

堀尾吉晴公共共同研究会 報告書
研究テーマ：石造物

近世大名・堀尾吉晴とその一族の石塔



令和2年（2020）12月
堀尾吉晴公共共同研究会（松江市・安来市・大口市）



堀尾忠氏宝篋印塔（玉湯・報恩寺）



堀尾忠晴五輪塔（松江・圓成寺）



堀尾泰晴夫妻石廟（京都・春光院）



殿様墓（三刀屋）



親子観音（堀尾勘解由石廟）（広瀬・富田城内）



高野山奥之院堀尾家墓所

近世大名・堀尾吉晴とその一族の石塔

はじめに

堀尾吉晴公共同研究会は、堀尾吉晴公の誕生と終焉の地である愛知県大口町、島根県安来市、松江市が、吉晴公の人物像をより明らかにし、共通の歴史認識を持つために、平成28年に共同設置した研究会です。

堀尾吉晴は、豊臣秀吉の家臣として、きわめて早い段階から行動を共にし、秀吉の栄達とともに活躍の場を広げた戦国武将です。しかし、これまで知られていた史料や伝承は限定的であるとともに、戦国動乱の中で吉晴の活動拠点がめまぐるしく変わったこともあり、吉晴と堀尾氏に関する情報は3市町でもあまり共有されていませんでした。そこで、共同研究会では、博物館や文化財行政に携わる職員らが集い、議論を重ね、最終的に城郭、文献、石造物の調査研究を通して、堀尾吉晴とその一族についての共通理解を深めることとなりました。

さて、関ヶ原合戦の後、出雲・隠岐両国を領有し近世大名家となった堀尾氏は、出雲国内の他に、京都、高野山、江戸に一族の墓所を設け、数多くの石塔を建立しました。墓所や石塔の在り方は、堀尾吉晴とその一族の精神性を色濃く反映したものであり、徹底的に調査分析することで、堀尾氏に関する史料の不足を補うことができます。

本書では、出雲国内（広瀬、松江、三刀屋など）、京都・妙心寺春光院、高野山奥之院、江戸・養源寺に残された堀尾吉晴とその一族の石塔、その他関連石造物を網羅的に調査分析し、掲載しました。

堀尾氏は出雲国に入部すると、一族の石塔に松江周辺で産出される来待石（凝灰質砂岩）を用いるようになります。ご協力いただいた松江石造物研究会は、多年にわたり来待石製石塔についての研究を進められる中で、来待石製石塔の大型化と爆発的な利用が近世初頭に起こり、それは堀尾氏の出雲国入部を契機とするものと捉え、調査を進めてこられました。その成果は、堀尾氏研究には不可欠なものであることから、これまでの研究成果を本書でも活用させていただきました。心より感謝申し上げます。

2021年3月

堀尾吉晴公共同研究会 石造物チーム

凡 例

1. 本書は、これまで松江石造物研究会を中心に重ねられてきた来待石石塔、および堀尾家墓所の調査成果を再編・追記することで、堀尾吉晴を中心とする堀尾一族の主な石塔をほぼ網羅的に紹介し、考察を加えるものである。これまでの調査成果は都度報告が行われた関係もあり、旧稿を再編した文章間には若干の齟齬があることをご了解願いたい。なお、本書各節の原典は第1表のとおりである。
2. 本書掲載の写真は、原則調査時のものである。
3. 文中の氏名、肩書等は、報告時のものを掲載した。
4. 注は、各項末に掲載した。
5. 参考にした文献は、その編・著者名、および発行年を本文中に括弧書きで注記し、その文献の詳細は、巻末の参考文献一覧に掲載した。
6. 各調査報告の原典に掲載されている協力者は本書末にまとめて協力者一覧として掲載した。
7. 石塔の名称は、指定文化財などで定められたもの以外は再検討を行った。
8. 本書では、来待石製の石塔を納める覆屋を「石龕」とし、そのうち大型の親子観音、堀尾民部石廟、殿様墓を「石廟」と呼ぶこととした。
9. 五輪塔と宝篋印塔の部位名称は、藤澤・狭川 2017『石塔調べのコツとツボ』を参考にし、巻末に掲載した「五輪塔各部位の名称」と「宝篋印塔各部位の名称」をもとに表記した。
10. 本書の編集は、松江石造物研究会の岡崎雄二郎、西尾克己、稲田 信、木下 誠、樋口英行で行った。

近世大名・堀尾吉晴とその一族の石塔

目 次

はじめに	i
凡例	ii
目次	iii
第1章 堀尾氏と一族の石塔	
1. 堀尾吉晴とその一族について	2
2. 堀尾一族の石塔と墓所	3
第2章 出雲地域に残る堀尾吉晴とその一族の石塔	
1. 堀尾吉晴	
・広瀬 巖倉寺	8
2. 堀尾忠氏	
・広瀬 忠光寺跡	13
・玉湯 報恩寺	15
3. 堀尾忠晴	
・松江 圓成寺	18
4. 堀尾氏の一族	
・親子観音（堀尾勘解由石廟）（広瀬 富田城内）	23
・堀尾民部石廟（玉湯 報恩寺）	26
・殿様墓（三刀屋）	31
・牧志摩宝篋印塔（松江 慈雲寺）	41
・堀尾但馬夫妻五輪塔（松江 圓成寺）	44
・松田左近の墓（赤名）	50
5. その他	
・松江洞光寺宝篋印塔	51
・松江洞光寺開山塔	54
第3章 京都・高野山・江戸に残る堀尾家墓所	
1. 京都・妙心寺春光院堀尾家墓所	58
2. 高野山奥之院堀尾家墓所	83
3. 江戸・養源寺堀尾家墓所	112

第4章 来待石製石塔に関する一考察

－堀尾氏と来待石製石塔の出現・変遷－

1. 近世来待石製石塔出現の一起源	126
2. 来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景	140
3. 来待石製石龕の成立と展開 ～江戸時代前半を中心に～	171
4. 石龕から竿状石塔へ ～宍道・川島家墓所にみる石塔の変遷～	181
5. 来待石製石塔の階層的広がり ～玉湯・上福庭家墓所の石塔～	199
おわりに	205

【巻末資料】

参考文献一覧	214
協力者一覧	217
宝篋印塔各部位の名称	218
五輪塔各部位の名称	219

挿図一覧

第1図 本書で取り扱う堀尾氏関連石塔所在場所	4
第2図 堀尾氏関係系図	5
第3図 巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔 実測図	9
第4図 巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔梵字	10
第5図 巖倉寺 堀尾吉晴墓石柱 実測図	11
第6図 忠光寺跡 堀尾忠氏墓所跡 周辺地形測量図	14
第7図 忠光寺跡 堀尾忠氏墓所跡 遺構図	14
第8図 報恩寺 堀尾忠氏宝篋印塔 実測図	16
第9図 圓成寺 堀尾忠晴五輪塔 実測図	19
第10図 圓成寺 堀尾忠晴五輪塔地輪 拓本	20
第11図 圓成寺 堀尾忠晴五輪塔地輪 解読文	20
第12図 親子観音（堀尾勘解由石廟） 実測図	23
第13図 親子観音（堀尾勘解由石廟）内宝篋印塔 実測図	24
第14図 堀尾民部石廟 実測図	26
第15図 堀尾民部石廟（正面左側面） 実測図	27
第16図 堀尾民部石廟内宝篋印塔 実測図	28
第17図 殿様墓 周辺地形 測量図	33
第18図 殿様墓 実測図	34
第19図 殿様墓石廟（正面右側）内宝篋印塔 実測図	35
第20図 殿様墓石廟（正面左側）内宝篋印塔 実測図	36
第21図 牧志摩宝篋印塔 実測図	42
第22図 堀尾但馬五輪塔 実測図	46
第23図 堀尾但馬妻五輪塔 実測図	47
第24図 松江洞光寺宝篋印塔 実測図	52

第25図 松江洞光寺開山塔（宝篋印塔） 実測図	55
第26図 妙心寺春光院 石塔配置図（左：現在、右：文政3年）	58
第27図 堀尾泰晴夫妻石廟、宝篋印塔 実測図（正面）	60
第28図 堀尾泰晴夫妻石廟 実測図（左：左側面、右：正面）	61
第29図 堀尾泰晴夫妻石廟前扉 実測図・拓本（左：表面、右：裏面）	62
第30図 堀尾泰晴夫妻石廟外壁卒塔婆四十九院判読図	63
第31図 堀尾泰晴夫妻宝篋印塔 実測図 （左：堀尾泰晴妻宝篋印塔、右：堀尾泰晴宝篋印塔）	64
第32図 伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔 実測図 （左：伝堀尾吉晴宝篋印塔、右：伝堀尾吉晴妻宝篋印塔）	67
第33図 伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔 実測図 （左：伝堀尾忠氏宝篋印塔、右：伝堀尾忠氏妻宝篋印塔）	69
第34図 伝奥平家昌夫妻宝篋印塔 実測図 （左：伝奥平家昌宝篋印塔、右：伝奥平家昌妻宝篋印塔）	71
第35図 伝野々村河内妻五輪塔 実測図	72
第36図 伝堀尾忠晴無縫塔 実測図	73
第37図 伝松村監物舟形石塔 実測図	74
第38図 高野山奥之院堀尾家墓所の石塔配置図	84
第39図 高野山奥之院堀尾家墓所五輪塔の年代順配列図	85
第40図 1号石塔（堀尾忠晴娘〔石川廉勝妻：憲之母〕石塔） 実測図	86
第41図 2号石塔（堀尾忠晴石塔） 実測図	87
第42図 3号石塔（堀尾吉晴石塔） 実測図	89
第43図 4号石塔（堀尾忠氏石塔） 実測図	90
第44図 5号石塔〔左〕（堀尾吉晴妻か）・6号石塔〔右〕（松村監物石塔） 実測図	92
第45図 7号石塔〔左〕（堀尾吉晴娘・勘解由母の勝山か） ・8号石塔〔右〕（堀尾頼母助政家石塔） 実測図	93
第46図 9号石塔〔左：堀尾民部石塔〕・10号石塔〔右：堀尾勘解由石塔〕 実測図	95
第47図 11号石塔〔左〕・13号石塔〔右〕 実測図	96
第48図 14号石塔（堀尾采女母・妻か） 実測図	99
第49図 堀尾氏に関わる石塔群配置図	113
第50図 堀尾忠晴宝篋印塔 実測図	115
第51図 石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）宝篋印塔 実測図	116
第52図 松村監物宝篋印塔 実測図	117
第53図 堀尾采女宝篋印塔 実測図	119
第54図 堀尾氏関係系図	120
第55図 岩屋寺「文禄五年」紀年銘宝篋印塔 実測図	126
第56図 遠江国浜松周辺の石塔位置図	130
第57図 蓮華寺境内所在の石塔残欠 実測図	131
第58図 龍潭寺墓地所在の宝篋印塔（伝新野左馬助公之墓） 実測図	132
第59図 西伝寺墓地所在の宝篋印塔 実測図	133

第 60 図	来待石製石塔製作の変化概略モデル	135
第 61 図	来待石製大型石塔の分布	140
第 62 図	伝大野次郎左衛門墓五輪塔 実測図	142
第 63 図	天倫寺裏山五輪塔 実測図	144
第 64 図	月照寺裏山五輪塔 実測図	146
第 65 図	三代長兵衛宝篋印塔 実測図	149
第 66 図	三代長兵衛妻宝篋印塔 実測図	150
第 67 図	年代基準となる宝篋印塔・五輪塔と大型石塔の分布	152
第 68 図	大型石塔以外の年代基準となる宝篋印塔	153
第 69 図	年代考察上、参考となる五輪塔	155
第 70 図	加藤光泰五輪塔 実測図	157
第 71 図	池田由之五輪塔 実測図	158
第 72 図	池田由之妻五輪塔 実測図	159
第 73 図	17 世紀における来待石製宝篋印塔の変遷	161
第 74 図	17 世紀前半における来待石製五輪塔の変遷	163
第 75 図	尼子義久夫人宝篋印塔と久戸千体宝篋印塔との類似点	165
第 76 図	来待石製石龕の分布	171
第 77 図	来待石製の石龕	174
第 78 図	石龕屋根形態の変遷概念図	175
第 79 図	来待石製石龕の展開	177
第 80 図	来待石製石龕規模の比較	178
第 81 図	川島家墓所石塔配置図	181
第 82 図	川島家墓所 1 号石塔 実測図	183
第 83 図	川島家墓所 1 号石塔の石龕内宝篋印塔 実測図	184
第 84 図	川島家墓所 2 号石塔 実測図	185
第 85 図	川島家墓所 2 号石塔の石龕内宝篋印塔 実測図	186
第 86 図	川島家墓所 3 号石塔 実測図	187
第 87 図	川島家墓所 3 号石塔の石龕内宝篋印塔 実測図	188
第 88 図	川島家墓所 4 号石塔 実測図	190
第 89 図	川島家墓所 1 7 号石塔 実測図	191
第 90 図	川島家墓所 1 7 号石塔の石龕内宝篋印塔 実測図	192
第 91 図	川島家墓所 2 0 号石塔 実測図	193
第 92 図	蓮光寺 上福庭家墓所石龕・宝篋印塔（上福庭家三代石塔） 実測図	200
第 93 図	蓮光寺 上福庭家墓所三代石龕内宝篋印塔 実測図	201

挿表一覧

第 1 表	本誌掲載の原典一覧	6
第 2 表	堀尾氏関係者の戒名と没年一覧（春光院所蔵の過去帳、位牌、木像、石塔配置図より）	76
第 3 表	石塔の形成要素（配列・被供養者・形態・年代・全高・石材）	100
第 4 表	刻字一覧	100

第 5 表	基準資料となる宝篋印塔・五輪塔の諸属性	164
第 6 表	堀尾吉晴とその一族に関する石塔一覧表	213

写真一覧

写真 1	巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔 1	11
写真 2	巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔 2	11
写真 3	巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔 3	12
写真 4	巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔 4	12
写真 5	巖倉寺 堀尾吉晴墓石柱	12
写真 6	忠光寺跡 堀尾忠氏墓所跡全景	13
写真 7	報恩寺	17
写真 8	報恩寺 堀尾忠氏宝篋印塔（正面）	17
写真 9	報恩寺 堀尾忠氏宝篋印塔（側面）	17
写真 10	圓成寺 松江藩主堀尾忠晴墓所 1	21
写真 11	圓成寺 松江藩主堀尾忠晴墓所 2	21
写真 12	圓成寺 堀尾忠晴五輪塔（正面）	22
写真 13	圓成寺 堀尾忠晴五輪塔（裏側）	22
写真 14	圓成寺 堀尾忠晴五輪塔（銘文の刻まれた地輪）	22
写真 15	親子観音（堀尾勘解由石廟） 1	25
写真 16	親子観音（堀尾勘解由石廟） 2	25
写真 17	堀尾勘解由宝篋印塔	25
写真 18	親子観音（堀尾勘解由石廟）（裏側） 1	25
写真 19	親子観音（堀尾勘解由石廟）（裏側） 2	25
写真 20	報恩寺 堀尾民部石廟 1	29
写真 21	報恩寺 堀尾民部石廟 2	30
写真 22	報恩寺 堀尾民部石廟（南側面）	30
写真 23	報恩寺 堀尾民部石廟（北側面）	30
写真 24	報恩寺 堀尾民部宝篋印塔	30
写真 25	殿様墓 1	39
写真 26	殿様墓 2	39
写真 27	殿様墓 正面左側石廟	39
写真 28	殿様墓 正面右側石廟	39
写真 29	殿様墓 正面右側石廟（右側側面）	40
写真 30	殿様墓 正面左側石廟（左側側面）	40
写真 31	殿様墓（手前：正面左側石廟、奥：正面右側石廟）	40
写真 32	殿様墓（手前：正面右側石廟、奥：正面左側石廟）	40
写真 33	慈雲寺 牧志摩宝篋印塔 1	43
写真 34	慈雲寺 牧志摩宝篋印塔 2	43
写真 35	牧志摩宝篋印塔塔身	43
写真 36	堀尾但馬夫妻五輪塔 1	48

写真 37	堀尾但馬夫妻五輪塔 2	48
写真 38	堀尾但馬五輪塔（水輪）	48
写真 39	堀尾但馬五輪塔（地輪）	49
写真 40	堀尾但馬妻五輪塔（地輪：左側）	49
写真 41	堀尾但馬妻五輪塔（地輪：右側）	49
写真 42	松田左近の墓	50
写真 43	松江洞光寺宝篋印塔 1	53
写真 44	松江洞光寺宝篋印塔 2	53
写真 45	松江洞光寺宝篋印塔 3	53
写真 46	松江洞光寺開山塔（宝篋印塔） 1	54
写真 47	松江洞光寺開山塔（宝篋印塔） 2	54
写真 48	妙心寺春光院（正門側より庫裏〔右〕を望む）	58
写真 49	堀尾泰晴夫妻石廟正面（閉扉） 〔石廟左：伝堀尾忠氏宝篋印塔、石廟右：伝堀尾吉晴妻宝篋印塔〕	59
写真 50	長齡寺前田利家・利長石廟（石川県七尾市）	77
写真 51	堀尾吉晴夫妻木像	79
写真 52	堀尾吉晴木像	79
写真 53	堀尾吉晴妻木像	79
写真 54	堀尾金助木像	79
写真 55	春光院御霊屋（正面）	79
写真 56	春光院御霊屋（内部）	79
写真 57	春光院御霊屋裏墓域	79
写真 58	堀尾泰晴夫妻石廟正面（開扉）	80
写真 59	堀尾泰晴夫妻石廟正面（閉扉）	80
写真 60	堀尾泰晴夫妻石廟前扉（表面）	80
写真 61	堀尾泰晴夫妻石廟前扉（裏面）	80
写真 62	堀尾泰晴夫妻石廟裏	80
写真 63	堀尾泰晴夫妻石廟外壁（卒塔婆を配した四十九院を刻む）	80
写真 64	堀尾泰晴宝篋印塔基礎（天徳寺の文字を刻む）	81
写真 65	伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔（左：妻、右：吉晴）	81
写真 66	伝奥平家昌夫妻宝篋印塔（左：妻、右：家昌）	81
写真 67	伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔（左：妻、右：忠氏）	81
写真 68	伝野々村河内妻五輪塔	81
写真 69	伝野々村河内妻五輪塔（地輪刻字採拓風景）	81
写真 70	伝松村監物舟形石塔（左）、伝堀尾忠晴無縫塔（右）	82
写真 71	伝松村監物舟形石塔	82
写真 72	伝堀尾忠晴無縫塔	82
写真 73	12 号石塔	82
写真 74	13 号石塔	82
写真 75	「奥院絵図」（宝永 4 年）に描かれた堀尾家墓所	105

写真 76	「高野山奥院総絵図」（寛政 5 年）に描かれた堀尾家墓所	105
写真 77	堀尾家墓所（奥側と左側面に堀尾家の石塔が並ぶ）	106
写真 78	堀尾家墓所（右側から 10 号～ 18 号石塔）	106
写真 79	堀尾家墓所（右側から 1 号石塔）	106
写真 80	1 号石塔（宝篋印塔：堀尾忠晴娘）（石川簾勝妻：憲之母）	107
写真 81	1 号石塔基礎の銘文	107
写真 82	2 号石塔（五輪塔：堀尾忠晴石塔）	107
写真 83	2 号石塔地輪の銘文	107
写真 84	2 号石塔空輪の梵字（拓本）	107
写真 85	2 号石塔風輪の梵字（拓本）	107
写真 86	2 号石塔火輪の梵字（拓本）	107
写真 87	2 号石塔水輪の梵字（拓本）	107
写真 88	2 号石塔地輪の梵字（拓本）	107
写真 89	2 号石塔空・風・火輪の梵字	107
写真 90	3 号石塔（五輪塔：堀尾吉晴石塔）	108
写真 91	3 号石塔地輪の銘文	108
写真 92	4 号石塔（五輪塔：堀尾忠氏石塔）	108
写真 93	4 号石塔地輪の銘文	108
写真 94	5 号石塔（五輪塔：堀尾吉晴妻か）	108
写真 95	5 号石塔地輪の銘文	108
写真 96	6 号石塔（五輪塔：松村監物石塔）	109
写真 97	6 号石塔地輪の銘文	109
写真 98	7 号石塔（五輪塔：堀尾吉晴娘・勘解由母の勝山か）	109
写真 99	7 号石塔地輪	109
写真 100	8 号石塔（五輪塔：堀尾頼母助政家石塔）	109
写真 101	9 号石塔（宝篋印塔：堀尾民部石塔）	109
写真 102	9 号石塔（堀尾民部石塔）基礎の銘文	110
写真 103	9 号石塔基礎の銘文（拓本）	110
写真 104	10 号石塔（宝篋印塔：堀尾勘解由石塔）	110
写真 105	10 号石塔基礎の銘文	110
写真 106	11 号石塔（宝篋印塔）	110
写真 107	11 号石塔基礎	110
写真 108	12 号石塔（円頂方柱型）	111
写真 109	13 号石塔（五輪塔）	111
写真 110	14 号石塔（五輪塔：堀尾采女母・妻か）	111
写真 111	14 号石塔地輪の銘文	111
写真 112	15 ～ 18 号石塔	111
写真 113	石塔の調査風景（11 号石塔側から）	111
写真 114	養源寺（東京都文京区千駄木）	112
写真 115	堀尾氏に関わる石塔群前面	

	(現在：左から堀尾式部、堀尾忠晴、石川廉勝妻、松村監物、堀尾采女石塔) ……………	121
写真 116	堀尾氏に関わる石塔群前面 (移転前：左から堀尾式部、堀尾忠晴、石川廉勝妻、松村監物、堀尾采女石塔) ……………	121
写真 117	堀尾氏に関わる石塔群裏面 (移転前) ……………	122
写真 118	堀尾式部石塔正面 (移転前) ……………	122
写真 119	堀尾忠晴石塔 (左)、石川廉勝妻石塔 (右) (移転前) ……………	122
写真 120	松村監物石塔 (左)、堀尾采女石塔 (右) ……………	122
写真 121	堀尾忠晴石塔 基礎正面 ……………	123
写真 122	石川廉勝妻石塔 基礎正面 ……………	123
写真 123	松村監物石塔 基礎正面 ……………	124
写真 124	堀尾采女石塔 基礎正面 ……………	124
写真 125	岩屋寺「文禄五年」紀年銘宝篋印塔 (右端の宝篋印塔) ……………	127
写真 126	岩屋寺「慶長拾貳年」紀年銘板碑 ……………	127
写真 127	蓮華寺境内所在の石塔 全景 ……………	137
写真 128	蓮華寺境内所在の石塔残欠 1 ……………	137
写真 129	蓮華寺境内所在の石塔残欠 2 ……………	137
写真 130	蓮華寺境内所在の石塔残欠の笠 (第 57 図－6) 1 ……………	137
写真 131	蓮華寺境内所在の石塔残欠の笠 (第 57 図－6) 2 ……………	137
写真 132	龍潭寺 本堂 ……………	138
写真 133	龍潭寺墓地所在の宝篋印塔 (伝新野左馬助公之墓) 1 ……………	138
写真 134	龍潭寺墓地所在の宝篋印塔 (伝新野左馬助公之墓) 2 ……………	138
写真 135	龍潭寺墓地所在の宝篋印塔 (伝新野左馬助公之墓 相輪下部・笠) ……………	138
写真 136	龍潭寺墓地所在の宝篋印塔 (伝新野左馬助公之墓 基礎) ……………	138
写真 137	西伝寺 山門 ……………	139
写真 138	西伝寺墓地所在の宝篋印塔笠・基礎 (第 59 図－1、2) 1 ……………	139
写真 139	西伝寺墓地所在の宝篋印塔笠・基礎 (第 59 図－1、2) 2 ……………	139
写真 140	西伝寺墓地所在の宝篋印塔笠 (第 59 図－1) ……………	139
写真 141	伝大野次郎左衛門墓五輪塔 1 ……………	143
写真 142	伝大野次郎左衛門墓五輪塔 2 ……………	143
写真 143	天倫寺裏山五輪塔 (正面) ……………	145
写真 144	天倫寺裏山五輪塔 ……………	145
写真 145	月照寺裏山五輪塔 ……………	147
写真 146	三代長兵衛夫妻宝篋印塔 (遠景) ……………	148
写真 147	三代長兵衛夫妻宝篋印塔 ……………	148
写真 148	三代長兵衛妻宝篋印塔 ……………	151
写真 149	三代長兵衛宝篋印塔 ……………	151
写真 150	尼子義久夫人宝篋印塔 ……………	154
写真 151	親子観音 ……………	173
写真 152	川島家墓所全景 (東から) ……………	196
写真 153	川島家墓所 1 号石塔 ……………	196

写真 154	川島家墓所 2 号石塔 ……………	196
写真 155	川島家墓所東側 (左から 1 ～ 4 号石塔) ……………	197
写真 156	川島家墓所 3 号石塔 ……………	197
写真 157	川島家墓所 4 号石塔 ……………	197
写真 158	川島家墓所全景 (西から) ……………	198
写真 159	川島家墓所 17 号石塔 ……………	198
写真 160	川島家墓所 20 号石塔 ……………	198
写真 161	蓮光寺 上福庭家墓所全景 (左側中央に初代の五輪塔が建つ) ……………	203
写真 162	蓮光寺 上福庭家三代石塔 1 ……………	203
写真 163	蓮光寺 上福庭家三代石塔 2 ……………	204
写真 164	蓮光寺 上福庭家初代五輪塔 ……………	204
写真 165	蓮光寺 上福庭家五代石塔 (寛政 6、7 年の紀年銘をもつ) ……………	204

第 1 章

堀尾氏と一族の石塔

1. 堀尾吉晴とその一族について

堀尾氏は、戦国時代の動乱を乗り越え、出雲入国後には松江城の築城と城下町の建設を行い、今日に至る松江市区の発展の礎を築いた一族である。一族を率い、大名家としての堀尾氏の基盤を築いたのは、堀尾吉晴であった。

吉晴は、尾張国丹羽郡御供所（愛知県丹羽郡大口町）に天文12年（1543）に生まれたと伝えられる。父の泰晴は、岩倉城（愛知県岩倉市）の織田信安に仕え、信安が織田信長と対立して滅亡したことから、牢人となった。吉晴は、永禄年間（1558～1570）より織田信長に仕え、木下藤吉郎（豊臣秀吉）に付属されたと考えられる。そのため、秀吉の活動のきわめて早い段階から行動をとともにした家臣であり、秀吉の政治的地位が上がるとともに吉晴の地位も向上していった。

吉晴の知行地の変遷は、天正元年（1573）に近江国長浜の内に於いて100石、播磨国姫路において1,500石、丹波国黒江において3,500石、天正10年（1582）に丹波国氷上郡内（黒井城）において6,284石、天正11年（1583）に若狭国高浜において1万7,000石となり、大名に列する（高浜城主）。天正13年（1585）に若狭国佐柿において2万石（佐柿城主）、近江国佐和山において4万石（佐和山城主）、天正18年（1590）に徳川家康の旧領遠江国浜松において12万石（浜松城主となり）、豊臣姓を許される。

吉晴に対する秀吉の信頼は厚く、秀吉の甥秀次の補佐役を佐和山時代からつとめ、秀次の失脚後も秀吉に奉公を続けている。慶長3年（1598）の秀吉の死により、後継者の地位をめぐる政治情勢が緊迫化する中で、吉晴は調整のために奔走する。慶長4年（1599）10月に、越前国府中城（福井県）の留守居役を徳川家康・毛利輝元・宇喜多秀家から命ぜられるのは、家康・前田利長の間の対立を調整することを期待されたものと思われる。慶長5年（1600）に、吉晴は家康の上杉氏攻撃に参陣するために7月に浜松へ下向するが、池鯉鮒（愛知県）で事件に巻き込まれて重傷を負い、9月の関ヶ原合戦に参加することができなかった。そのため、吉晴に代わって関ヶ原合戦前後の堀尾氏の軍事行動を担ったのが息子堀尾忠氏である。忠氏は家康方の東軍として行動し、重要な役割を果たしている。

関ヶ原合戦後、堀尾忠氏に出雲国と隠岐国が与えられた。堀尾氏の出雲入国は慶長5年（1600）11月、家臣への知行宛行は忠氏によって慶長6年（1601）3月より行われている。藩主であった忠氏は、入国した4年後の慶長9年（1604）に死去するが、その子の忠晴はまだ幼く、以後は祖父吉晴が堀尾氏を代表する立場で政務を代行している。なお、吉晴には天正18年（1590）の小田原攻めの折に亡くなった金助という男子があり、忠氏は吉晴の次男だったと考えられる。

堀尾氏は、出雲・隠岐両国に入国した当初は富田城（安来市広瀬町）を本拠地としていた。富田城は、尼子氏や毛利氏が山陰支配の拠点としており、その拠点を継承する形で堀尾氏は入城したが、富田は領国の中で大きく東に偏り、日本海との接点にも隔たりがあるという地政学上の問題を抱えていた。また、地形的に大規模な城下町建設に不適でもあった。松江城築城は、慶長12年（1607）から同16年にかけて行われたと伝えられている。「堀尾古記」（松江市史編集委員会編2018）には、慶長13年（1608）10月2日に「松江越」という記述があり、この時に富田から松江へ政治的機能が移転したものと考えることができる。また、松江城天守は慶長16年（1611）正月以前に完成していたことが、天守創建時の祈禱札によって確認されている。領主としての堀尾氏の基礎を築いた堀尾吉晴は、天守完成後の慶長16年（1611）6月17日に死去し、厳倉寺（安来市広瀬町）に葬られた。

堀尾一族の中には、本来の一族とともに、野々村（堀尾）河内、松田（堀尾）因幡、高間（堀尾）頼母、揖斐宮内（堀尾民部）などのように、婚姻などを通して堀尾姓が与えられ、一族として扱われた場合もある。堀尾氏は吉晴及び忠氏の代で急成長し、所領や家臣を増やしていったため、有力な外様家臣の帰属意識を高めるためにも一族に組み入れる必要があった。婚姻や賜姓により一族として扱われてい

たことが残された石塔や墓所にも窺える。本書で紹介する堀尾吉晴を中心とする一族の人物関係については、「堀尾氏関係系図」（第2図）を基本としてご確認いただきたい。

2. 堀尾一族の石塔と墓所

堀尾氏は出雲国を知行して以降、一族の墓、供養塔には来待石（凝灰質砂岩）を石材として利用していたことが知られている。堀尾一族の来待石石塔は、これまで出雲国内では堀尾氏の出雲国支配に関わりが深い広瀬、松江、三刀屋などで確認されており、出雲国外では京都・春光院で確認されている。また、来待石石塔は用いないが、高野山・奥之院、江戸・養源寺にも堀尾一族の墓所が知られている。

（1）広瀬（安来市広瀬町）に残る堀尾一族の石塔

広瀬は、堀尾氏が慶長5年（1600）から松江に移るまで出雲国支配の拠点とした場所で、厳倉寺（安来市広瀬町）では堀尾吉晴の墓（五輪塔）、忠光寺跡（安来市広瀬町）では忠氏の墓（石塔は残っていない）、富田城内では親子観音（堀尾勘解由石廟）などが確認できる。

（2）松江周辺（松江市）に残る堀尾一族の石塔

松江は、堀尾氏が出雲支配の拠点として新たに城と城下町を建設した場所である。堀尾氏の菩提寺である圓成寺（松江市栄町）では、堀尾忠晴の墓（五輪塔）や堀尾但馬の石塔（五輪塔）が確認できる。松江城の裏鬼門とされる報恩寺（松江市玉湯町）では、堀尾忠氏の墓と伝える宝篋印塔、堀尾民部の石廟（来待石製大型石廟）、また、慈雲寺（松江市和多見町）では、堀尾氏重臣牧志摩の石塔（宝篋印塔）が確認できる。

（3）三刀屋（雲南市三刀屋町）に残る堀尾一族の石塔

堀尾氏は松江城を本城として富田、三刀屋、赤名に支城を置くが、三刀屋には一族の堀尾掃部（宗光）、修理を配する。三刀屋城近くに掃部、修理の菩提寺である同安寺が置かれ、同安寺跡では殿様墓と呼ばれる来待石製大型石廟2基が確認できる。

（4）高野山奥之院（和歌山県伊都郡高野町）に残る堀尾一族の石塔

高野山は弘法大師空海が修行の場として開いた高野山真言宗の聖地である。奥之院には弘法大師の御廟があり、その参道脇には皇室、公家、武家などの墓所が営まれ、近世大名の巨大な石塔も多数並ぶ。堀尾一族の石塔は、奥之院にある一の橋から中の橋に至る間の参道脇にあり、現在、海軍整備練習生慰霊碑などが建つ平坦面の奥側に11基、左側面に2基が確認できる。

（5）春光院（京都市右京区花園妙心寺町）に残る堀尾一族の石塔

春光院は、天正18年（1590）の創建と伝えられる臨済宗妙心寺の塔頭寺院である。堀尾吉晴は息子金助の菩提を弔うために妙心寺に俊巖院を創建し、この俊巖院が後に改称して春光院となっている。春光院本堂裏の墓域には、堀尾氏の位牌及び木像を納めた御霊屋と、供養塔或いは墓碑などの石塔群が残されている。現在、堀尾泰晴夫妻の石廟（笏谷石製）のほか、石廟内宝篋印塔2基を含めた宝篋印塔10基、五輪塔1基、無縫塔1基、舟形石塔1基の来待石製石塔が確認できる。

（6）養源寺（東京都文京区千駄木）に残る堀尾一族の石塔

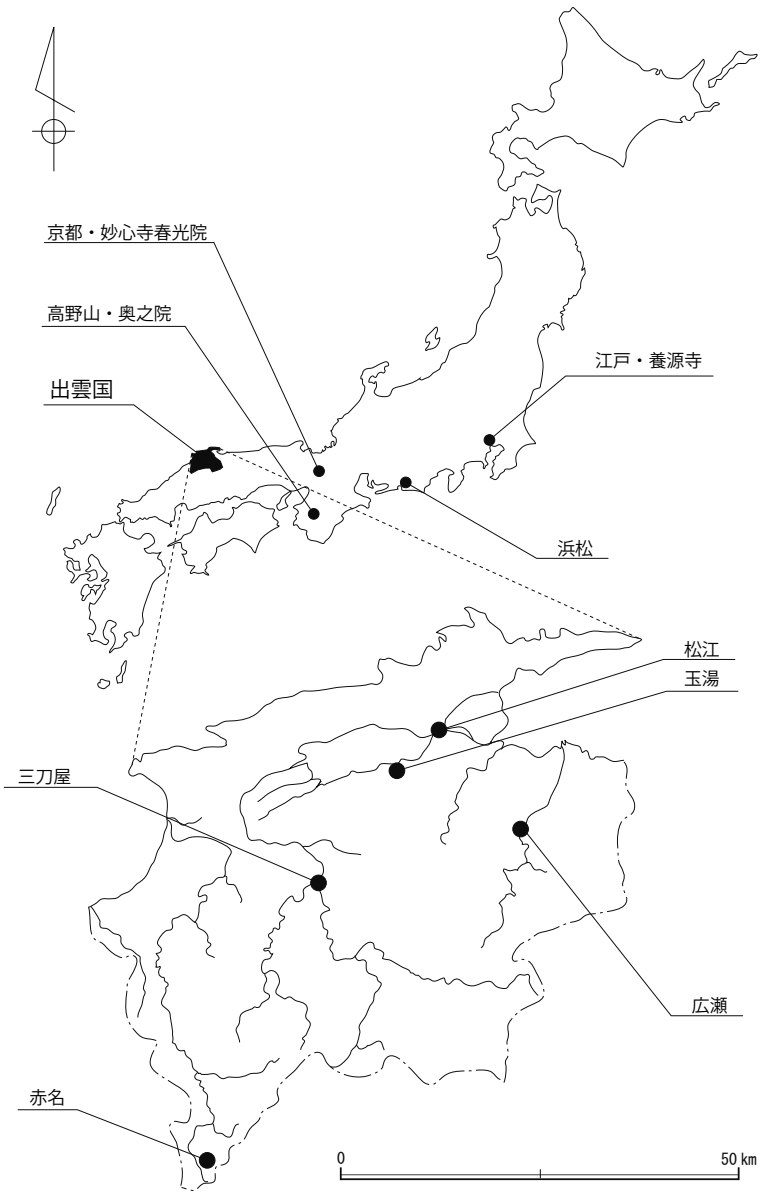
養源寺は、江戸初期に創建されたと伝えられる臨済宗妙心寺派の寺院である。寛永10年（1633）9月20日に江戸で亡くなった堀尾忠晴は、養源寺に葬られた。現在、本堂裏の墓所では堀尾忠晴、石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）、堀尾式部（勝明）、堀尾采女、松村監物の石塔が確認できる。

※印のものは
藤田氏系図より転記

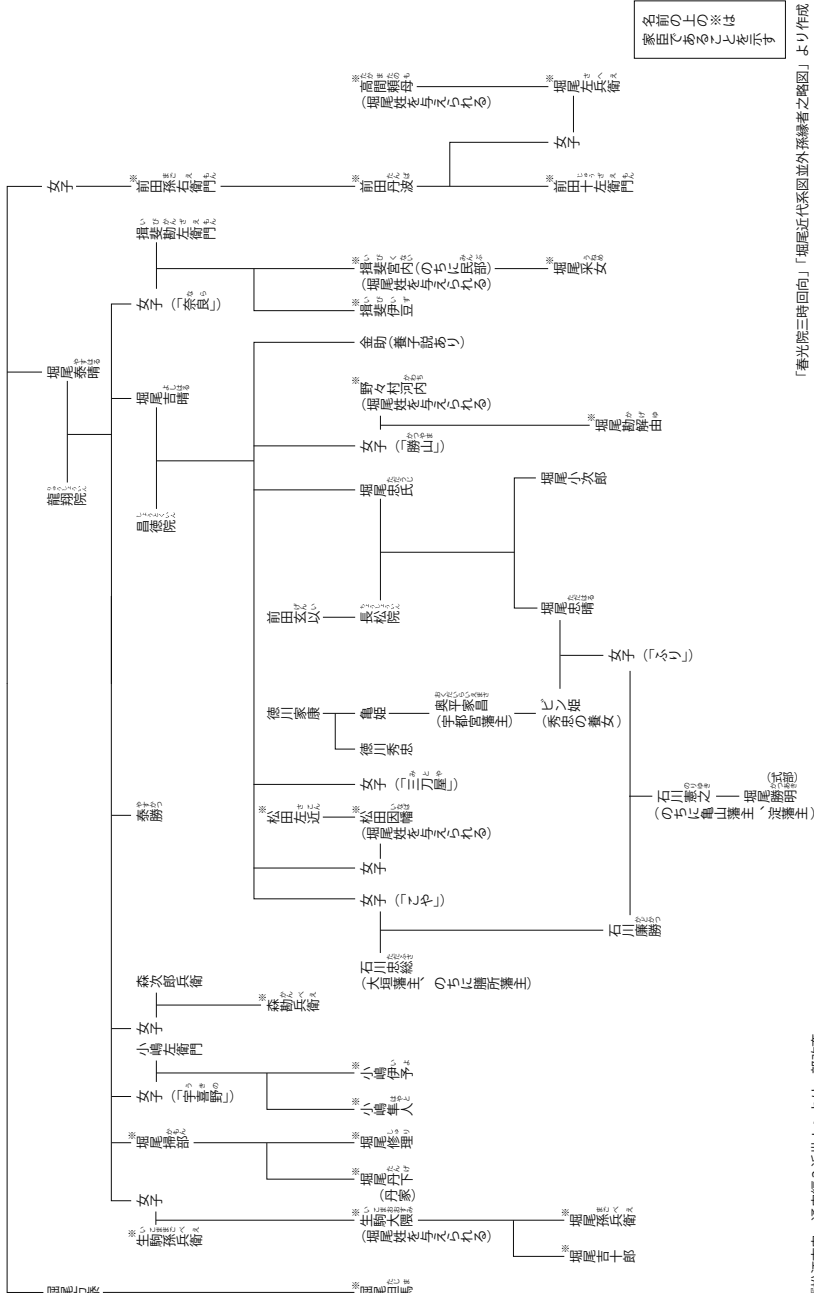
「春日部三時回向」「堀尾氏系図並外孫縁者之略図」より作成

第2図 堀尾氏関係系図

『松江市史 通史編3 近世1』より一部改変



第1図 本書で取り扱う堀尾氏関連石塔所在場所



第1表 本誌掲載の原典一覧

章	節	内容	出典
1			本書初出
2	1	巖倉寺	岡崎雄二郎・西尾克己・稲田 信・佐々木倫朗・樋口英行2006「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景・松江藩主堀尾氏のもたらした石造技術・」『来待ストーン研究』7 来待ストーンミュージアム
	2	忠光寺	本書初出
	2	報恩寺	西尾克己・稲田 信・樋口英行2005b「玉湯・報恩寺の石塔群」『来待ストーン研究』6 来待ストーンミュージアム
	3	圓成寺	岡崎雄二郎・西尾克己・稲田 信・佐々木倫朗・樋口英行2006「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景・松江藩主堀尾氏のもたらした石造技術・」『来待ストーン研究』7 来待ストーンミュージアム
	4	親子観音	本書初出
	4	堀尾民部	西尾克己・稲田 信・樋口英行2005b「玉湯・報恩寺の石塔群」『来待ストーン研究』6 来待ストーンミュージアム
	4	殿様墓	本書初出
	4	牧志摩	岡崎雄二郎・西尾克己・稲田 信・佐々木倫朗・樋口英行2008「来待石製大型石塔調査（補遺）・松江・洞光寺宝篋印塔、牧志摩宝篋印塔・」『来待ストーン研究』9 来待ストーンミュージアム
	4	堀尾但馬	本書初出
	5	松江洞光寺	岡崎雄二郎・西尾克己・稲田 信・佐々木倫朗・樋口英行2008「来待石製大型石塔調査（補遺）・松江・洞光寺宝篋印塔、牧志摩宝篋印塔・」『来待ストーン研究』9 来待ストーンミュージアム ※開山塔は本書初出
3	1	春光院	岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・樋口英行・佐々木倫朗・松原祥子2007「春光院に所在する来待石製石塔群について」「春光院所蔵の堀尾氏関連文献史料について」『松江市歴史叢書』1 松江市教育委員会
	2	高野山	西尾克己・稲田 信・木下 誠2013「高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について・近世大名墓と堀尾家の宗教的背景・」『松江歴史館研究紀要』第3号 松江歴史館
	3	養源寺	西尾克己・稲田 信・佐々木倫朗2011「白華山養源寺〔東京都千駄木〕に所在する堀尾忠晴石塔について」『松江歴史館研究紀要』第1号 松江歴史館
4	1		岡崎雄二郎・西尾克己・稲田 信・木下 誠・樋口英行2018「近世来待石製石塔出現の一起源」『松江歴史館研究紀要』第6号 松江歴史館
	2		岡崎雄二郎・西尾克己・稲田 信・佐々木倫朗・樋口英行2006「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景・松江藩主堀尾氏のもたらした石造技術・」『来待ストーン研究』7 来待ストーンミュージアム
	3		樋口英行2005「来待石製石龕の成立と展開・江戸時代前半を中心に・」『来待ストーン研究』6 来待ストーンミュージアム
	4		稲田 信・西尾克己2005「穴道・川島家墓所にみる石塔の変遷・石龕から竿状石塔へ・」『来待ストーン研究』6 来待ストーンミュージアム
	5		西尾克己・樋口英行2005a「玉湯・上福庭家墓所の石塔」『来待ストーン研究』6 来待ストーンミュージアム

第2章 出雲地域に残る堀尾吉晴とその一族の石塔

1. 堀尾吉晴

・広瀬 巖倉寺

堀尾吉晴は、関ヶ原合戦後、慶長5年（1600）に子息忠氏の功績もあり、出雲・隠岐2か国24万石に転封されると、尼子氏の居城であった富田城（安来市広瀬町）を本拠地とした。吉晴は家督を忠氏に譲ったが、忠氏の早世により2代藩主となった堀尾忠晴の後見として国政をみた。慶長16年（1611）6月17日に69歳で没し、巖倉寺（安来市広瀬町）に葬られた。

堀尾吉晴墓五輪塔

堀尾吉晴墓は東に正面を向けた五輪塔で、基壇上に建ち、その周囲には来待石製の欄干が廻っている。基壇は下端幅460cm、上端幅443cm、高さ155cmで、石垣を積んだものである。石の間にセメントが確認できることから、後世に幾度か積み直したものであると思われる。また、基壇前には石製の線香立てと花立てが置かれ、基壇上の正面左右には、「文化八口未年」の紀年銘のある石灯籠が建つ。

五輪塔は基壇上にあり、幅150cm、高さ11cmの台石の上に建ち、空輪から地輪までの総高は301.5cm、台石を含めた総高は312.5cmである。火輪と地輪で比較的風化が著しいものの、製作時当初の形態を全体的に保持している。

空風輪は、高さ86.5cmで、一石で作られている。風輪は、下端径51cm、上端径53cm、高さ32cmで円筒形である。空輪は、下端径45cm、最大径57cm、高さ54.5cmで、側面は直線的に広がり、先端はやや丸みを帯びるように盛り上がる形態である。

火輪は、下端幅121cm、上端幅65cm、高さ68cmである。軒の厚さは、中央で17.5cm、左端26.5cm、右端32cmとなり、右端のほうで軒が厚くなっている。風化の程度が影響している可能性がある。軒から火輪の上端につながるラインは、直線的である。また、上端には、径40cmの柄穴が作られている。

水輪は、下端径86.5cm、上端径86.5cm、高さ75cmである。水輪のちょうど中位で最大径113cmとなり、つぶれた球形となっている。

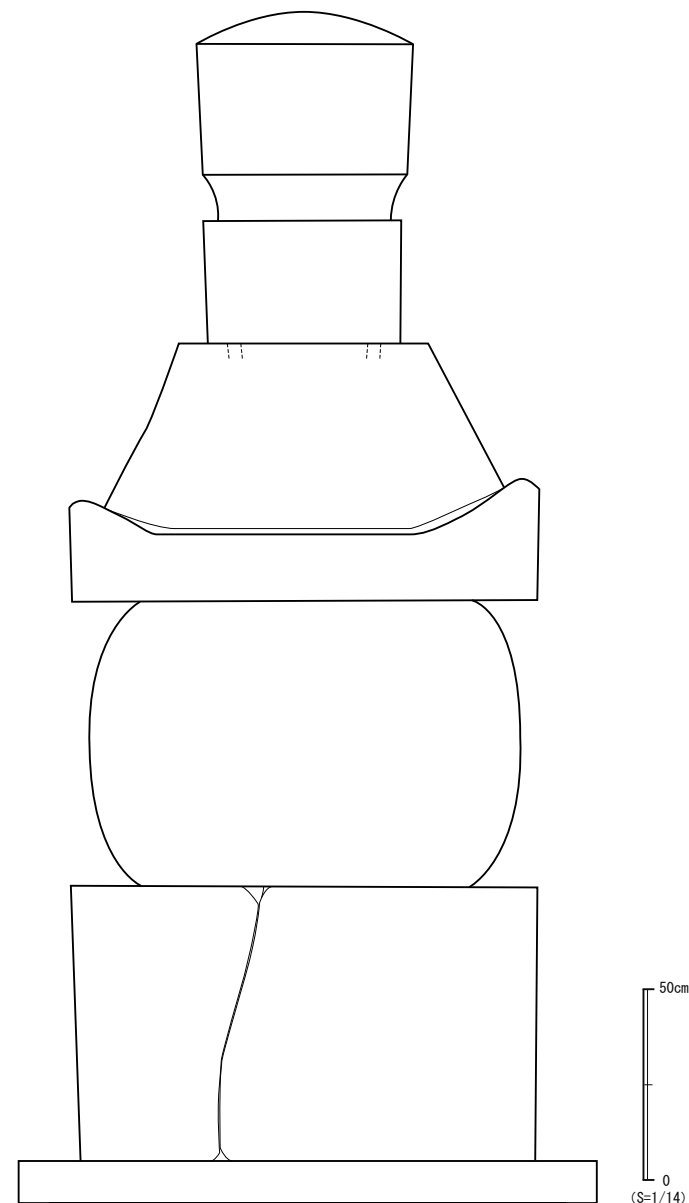
地輪は、下端幅118.5cm、上端幅121cm、高さ72cmで、若干上端が下端に比べ広くなる。また、地輪はもととも大きな一つの石であったが、現在は割れている。

五輪塔には、すべての輪の四面に一字ずつ梵字が刻まれている。最も梵字の遺存状態の良い北面で採拓を行い、その他の面では観察できる梵字を読みとった。観察できるすべての面で、梵字は正しく組合わさっており、文字が示す結界の方向とも一致している。





















石柱

五輪塔基壇の北西前に、幅30cm、高さ130cmの竿状の石柱が1本建っている。この頂部に径15cm、深さ5cm程の穴が穿かれている。笠が乗っていたかどうかは不明である。上面の4面には地藏が浮彫りにされている。地藏の大きさは、高さ40cm、台座部の横幅18cm、厚さ10～20cmである。地藏尊の表面は風化が進み、顔や衣の様子は明瞭ではない。

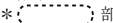
この石柱は、六角柱ではないものの、形態より石幢の幢身の可能性もある。同時期の地藏尊を配した石製品には、堀尾氏菩提寺の圓成寺（松江市栄町）にある六角地藏灯籠が知られている。



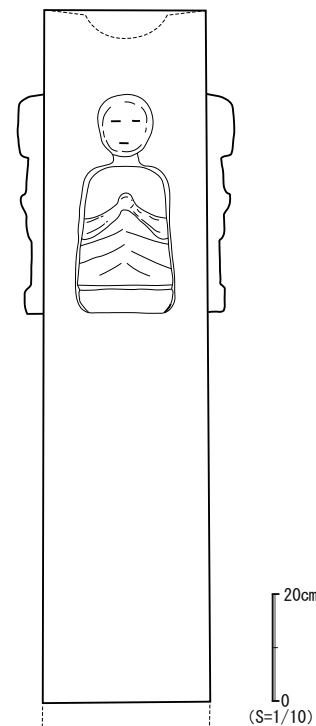
第3図 巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔 実測図

	北面	南面	東面 (正面)	西面 (裏面)
空輪	 𑖕: 【キヤク】	 𑖕 【キヤー】	 𑖕 【キヤ】	 𑖕 【ケン】
風輪	 𑖖: 【カク】	 𑖖 【カー】	 𑖖 【カ】	 𑖖 【カン】
火輪	 𑖗: 【ラク】	 𑖗 【ラー】	 𑖗 【ラ】	 𑖗 【ラン】
水輪	 𑖘: 【バク】	 𑖘 【バー】	 𑖘 【バ】	 𑖘 【バン】
地輪	 𑖙: 【アク】	 𑖙 【アー】	 𑖙 【ア】	 𑖙 【アン】

* 拓本のスケールは $S=1/16$ である。

*  部分は、観察では風化で読みとれなかったが、梵字の並びから想定できる文字である。

第4図 巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔梵字



第5図 巖倉寺 堀尾吉晴墓石柱 実測図



写真1 巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔1



写真2 巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔2



写真3 巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔3



写真4 巖倉寺 堀尾吉晴墓五輪塔4

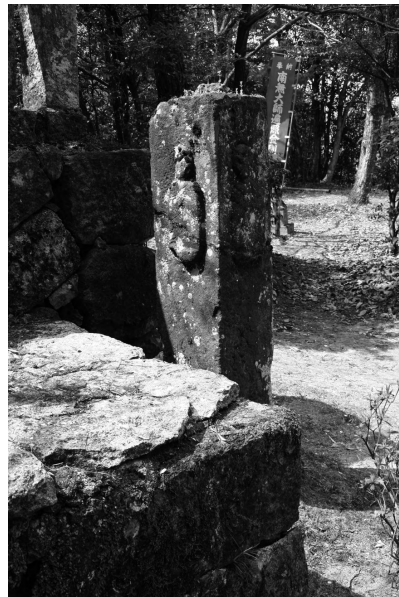


写真5 巖倉寺 堀尾吉晴墓石柱

2. 堀尾忠氏

・広瀬 忠光寺跡

堀尾忠氏墓所跡

慶長9年（1604）に亡くなった堀尾忠氏の墓所と言われる場所が、安来市広瀬^{しんごう}新宮の前谷、字 忠光寺^{ちゅうこうじ}にある^{（注1）}。この前谷は富田城跡の北麓にあたり、墓所は標高73 mの尾根にあり、その先端を削平して、三方には割石積みの石垣が築かれている。石垣に囲まれた正方形の平坦面の中央部には、礎石と考えられる人頭大の石が点在する。ただし、現在は石塔などの石造物は現存しない。なお、この墓所の調査は安来市教育委員会により、平成21年（2009）と同22年に地形測量や平坦面と石垣裾部で遺構確認の発掘が行われている。（安来市教育委員会2011）

遺構としては、前述した礎石と石垣がある。礎石の配列より、東西約8 m、南北9 mの3間×4間半の建物を推定されているが、所々の礎石が抜かれており、規模、構造は確定できない。また、出土品中には瓦が数点ある。瓦の量は少なく、礎石建物には使用されていなく、土堀に葺かれていたかも知れない。石垣の長さは、東側と北側が約13 m、西側が約16 mで、高さは共に約3 mである。さらに、平坦面の南側では7 m程の石列とピット3個を検出している。この遺構は建物を遮蔽する堀にかかるものと推定される。平坦面には4箇所で集石遺構が確認されている。建物内部にある1基は、径約2 m程である。また、この集石は径約4.5 mの不整形の土壕の中にある。発掘は行われていないが、調査者は埋葬施設の一部と推定している。次に、他の3基の集石は建物の東側に2基があり、大きさは1 m程、1.5 m程で、北側には2.5 m程と大きさのものが1基存在した。この遺構の性格や時期については不明である。

遺物としては前述の燹瓦以外に、西側の石垣裾のトレンチより唐津の徳利の底部片が出土している。僅かであるが、手捏ねの京都系土師器皿も1片発見されている。時期は17世紀初めである。

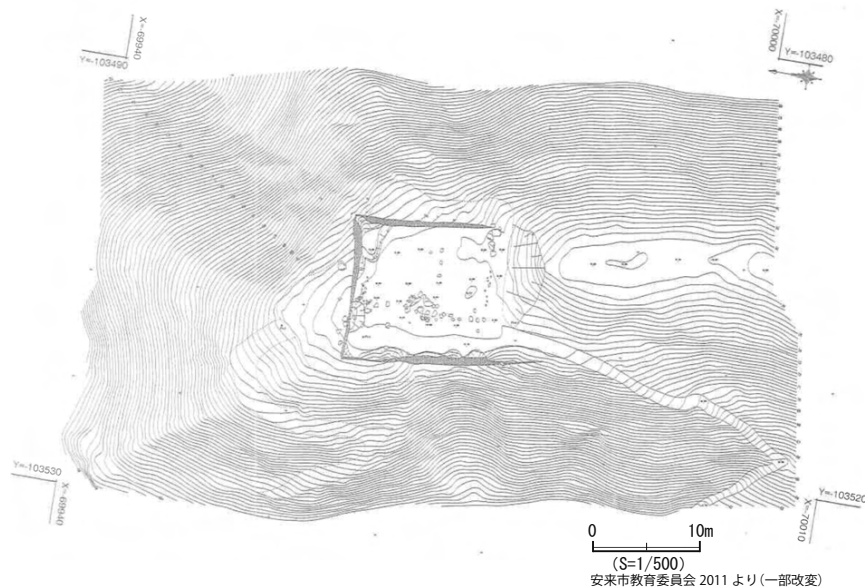
堀尾氏が城を富田から松江に移した江戸時代初期には、この墓所も廃された。「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）に描かれた忠光寺からすると、松江市外中原町の丘陵に移転したと推定される。

注

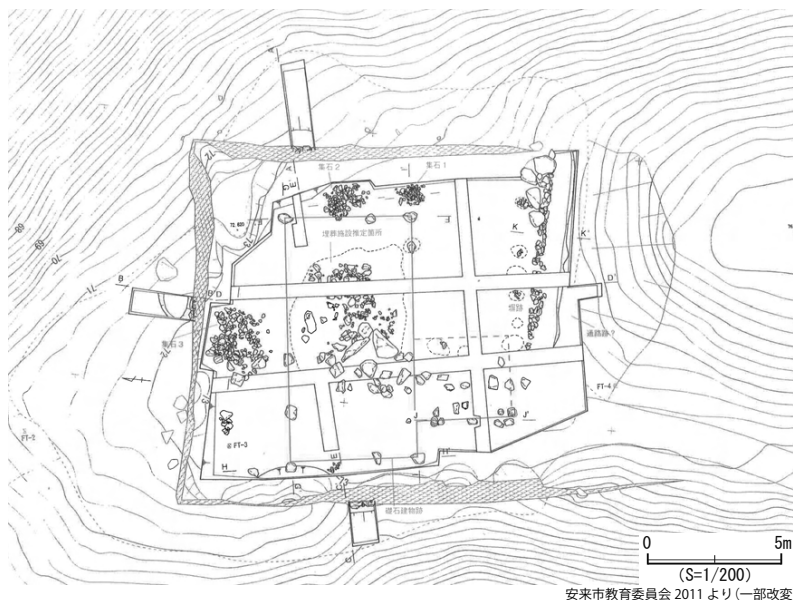
（1）堀尾忠氏の戒名は「忠光寺殿天岫世球大居士」であり、寺号はこの戒名からきている。



写真6 忠光寺跡 堀尾忠氏墓所跡全景



第6図 忠光寺跡 堀尾忠氏墓所跡 周辺地形測量図



第7図 忠光寺跡 堀尾忠氏墓所跡 遺構図

・玉湯 報恩寺

養龍山報恩寺（松江市玉湯町）は真言宗の古刹で、尼子経久^{つねひさ}、堀尾吉晴^{よすけ}、忠氏^{ただはる}、忠晴^{ただはる}などの祈願所と伝えている。『雲陽誌』には「寺宝と称して摩利支天の像、長一寸二分、(中略)。堀尾忠晴の守本尊という。大般若経一部、堀尾采女寄進す」とあり、摩利支天堂の棟札、摩利支天像の他にも、堀尾吉晴による寺領寄進状が現存していることから、寺と堀尾氏との深いつながりを窺い知ることが出来る。本尊の十一面観音立像は、高さ4.26mの長谷寺式の大作で、天正7年（1538）、京都の仏師康運^{こううん}の作である。

報恩寺境内には、堀尾忠氏宝篋印塔、堀尾民部石廟^{みんぶ}などがあり（日野1982増補版）、本堂裏斜面にも玉造湯之助^{たまづのすけ}（注1）を務めた長谷川氏の墓所も残る。石塔群の大半は来待石製であり、そのいくつかは制作年代を概ね推定できる。築城技術に長け、高度な石材加工技術を移入したであろう出雲国主堀尾氏に関わるものも含まれることから、出雲地域における石廟の起源、大型五輪塔・宝篋印塔の出現など、来待石製石塔の変遷をたどる上で貴重な石造物である。

堀尾忠氏は堀尾吉晴の次男とされ、2代松江藩主堀尾忠晴の父である。関ヶ原合戦後、遠江国浜松から慶長5年（1600）に出雲国に移り、慶長6年には吉晴の後を受け、富田城主になるが、慶長9年（1604）に若くして病没した。「堀尾家記録」（島根県編1965a）には、「忠光寺殿前雲隠両太守天岫世球大居士様 慶長九甲辰年八月四日、於出雲卒、二十七歳」とある。富田城で死亡したとも言われ、安来市広瀬町新宮谷には忠光寺跡^{（注2）}があり、菩提寺であったとされる。報恩寺には、マムシに噛まれた忠氏が玉造温泉で治療したが、当地で亡くなったため報恩寺で密葬がおこなわれ、墓として忠氏石塔が建てられた、という寺伝が残っている。

堀尾忠氏宝篋印塔

宝篋印塔は来待石製品としては最大級のもので、保存状態は良く、総高255cmを測る。石塔の下には幅116cm、奥行き122cm、厚さ23cmで、2枚からなる台石を敷く。また、塔の周囲には幅212cm、奥行き281cm、高さ15cm程の基壇（縁石が河原石、内部に円礫を詰める）が残る。

宝篋印塔は相輪、笠、塔身、基礎を別々の石で作る。

相輪は高さ93.6cmで、宝珠の高さ15.6cm、最大径32.4cm、上部の受花は高さ10cm、最大径32cmである。九輪は高さ43cm、8輪が確認され、各輪の溝は線状に削られており、最上部の径27.8cm、基底部分は34cmで、やや胴張りである。下部の受花は高さ13cm、最大径35cmである。伏鉢は高さ11cm、最大径34.8cmである。

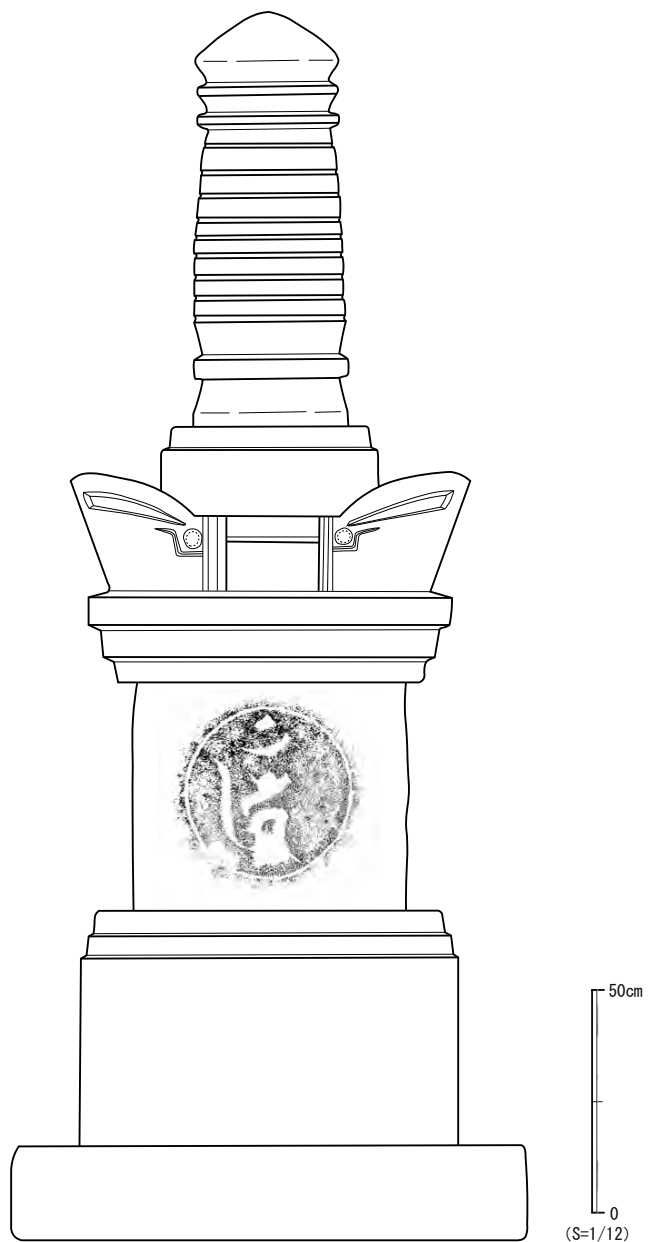
笠は高さ57.4cm、上端幅44cm、軒幅82cm、下端幅69cm、隅飾の高さ26.6cm、最大幅89.8cmである。隅飾は馬耳状に加工し、側面には模様をもつ。軒の下部は2段の階段もち、上部は4段の階段（下2段は形骸化している）をもつ。大型品のため、相輪の柄と笠の柄穴は実測できなかった。

塔身は直方体で、高さ51cm、上端は幅60.6cm、奥行き60cm、下端は幅61cm、奥行き58cmで、中央部がやや膨らむ。四面には月輪の中に薬研彫りの梵字があり、正面には阿闍如来を表す「ウン」が彫り込まれている。

基礎は上部に2段の階段をもち、高さ53cm、上端は幅76.6cm、奥行き74.6cm、下端は幅84.8cm、奥行き85cmである。

注

- (1)「湯之助」とは役職名で、江戸時代に玉造温泉の管理を松江藩から任されていた。代々長谷川氏の世襲であった。江戸末期までに13人の湯之助役が知られている。
- (2)昭和56年度に忠光寺跡西側の麓の谷でトレンチ調査が行われたが、遺構は確認されていない（島根県教育委員会1983）。後、平成22年にも発掘調査が行われた（安来市教育委員会2011）。



第8図 報恩寺 堀尾忠氏宝篋印塔 実測図



写真7 報恩寺



写真8 報恩寺 堀尾忠氏宝篋印塔 (正面)



写真9 報恩寺 堀尾忠氏宝篋印塔 (側面)

3. 堀尾忠晴

・松江 圓成寺

堀尾忠晴五輪塔の所在する鏡湖山圓成寺（松江市栄町）は、堀尾氏三代及びその一族の霊牌を祀る臨濟宗 妙心寺派の名刹である。堀尾吉晴は広瀬の城安寺を洗合（今の外中原町）に移し、龍翔山瑞応寺と改めて、帰依した春龍 玄済和尚を旧領遠州浜松の天徳寺から請い招いて当寺の開山としたと伝える。その後、春龍和尚は意宇郡乃木村の地（今の圓成寺の地）を賜わり隠棲の地とした。後、高弟龍沢和尚は臨江庵と称する庵寺を創建したといわれる。

寛永10年（1633）に、堀尾家は断絶し、同11年（1634）、京極忠高が入国するに及び、翌12年（1635）に瑞応寺を現在地に移し、堀尾忠晴の法号である「圓成寺殿」からとって寺号を鏡湖山圓成寺と改め、堀尾家累代の菩提寺とした。

堀尾忠晴は、吉晴の孫、忠氏の子で、母は前田玄以の女（長松院）である。慶長4年（1599）、遠州浜松城で生まれ、幼名を三之助といった。慶長9年（1604）8月4日、父忠氏の死去により2代藩主として跡を継いだ。年わずかに6歳であったので、吉晴が実質国政をみるようになった。忠晴は、慶長16年（1611）3月に元服・叙爵して堀尾山城主と称した。同年6月、吉晴が65歳で没したので、名実ともに出雲・隠岐両国の国政にあたることになった^{（注1）}。慶長19年（1614）の大坂冬の陣に16歳で初陣、軍功をたて、翌元和元年（1615）の大坂夏の陣にも参戦し、元和5年（1619）、福島正則が広島没収の際にも城公収の事に当たり、翌6年（1620）には西国、北国の諸大名と共に大坂城修理にも携わった。

寛永10年（1633）9月20日、江戸藩邸にて35歳で病死し、「圓成寺殿前雲隠兩州大守拾遺高賢世肖大居士」（圓成寺「堀尾忠晴位牌」より）と諡した。江戸駒込養源寺に埋葬されたが、寛永12年（1635）、新藩主京極忠高は圓成寺に忠晴の分骨を葬った。忠晴は、夫人（奥平家昌の女（娘）：家康の曾孫女）との間に一女をもうけたが嗣子はなく、いとこの宗十郎を後継ぎにと哀願したが聞き入れられず、忠晴逝去により堀尾家は断絶することになった。

松江藩主堀尾忠晴墓所（松江市指定史跡）

堀尾忠晴の墓所は、圓成寺境内の北西部にある墓地の北奥に所在する。南に下がる丘陵中途を平坦に切削し、東西7.13m、南北8.31mの長方形の玉垣に囲まれた中に東西2.8m、南北2.76mの略正方形の内側の玉垣を設け、二重としている。

堀尾忠晴五輪塔

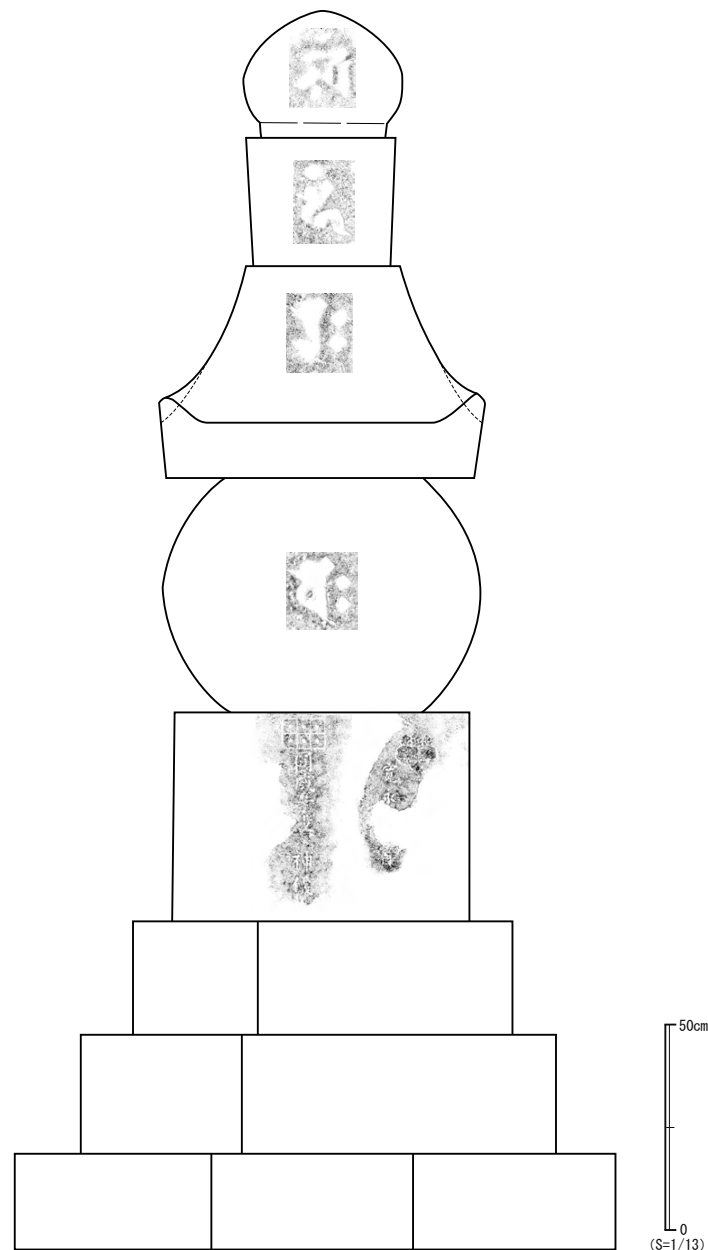
内側の玉垣の中で、3段の基礎（基壇）の上に來待石製の大型五輪塔を置く。空輪から地輪までの五輪塔の総高は216cm、3段の基礎（基壇：高さ79cm）を含めた総高は295cmである。墓石の前には、六ツ目結と分銅の家紋が格狭間の中に半肉彫りされた水溜め（石工の渡部卯助の陰刻銘あり）と線香立て、両側に花立、最前部に御供台がある。

空風輪は、総高60cm、空輪の高さ30cmで、表面と裏面に梵字を刻む。風輪の高さは30cmで、直径35cmを測り、やや上方に広がり四面に梵字を刻む。

火輪は、高さ50cm、下面は平坦で一辺74.5cm、上面の一辺は38cmを測り、四面に梵字を刻む。

水輪は、高さ56cm、最大径はほぼ中位にあり、直径78cmを測り、四面に梵字を刻む。

地輪は、高さ50cm、一辺71cmの直方体で、やや胴張りの感がある。表面右上に五七の桐紋、その左下に「寛永〇酉」、中央上部に六ツ目結紋、その下に「圓成寺殿神儀」、但し「寺」と「殿」はかなり剥落している。左側にも字が陰刻されていたようであるが、剥落しており不明である。裏面には、ほぼ全面にわたり7行にわたり、1行当たり最大13文字が陰刻されている。刻字には一部に赤色顔料が塗布しており、本来は全部の字に塗布してあったものと思われる。銘文は別記（第10図、第11図）のとお



第9図 圓成寺 堀尾忠晴五輪塔 実測図



写真 12 圓成寺 堀尾忠晴五輪塔
(正面)



写真 13 圓成寺 堀尾忠晴五輪塔
(裏側)



写真 14 圓成寺 堀尾忠晴五輪塔 (銘文の刻まれた地輪)

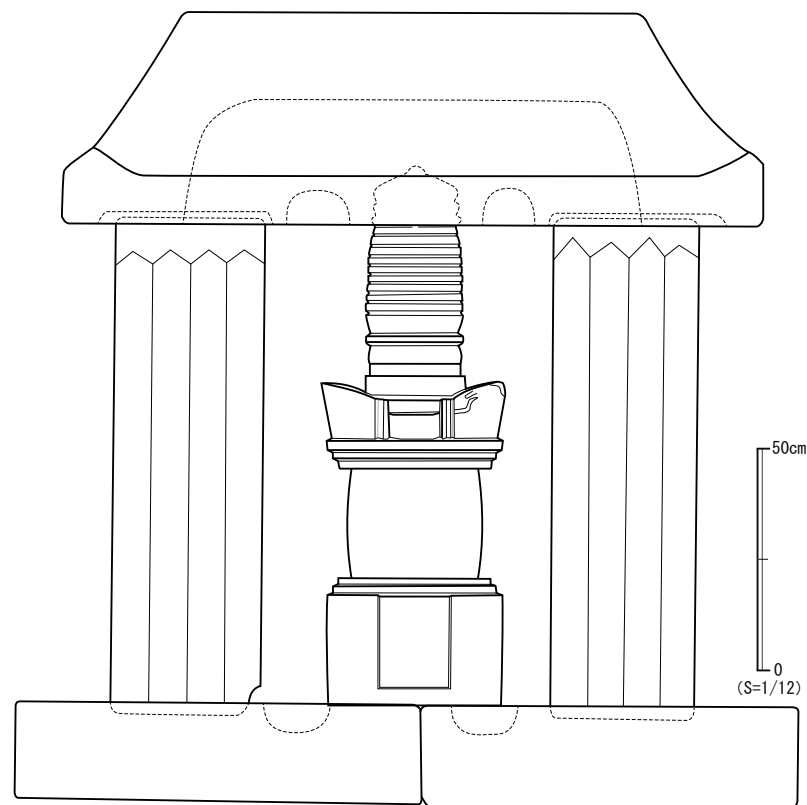
4. 堀尾氏の一族

・親子観音 (堀尾勘解由石廟) (広瀬 富田城内)

親子観音は、富田城 (安来市広瀬町) の山中御殿跡から本丸に至る登山道脇に所在し、寄棟平入屋根を有する来待石製石廟の内部に石塔 (宝篋印塔) 1 基を納めている。宝篋印塔の基礎には戒名、没年月日 (慶長 13 年 (1608) 12 月 5 日) が刻まれている。

親子観音は、堀尾河内・勘解由親子の墓、堀尾忠氏の墓などの諸説があった。しかし、堀尾家重臣の堀尾但馬が記したとされる「堀尾古記」(松江市史編集委員会編 2018) に、慶長 13 年「堀尾勘解由果ル、極月五日京ニテ」と記されていること、京都・春光院所蔵の「春光院三時回向」に「桂岩院殿祥雲世端大居士 慶長十三 十二月五日」と記されていることから、親子観音は堀尾勘解由に由来して造られたものと理解できた (今岡 2006、岡崎ほか 2006、岡崎ほか 2007)。

堀尾勘解由は堀尾吉晴の娘の子 (吉晴の孫) にあたる人物であるが、忠氏の死後、吉晴の娘婿・堀尾 (野々村) 河内が息子勘解由を後継者とするために、忠晴を広瀬の屋敷で監禁し、亡きものにしようとしたとされる堀尾騒動の当事者として語られてきた。事件の信憑性は明らかではないが、高野山の堀



第 12 図 親子観音 (堀尾勘解由石廟) 実測図

尾家墓所にも勘解由の石塔が存在することなどから、没後も堀尾家一族として弔われていたことが分かる。

石廟

来待石製石廟は花崗岩を組み合わせた基壇をもつ。基壇の横幅は上幅で173 cm、下幅で180 cm、奥行きは上幅で135 cm、下幅で145 cm、高さ60 cmである。

石廟は来待石製で、横幅125 cm、奥行き95 cm、屋根棟までの高さ156 cm(壁上までの高さ108 cm)である。床石は2枚からなり、床の幅173 cm、奥行き131 cm、厚さ21 cmである。壁石は厚さ11.5 cmで、6枚で構成され、表面全体に、「空風火水地」の文字と四十九院名が刻まれた卒塔婆が刻まれている。寄棟の屋根は平側151 cm、妻側117 cm、高さ48 cmである。軒の幅は9 cmで、両端に反りをもつ。棟にあたる頂部には幅9.5 cm、長さ100 cmの平坦部が認められる。

入口は幅63 cmで、床石及び天井部(屋根)にそれぞれ2個の柄穴が残っていることから、観音開きの扉石が2枚あったと考えられる。天井の柄穴は直径13 cm、深さ7 cm、床の柄穴は直径13 cm、深さ5.5 cmである。

石廟には、時期は不明であるが、覆屋のようなものが建てられようで、石廟を囲むように礎石が残っている。

宝篋印塔

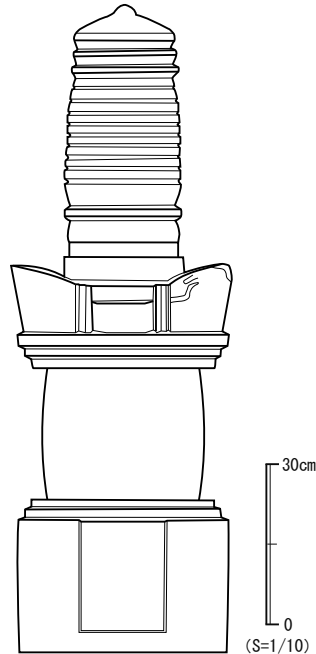
石廟内の宝篋印塔は、相輪、笠、塔身、基礎からなり、総高117 cm、各部材とも良好な状態で残っている。

相輪は、高さ42.5 cmで下から伏鉢・下部受花・九輪・上部受花・宝珠が表現されているが、上下の受花部分に花卉の表現はない。伏鉢は、下端径20 cm。下部受花は、下端径19 cm、最大径17.5 cm。九輪は、8本の浅いやや幅広の線で表現されている。上部受花は下端幅17.5 cm、宝珠は下端幅17 cm、最大幅18 cmである。

笠は、高さ23.5 cm、下端幅32.5 cm、上端幅19.5 cm、最大幅40 cmで、下部階段が2段、上部階段が4段作り出されているが、上部階段の隅飾に挟まれた部分の階段表現は簡略的である。隅飾は高さ13.5 cm、下端幅35 cmで側面には、文様が刻まれている。

塔身は、高さ24 cm、上端幅27 cm、下端幅27 cm、中幅28 cmで、塔身中位がややふくれる形状である。塔身には、月輪に梵字が刻まれている。

基礎は、高さ27 cm、上端幅32 cmで上部に2段の階段を有する。正面の中央は一段掘り下げており、蓮華座を刻む。基礎の正面(蓮華座の左右)と左右側面に銘が刻まれており、正面蓮華座の右側には「附□□院殿祥雲」、左側には「世□大居士靈儀」の戒名が、基礎右側面に没年「慶長十三年(1608)」、左側面に没月日「十二月五」が刻まれている。



第13図 親子観音(堀尾勘解由石廟)内宝篋印塔 実測図



写真15 親子観音(堀尾勘解由石廟) 1



写真16 親子観音(堀尾勘解由石廟) 2

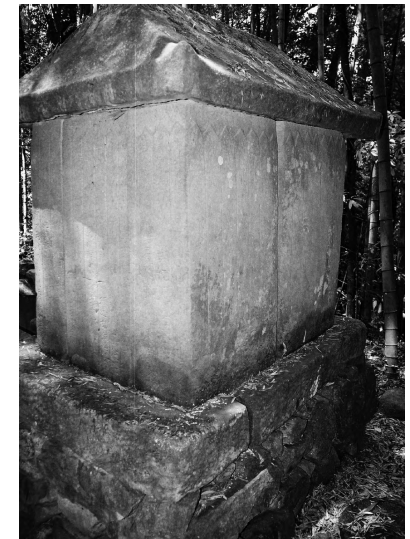


写真18 親子観音(堀尾勘解由石廟)(裏側) 1



写真17 堀尾勘解由宝篋印塔

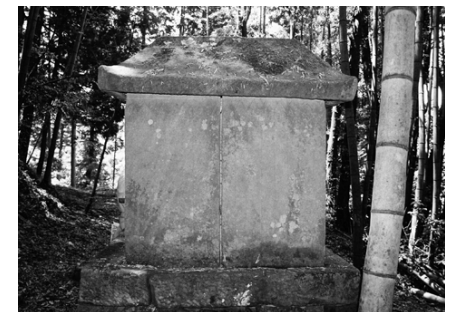
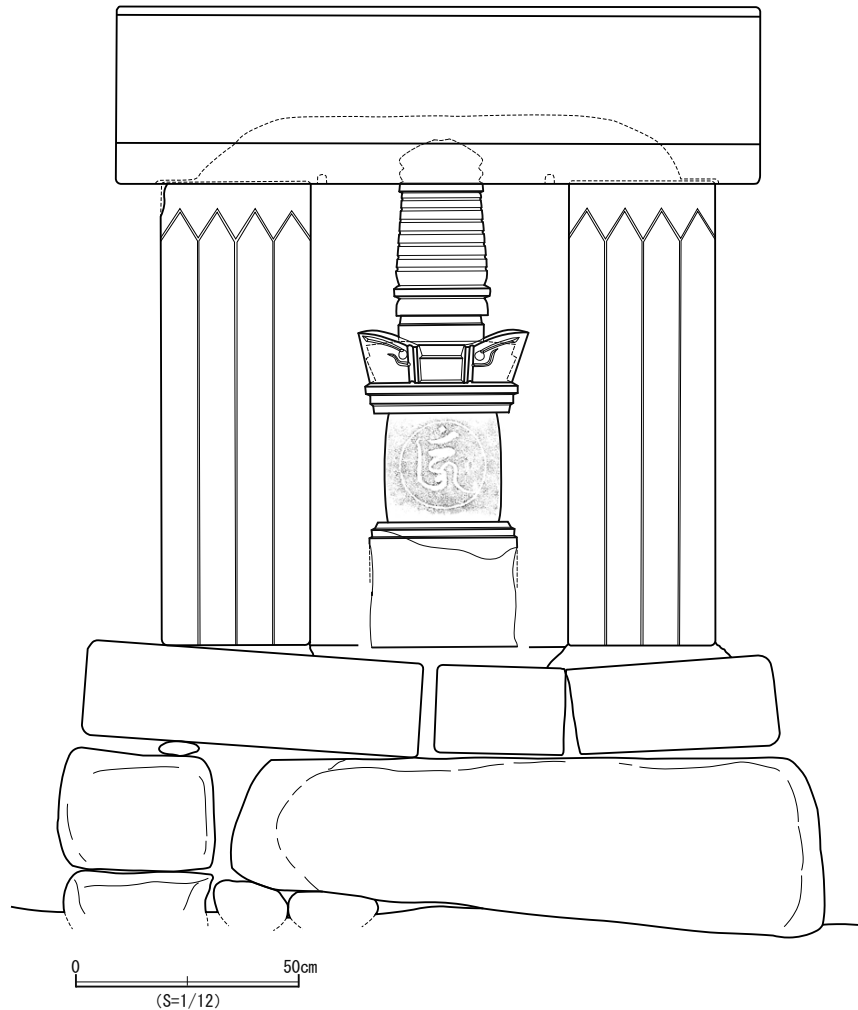


写真19 親子観音(堀尾勘解由石廟)(裏側) 2

・堀尾民部石廟（玉湯 報恩寺）

報恩寺観音堂の裏の山裾に、切妻平入屋根を有する来待石製の石廟がある。内部には宝篋印塔が1基あり、堀尾民部の墓もしくは供養塔である。堀尾民部、堀尾采女親子^{（注1）}は堀尾吉晴、忠氏、忠晴に仕えた堀尾一族である。この石塔を堀尾民部の石塔とする所以であるが、石廟壁石外面に刻出された卒塔婆に「實山榮眞大居士」と刻まれ、報恩寺の過去帳に「實山榮眞大居士 元和七年西辛三月 堀尾山城守家臣也 采女^{ちからめ}□□」とある。また、過去帳の頭注には「本堂後ニ廟所アリ」と記されている。「堀尾古記」（松江市史編集委員会編 2018）に、元和6年「三月六日ニ民部果ル」とあるので、過去帳の年



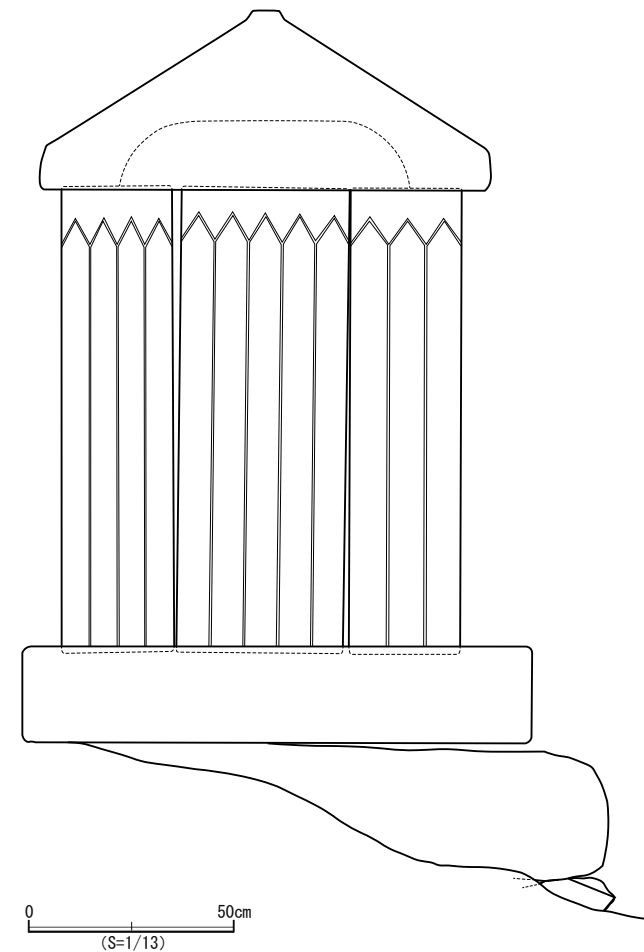
第14図 堀尾民部石廟 実測図

記は一年後（一周忌か）となっている。なお、高野山奥之院の堀尾家墓所の調査から、「實山榮眞大居士」が堀尾民部の戒名であることが確認された。采女は報恩寺に大般若経を寄進した事実があり、采女が父民部のために、報恩寺裏に墓もしくは供養塔としてこの石廟を建立したものと思われる。

石廟の北隣には、石列による幅約1m、長さ約10mの区画が認められ、中型の宝篋印塔2基がある。ただし、由来等は不明である。また、寺の南側の丘陵斜面には江戸時代の五輪塔、宝篋印塔、石龜^{せきかみ}等が散在する。

石廟

来待石製石廟には、入口の天井部に2個の柄穴が残っており、元は、扉石が2枚あり、観音開きになっていたと推定される。石廟は長さ130cm、奥行き150cm以上、高さ40cmの来待石の基壇に置かれている。



第15図 堀尾民部石廟（正面左側面）実測図

石廟本体は横幅 124 cm、奥行 100 cm、高さ 164 cm で、大型のもの。床石は 2 枚からなり、床の幅 152 cm、奥行 128 cm、厚さ 21.2 cm である。壁石は厚さ 7 cm で、7 枚で構成され、表面全体に、梵字や四十九院名、そして戒名が刻まれた卒塔婆が陽刻されている。切妻の屋根は平側 144 cm、妻側 112 cm、高さ 40 cm である。軒の幅は 8.8 cm で、反りはない。棟にあたる頂部は 2 cm 程高くなり、幅 10.8 cm の平坦部が認められる。

宝篋印塔

石廟内の宝篋印塔は、宝珠の先端が欠けている状態での高さ 114.4 cm である。石塔は、宝珠のほか、基礎は階段下の剥落が著しいことを除けば、良好な状態で残っている。

相輪は、高さ 39.5 cm で、先述したように宝珠先端を欠く。下から伏鉢・下部受花・九輪・上部受花・宝珠が表現されているが、上下の受花部分に花卉の表現はない。伏鉢は、下端径 22.4 cm。下部受花は、下端径 18.8、最大径 10.7 cm。九輪は、20.1 cm で、7 本の浅いやや幅広の線で表現されている。上部受花は下端幅 8.6 cm、宝珠は下端幅 16.8 cm、最大幅 18.4 cm である。

笠は、高さ 21.8 cm、下端幅 30.2 cm、上端幅 17.8 cm で、下部階段が 2 段、上部階段が 4 段作り出されているが、上部階段の隅飾に挟まれた部分の階段表現は簡略的である。隅飾は高さ 11.2 cm、下端幅 10.8 cm で側面には、文様が刻まれている。

塔身は、高さ 24.5 cm、上端幅 24.2 cm、下端幅 24.7 cm で、塔身中位がややふくれる形状を呈している。塔身には、月輪に梵字が刻まれ、正面を向いている。

基礎は、高さ 28.1 cm、上端幅 27.0 cm で、上部に 2 段の階段を有する。

ここで、本石塔の特徴を抽出してみると、笠部の上部階段表現が階段状にはつき



第 16 図 堀尾民部石廟内宝篋印塔 実測図

りと作り出すのではなく簡略化され、特に、隅飾の間では階段表現が形骸化してしまっていること、隅飾がやや外側に開き、やや丸みをもつが、直線的な文様が施されていること、九輪の表現がやや幅広で浅い沈線表現されていることなどである。

注

- (1) 『断家譜』巻 4 続群書類従完成会 1981 によると、堀尾民部は堀尾吉晴の甥（姉の子）、采女は民部の子である。采女は寛永 21 年（1644）5 月 19 日没、駒込養源寺に葬ったと記されている。江戸における堀尾氏の墓所は、東京都文京区千駄木の臨済宗養源寺に残っている。『島根県史』（第 9 編 1900）には、当時、石塔としては、堀尾忠晴（山城守）墓とその女（石川廉勝妻）、忠晴に殉死した松村監物の墓とともに、堀尾勝明（式部）の墓、堀尾采女の墓が残ると記している。養源寺のご教示によると、墓地は第二次世界大戦後に整理されたようである。堀尾采女墓の宝篋印塔は、基壇の正面中央に「地」が大きく刻まれ、その左側に「寛永廿一年甲申五月十九日」、右側に「大用浄輪居士」とあり、系図の記載と一致する。なお、「堀尾忠晴給帳（寛永年間 圓成寺蔵）」『新修島根県史』史料編 2 1965 などによれば、堀尾采女は 4 千石で、堀尾家臣中で堀尾修理（三刀屋を領す）、堀尾因幡（赤名を領す）に次ぐ。



写真 20 報恩寺 堀尾民部石廟 1



写真 21 報恩寺 堀尾民部石廟 2



写真 22 報恩寺 堀尾民部石廟
(南側面)



写真 23 報恩寺 堀尾民部石廟
(北側面)



写真 24 報恩寺 堀尾民部宝篋印塔

・殿様墓（三刀屋）

1) 「殿様墓」と同安寺

雲南市三刀屋町 給下字同安寺に、「殿様墓」と呼ばれる 2 基の来待石製石廟がある。「同安寺谷」の奥平坦面に所在し、「殿様墓」の前方には谷地形を加工し埋めたような一段低い平坦面が広がっている(第 17 図)。地元では 2 つの平坦面一帯を「同安寺(道安寺)」、「殿様墓」に至る坂道を「同安寺坂」と呼ぶ。現在、同安寺に関わる建造物は失われているが、寺の本尊とされる仏像が近くの梅窓院(曹洞宗)に納められている。

「殿様墓」は、三刀屋(諏訪部)氏の墓、あるいは堀尾氏の墓などと伝承されてきた(今岡 2006)。「殿様墓」と類似する来待石製石廟は、「親子観音」(安来市広瀬町)、「堀尾民部石廟」(松江市玉湯町)が確認されており、「親子観音」は堀尾勘解由、「堀尾民部石廟」は堀尾民部のために造立されたと考えられることから(岡崎ほか 2006、岡崎ほか 2007、西尾ほか 2011、松江市教育委員会 2010)、来待石製石廟は堀尾氏重臣層のための墓、あるいは供養塔として用いたものと考えられる。「殿様墓」も堀尾氏重臣のために造立されたと考えるのが妥当であろう。

2) 「殿様墓」

「殿様墓」は、石垣基壇の上に 2 基の来待石製石廟が載るもので、石廟にはいずれも宝篋印塔 2 基が納められている。「殿様墓」の左側には、低い石垣基壇の上に宝篋印塔を納める石龜 1 基、無縫塔 2 基があり、周辺には来待石製の宝篋印塔や五輪塔の残欠が積まれている。本書では正面から見た配置で説明する。

(a) 石廟(正面右側)

基壇は幅 410 cm、奥行き 200 cm、高さ 70 cm ほどで、花崗岩を石垣状に組み合わせ積んでいる。基壇の上に、正面から見て左右 2 基の石廟が並ぶ。

石廟は来待石製で、横幅 144 cm、奥行き 102.5 cm、屋根までの高さ 143 cm(壁高 111.5 cm)である。床石は 2 枚からなり、床石の幅 168 cm、奥行き 102.5 cm、厚さ 19 cm である。壁石は厚さ 10.5 cm で、6 枚で構成され、表面全体に、「空・風・火・水・地」や四十九院名が刻まれた卒塔婆が陽刻されている(注 1)。切妻の屋根は平側 159 cm、妻側 121 cm、高さ 35 cm である。軒の幅は 12.5 cm で、反りはない。棟にあたる頂部は 2 cm 程高くなり、幅 10 cm の平坦部が認められる。屋根の妻側は三角形に一段掘りくぼめられており、その中に蓮華文を刻む。

入口の天井部、床部にそれぞれ 2 個の円柱形の枘穴が残っており、左右廟と同様に観音開きの扉石が 2 枚あったと考えられるが、現在は失われている。天井の枘穴は直径 14 cm、深さ 8 cm、床石の枘穴は直径 15 cm、深さ約 7 cm である。

宝篋印塔(正面右側)

石廟内右側の宝篋印塔は、相輪、笠、塔身、基礎からなり、総高 113.5 cm である。石塔は、基礎の階段下の剥落が認められるほかは、良好な状態で残っている。

相輪は、高さ 42 cm で、下から伏鉢・下部受花・九輪・上部受花・宝珠が表現されているが、上下の受花部分に花卉の表現はない。伏鉢は、下端径 19.5 cm。下部受花は、下端径 18.5 cm、最大径 20 cm。九輪は 7 本の浅いやや幅広の線で表現されている。上部受花は下端幅 17.5 cm、宝珠は下端幅 17 cm、最大幅 18.5 cm である。

笠は、高さ 22.5 cm、上端幅 37 cm、下端幅 29 cm で、下部階段が 2 段、上部階段が 4 段作り出されているが、上部階段の隅飾に挟まれた部分の階段表現は簡略的である。隅飾は高さ 12.5 cm、下端幅 32 cm で側面に

は、文様が刻まれている。

塔身は、高さ 24 cm、上端幅 20 cm、下端幅 26 cm、中幅 27 cm で、塔身中位がややふくれる形状である。塔身の四面には、月輪に梵字が刻まれている。

基礎は、高さ 25 cm、上端幅 29.5 cm、下端幅 35 cm で、上部に 2 段の階段を有する。基礎の階段下は剥落が著しいが、ほぼ中央上部に「元」の刻字がわずかに認められる^(注2)。

宝篋印塔（正面左側）

石廟内左側の宝篋印塔は、相輪、笠、塔身、基礎からなり、総高 114 cm である。石塔は、基礎の階段下の剥落が認められるほかは、良好な状態で残っている。

相輪は、高さ 40 cm で、下から伏鉢・下部受花・九輪・上部受花・宝珠が表現されているが、上下の受花部分に花卉の表現はない。伏鉢は、下端径 19 cm。下部受花は、下端径 18 cm、最大径 19.5 cm。九輪は 7 本の浅いやや幅広の線で表現されている。上部受花は下端幅 17.5 cm、宝珠は下端幅 16.5 cm、最大幅 18.5 cm である。

笠は、高さ 24 cm、上端幅 38.5 cm、下端幅 31 cm で、下部階段が 2 段、上部階段が 4 段作り出されているが、上部階段の隅飾に挟まれた部分の階段表現は簡略的である。隅飾は高さ 12.5 cm、下端幅 34 cm で側面には、文様が刻まれている。

塔身は、高さ 25 cm、上端幅 26.5 cm、下端幅 26.5 cm、中幅 27 cm で、塔身中位がややふくれる形状である。塔身の四面には、月輪に梵字が刻まれている。

基礎は、高さ 25 cm、上端幅 29.5 cm、下端幅 35.5 cm で、上部に 2 段の階段を有する。

(b) 石廟（正面左側）

幅 407 cm、奥行き 197 cm、高さ 71 cm の石垣基壇の左側に置かれている。

石廟は来待石製で、横幅 139 cm、奥行き 103 cm、屋根までの高さ 147 cm（壁高 109.5 cm）である。床石は 2 枚からなり、床の幅 165 cm、奥行き 133 cm、厚さ 15 cm である。壁石は厚さ 11 cm で、6 枚で構成され、表面全体に、「空・風・火・水・地」や四十九院名が刻まれた卒塔婆が陽刻されている。切妻の屋根は平側 162 cm、妻側 125 cm、高さ 37 cm である。軒の幅は 11 cm で、反りはない。棟にあたる頂部は 2 cm 程高くなり、幅 9 cm の平坦部が認められる。屋根の妻側は三角形に一段掘りくぼめられており、その中に蓮華文を刻む。

入口には観音開きの扉石が 2 枚あり、入口の天井部、床部にそれぞれ 2 個の円柱形の柄穴が掘り、扉を据え付ける。一方、正面右側扉は幅 32 cm、高さ 107 cm、厚さ 9 cm で、「日」を表現した丸い割り抜きがある。左側扉は幅 32 cm、高さ 107 cm、厚さ 9 cm で、「三日月」を表現した割り抜きがある。

宝篋印塔（正面右側）

石廟内右側の宝篋印塔は、相輪、笠、塔身、基礎からなり、総高 116 cm である。石塔は、基礎の階段下の剥落が認められるほかは、良好な状態で残っている。

相輪は、高さ 42 cm で下から伏鉢・下部受花・九輪・上部受花・宝珠が表現されているが、上下の受花部分に花卉の表現はない。伏鉢は、下端径 18 cm。下部受花は、下端径 16 cm、最大径 17.5 cm。九輪は 7 本の浅いやや幅広の線で表現されている。上部受花は下端幅 15 cm、宝珠は下端幅 16 cm、最大幅 16.5 cm である。

笠は、高さ 20 cm、上端幅 39 cm、下端幅 28 cm で、下部階段が 2 段、上部階段が 4 段作り出されているが、上部階段の隅飾に挟まれた部分の階段表現は簡略的である。隅飾は高さ 12.5 cm、下端幅 28.5 cm で側面には、文様が刻まれている。

塔身は、高さ 24 cm、上端幅 25 cm、下端幅 25 cm、中幅 26 cm で、塔身中位がややふくれる形状である。

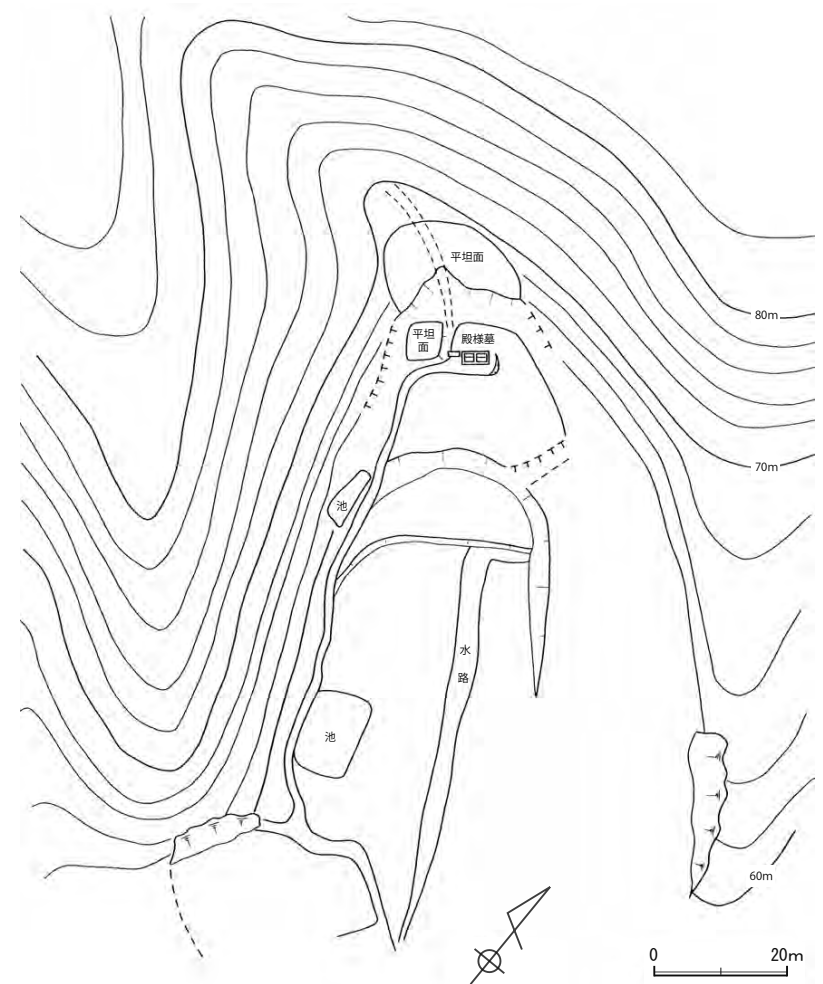
塔身の四面には、月輪に梵字が刻まれている。

基礎は、高さ 30 cm、上端幅 29 cm、下端幅 33.5 cm で、上部に 2 段の階段を有する。

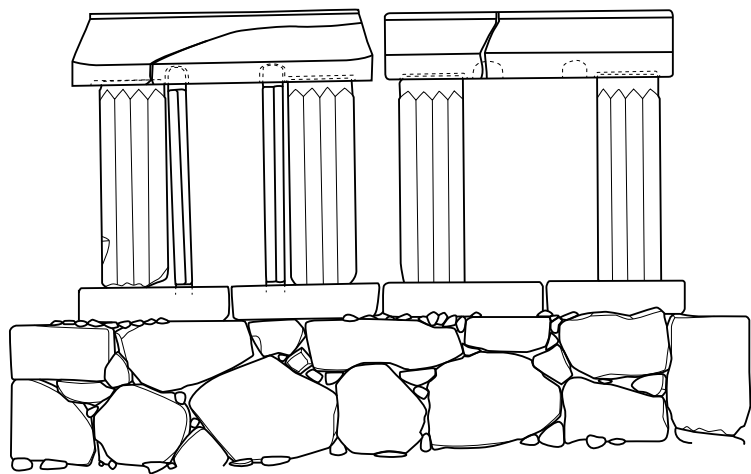
宝篋印塔（正面左側）

石廟内左側の宝篋印塔は、相輪、笠、塔身、基礎からなり、総高 108.5 cm である。石塔は、基礎の階段下の剥落が認められるほかは、良好な状態で残っている。

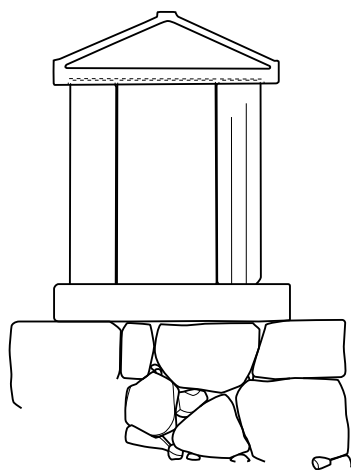
相輪は、高さ 39 cm で、下から伏鉢・下部受花・九輪・上部受花・宝珠が表現されているが、上下の



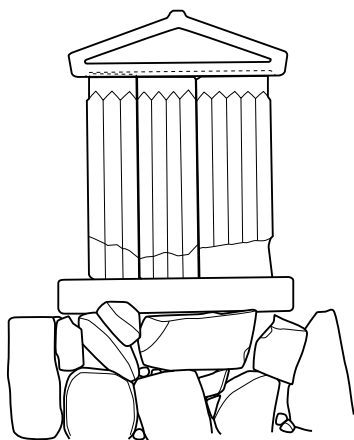
第 17 図 殿様墓 周辺地形 測量図



(正面)



(左正面)



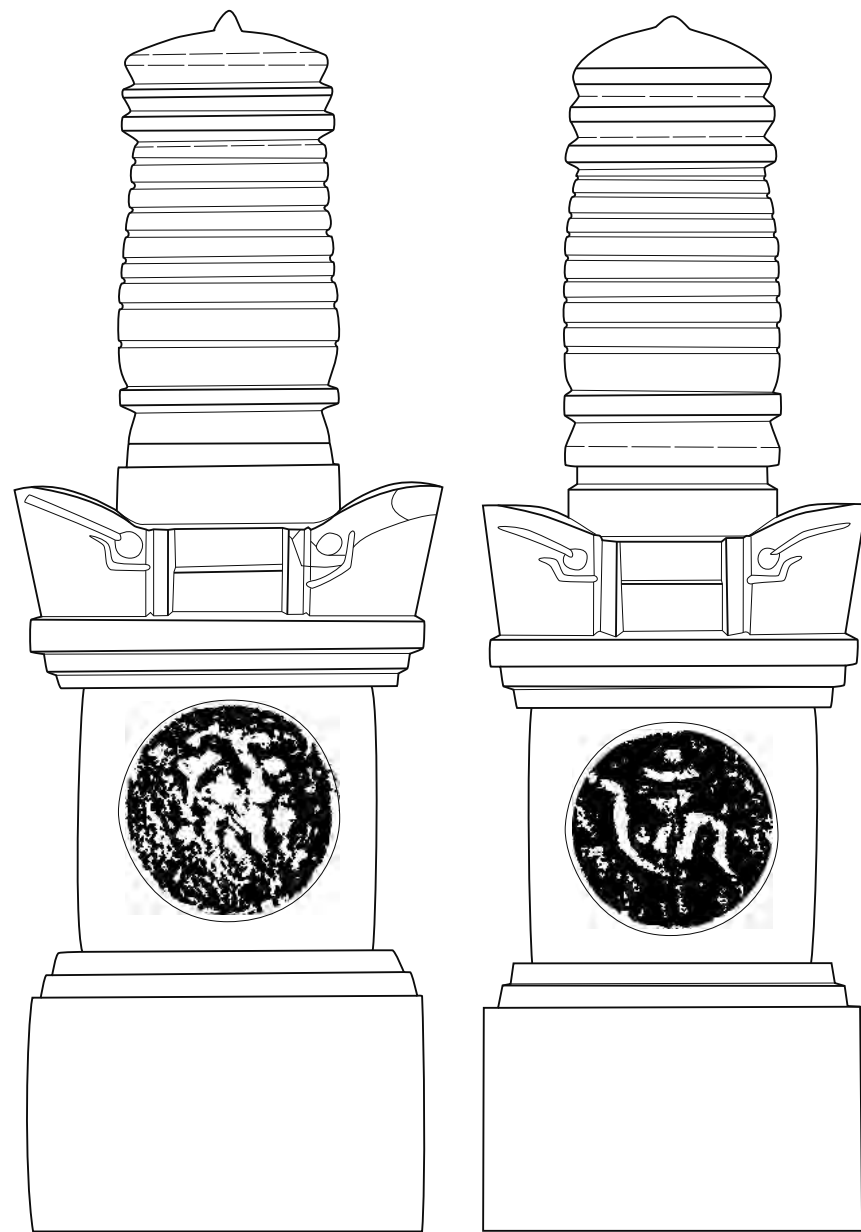
(右正面)

0 1m

(S=1/30)

今岡 2005 より一部改変し再トレース

第 18 図 殿様墓 実測図

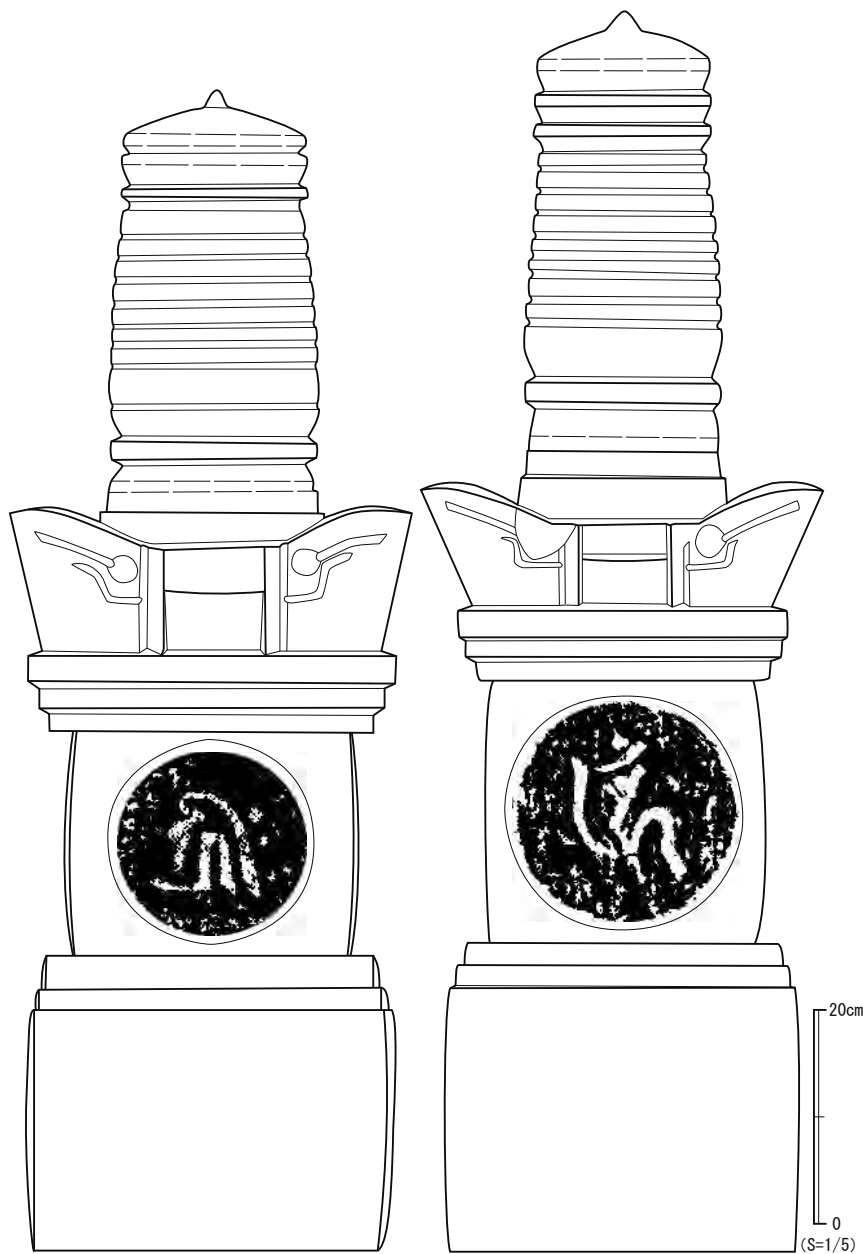


今岡 2005 より一部改変し再トレース

0 20cm

(S=1/5)

第 19 図 殿様墓石廟 (正面右側) 内宝篋印塔 実測図



第 20 図 殿様墓石廟（正面左側）内宝篋印塔 実測図

受花部分に花卉の表現はない。伏鉢は、下端径 17.5 cm。下部受花は、下端径 16 cm、最大径 17 cm。九輪は 7 本の浅いやや幅広の線で表現されている。上部受花は下端幅 15.5 cm、宝珠は下端幅 15.5 cm、最大幅 16.5 cm である。

笠は、高さ 20 cm、上端幅 36 cm、下端幅 29.5 cm で、下部階段が 2 段、上部階段が 4 段作り出されているが、上部階段の隅飾に挟まれた部分の階段表現は簡略的である。隅飾は高さ 13 cm、下端幅 31 cm で側面には、文様が刻まれている。

塔身は、高さ 20.5 cm、上端幅 25 cm、下端幅 25 cm、中幅 25.5 cm で、塔身中位がややふくれる形状である。塔身の四面には、月輪に梵字が刻まれている。

基礎は、高さ 29 cm、上端幅 30 cm、下端幅 33 cm で、上部に 2 段の階段を有する。

(c) 石龕内の宝篋印塔（「殿様墓」左側）

「殿様墓」の左側には、宝篋印塔を納める石龕 1 基がある。石龕内の宝篋印塔は、相輪、笠、塔身、基礎からなり、総高 72.9 cm である。石塔は基礎階段下の剥落が著しく、隅飾が多少欠損しているものの、全体としては良好な状態で残っている。

相輪は、高さ 22.6 cm で下から伏鉢・下部受花・九輪・上部受花・宝珠が表現されているが、上下の受花部分に花卉の表現はない。伏鉢の下端径 12.5 cm、下部受花の下端径 11.7 cm、最大径 12.2 cm。九輪の表現も簡略化され、5 本の浅く細い線で表現されている。上部受花は下端幅 10 cm、最大幅 11.4 cm、宝珠は下端幅 10.7 cm、最大幅 11.4 cm である。

笠は、高さ 16.3 cm、下端幅 18.7 cm、上端幅 12.6 cm で、下部階段が 2 段、上部階段が 4 段作り出されているが、上部階段の隅飾に挟まれた部分の階段表現は簡略的である。隅飾は高さ 7.2 cm、下端幅 7 cm で側面に文様が刻まれている。

塔身は、高さ 14.5 cm、上端幅、下端幅ともに 15.4 cm で、塔身中位がややふくれる形状を呈している。塔身の四面には梵字が配されている。

基礎は、高さ 19.5 cm、上端幅 18 cm で上部に 2 段の階段を有する。

注

- (1) 今岡 2006 に詳しい分析がある。右側石廟の四十九院の配列については規則正しく配列されているが、左側石廟については、壁石の順序の入れ替わったと思われる箇所や、他個体のものと思われる壁石があり、石廟は元々 3 棟以上存在し、後世、整備し直された時に、入れ替わったり、組み替わった可能性を指摘している。
- (2) 杉原 1985 には、「右塔基礎のほぼ中央上部に『天』の字があり、その下が偏側に『富』が読まれる（伊藤菊之輔氏はこれを傍側に見て推論されている）。その左側には右上に『三』の字が認められ、左上には二文字分が彫られているが判読できなかった。それらの下方は剥落してしまっている。（伊藤氏はさら『二』の文字を認めている。）」とし、中村氏は「数百年春風秋雨に曝され彫刻の文字も来待石なるがために風化剥落し充分読み取ることが得ず。勿論俗名戒名なども不明にて僅かに宝篋印塔の一基に地輪年号らしき『天』の一字他の一基に『寛』の頭文字を明らかにするばかりで、何れとも判じ難い。」とする。従来の報告では「天」と読むが、今回の調査で確認できる文字は「元」と読め（右側石廟の右側宝篋印塔）、これを「元和」と考えれば、元和 4 年（1618）に没した吉晴の娘「三刀屋殿」の宝篋印塔である可能性がある。今回は確認できなかったが、他の一基の「寛」の読字が正しければ、寛永 3 年（1626）没の「修理氏信」の宝篋印塔である可能性がある。

3) 堀尾修理一族と「殿様墓」被葬者（供養者）について

三刀屋城主として知られる「堀尾修理」は（永塚 1982）、堀尾吉晴の弟である堀尾掃部宗光（氏光）の系統である。掃部宗光、修理氏信、修理氏朝と続き、宗光の子と孫は「修理」を名乗る。庶流に丹下、彦三郎らがいた。

出雲入国以前の宗光の役割を確認すると、天正 19 年（1591）以降の史料から活動が確認できる。宗光は堀尾氏の浜松領 12 万石のうち、二侯城（静岡県浜松市）を拠点（浜松城に対する支城）としながら「犬居領」と「二侯周辺」を管轄していたようで、堀尾氏の浜松領有期から領国支配の一翼を担っていた（坪井 1997）。慶長 5 年（1600）の関ヶ原合戦では堀尾忠氏の軍勢に従っている（堀尾家記録）。

浜松領での宗光の役割を考慮すれば、堀尾氏（忠氏）は出雲国に入部すると、宗光に三刀屋城を支城として近世城郭に改修させ、三刀屋周辺、あるいは出雲西部の支配を担わせた可能性がある。宗光は、堀尾氏の出雲入国後、重臣の一人として出雲国内の寺社への連署寄進状を発給するとともに、単独での文書発給も行っており（「鰐淵寺文書」等）、没年は、「堀尾古記」（松江市史編集委員会編 2018）では慶長 14 年（1609）である（「三時回向」では慶長 13 年とする）。

なお、寛政 4 年（1792）の「飯石郡中萬差出帳」（「旧島根県史編纂資料」近世筆写編 106）には「酉年堀尾修理様在城之由當子迄二百五拾六年當時ニ而ハ山畑ニ成ル」とある。この「酉年」を慶長 14 年（1609）己酉と考えれば、この記事は宗光の没した慶長 14 年「酉年」に、宗光の長男の修理氏信が堀尾氏の地域支配を引き継いだことを伝えた可能性がある。修理氏信の没年は、寛永 3 年（1626）である。

「殿様墓」は、来待石製石廟は堀尾氏重臣層のための墓、あるいは供養塔と考えられることから、この 2 基は、堀尾氏重臣のために造立されたと考えるのが妥当である。慶長 14 年（あるいは慶長 13 年）に没した堀尾掃部宗光とその子修理氏信の墓或いは供養塔として造立された可能性が考えられる（注 1）。

「堀尾修理」の一族については次のようになる。

【掃部 宗光（？～慶長 13or14 年, 1608or09）】別名：光景、氏光、六左衛門尉。法号：見桃院殿寶光世眞大居士。

【修理 氏信（？～寛永 3 年, 1626）】宗光の長男。別名：修理亮。法名：玉峰院殿瑞溪世琳居士。

その他：慶長 16 年（1611）6 月 28 日の堀尾家家臣起請文写（安部吉弘氏蔵）では修理亮。元和 5 年（1619）3 月 28 日に飯石郡狹長神社（雲南市掛合町）を造営。元和 5 年カ飯石郡尾崎の天神宮の再建（『雲陽誌』）。近世の後期に成立した「古城山件」、「三刀屋弾正君由来」では、大坂夏陣に忠晴名代として従軍し、堀尾河内守を自らの所領で捕らえたとする。

【修理 氏朝（？～寛永 18 年, 1641）】氏信の子。別名：掃部。法名：西嶺院殿松外世長居士「堀尾山城守給帳」では 6500 石。寛永 3 年に峯寺へ寄進状を発給する（「掃部」を用いる）。「堀尾近代系図並外孫縁者之略図」では男子が無く、家が絶えたとする。

【丹下 氏安（慶長 8 年, 1603～貞享 3 年, 1686）】宗光の二男。吉晴の養子になったとも伝わる。別名：丹家。法名：圓徳院青嶺世蓮居士

その他：「堀尾山城守給帳」では 1000 石。堀尾吉晴の子として記載されることもあり、別家となっていたか。後に青山家に仕える。

【彦三郎 氏成 生没年未詳】堀尾宗光の男。別名：六左衛門。その他：「堀尾山城守給帳」では 200 石。後に、紀州徳川家に仕える。

【三刀屋殿（？～元和 4 年, 1618）】吉晴の娘。法号：清涼院殿金基宗蓮大禪定尼。その他：三刀屋と名乗ったことから堀尾修理氏信の室である可能性がある。春光院の堀尾一族の木像、清涼院木像（三刀屋殿）があり、黒色の法衣を纏う尼僧の姿。春光院に石塔が残る。

【堀尾丹下母（？～正保 4 年, 1647）】宗光の妻。法号：樹林院殿堅正宗固大姉。その他：「堀尾近代系図並外孫縁者之略図」や堀尾氏の系図類では遠江の国人領主天野宮内少輔勝秀の女子とされる。天野勝秀は『掛川誌稿』には名前が見えるが、永禄～天正年間の遠江天野氏の惣領であった天野藤秀の可能性がある。

注

- (1) 「旧島根県史編纂資料」（島根県立図書館蔵）には「古城山件」、「三刀屋弾正君由来」という謄写本が蔵されている。これは或人物が三刀屋城と城主について尋ねたことへの返答をまとめたもので、「古城山件」は天保 3 年（1832）に筆写されている。文中に享保 2 年成立の『陰徳太平記』からの引用や、享保の年号も見られるため、18 世紀以降に成立したと推定できる。いずれもほぼ同内容で、「梅窓院末寺道安寺に堀尾修理殿掃部殿御二代之御墳墓有之由。然ルを三刀屋殿御墳墓之よし」と記されており、同安寺（道安寺）に堀尾修理、掃部二代（三刀屋殿）の墓があるとする。掃部は堀尾掃部宗光のことを、修理は堀尾修理氏信のことを伝えたと考えれば、記録と 2 人の没年と 2 つの石廟（殿様墓）の年代観に齟齬はない。



写真 25 殿様墓 1



写真 26 殿様墓 2

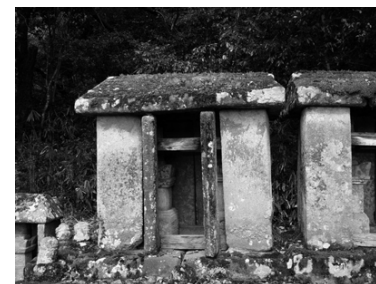


写真 27 殿様墓 正面左側石廟

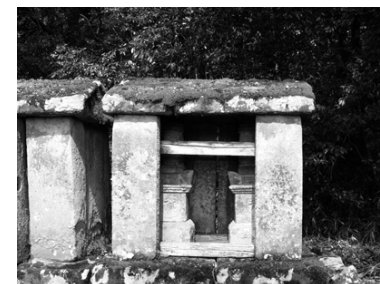


写真 28 殿様墓 正面右側石廟



写真 29 殿様墓 正面右側石廟
(右側側面)



写真 30 殿様墓 正面左側石廟
(左側側面)



写真 31 殿様墓
(手前：正面左側石廟、奥：正面右側石廟)



写真 32 殿様墓
(手前：正面右側石廟、奥：正面左側石廟)

・牧志摩宝篋印塔（松江 慈雲寺）

1) 牧志摩と慈雲寺

牧志摩宝篋印塔は、日蓮宗寺院慈雲寺（松江市和多見町）の境内にある。慈雲寺は、寺伝によると、天正2年（1574）、身延17世慈雲院日新が富田城下（安来市広瀬町）に創建したもので、堀尾吉晴が城府を松江に移すにあたり、堀尾氏重臣^{（注1）}牧志摩が本願主となり、現在の地に移されたという^{（注2）}。

「堀尾忠晴給帳」（島根県編 1965 b）によれば、堀尾家家臣団の中に鉄砲組10隊があり、当時の新鋭武器である鉄砲を扱う鉄砲組は禄高や人数も充実しており、隊長の中には堀尾采女のように最高首脳である仕置職に就く者もいた。牧志摩は鉄砲組のうち、1隊12人の隊長で、2千石が与えられた^{（注3）}。

牧志摩宝篋印塔は、牧志摩の墓碑として建立され、その後慈雲寺境内に埋没していたものを大正8年（1919）、基座（基壇のことか）を新しくして、修復されたという（白神 1988）。牧志摩の没年は宝篋印塔に刻まれた寛永9年（1632）と考えられることから、この宝篋印塔もそのころの製作と考えられる。

ちなみに、宝篋印塔の隣に高さ112 cm、幅20.5 cmの石柱が建てられており、正面には「慈眼院殿八啓運山開基檀那デ有リテ堀尾山城守七家老牧志摩ノ墓ナリ 寺檀共ニ水祭供花ヲ意ルコト勿レ 昭和十二年六月七日二十六代権力僧正無能院日慈 告白」とある。

慈雲寺は、堀尾氏が絶えた後も松江藩からの厚遇を受けるとともに、松平期に家老職を勤めた朝日家、柳 多家の菩提所でもあった。

注

- （1）島根縣史編纂掛編 1929。堀尾家家臣団の職制では、最高首脳は「仕置」と呼ばれており、記録の限りでは、牧志摩は仕置職を務めてはいない。
- （2）黒沢長尚『雲陽誌』（復刻版 歴史図書社 1976）、上野ほか編 1941。
- （3）島根縣史編纂掛編 1929、「堀尾忠晴給帳」（島根県編 1965b）。

2) 牧志摩の石塔

宝篋印塔

来待石製の宝篋印塔で、一部剥落が認められるものの保存状態は良く、総高は240.5 cmである。相輪、笠、塔身、基礎を別々の石で作る。

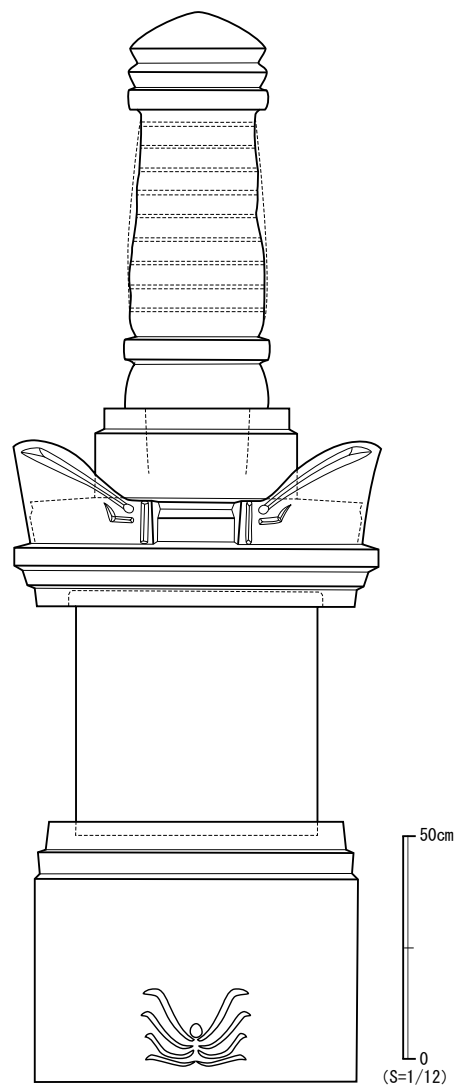
相輪は、現在高さ89 cmで、宝珠の高さ11.5 cm、最大径30.5 cm、上部の受花は高さ5.5 cm、最大径31 cmである。九輪は高さ46 cm、表面の風化が進んでいるが、九輪が確認され、各輪の溝は線状に削られており、最上部の径26 cm、基底部は約30 cmで、やや胴張りである。下部の受花は高さ5 cm、基底部径28 cmである。伏鉢は高さ10 cm、最大径10.5 cmである。

笠は、高さ44.5 cm、上端幅41.5 cm、軒幅81 cm、下端幅71 cm、隅飾りの高さ23.5 cm、最大幅82 cmである。隅飾りは馬耳状に加工し、側面には模様がある。軒の下部は2段の階段をもち、上部は4段の階段（下2段は形骸化している）をもつ。相輪を受ける笠の柄穴は径23 cmである。笠は塔身と接する部分で3.5 cmほど掘り凹められており、印籠蓋のように加工されている。

塔身は直方体で、高さ54.5 cm、上端は幅54 cm、下端は幅54 cmであるが、笠と基礎は塔身と接する部分が掘り凹められていることから、実質的な（視覚的な）塔身の高さは48 cmである。四面に梵字は刻まれていない。正面は縁を残して約1 cm彫り窪められており、その上から「前堀尾山城守七家老 牧志摩正 慈眼院日雄大居士 寛永九申十一月九日」の文字を刻む。文字は堀尾氏家臣団の職制にない「家老」と刻まれるように追刻であろう。

基礎は、上部に2段の階段をもち、高さ59cm、上端は幅66cm、下端は幅72cmである。塔身と接する部分で3cmほど掘り凹められており、逆印籠蓋のように加工されている。正面には蓮華模様が彫り込まれている。

宝篋印塔の形態の特徴をみると（岡崎ほか2006）、相輪は長く、隅飾は若干外反し、隅飾の文様はより退化した眉状である。また、塔身と基礎の側面の膨らみも無い。これらの特徴から17世紀第



第21図 牧志摩宝篋印塔 実測図

1 四半期の堀尾民部石廟より後出のものと考えられる。牧志摩の没年が寛永9年（1632）であり、石塔造立が死後そう遅くない時期とすれば、塔の形態と年代は矛盾するものではない。



写真33 慈雲寺 牧志摩宝篋印塔1



写真34 慈雲寺 牧志摩宝篋印塔2



写真35 牧志摩宝篋印塔塔身

・堀尾但馬夫妻五輪塔（松江 圓成寺）

圓成寺の墓地内にあつて、松江市指定史跡松江藩主堀尾忠晴墓所の左手前に所在する。2段の台座の上に正面を東に向けて立つ2基の五輪塔で構成される。向かつて右側が堀尾但馬、向かつて左側が妻の五輪塔である^(注1)。石材は全て来待石（凝灰質砂岩）である。

堀尾但馬は、寛永21年（1644）に69歳で亡くなり、その23年後の寛文7年（1667）には妻で、長男堀尾圖書の北堂（母）が84歳で没している。

但馬は鉄砲組に属し、3000石を受け、大坂冬の陣で勲功を立てた。堀尾家断絶後、寛永15年（1638）7月6日、松平直政に召し出され、3000石を拝領した。主な事柄を時系列で記した「堀尾古記」（松江市史編集委員会編2018）を書き記し、堀尾氏研究の重要史料となっている。

堀尾但馬五輪塔

来待石製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪、台座が残る。空風輪から地輪までの総高は193.1cmである。

空風輪は、総高70.6cmである。空輪は、高さ46.6cmで、最大径は下位にあり38.0cm、上方に向け尖り気味にすばまる。風輪は、高さ24.0cmで上径が下径よりわずかに大きくなる。

火輪は、高さ36.0cm、上辺31.2cm、下辺61.1cmを測る。軒の最大幅65.0cm、軒厚は中央部で11.0cm、隅で15.5cm。軒の底部は平坦である。

水輪は、高さ41.5cm、上径47.0cm、下径46.4cmを測る。正面中央に4文字の刻字「□勝院殿」が認められるが、最上部の文字は殆ど剥落しており、不明である。側部には粗いノミ痕が認められる。

地輪は、高さ45.0cm、幅58.3cmを測る。正面は平坦面だが、両側面は中位で各7.5mm厚くなり、胴張りに仕上げている。背面も観察しにくい、が、わずかに胴張りを成す。正面には中央と左右に刻字が認められる。右側は「寛永廿一年中」、中央は「□叟□」と読める。「世」の直上には漢字の下半部であろうか、「又」と読める。その上部と「世」の下部は剥落し不明。左側は「九月十四日」とはっきりと読める。この年月日は、堀尾但馬の命日である。

なお、地輪の下には、台座となる直方体の石が2段積まれている。上段は長さ78cm、幅40cm、厚み（高さ）13.0cmの石が前後に計2枚置かれている。下段の石の厚みは不明である。

堀尾但馬妻五輪塔

来待石製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪、台座が残る。空風輪から地輪までの現存高は148.5cmである。

空風輪は、残存高42.0cmである。空輪は、高さ（残存）30.0cmで、全体に丸みを帯びる。風輪は、高さ12.0cm、一辺26.0cmの四角形である。この部分、一般的な風輪と形状が異なる。

火輪は、高さ32.0cm、上辺25.0cm、下辺48.0cmを測る。軒の最大幅54.8cm、軒厚中央部で6.0cm、隅で10.4cm。隅棟は上部から直線的に下降し下部で変換点を設ける。

水輪は、高さ35.5cm、上径37.5cm、下径39.4cm、中位で最大径48.5cmを測る。正面中央部が剥落しているが、文字の刻まれていた可能性は低い。

地輪は、高さが中央部で39.0cm、左右でややいびつである。幅は正面上辺で47.5cm、中位で48.0cm、下辺で47.8cmを測る。両側面は中位で50.8cmを測り、両側面と背面が各1.0～1.5cmほど胴張りとなっている。正面は平坦面を成す。正面中ほどには、縦30.0cm、横35.5cm、深さ2.8cmの枠取が設けられている。宝篋印塔の基礎のイメージに近いものがある。内面の左右には間隔を空けて各5文字程度の文字が刻まれている。右側は「□□□□大姉」と読める。左側の文字群は「□法永正」と読めるが、正確ではないかも知れない。格狭間外面の左右にも刻まれている。右は「丁未七月二十二日」と読める。左

は4～5文字程度認められるが、字体は不明である。

台座は2段ある。上段は横長72.8cm、高さ13.0cmである。下段はさらに17.0cm拡張し、深さ18.0cmである。

注

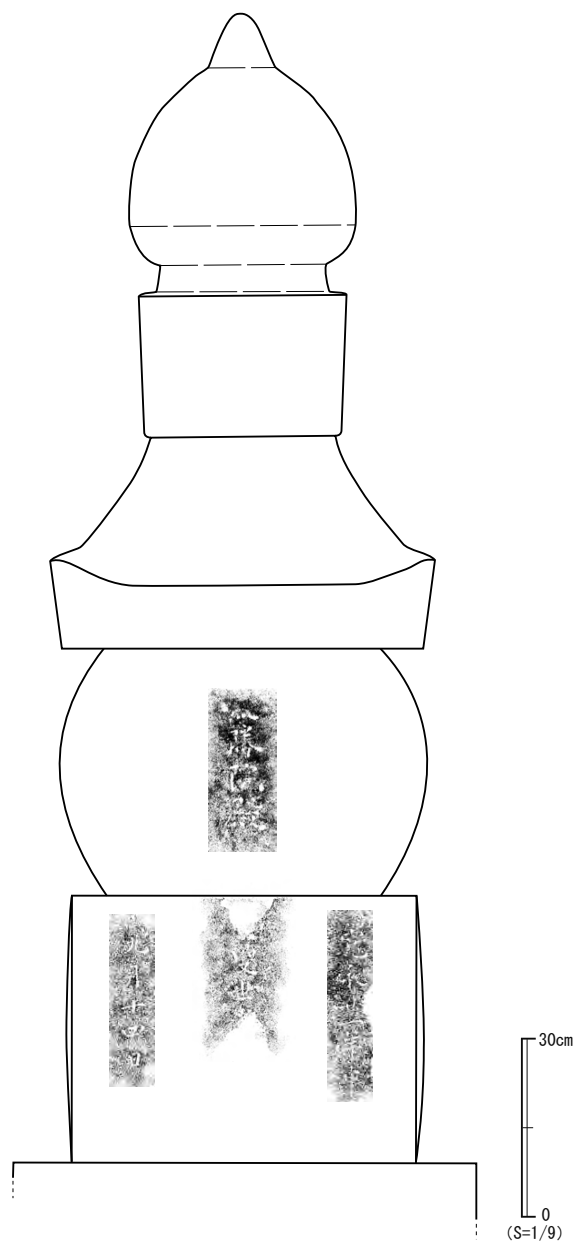
- (1) 堀尾家の過去帳には「寛永二十一年九月十四日 最勝院殿天叟世光居士 元祖但馬（方成）六十九歳」「寛文七年七月二十二日 慈堂良慰大姉 但馬室 圖書母 八十四歳」とあり、昭和14年刊の藤井準一郎著の「市内墓しらべ」後編「寺院記述順序」十三、舊藩家老以下高級藩士の菩提所、鏡湖山圓成寺の項にも「堀尾山城守忠晴之廟」の次に「最勝院殿天叟世光居士 堀尾但馬右（※方の誤り）成墓」「慈堂良慰大姉 堀尾圖書殿北堂墓」として同内容の解説がある。以上の根拠から、圓成寺にある石塔は堀尾但馬とその妻の墓石ということが分かる。なお、五輪塔と過去帳の法名と没年月日を比較すると次のようになる。

①堀尾但馬

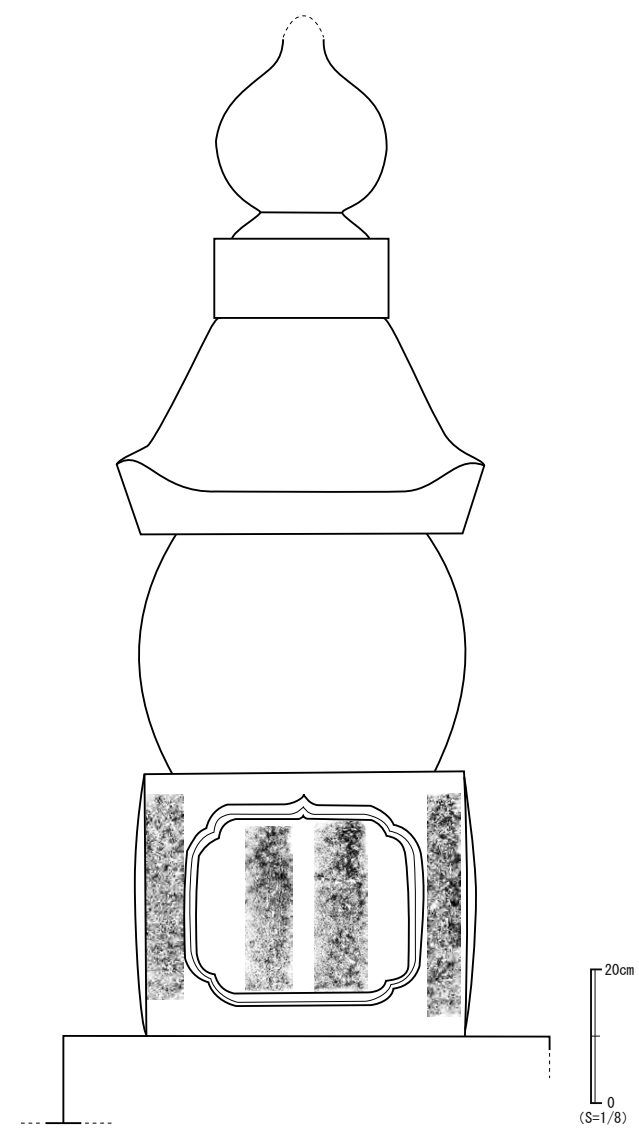
部位	五輪塔の読み (目視と写真)	堀尾家の過去帳ほか
水輪 中央	□勝院殿	最勝院殿
地輪 右	寛永廿一年中	寛永廿一年
地輪 中央	□□世□□□	天叟世光居士
地輪 左	九月十四日	九月十四日

②堀尾但馬妻

部位	五輪塔の読み (目視と写真)	堀尾家の過去帳ほか
地輪 格狭間外右	寛文七丁未七月二十二日	寛文七年丁未七月二十二日
地輪 格狭間内右	□□良慰大姉	慈堂良慰大姉
地輪 格狭間内左	□法永正カ	不明
地輪 格狭間外左	不明	不明



第 22 図 堀尾但馬五輪塔 実測図



第 23 図 堀尾但馬妻五輪塔 実測図



写真 36 堀尾但馬夫妻五輪塔 1



写真 39 堀尾但馬五輪塔（地輪）



写真 37 堀尾但馬夫妻五輪塔 2

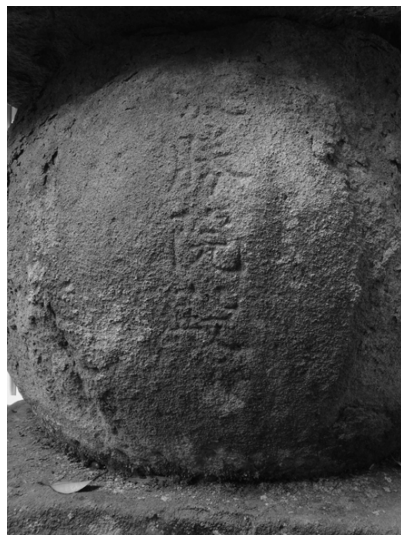


写真 38 堀尾但馬五輪塔（水輪）



写真 40 堀尾但馬夫妻五輪塔（地輪：左側）

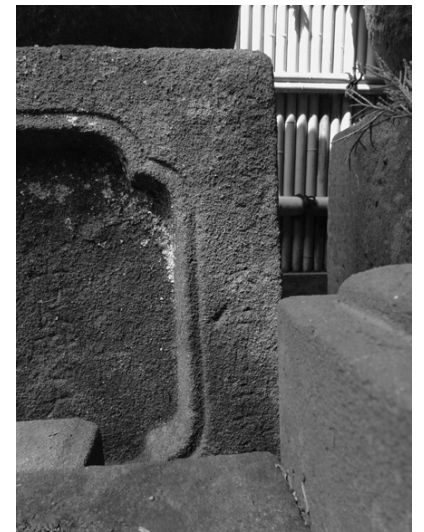


写真 41 堀尾但馬夫妻五輪塔（地輪：右側）

・松田左近の墓（赤名）

出雲・隠岐に堀尾吉晴・忠氏が入封すると、赤名が備後との国境であることから、城番として松田左近、中山織部らが派遣された。この松田左近は近江国甲賀郡出身と伝えられ、豊臣秀吉に仕え、後に堀尾吉晴の家臣となっている。左近の息子は吉晴の娘婿となり、堀尾因幡と称し、堀尾家の家老となった。「松田氏系譜」によると、左近は吉久と名乗っており、「吉久賜石州阿加奈城領二万石」とも記されている。江戸時代に作成された家譜であり、史料の信頼性は低いが、松田左近の赤名城番は単なる支城の城番ではなく、赤名周辺の地域支配も任されていた可能性が高い。

赤名瀬戸山城跡の山麓には松田左近の墓と伝えられる五輪塔があるが、そこには凝灰岩（福光石）の石廟の屋根部分が残されており、元来は石廟の中に五輪塔が納められていたものと考えられる。石廟は三刀屋城の殿様墓や、富田城の親子観音と同じ構造の可能性があり、支城の城主、つまり堀尾姓を賜った支城主の墓（あるいは供養塔）に共通する構造といえよう。なお、城跡の西方に位置する大光寺には戦国時代の城主であった赤穴氏累代の墓所があり、中世の宝篋印塔が残されている。



写真 42 松田左近の墓

5. その他

・松江洞光寺宝篋印塔

曹洞宗の金華山洞光寺（松江市新町）は、元々、尼子経久が父清定の追福のために富田城下金尾谷（安来市広瀬町）に寺地を定めたものであるが、堀尾吉晴が城府を松江に移すにあたり、移転されたものである^{（注1）}。

宝篋印塔は、寺の本堂南に延びる尾根を加工して形成された墓域の一角に所在するもので、総高約354 cm（復元）の来待石製宝篋印塔である。現在、多数の墓石群の中にあり、基壇や玉垣は付設されていないが、石塔の高さのみ比較すれば、巖倉寺（安来市広瀬町）の堀尾吉晴墓五輪塔の総高301.5 cmを凌ぐものである。

宝篋印塔

来待石製の宝篋印塔で、相輪の先端を欠くが、全体に保存状態は良く、現在の宝篋印塔の総高は348 cm（相輪先端を復元すると、約354 cm）である。相輪、笠、塔身、基礎を別々の石で作る。

相輪は、現在の高さ114 cmで（復元高約120 cm）、宝珠の復元高約15 cm、最大径36 cm、上部の受花は高さ12 cm、最大径約37 cmである。九輪は高さ55 cm、表面の風化が進んでいるが、最上部の径約31 cm、基底部は37 cmで、やや胴張りである。下部の受花は高さ7.5 cm、基底部径35 cmである。伏鉢は高さ13 cm、最大径42 cmである。

笠は、高さ78 cm、上端幅49 cm、軒幅93.5 cm、下端幅82 cm、隅飾りの高さ36 cm、最大幅99 cmである。隅飾は馬耳状に加工し、側面には模様がある。軒の下部は2段の階段をもち、上部は4段の階段（下2段は形骸化している）をもつ。相輪を受ける笠の柄穴は径31 cmである。笠は塔身と接する部分で3.5 cmほど掘り凹められており、印籠蓋のように加工されている。上部階段最下段正面に「火」の文字を陰刻するが、追刻であろう。

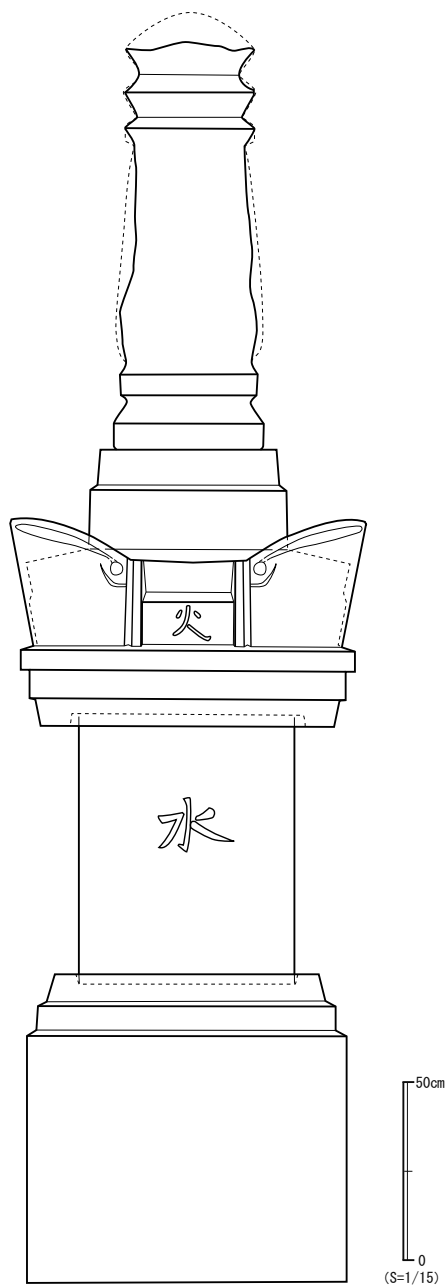
塔身は、直方体で、高さ76 cm、上端は幅60 cm、下端は幅60.5 cmであるが、笠と基礎は塔身と接する部分が彫り凹められていることから、実質的な塔身の高さは70 cmである。四面に梵字は刻まれていない。正面に「水」の文字を陰刻するが追刻であろう。

基礎は、上部に2段の階段をもち、高さ86 cm、上端は幅74 cm、下端は幅89 cmである。基礎は塔身と接する部分で2.5 cmほど彫り窪められており、逆印籠蓋のように加工されている。

寺伝や記録など、現在確認できる範囲では、石塔の被葬者（あるいは被供養者）及び造立の経緯は明らかではない。しかし、宝篋印塔の形態の特徴より製作年代をみると（岡崎ほか2006）、松江洞光寺宝篋印塔は、相輪が長く、隅飾は若干反し、隅飾の文様は上寄りに眉状に施されている。また、塔身と基礎の側面の膨らみは無い。これらの特徴は親子観音（堀尾勘解由石廟）（安来市広瀬町）や堀尾民部石廟（松江市玉湯町）の形態と類似しており、17世紀第1四半期に属すると推定される。後世の移入でなければ、洞光寺の松江移転に深く関わった人物、しかもそれは国主である堀尾一族、あるいはそれに近い有力者に関わる墓石もしくは供養塔と考えられよう。

注

（1）黒沢長尚『雲陽誌』（復刻版 歴史図書社 1976）、藤岡 1982



第 24 図 松江洞光寺宝篋印塔 実測図



写真 43 松江洞光寺宝篋印塔 1



写真 44 松江洞光寺宝篋印塔 2

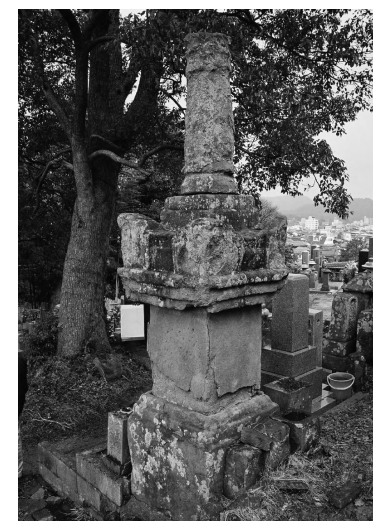


写真 45 松江洞光寺宝篋印塔 3

・松江洞光寺開山塔

洞光寺開山塔は、松江洞光寺の本堂裏側に所在する来待石製宝篋印塔である。石塔の高さのみを比較すれば、巖倉寺（安来市広瀬町）の堀尾吉晴五輪塔や松江洞光寺宝篋印塔の総高を凌ぎ、確認できた範囲では最大の来待石製宝篋印塔である。寺伝によれば、松江洞光寺御開山「大拙真雄大和尚」の墓と伝ええる。

開山塔（宝篋印塔）

来待石製の宝篋印塔で、相輪の先端を欠くが、全体に保存状態は良く、現在の宝篋印塔の総高は356cmである。相輪、笠、塔身、基礎を別々の石で作る。

相輪は、高さ130cmで、宝珠の高さ約20cm、最大径36cm、上部の受花は高さ16cm、最大径約36cmである。九輪は高さ73cm、最上部の径約32cm、基底部は36cmである。下部の受花は高さ10cm、最大径39cmである。伏鉢は高さ11cm、最大径39cmである。

笠は、高さ70cm、上端幅51cm、軒幅100cm、下端幅78cm、隅飾りの高さ40cm、最大幅40cmである。隅飾りは馬耳状に加工し、側面には模様がある。軒の下部は2段の階段をもち、上部は4段の階段（下2段は形骸化している）をもつ。相輪を受ける笠の柄穴は径24cmである。笠は塔身と接する部分で3cmほど掘り凹められており、印籠蓋のように加工されている。

塔身は、直方体で、高さ62cm、上端は幅65cm、下端は幅64cmであるが、笠と基礎は塔身と接する部分が彫り凹められていることから、実質的な塔身の高さは66cmである。四面に梵字は刻まれていない。正面に「開山」の文字を陰刻するが追刻であろう。

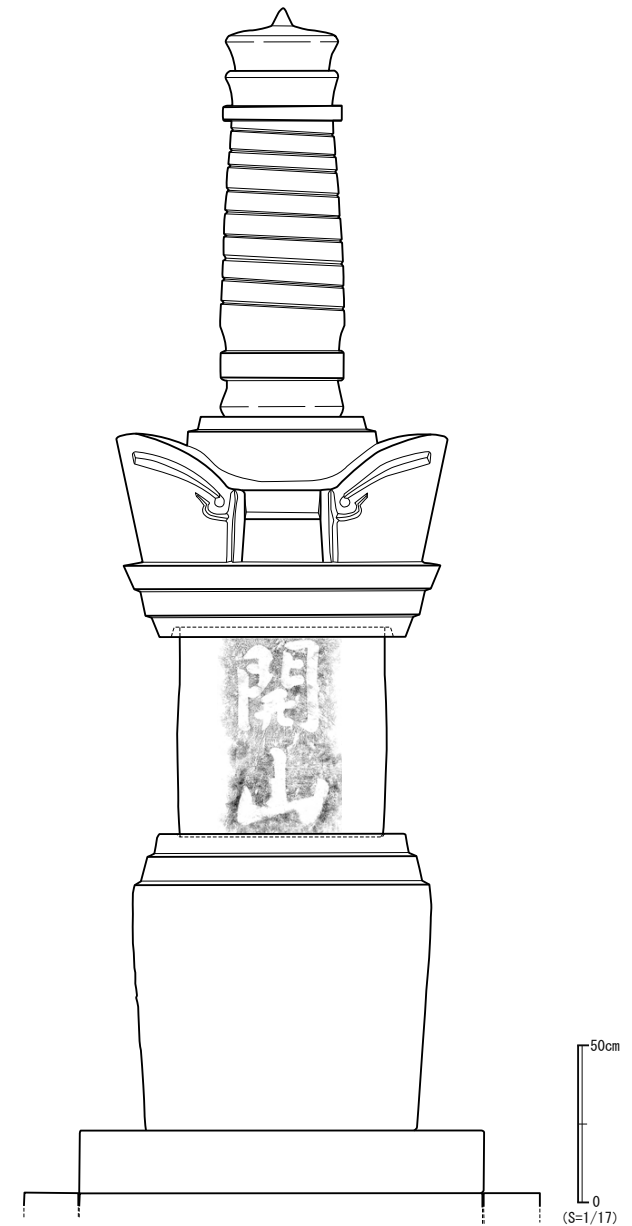
基礎は、上部に2段の階段をもち、高さ94cm、上端は幅79cm、下端は幅85cmである。基礎は塔身と接する部分で1cmほど彫り窪められており、逆印籠蓋のように加工されている。



写真 46 松江洞光寺開山塔（宝篋印塔） 1



写真 47 松江洞光寺開山塔（宝篋印塔） 2



第 25 図 松江洞光寺開山塔（宝篋印塔） 実測図

第 3 章

京都・高野山・江戸に残る堀尾家墓所

1. 京都・妙心寺春光院堀尾家墓所

1) 春光院について

春光院^{しゆんこういん}は京都市北区に所在し、天正18年(1590)の創建と伝えられる臨済宗妙心寺の塔頭寺院である。開基は碧潭^{へきたんかん}禪師と伝えられている。堀尾吉晴^{よしはる}は、小田原攻め(天正18年[1590])の時に陣中で病没したとされる息子金助^{きんすけ}の菩提を弔うために妙心寺に俊巖院^{しゆんがんいん}を創建し、この俊巖院が後に改称して春光院となっている。



写真 48 妙心寺春光院(正門側より庫裏[右]を望む)

このような経緯で創建された俊巖院(春光院)は、堀尾家の菩提寺であり、出雲に入国して以降も、吉晴をはじめとする一族から厚い尊崇を受けたと考えられる。俊巖院(春光院)に所蔵されていた堀尾忠晴書状に、忠晴の母(忠氏妻長松院)の菩提を弔ったことへの謝意が述べられていることから、そのことが窺える。

春光院への改称の時期は、所蔵の「春光院古今院事記」(享保7年[1722])により、寛永12年(1635)

7月より同13年7月までの間に行われたものとされ、時期的には、寛永10年(1633)の堀尾家断絶が一つの契機となったと思われる。

なお、臨済宗妙心寺派は、吉晴が春龍^{しゆんりゅう}玄濟^{げんさい}(妙心寺百一世で、吉晴に招かれ遠州浜松天徳寺^{てんとくじ}から出雲に赴^{すい}むいたとされ、瑞応寺^{ずいおうじ}[現天倫寺^{てんりんじ}:松江市]^{えんじやうじ}、圓成寺^{えんじやうじ}[松江市]の開山となる)に帰依したように、堀尾家の厚い尊崇を受けていた。また、吉晴は慶長10年(1605)に妙心寺の「城直軒」の相続問題に関与したことが西笑承兌^{さいしやうじやうたい}・閑室元信連署書状(「西笑和尚文案 八冊」『相国寺藏西笑和尚文案』所収406号文書)から確認でき、俊巖院の創建にとどまらない関係を妙心寺ともっていた。

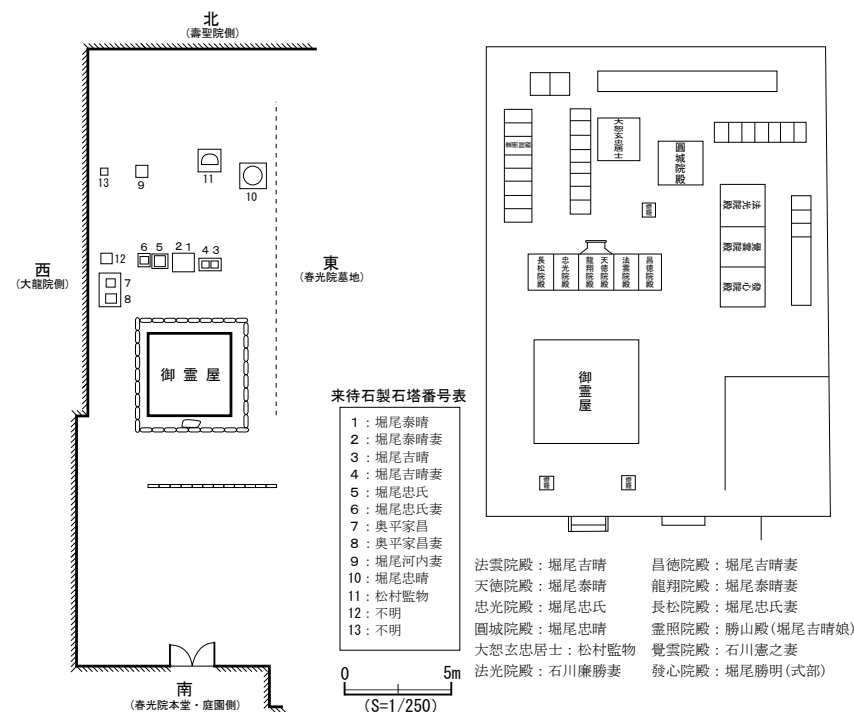
堀尾家が忠晴の死をもって断絶して以降の春光院は、忠晴の娘が石川廉勝^{いしかわかどかつ}(膳所藩主石川忠総^{せだふさ}の長男。慶安3年[1650]に忠総に先立ったため、後に長男憲之[忠晴の孫]が藩主を継ぐ)の室となっていた関係から、石川家の保護を受けた。石川家は春光院を厚く弔い保護を行っており、春光院は石川家より、初め50石、後に20石加増の70石の寺領の寄進を受けている。これについては、堀尾家から50石の寄進を受けていたとする記述が「春光院古今院事書」に存在し、また圓成寺や春光院に伝えられている堀尾家の「給帳」には、妙心寺に対して50石の寄進を行っていることが記載されているので、堀尾家の寄進が石川家に引き継がれ、更に加増されて保護されたと考えられる。春光院は石川家の菩提寺としての役割も果たし、墓所には堀尾家の墓石類の他、石川家の墓石類も残されている。

2) 来待石製石塔の配置と人物比定について

春光院本堂裏の墓域には、堀尾家・石川家などの位牌及び堀尾家嫡流の木像を納めた御霊屋^{おたまや}と、供養



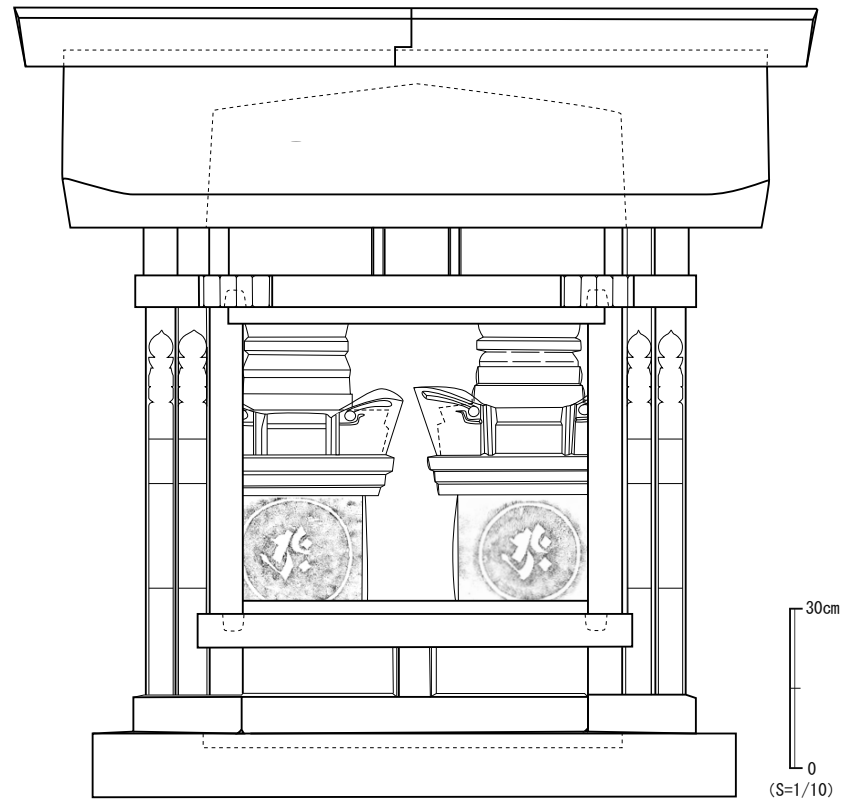
写真 49 堀尾泰晴夫妻石廟正面(閉扉) [石廟左:伝堀尾忠氏宝篋印塔、石廟右:伝堀尾吉晴妻宝篋印塔]



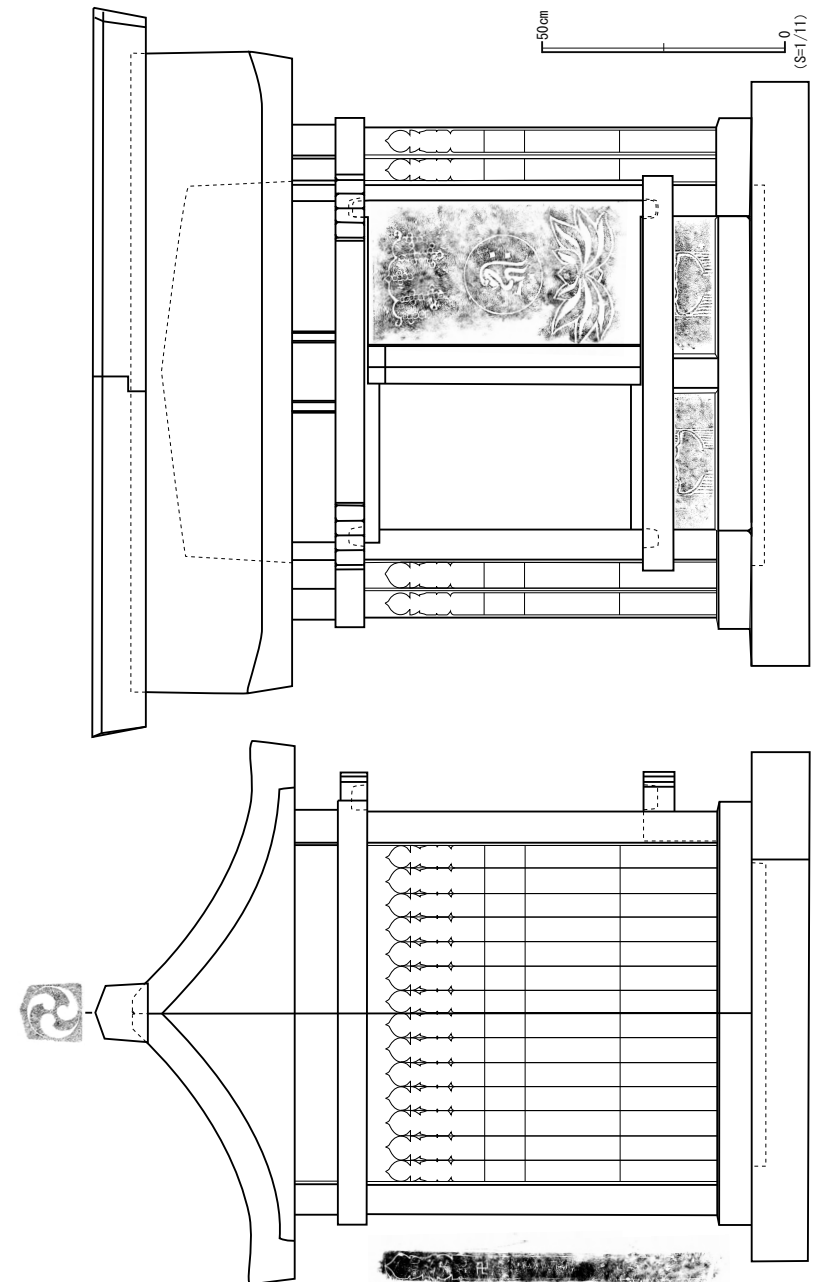
第26図 妙心寺春光院 石塔配置図(左:現在、右:文政3年)

塔あるいは墓碑などの石塔群が残されている。この石塔群の中に、松江市宍道町来待地区で産する来待石製（凝灰質砂岩）の石塔が存在し、堀尾泰晴夫妻石廟内宝篋印塔2基を含めた宝篋印塔10基のほか、五輪塔1基、無縫塔1基、舟形石塔1基が確認できる。吉晴の父母の堀尾泰晴夫妻のものとした石廟内の宝篋印塔1基（正面右）には「天徳寺□□□」「世崇□□□」の文字が刻まれており、泰晴の戒名が「天徳寺殿高菴世崇大居士」であることから、この石廟が堀尾泰晴夫妻のものであると特定できた。他の来待石製石塔については、人物を特定できる銘文等は確認できなかったが、春光院には石塔の被葬者・供養者を記した石塔配置図^(注1)と墓石表が残されており、これに基づいて、伝わる人物名を石塔名に付し、併せて石塔番号を記すこととした（以下、人物名を付して呼ぶ）。

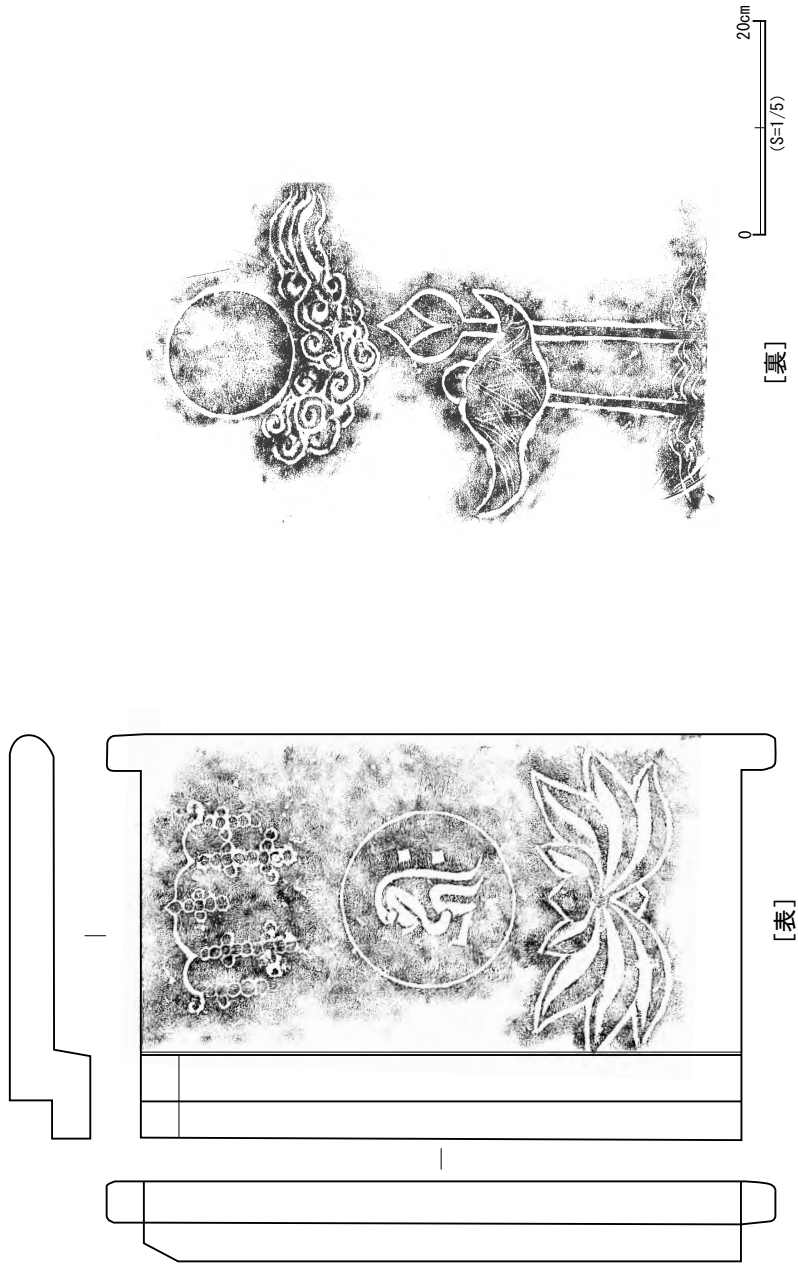
来待石製石塔の配置は、御霊屋の真裏に堀尾泰晴夫妻石廟があり、正面向かって右側に2基の宝篋印塔（伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔）、左側に大小2基の宝篋印塔（伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔）、伝堀尾忠氏妻石塔の左通路を挟んで東向きに2基の宝篋印塔（伝奥平家昌夫妻宝篋印塔）が配されている。五輪塔1基（伝野々村河内妻〔勝山：堀尾勘解由母〕五輪塔）は伝忠氏夫妻宝篋印塔の北に並んだ石塔列の中



第27図 堀尾泰晴夫妻石廟、宝篋印塔 実測図（正面）

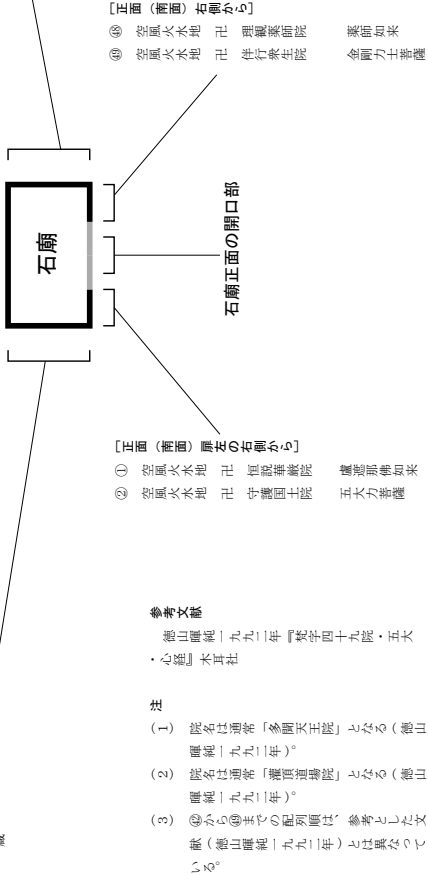


第28図 堀尾泰晴夫妻石廟 実測図（左：左側面、右：正面）



第29図 堀尾泰晴夫妻石廟前扉 実測図・拓本（左：表面、右：裏面）

[正面（前面）右側から]		
③	空風火水地 祀 應永寺院	佛眼口菩薩
④	空風火水地 祀 般若不斷院	般若力菩薩
⑤	空風火水地 祀 金蓮三昧院	大勢至菩薩
⑥	空風火水地 祀 彼但三昧院	轉法輪菩薩
⑦	空風火水地 祀 修習慈嚴院	多羅菩薩
⑧	空風火水地 祀 常念七佛院	過去七佛
⑨	空風火水地 祀 鍾萬方等院	佛頂菩薩像
⑩	空風火水地 祀 常念常樂院	釋迦涅槃像
⑪	空風火水地 祀 少翁知足院	寂滅羅漢菩薩
⑫	空風火水地 祀 界沙門天之院 ^(三)	界沙門天之像
⑬	空風火水地 祀 地蔵十佛院	地蔵持菩薩像
⑭	空風火水地 祀 普見菩薩院	普見菩薩像
⑮	空風火水地 祀 精進修行院	精進寂羅漢之像
⑯	空風火水地 祀 常念不動院	阿闍如來之像
[背面（北面）右側から]		
③	空風火水地 祀 原修菩薩院	善財童子如來之像
④	空風火水地 祀 三寶真院	普賢菩薩
⑤	空風火水地 祀 光明十華院	世親菩薩
⑥	空風火水地 祀 如來基藏院	大蓮華如來
⑦	空風火水地 祀 金剛道場院 ^(三)	金剛手菩薩
⑧	空風火水地 祀 勝法印他院	釋迦說法像
⑨	空風火水地 祀 常行説因院	文殊師利口像
⑩	空風火水地 祀 金剛秀法院	大日如來像
⑪	空風火水地 祀 法華三昧院	釋迦多宝像
⑫	空風火水地 祀 屋金剛音院	六觀音像
⑬	空風火水地 祀 菩提樹藏院	海阿彌之像
⑭	空風火水地 祀 梵樞閣王印	梵天帝釋四天王
⑮	空風火水地 祀 新勸法相院	新勸菩薩像
⑯	空風火水地 祀 施藥慈田院	藥王菩薩
⑰	空風火水地 祀 金剛吉祥院	吉祥大菩薩
⑱	空風火水地 祀 念觀文殊院	文殊師利菩薩像
⑲	空風火水地 祀 平等忍辱院	忍辱寂羅漢之像
[正面（前面）左側から]		
①	空風火水地 祀 恒説華嚴院	盧那那佛如來
②	空風火水地 祀 守護国土院	五大菩薩
[正面（背面）右側から]		
③	空風火水地 祀 理觀終極院	藥師如來
④	空風火水地 祀 伴行衆生院	金剛力士菩薩
[背面（背面）右側から]		
③	空風火水地 祀 海徳図壽院	佛修佛像
④	空風火水地 祀 安養弁士院	阿弥陀如來
⑤	空風火水地 祀 理正玉王院	慈覺大王
⑥	空風火水地 祀 權臣印益院	權臣羅漢菩薩
⑦	空風火水地 祀 因國聖寺院	竜樹王菩薩
⑧	空風火水地 祀 觀賢空藏院	慈空藏菩薩
⑨	空風火水地 祀 具足藏院	覺賢菩薩像
⑩	空風火水地 祀 唯覺傳法院	諸結諸羅漢
⑪	空風火水地 祀 住樂三空院 ^(三)	金剛菩薩
⑫	空風火水地 祀 常修修福院	寶頭藏像
⑬	空風火水地 祀 不二淨名院	維摩居士像
⑭	空風火水地 祀 常行律儀院	釋迦說法像
⑮	空風火水地 祀 常行如意院	海徳羅漢菩薩
⑯	空風火水地 祀 常念勤持院	王大明王



第30図 堀尾泰晴夫妻石廟外壁卒塔婆四十九院判読図

に、無縫塔1基（伝堀尾忠晴無縫塔）、舟形石塔1基（伝松村監物舟形石塔）は泰晴夫妻石廟のやや離れた右奥に配されている。なお、伝奥平家昌夫妻宝篋印塔横とその北石塔列中で伝野々村河内妻五輪塔近くに、相輪を欠く高さ60cmほどの宝篋印塔が2基あるが〔12、13号石塔〕、いずれも人物比定はなされていない^{（注2）}。

また、堀尾吉晴石塔の東側に通路があり、その道沿いに石川家の石塔が3基並んでいる。文政3年（1820）の「春光院古今院事記」を見ると、北には石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）の石塔が、中央には廉勝の子憲之の妻の石塔がある。さらに南には「發心院殿」と書かれた憲之の子勝明（堀尾式部）の石塔が位置する。

なお、「春光院古今院事記」には、石川家の命を受けた石川家家臣が出雲より堀尾家の木像とともに「石碑」を移したことが伝えられており、石塔の一部は、堀尾家断絶後に出雲より移送された可能性もある。

注

- （1）石塔配置図は4枚残されており、3枚は現在の来待石石塔の配置と一致する。しかし、他の1枚は現在の配置と異なる記載で、寺伝によれば、元々、堀尾泰晴夫妻石廟、6基の宝篋印塔（堀尾吉晴

夫妻石塔、堀尾忠氏夫妻石塔、奥平家昌夫妻石塔）は、現在墓域の北端にある石川家墓所の更に北奥にあり、境内地の改修により現在の位置に移されたとのことで、移設前の配置図と推定される。

- （2）「堀尾古記」（松江市史編集委員会編2018）には、慶長13年「堀尾勘解由果ル、極（12）月五日京ニテ」と記されており、月山富田城跡（安来市広瀬町富田）麓にある親子観音内宝篋印塔には、「慶長十三年」「十二月五」の紀年銘と、「桂口院殿祥雲世口大居士」の戒名が刻まれている（岡崎ほか2006）。春光院の調査により確認できた「春光院過去帳」に、「桂岩院殿祥雲世端大居士 慶長十三十二月五日」という戒名・没年の記録が残されていることから、「桂岩院殿祥雲世端大居士」とは、堀尾勘解由の戒名であると判断でき、同じ戒名を刻む親子観音内宝篋印塔は勘解由のものと特定できる。「堀尾古記」は勘解由の果てたのが京のどこで、どのような果て方だったかは伝えていないが、京都の何処かで（あるいは春光院で）勘解由が亡くなり、亡骸は堀尾家菩提所春光院に葬られた可能性が考えられる。そして、月山の麓には堀尾一族である勘解由の供養などのために親子観音が造立されたのであろう。寺伝にも人物比定のなされていない小型の宝篋印塔の一つは、若き勘解由の石塔（墓）なのであろうか。

3）笏谷石製石廟と来待石製石塔

（a）堀尾泰晴夫妻石廟

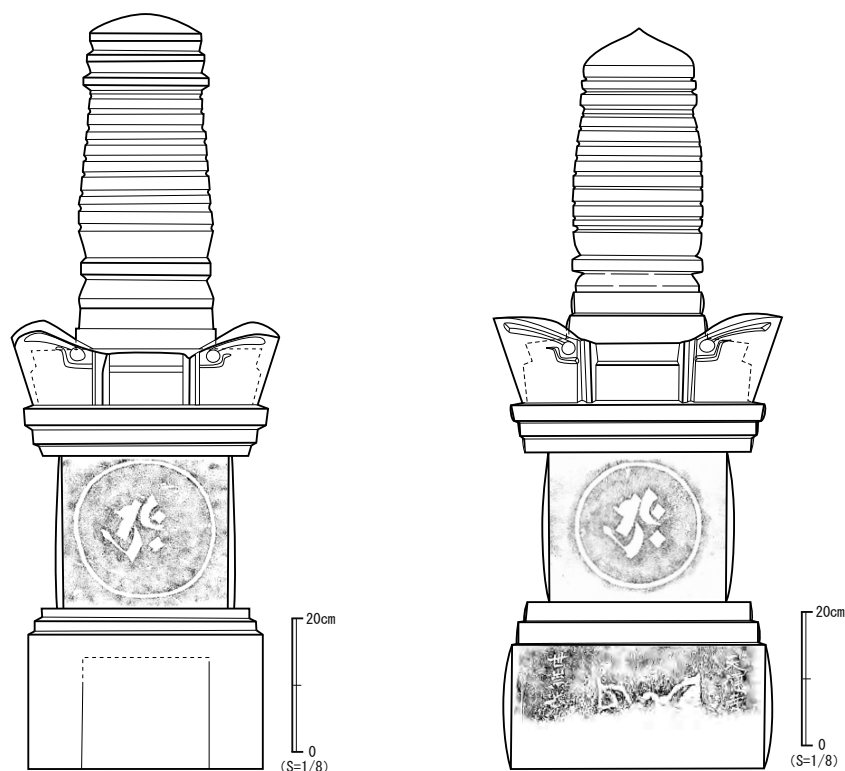
堀尾泰晴夫妻石廟は笏谷石（火山礫凝灰岩）製で^{（注1）}、石材を極めて精巧に加工し、組み合わせている。高さ147.2cm、横幅〔屋根棟石〕150.8cm〔本体〕101cm、縦幅〔屋根〕112cm〔本体〕83.2cmの平入りの屋根形で、台石の上に石廟本体、屋根を載せ、正面には装飾をもつ観音開きの扉が付く。

屋根は前後2枚の石材を用いた切妻造りで、棟には断面5角形に整えた2枚からなる棟石を載せ屋根を固定している（棟石は接続部分で上下に組み継いでいる）。棟石の断面は高さ12cm、下幅12cm、棟の両端には左三つ巴紋が刻まれている。屋根の軒先は直線的に厚さ6.2cm、両端は厚さ9.2cmで緩やかに立ち上がるよう表現されている。

石廟本体は、壁面に前壁（正面両脇）、側壁、奥壁を構成するために6枚の切石を用い、正面に観音開きの2枚の扉石（現在、左の1枚は失われている）と、扉石の軸受を造り付けた上下2枚の切石羽目板をかませ込んでいる。現存する扉は正面右側のもので、高さ60cm、幅38cm、厚さ4cm、表面には上部に天蓋と瓔珞、中央に月輪と梵字、下部に蓮華座、裏面には上部に半肉彫りの日輪と雲流、中央に蓮を2本（茎、蕾、葉）、下部に蓮池（流水）が彫り込まれている。扉右端は半円柱状に整形され、上下には軸となる直径3.4cm、高さ3.2cmの突起が付く。扉左端には失われた左扉を押さえる幅8cmの石板羽目板が造り付けられている。扉の上下の切石は複雑に加工され、扉の軸受け部分は本体より4cmほど外に突き出している。扉下の切石羽目板の正面中央には幅8cmの突帯があり、その両側には縦連子と格狭間を組み合わせた図柄を彫る。本体の壁面は6枚の切石からなるが、前壁から側壁にかけて平面面し字状に左右1枚ずつ、側壁から奥壁にかけて左右1枚ずつ、奥壁には2枚を用いている。外側壁面には卒塔婆形に配した四十九院が陰刻されている（第30図）。

台石は、直方体の石を9個組み合わせて平面□形とし、その上に石廟本体を載せている。平面□形の台石の内側には一枚の板石をはめ込み、石廟の床面とし、その上に2基の宝篋印塔を載せる。

堀尾泰晴夫妻石廟の形態や装飾は、親子観音〔安来市広瀬町〕・堀尾民部石廟〔松江市玉湯町〕・殿様墓〔雲南市三刀屋町：石廟が左右2基並ぶ〕など、堀尾氏の上级家臣に採用されたと考えられる来待石製大型石廟と類似する^{（注2）}。



第31図 堀尾泰晴夫妻宝篋印塔 実測図（左：堀尾泰晴夫妻宝篋印塔、右：堀尾泰晴宝篋印塔）

堀尾泰晴宝篋印塔〔1号石塔〕

石廟内の正面右側に納められている。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎まで総高は111.5cmである。石廟内の右側に納められており、基礎部は一部風化している。

相輪の高さは40cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部受花は輪状に加工され、径17.5cmで、文様はない。九輪は狭い凹状の線で表され、最高部径19.5cm、最下部径19cmである。下部の受花は椀形に加工され、文様は認められない。伏鉢は最大径19cmである。

笠の高さは24cm、上端部幅19cm、軒幅38cm、下端部幅33.5cmである。軒上、軒下とも2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りの縁には、蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体であり、高さ22.5cm、上端部幅26.5cm、下端部幅26.5cmで、中央部が少し膨らむ。正面中央部には月輪の中に、薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部2段で、高さ25cm、上端部幅33.5cm、下端部幅38cmである。正面には凹状に段が作られ、その中央に蓮座が彫り込まれている。しかし、表面が風化し、文様は不明瞭になっている。また、左右の端部には戒名が彫られており、右側には「天徳寺□□□」、左側には「世崇□□□」の文字が認められる。堀尾泰晴の戒名が「天徳寺殿高菴世崇大居士」であることから、この宝篋印塔が泰晴のものであることが判明した。

堀尾泰晴妻宝篋印塔〔2号石塔〕

石廟内の正面左側に納められている。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は113cmである。石廟内の左側に納められており、石廟の左扉が失われていたためか、基礎部はかなり風化している。

相輪の高さは44.5cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部の受花は輪状に加工され、径18cmで、文様はない。九輪は狭い凹状の線で表され、最高部径17cm、最下部径20cmである。下部の受花は椀状に加工され、文様は認められない。伏鉢は最大径20cmである。

笠の高さは21cm、上端部幅20cm、軒幅37cm、下端部幅30.5cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りの縁には、やや簡略された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体であり、高さ23cm、上端部幅25cm、下端部幅25cmで、中央部が少し膨らむ。四面中央部には月輪の中に、薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部2段で、高さ24.5cm、上端部幅31cm、下端部幅35cmである。正面には幅19cm、高さ約15cmの大きさで凹状に段が正方形に作られ、その中央に表面が風化し不明瞭であるが、蓮座と思われる文様が彫り込まれている。また、左右の端部には戒名が彫られていたようだが、現在では左側の下部に「姉（大姉か）」の偏と考えられる「女」の字が認められるのみである。

(b) 伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔**伝堀尾吉晴宝篋印塔〔3号石塔〕**

堀尾泰晴夫妻石廟の東隣（正面右）に位置する2基の宝篋印塔のうち、東側（正面右側）のものである。春光院の記録により、堀尾吉晴のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は120cm、全体的に風化が進んでいる。台石は花崗岩製で、高さ14cm、幅54cmである。

相輪の高さは39.5cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部の受花は輪状に加工され、径17.5cmで、文様はない。風化は進んでいるが、九輪は狭い凹状の線で表され、最高部径約15cm、最下部径18cmである。下部の受花も輪状に加工され、文様は認められない。伏鉢は高さ4.5cm、最大径18cmである。

笠の高さは25.5cm、上端部幅20cm、軒幅39cm、下端部幅35cmである。軒上、軒下とも段形は2段

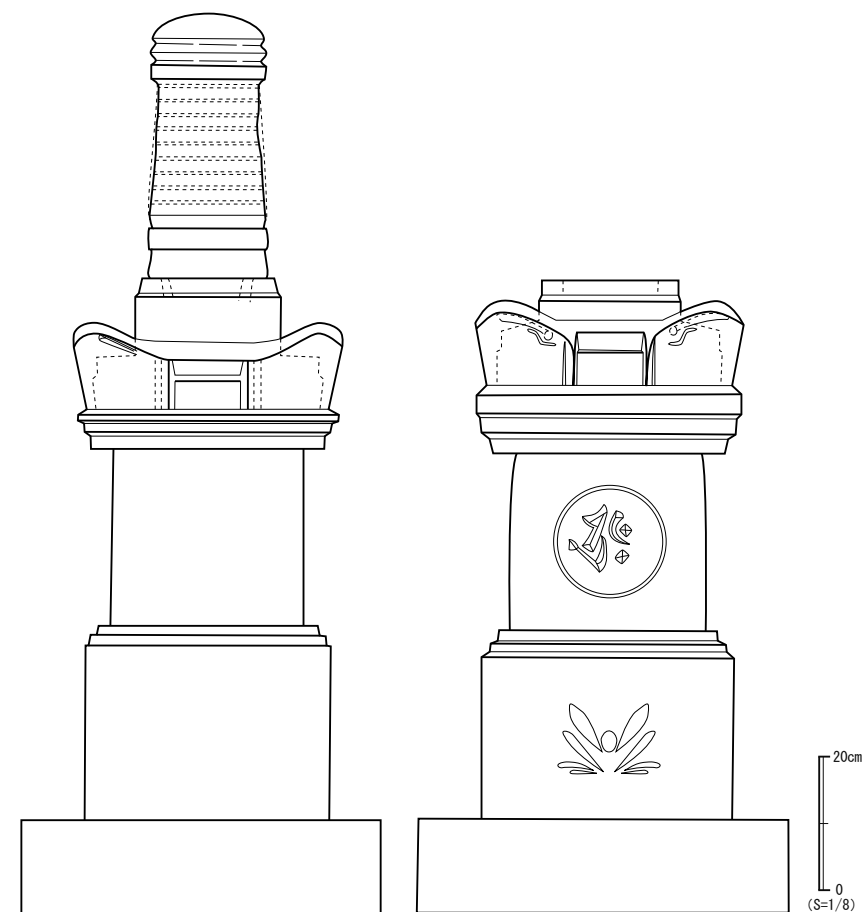
となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りには、やや簡略された蕨手の文様が彫られているが、風化のため詳細は分からない。

塔身は直方体であり、高さ26cm、上端部幅28.5cm、下端部幅29cmである。風化が進んでいるためか、四面に梵字は認められない。

基礎は上部2段で、高さ29cm、上端部幅33cm、下端部幅36.5cmである。

伝堀尾吉晴妻宝篋印塔〔4号石塔〕

堀尾泰晴夫妻石廟の東隣（正面右）に位置する2基の宝篋印塔のうち、西側（正面左側）のものである。



第32図 伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔 実測図（左：伝堀尾吉晴宝篋印塔、右：伝堀尾吉晴妻宝篋印塔）

春光院の記録により、堀尾吉晴妻のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪の風化が著しく、総高は分からない。笠から基礎までの高さは80.5 cmである。台石は花崗岩製で、高さ14 cm、幅53 cmである。

相輪は先端の宝珠部分の残欠を置いているが、詳細は不明である。

笠の高さは26 cm、上端部幅20.5 cm、軒幅40 cm、下端部幅35 cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りには、やや簡略化された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体であり、高さ26.5 cm、上端部幅29 cm、下端部幅29.5 cmである。四面の中央部には月輪の中に、薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部2段で、高さ28 cm、上端部幅33 cm、下端部幅37.5 cmである。正面の中央に蓮座が彫り込まれているが、表面が風化し、不明瞭になっている。

(c) 伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔

伝堀尾忠氏宝篋印塔〔5号石塔〕

堀尾泰晴夫妻石廟の西隣（正面左）に位置する2基の宝篋印塔のうち、東側（正面右側）のものである。春光院の記録により、堀尾忠氏のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は182.5 cm、全体的に風化が進んでいる。台石は来待石製で高さ14.0 cm、幅77 cmである。台石の上端は大きく面取りしており、蓮弁が四方の面取り部分に線刻されている。

相輪の高さは82.5 cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部の受花は輪状に加工され、径23.5 cmで、文様はない。九輪は狭い凹状の線で表されている。下部の受花は風化が進んでいるが、輪状に加工され、文様は認められない。伏鉢は高さ6.5 cm、最大径25.5 cmである。

笠の高さは33.5 cm、上端部幅26 cm、軒幅61.5 cm、下端部幅51.5 cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りは、やや簡略化された蕨手の文様が彫られている。笠の底は塔身との接合部で深さ3 cmほど掘り込まれており、印籠蓋のようにになっている。

塔身は直方体で、高さ35 cm、上端部幅42 cm、下端部幅42 cmである。笠との接合部で3 cmほど組み合っており、見かけの高さは32.5 cmである。四面の中央部には月輪の中に、薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部2段で、高さ34 cm、上端部幅48 cm、下端部幅59.5 cmである。正面には幅約20 cm、高さ約19 cmの大きさで凹状に段がほぼ正方形に作られ、その中央に表面が風化し文様は不明瞭になっているが、蓮座が彫り込まれている。

伝堀尾忠氏妻宝篋印塔〔6号石塔〕

堀尾泰晴夫妻石廟の西隣（正面左）に位置する2基の宝篋印塔のうち、西側（正面左側）のものである。春光院の記録により、堀尾忠氏妻のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は121.5 cm、全体的に風化が進んでいる。台石は花崗岩製で高さ14 cm、幅55.5 cmである。

相輪の高さは40 cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部の受花は輪状に加工され、径18 cmで、文様はない。九輪は風化が進んでいるが、狭い凹状の線で表され、最高部径16.5 cm、最下部径19.5 cmである。下部の受花も輪状に加工され、文様は認められない。伏鉢は高さ3.5 cm、最大径20 cmである。

笠の高さは25.5 cm、上端部幅21.5 cm、軒幅39 cm、下端部幅34.5 cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りには、やや簡略化された蕨手の文様が彫られている。

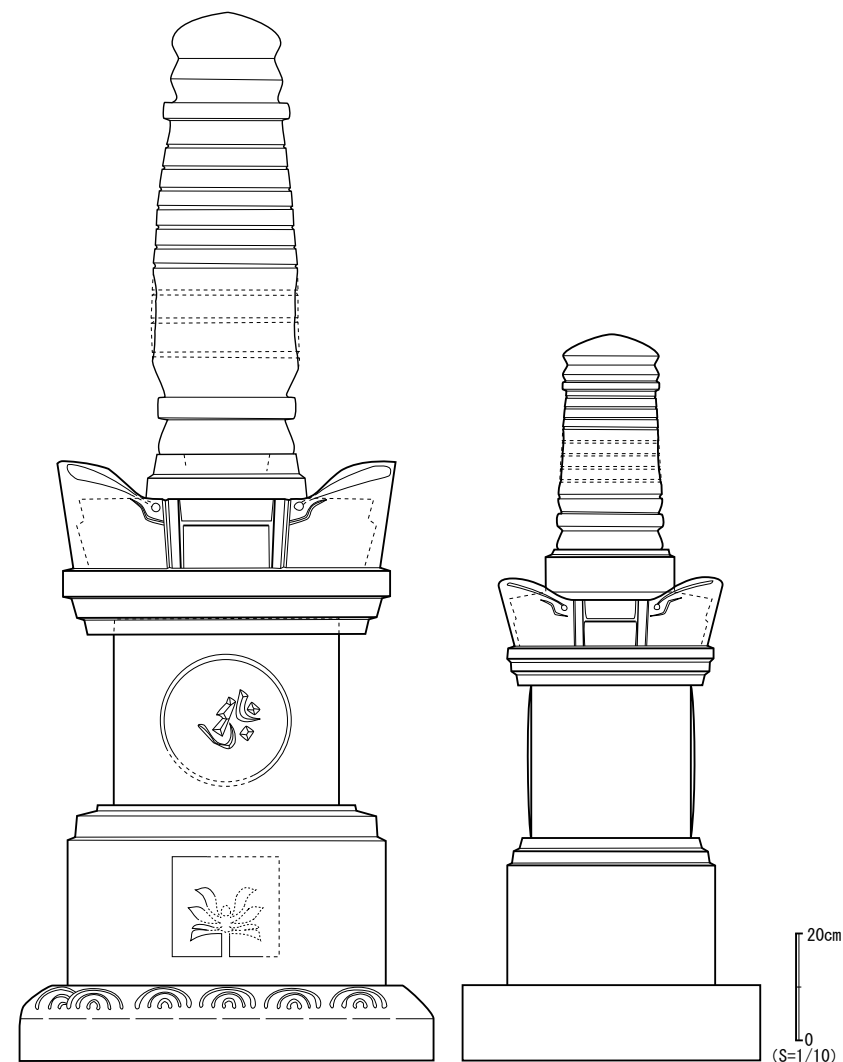
塔身は直方体であり、高さ28.5 cm、上端部幅30 cm、下端部幅30 cmで、中央部が少し膨らむ。風化が進んでいることもあるが、四面に梵字は確認できない。

基礎は上部2段で、高さ27.5 cm、上端部幅33 cm、下端部幅39 cmである。

(d) 伝奥平家昌夫妻宝篋印塔

伝奥平家昌宝篋印塔〔7号石塔〕

伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔の左通路を挟んで東向きに位置する2基の宝篋印塔のうち、北側（正面右側）のものである。春光院の記録により、堀尾忠晴妻の父親で、徳川家康の孫にあたる奥平家昌のものとし



第33図 伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔 実測図（左：伝堀尾忠氏宝篋印塔、右：伝堀尾忠氏妻宝篋印塔）

た。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は117.5 cm、全体的に風化が進んでいる。台石は花崗岩製で高さ15 cm、幅55.5 cmである。

相輪の高さは40 cm、頂部はやや扁平な球状となっており、九輪は凹状の線で表されているが、風化が進んでおり、細部は分からない。

笠の高さは22.5 cm、上端部幅18.5 cm、軒幅35.5 cm、下端部幅31.5 cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りには、やや簡略された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体であり、高さ26 cm、上端部幅26.5 cm、下端部幅26.5 cmで、中央部が少し膨らむ。四面の中央部には、月輪の中に薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部2段で、高さ29 cm、上端部幅29.5 cm、下端部幅34.5 cmである。

伝奥平家昌妻宝篋印塔〔8号石塔〕

伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔の左通路を挟んで東向きに位置する2基の宝篋印塔のうち、南側（正面左側）のものである。春光院の記録により、奥平家昌妻のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は120.5 cm、全体的に風化が進んでいる。台石は花崗岩製で高さ14 cm、幅53.5 cmである。

相輪の高さは43 cm、頂部はやや扁平な球状となっているが、風化が進んでおり、細部は分からない。

笠の高さは24.5 cm、上端部幅20 cm、軒幅37 cm、下端部幅32.5 cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。風化しているが、隅飾りには、やや簡略された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体であり、高さ25 cm、上端部幅29 cm、下端部幅29 cmで、中央部が少し膨らむ。風化が進んでいることもあるが、四面に梵字は確認できない。

基礎は上部2段で、高さ28 cm、上端部幅31 cm、下端部幅36 cmである。

(e) 伝野々村河内妻（勝山：堀尾勘解由母）五輪塔〔9号石塔〕

伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔の北に並んだ石塔列の中に位置する五輪塔である。春光院の記録により、野々村河内妻（勝山：堀尾勘解由母）のものとした。来待石製の五輪塔で、空輪から地輪までの総高は165 cmである。台石は来待石製で、高さ13 cm、幅72 cmである。

空風輪は一石で作られており、高さは48 cm、頂部はやや扁平な球状となっている。風輪下部から空輪上部にかけての側面は直線的に広がっており、溝を掘り込むことで空輪と風輪を分けている。空輪は、上部径（空風輪の最大径）30 cm、下部径27.5 cm、風輪は、上部径25.5 cm、下部径24 cmである。

火輪は、高さ37 cm、上端幅28.5 cm、下端幅94.5 cmである。軒の厚さは、中央で7 cm、両端部で約14 cmである。火輪上端から軒に下る斜面は上端から直線的に下り、軒先付近で大きくカーブする。

水輪は、高さ40 cm、上端径40 cm、下端径40 cmである。水輪のちょうど中位で最大径48 cmとなり、視覚的には細長い橢^{なつめ}型となっている。表面は風化が進んでいるが、正面には「空」「風」「火」「水」「地」の文字が刻まれており、側面には斜め方向のノミ痕も認められる。

地輪は、高さ40 cm、上端幅54 cm、下端幅55 cmで、正面の中央に蓮座が彫り込まれているが、表面が風化し、文様は不明瞭になっている。また、南側（正面左側）側面、北側（正面右側）側面に文字が刻まれているが、風化しており判読できない。

(f) 伝堀尾忠晴無縫塔〔10号石塔〕

伝堀尾忠晴無縫塔（岡崎ほか2006）は来待石製の大型品で、塔身、台座、基礎からなり、幅146 cm、高さ21 cmの花崗岩製の台石に据えられている。塔身から基壇までの総高は229 cm、台石を含めた総高は250 cmである。

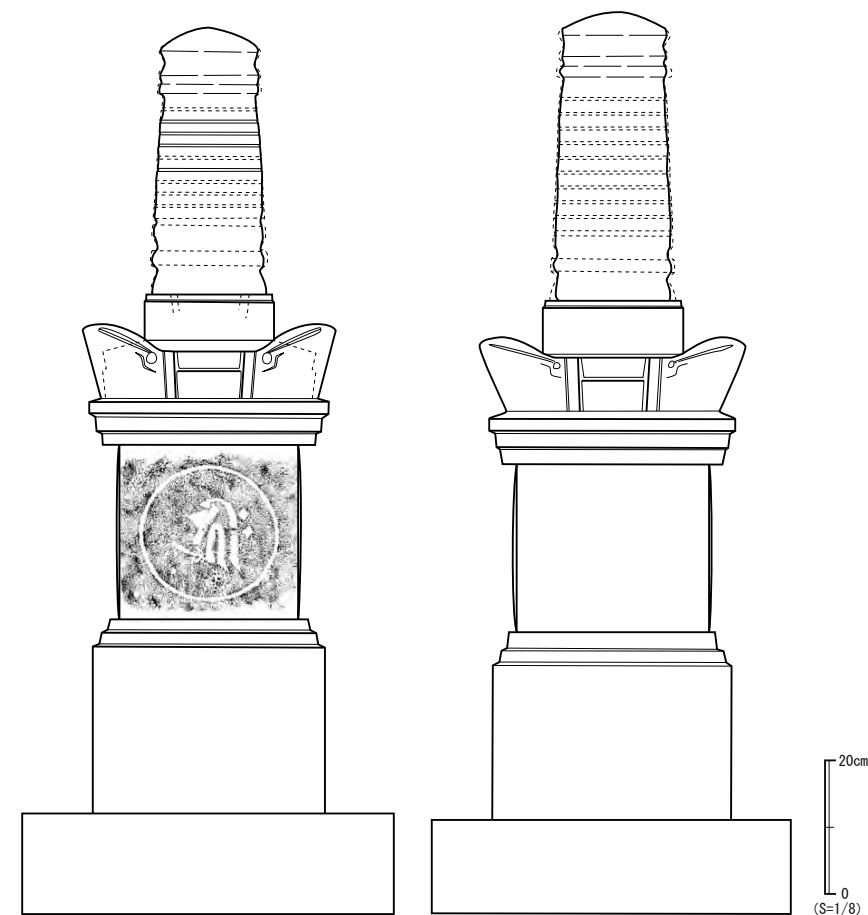
塔身は、高さ157 cm、最大径90 cmを測る縦長のもので、先端は丸味をおびる。受花は無い。

基礎は高さ60 cm、幅120 cmの直方体で、台石の上に据えられている。基礎の上面に高さ12 cm、上端径75 cmの花崗岩製の台座が作られている。

(g) 伝松村監物舟形石塔〔11号石塔〕

来待石製の舟形石塔で、塔身、台座、基礎からなり、幅135 cm、高さ20 cmの花崗岩製の台石に据えられている。塔身から基礎までの総高は196 cm、台石を含めた総高は216 cmで、大型石塔の暫定定義からするとやや小ぶりではある。

塔身は高さ130 cm、最大径63 cmを測る縦長のもので、先端は丸くなる。塔身の正面は半裁された状態で、下端から15 cm上から凹状となり、銘文等を記すための平坦面が作られており、その周囲には7～8 cm程の縁がつく。風化が著しく、現在銘文は残っていないが、春光院に残る古写真（明治25年頃



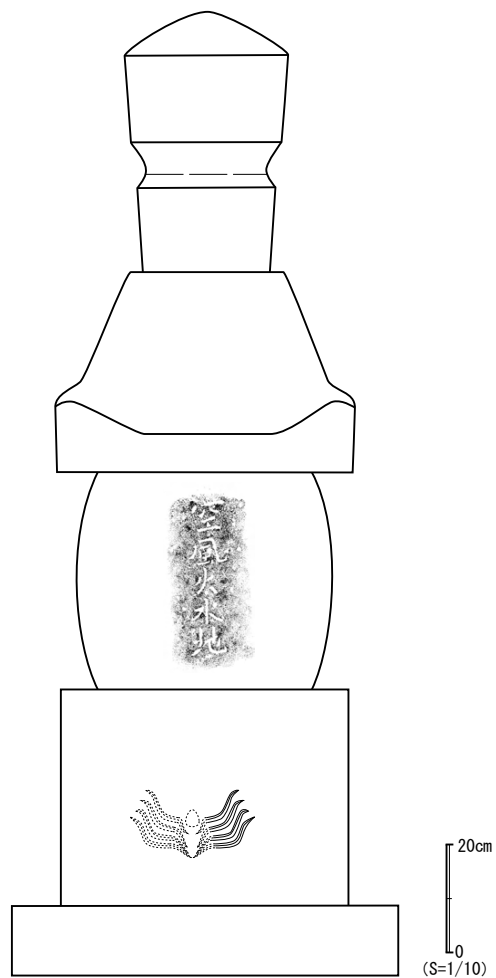
第34図 伝奥平家昌夫妻宝篋印塔 実測図（左：伝奥平家昌宝篋印塔、右：伝奥平家昌妻宝篋印塔）

撮影)を見ると、平坦面に「□吉祥海雲」の文字が刻まれていたことが判読できる。なお、裏側は舟底形に丸くなっている。

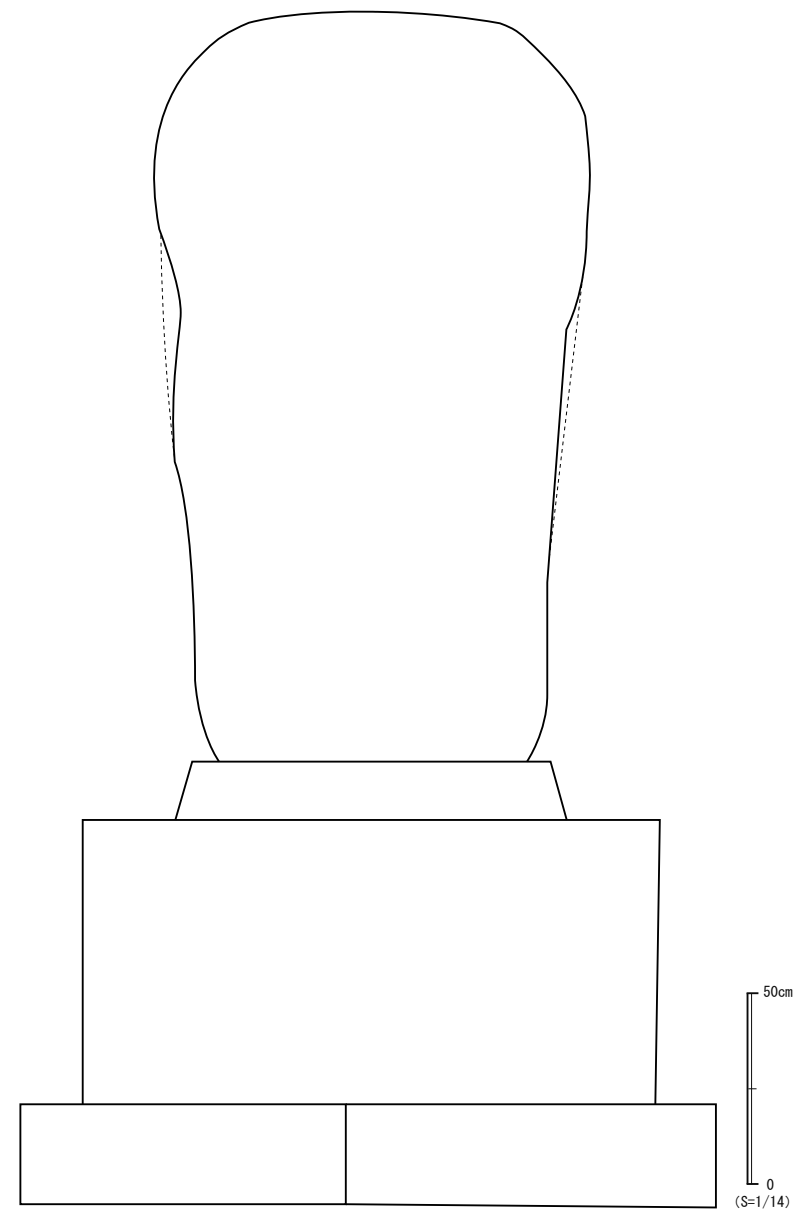
基礎は幅 106 cm、高さ 56 cm の直方体で、台石の上に据えられている。基礎の上面には高さ 10 cm、上端 60 cm の台座が造り出しで作られている。

注

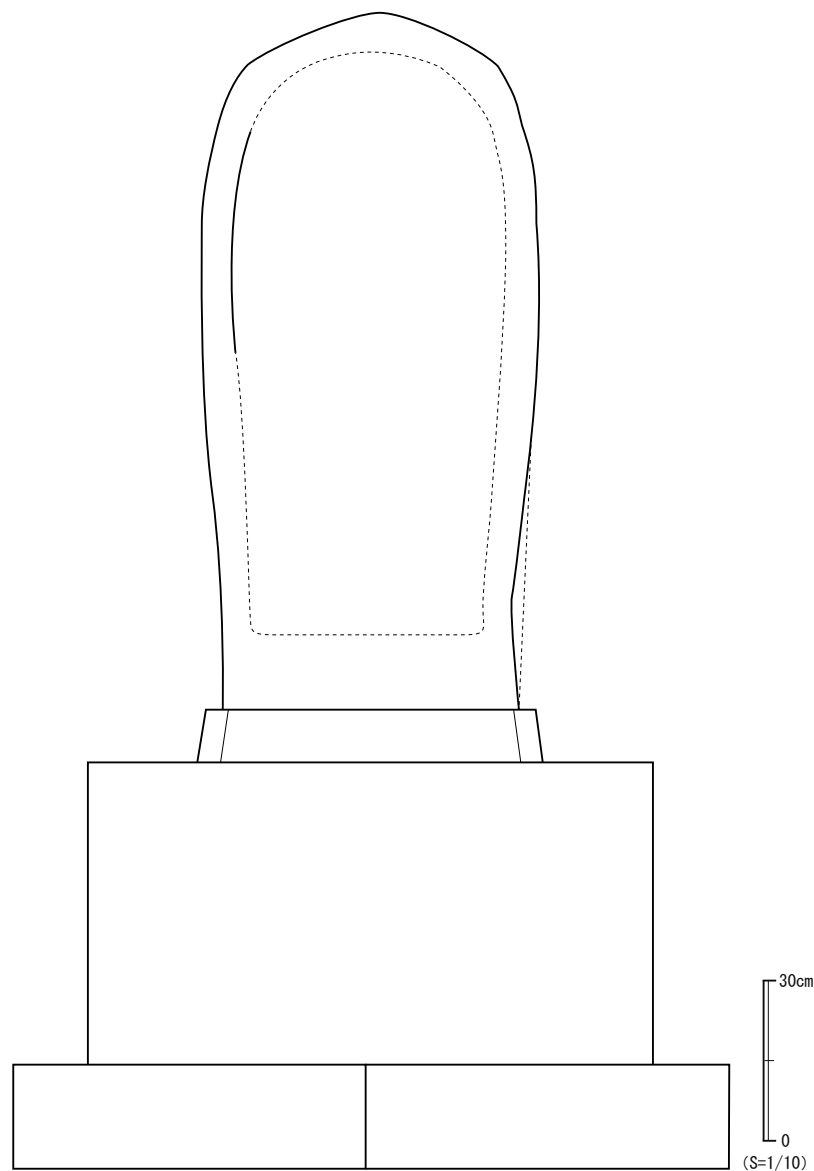
- (1) 『石を巡る歴史と文化―笏谷石とその周辺―』福井県立博物館 1989、『福井県史』通史編4（近世2）福井県 1996、三井紀生「越前笏谷石 一北前船による移出・各地の遺品―」福井新聞社 2002、三井紀生「越前笏谷石 続編―越前仏教文化の伝搬を担う―」福井新聞社 2006。「笏谷石」は、福井



第35図 伝野々村河内妻五輪塔 実測図



第 36 図 伝堀尾忠晴無縫塔 実測図



第37図 伝松村監物舟形石塔 実測図

市足羽山の北西側山麓部の通称笏谷地区で採掘される良質の火山礫凝灰岩である。笏谷石の石造物には、いくつかの独自の装飾や形態をもつ荘厳形式が見られ、「越前式荘厳」と呼ばれている。笏谷石製石廟は、様々な荘厳手法を採用し、藩主や高位の人々の宝篋印塔や五輪塔を安置するための屋形として使用されている。

- (2) 今岡 2006、岡崎ほか 2006。堀尾泰晴夫妻石廟と来待石製大型石廟との間には、石材を精巧に加工し組み合わせること、切妻造りなどの屋根をもつ平入りの屋形であること、台石の上に石廟本体、屋根を載せ、内部には宝篋印塔が納めることなど、形態に強い類似性がある。また、泰晴夫妻石廟の前扉にも太陽を象徴する日輪が彫り込まれており、(もう一方の扉には月が彫り込まれていた可能性がある)、殿様墓の1基(正面左)前扉にも太陽や月を象徴する円や三日月が彫られている。越前の石籠、石廟に見られる装飾の一つとして、正面に太陽や月を象徴する円や三日月が彫られるものがある(三井紀生「越前笏谷石 続編」2006)。さらに、外側壁面に卒塔婆形に配した四十九院を陰刻するなど、堀尾泰晴夫妻石廟と3箇所(4基)の来待石製大型石廟には特徴的な類似性がある。堀尾氏の菩提寺に、笏谷石製石廟が存在することで、堀尾氏の上級家臣に採用されたと考えられる親子観音・堀尾民部石廟・殿様墓などの来待石製大型石廟が、笏谷石製石廟をモデルにして製作された可能性は極めて高い。

4) 石塔の年代的考察と石廟の系譜について

(a) 石塔の時期について

春光院には、来待石製石塔として宝篋印塔10基、五輪塔1基、無縫塔1基、舟形石塔1基が存在する。これらの石塔の時期は、堀尾氏が出雲国を領していた17世紀前半のものと考えられる。石塔の被葬者(被供養者)の比定は、寺伝に残るものもあるが、石塔に刻まれた銘文から人物を特定出来るのは「天徳寺□□□」「世崇□□□」が刻まれた「天徳寺殿高菴世崇大居士」、すなわち堀尾泰晴のみで、他の石塔は銘文による人物の特定はできなかった。そこで、人物の没年、来待石製宝篋印塔の年代観に照らし合わせた各石塔の時期、人物名の整合性について考えてみたい。

春光院の堀尾氏関係者の没年と戒名を過去帳でみると(第2表)、16世紀末に没したのは堀尾金助(吉晴の子とされる)と泰晴である。17世紀に入ると、忠氏、泰晴妻、吉晴、家昌妻、家昌と続く。その後、元和期には吉晴の娘の勝山殿と三刀屋殿、吉晴妻が、17世紀第2四半期の寛永期には忠氏妻、忠晴、松村監物となる。さらに、17世紀中頃の慶安期に堀尾忠晴妻が亡くなっている。

石塔について、来待石製石塔の研究より明らかになっている年代観に照らし合わせてみると(岡崎ほか 2006)、最も古い要素をもつ石塔は伝堀尾吉晴妻宝篋印塔(4号石塔)である。これは、九輪を欠くが、笠の形状と基礎に蓮座を有するなど、親子観音、堀尾民部石廟内宝篋印塔に類似し、慶長期のものと考えられるが、堀尾吉晴妻は元和5年(1619)に没しているため、石塔の年代観とは整合しない。

次に古い年代観が与えられる石塔は、石廟内の泰晴宝篋印塔(1号石塔)と泰晴妻宝篋印塔(2号石塔)である。相輪の形状、笠の階段の表現、隅飾りの形状などにより、親子観音と同じ時期と考えられる。泰晴石塔は石廟内に存在するために銘が残っており、人物を確認できる唯一のものである。泰晴妻宝篋印塔(2号石塔)には大姉の女偏が認められることから、この石塔が女性のものと特定できる。

泰晴夫妻宝篋印塔(1、2号石塔)とほぼ同じ時期のものに、伝堀尾忠氏宝篋印塔(5号石塔)がある。この伝堀尾忠氏宝篋印塔は、春光院に所在する来待石製宝篋印塔の中では最大のものである。笠の全体的形状や隅飾りがやや外開きで、中央寄りの部分では平坦面があることや、基礎に蓮座をもつことなどにより、親子観音から堀尾民部石廟内宝篋印塔の時期と考えられる。年代観からみると、慶長9年(1604)

第2表 堀尾氏関係者の戒名と没年一覧（春光院所蔵の過去帳、位牌、木像、石塔配置図より）

没年	人物名	戒名	位牌	木像	石塔配置図
1590（天正18）	堀尾金助	俊巖院殿逸巖世俊大禪定門	●	●	—
1599（慶長4）	堀尾泰晴	天徳寺殿高菴世崇大居士	●	●	●
1604（慶長9）	堀尾忠氏	忠光院殿天岫世球大居士	●	●	●
1607（慶長12）	堀尾泰晴室（妻）	龍翔院殿芳巖宗葩大姉	●	●	●
1611（慶長16）	堀尾吉晴	法雲院殿松庭世栢大居士	●	●	●
1611（慶長16）	奥平家昌室（妻）	法明院殿慧光正圓大禪定尼	●	—	●
1614（慶長19）	奥平家昌	六通院殿天眼道高大居士	●	—	●
1618（元和4）	女（娘）勝山殿	靈照院殿高月宗松大禪定尼	●	●	●
1618（元和4）	女（娘）三刀屋殿	清涼院殿金臺宗蓮大禪定尼	●	●	—
1619（元和5）	堀尾吉晴室（妻）	昌徳院殿俊芳宗英大姉	●	●	●
1627（寛永4）	堀尾忠氏室（妻）	長松院殿眞諦紹聖大姉	●	●	●
1633（寛永10）	堀尾忠晴	圓成院殿高賢世肖大居士	●	●	●
1633（寛永10）	松村監物	大恕玄忠居士	●	—	●
1650（慶安3）	堀尾忠晴室（妻）	雲松院殿長天正久尼大姉	●	●	—

に没した忠氏のものとする整合性はとれている。

その次に古い年代観が与えられる石塔としては、伝堀尾忠氏妻宝篋印塔（6号石塔）、伝堀尾吉晴妻宝篋印塔（3号石塔）がある。笠の階段の表現が荒く、隅飾りが横長になり、中央よりの部分では平坦面があることから、堀尾民部石廟内宝篋印塔以降のものである。

その次に、寛永期以降の年代観をもつ石塔は伝奥平家昌宝篋印塔（7号石塔）で、最も新しいものが伝奥平家昌妻宝篋印塔（8号石塔）である。笠の階段表現や隅飾りの形状から寛永期以降の17世紀中頃と推定される。この石塔の年代観と奥平家昌の没年（慶長19年〔1614〕）とはやや年代差がある。

なお、今日残されている堀尾一族の木像として、春光院所蔵の9体（泰晴夫妻、吉晴夫妻、忠氏夫妻、金助、女2体）、圓成寺（松江市）所蔵の2体（忠晴夫妻）が存在する。これらの像は、吉晴を中心とした堀尾家嫡流の人物のものである。この木像と人物の比定が正しいものとするれば、この木像比定者の石塔も同じように春光院に存在した可能性が考えられる。しかし、春光院に伝えられている石塔配置図と墓籍表には、金助と忠晴室（妻）および三刀屋殿の記載はない。想像の域を出ないが、石塔運搬あるいは改葬などの折に、人物の一部に何らかの理由で入れ替えが生じた可能性も考えられる。

来待石製大型石塔である伝堀尾忠晴無縫塔（10号石塔）、伝松村監物舟形石塔（11号石塔）（岡崎ほか2006）については、来待石製石塔としては特殊なものであり、明確な編年観を持ち合わせていないが、両名が亡くなった寛永10年（1633）以降の17世紀第2四半期の内で造られた可能性をもつ。また、石塔の配置でも分かるように、墓地の中でも中心に置かれ、灯籠をも備えた伝堀尾忠晴無縫塔（10号石塔）が重要視されていたことは推察できる。いずれにせよ、堀尾氏に関わる大型石塔であり、多大な労力をかけて出雲より京都に搬入したものと言えよう。

(b) 笏谷石製石廟と来待石製大型石廟について

笏谷石（火山礫凝灰岩）の石塔には、いくつかの独自の装飾や形態をもつ荘厳形式が見られ、「越前式荘厳」と呼ばれている^{（注1）}。笏谷石製石廟は、様々な荘厳手法を採用し、藩主や高位の人々の宝篋印塔や五輪塔を安置するための屋形として使用され、京都、近江、能登、越中、越後、紀州、蝦夷松前などに移出されている。代表的なものとして、高野山の結城（松平）秀康の石廟、石川県七尾市長齢寺の前田利家・利長の石廟、金沢市野田山の前田利家の子女と家臣の石廟、富山県高岡市瑞龍寺の前

田利家の石廟、滋賀県米原市清滝寺徳源院の京極高次の石廟などが知られている。特に、

七尾市長齢寺の前田利家・利長の石廟は、石材を精巧に加工し組み合わせるもので、切妻造りの屋根をもつ平入りの屋形で、台石の上に石廟本体、屋根を載せ、正面には観音開きの扉が付き、扉下の切石羽目板には堅連子と格狭間を組み合わせた荘厳が施されているなど、堀尾泰晴夫妻石廟と極めて類似する。内部には前田利家と利長を供養するための2基の笏谷石製の宝篋印塔が納められており、宝篋印塔には利家・利長の法名と没年が刻まれている^{（注2）}。利長の没年が慶長19年（1614）であることから、この石廟も利長の没年の慶長期頃に作成されたものと考えられる。笏谷石製石廟の多くは17世紀初めから中頃にかけて造立されており、この石廟のスタイルは越前地域（福井県）の神社などに見られる石龕が起源と考えられている。また、越前の石龕、石廟に見られる装飾の一つとして、正面に太陽や月を象徴する円や三日月が彫られるものがある^{（注3）}。



写真50 長齢寺前田利家・利長石廟（石川県七尾市）

ところで、今回調査した堀尾泰晴夫妻石廟と、親子観音〔安来市広瀬町〕、堀尾民部石廟〔松江市玉湯町〕、殿様墓〔雲南市三刀屋町：石廟が左右2基並ぶ〕（今岡2006、岡崎ほか2006、西尾ほか2005、樋口2005）などの来待石製大型石廟との間にはいくつかの類似性があり、石材を精巧に加工し組み合わせていること、平入りの屋形であること、台石の上に本体、屋根を据え、内部には宝篋印塔を納めることなど、形態的な共通性がある。また、泰晴夫妻石廟の前扉には太陽を象徴する日輪が彫り込まれているが（もう一方の扉には月が彫り込まれていた可能性がある）、殿様墓の前扉にも円や三日月が彫り抜かれている。さらに、外側壁面には卒塔婆形に配した四十九院を陰刻しており、堀尾泰晴夫妻石廟と3箇所（4基）の来待石製大型石廟では宗教観を共有していたと考えられる。堀尾氏の菩提寺に笏谷石製石廟が存在することで、堀尾氏の仕置等の上級家臣に採用されたと考えられる来待石製大型石廟が、笏谷石製石廟をモデルにして製作された可能性は極めて高く、来待石の採石・加工技術の展開に笏谷石の工人が何らかの形で関わっていた可能性も考えられる。

注

(1) 『石を巡る歴史と文化―笏谷石とその周辺―』福井県立博物館 1989、川勝1998ほか

(2) 三井紀生「越前笏谷石 ―北前船による移出・各地の遺品―」福井新聞社 2002

(3) 三井紀生「越前笏谷石 続編―越前仏教文化の伝搬を担う―」福井新聞社 2006

5) おわりに

堀尾氏の菩提寺である京都・妙心寺春光院には、境内の一角に堀尾一族を祀る「御霊屋」があり、その裏には堀尾泰晴夫妻、吉晴夫妻、忠氏夫妻、忠晴、奥平家昌夫妻、野々村河内妻、松村監物のものと伝えられる宝篋印塔、五輪塔、無縫塔、舟形石塔など、来待石製の石塔が並んでいる。

宝篋印塔・五輪塔については、形態的には出雲地域で見られる17世紀前半の来待石製宝篋印塔・五輪塔であり、いずれも出雲から京都まで運んだものである。伝堀尾忠晴無縫塔と伝松村監物舟形石塔についても、来待石製大型石塔が出現する（岡崎ほか2006）17世紀前半のものと考えられ、同じく出雲

から運んだものである。

来待石製石塔の大半が春光院の資料により人物名比定がなされていたことから、人物の特定に言及できたのは大きな成果であった。しかし、石塔に残された紀年銘より、人物を特定できたのは堀尾泰晴夫妻宝篋印塔のみで、来待石石塔の年代観に照らし合わせると、一部の石塔に整合性のとれないものも存在した。人物の特定については堀尾一族の木像調査等と併せ、今後検討していく必要がある。

今回の調査で、堀尾泰晴夫妻の石廟が、加賀藩主前田家一族など、高位の人々の宝篋印塔や五輪塔を安置するための屋形として使用された笏谷石製石廟であることが明らかになった。また、堀尾泰晴夫妻石廟と、堀尾氏の上級家臣に採用されたと考えられる親子観音・堀尾民部石廟・殿様墓などの来待石製大型石廟にはいくつもの共通性が認められ、京都の地ではあるが、堀尾氏の菩提寺に笏谷石製石廟が存在することで、出雲にある来待石製大型石廟が、笏谷石製石廟をモデルにして製作された可能性を指摘するに至った。笏谷石製石廟と来待石製大型石廟の系譜と歴史的背景、さらには、採石・加工・運搬等の石造技術の伝播・展開などについては、引き続き今後の重要な検討課題と言えよう。

なお、「春光院過去帳」により、「桂岩院殿祥雲世端大居士 慶長十三十二月五日」という戒名・没年の記録が確認出来たことで、「慶長十三年」「十二月五」の紀年銘と、「桂ヵ口院殿祥雲世口大居士」の戒名を刻む（岡崎ほか2006）富田城跡〔安来市広瀬町〕山麓にある親子観音内宝篋印塔が、堀尾勘解由のものであると特定できた。「堀尾古記」（松江市史編集委員会編2018）には、慶長13年「堀尾勘解由果ル、極（12）月五日京ニテ」と記されてはいるが、京のどこで、どのような果て方だったかは伝えていない。しかし、亡骸は堀尾家菩提所春光院に葬られた可能性は高い。



写真 51 堀尾吉晴夫妻木像



写真 52 堀尾吉晴木像



写真 53 堀尾吉晴妻木像



写真 54 堀尾金助木像



写真 55 春光院御霊屋（正面）



写真 56 春光院御霊屋（内部）



写真 57 春光院御霊屋裏墓域



写真 58 堀尾泰晴夫妻石廟正面（開扉）



写真 59 堀尾泰晴夫妻石廟正面（閉扉）



写真 64 堀尾泰晴宝篋印塔基礎（天徳寺の文字を刻む）



写真 65 伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔（左：妻、右：吉晴）



写真 60 堀尾泰晴夫妻石廟前扉（表面）



写真 61 堀尾泰晴夫妻石廟前扉（裏面）



写真 66 伝奥平家昌夫妻宝篋印塔（左：妻、右：家昌）



写真 67 伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔（左：妻、右：忠氏）



写真 62 堀尾泰晴夫妻石廟裏



写真 63 堀尾泰晴夫妻石廟外壁
（卒塔婆を配した四十九院を刻む）



写真 68 伝野々村河内妻五輪塔



写真 69 伝野々村河内妻五輪塔
（地輪刻字採拓風景）



写真70 伝松村監物舟形石塔（左）、伝堀尾忠晴無縫塔（右）



写真71 伝松村監物舟形石塔



写真72 伝堀尾忠晴無縫塔



写真73 12号石塔



写真74 13号石塔

2. 高野山奥之院堀尾家墓所

1) はじめに

高野山は、和歌山県伊都郡高野町に所在する標高約1,000 m前後の山々の総称である。弘仁7年(816)より弘法大師空海が修行の場として開いた高野山真言宗の聖地で、標高約800 mの平坦地には「壇上伽藍」と呼ばれる根本道場を中心とする宗教都市が形成されている。現在、山内の寺院数は高野山真言宗総本山金剛峯寺をはじめ百か寺あまりに及ぶ。

奥之院には、弘法大師の御廟と灯籠堂があり、その参道脇には皇室、公家、大名などの墓所が営まれ、近世大名の巨大な石塔が多数並ぶ。奥之院の入り口は寺院群から東に続く一の橋と、中の橋の2箇所があり、一の橋から御廟までの参道は約2 kmの道のりとなっている。

近世大名（松江藩主）堀尾家墓所は、奥之院にある一の橋から中の橋に至る間の参道脇にある。現在、堀尾家に関する石塔は海軍整備練習生慰霊碑などが建つ平坦面（約90 m²：幅約10 m×奥行約9 m）の奥側に11基、左側面に2基が確認されている。近くには、鳥取池田家墓所、土佐山内家墓所、薩摩島津家墓所などがある。近世の堀尾家墓所と石塔群については、宝永4年(1707)の「奥院絵図」、寛政5年(1793)の「高野山奥院総絵図」に描かれている（日野西1988a）。

高野山での堀尾家の宿坊は龍生院で^(注1)、紀州藩が天保10年(1839)に編纂した『紀伊續風土記』「高野山之部」龍生院の項には、「(前略) 遮黎大師眞作の多聞天を安置して本院の鎮護とす 今内道場の本尊是なり 毎歳正月毘沙門講あり 曩昔院宇丙丁の災ありし時脊の山脚に相好端嚴として立ち給ふ 堀尾吉晴主此天の靈異を仰信ありて宮殿を修し正五九の月には武運榮久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す 且堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢亀山石川侯先操を追ひて壇契篤し」とある^(注2)。

「堀尾吉晴主・・・正五九の月には武運榮久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す」の記事が示すように、堀尾吉晴は堀尾家の武運榮久の誓祈（仏に誓いを立て、加護を祈る）を願ひ高野山龍生院を宿坊とし墓所を設けるとともに、領国支配や松江城下町形成、松江城築城などにあたって「長栄」「武運長久」などの誓祈、祈祷を高野山真言宗に願ったと考えるのが妥当であろう^(注3)。

また、「堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢亀山石川侯先操を追ひて壇契篤し」と、墓所と石塔についての記述があり、高野山においても、妙心寺春光院（京都市）（岡崎ほか2007）、白華山養源寺（東京都千駄木）（西尾ほか2011）と同様に、寛永年間に大名家として断絶した後、堀尾家の菩提は堀尾忠晴娘（石川廉勝妻：憲之母）が嫁いだ石川家^(注4)によって弔われていたことが分かる。

注

- (1) 日野西1988b。明治12・23・26年の「高野山寺院調査票」によれば、龍生院は高野山蓮華谷と谷上谷にあり、その後蓮華谷の龍生院は大円院に引き継がれ、谷上谷の龍生院は東京都港区三田へ移転している。なお、出雲国の宿坊は中世以来、高野山普賢院で、松江市域内にも関係史料が残るとともに、現在でも出雲地域の真言宗寺院との関係が深い。
- (2) 「紀伊續風土記高野山之部」『紀伊続風土記（五）』歴史図書社1970。『紀伊續風土記』は紀州藩が文化3年（1806年）から天保10年（1839）にかけて、藩士で儒学者の仁井田好古らに編纂させた紀伊国の地誌で、高野山とその寺領の記述は5輯中2輯と詳細である。
- (3) 稲田ほか2013。松江城の鬼門（北東）には真言宗千手院（松江市石橋町）、裏鬼門（南西）には真言宗報恩寺（松江市玉湯町）を配置するなど、高野山真言宗との関係は極めて深い。高野山龍生院『紀伊續風土記』「高野山之部」龍生院」と、松江城天守創建に関わる「奉誦讀如意珠經長榮処」祈祷

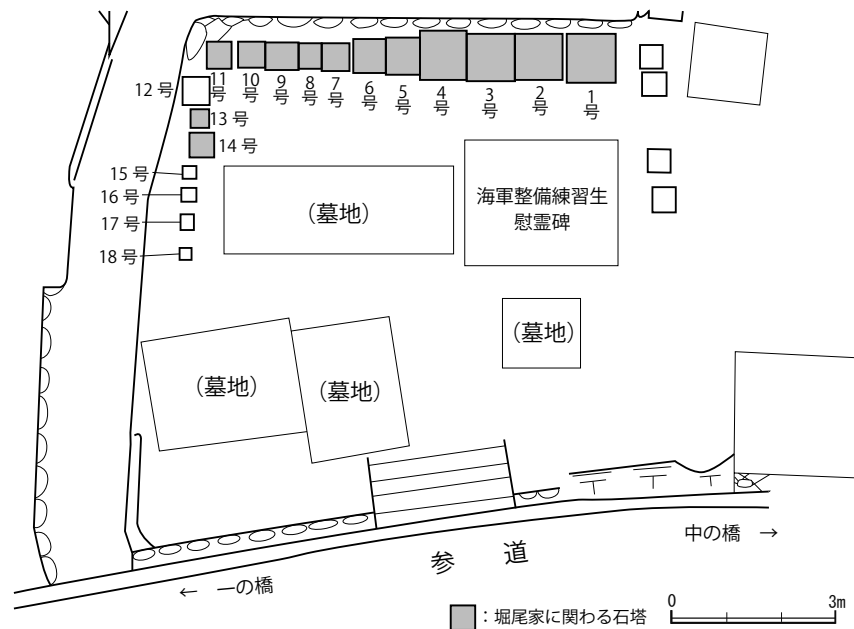
札にある如意珠経（如意寶珠轉輪秘密現身成佛金輪呪王經の略：仏書解説大辞典参照）は、ともに龍王に関係している。

- (4) 堀尾家と石川家は、近江膳所藩の石川家初代当主となる石川忠総に堀尾吉晴の娘が嫁ぎ、その子廉勝に堀尾忠晴の娘が嫁ぐという二重の姻戚関係を持っていた。廉勝は忠総より早世したため、石川家は廉勝の子憲之（忠晴孫）が継いだ。憲之は膳所藩の2代藩主で、後に伊勢亀山藩主、淀藩主となる。

2) 堀尾家に関わる石塔群（五輪塔、宝篋印塔群）

堀尾家の墓所は、奥之院の参道に面した幅約10m、奥行約9mの平坦面奥にあり、堀尾家に関わる石塔として、13基が確認されている。左側面には、堀尾家とは直接かわからない石塔も5基並んでおり、便宜上、奥側の右端（東側）から順に1～18号石塔とする（第38図）。堀尾家に関わる石塔は奥側に横一列に並んだ1～11号（11基）、左側面に横に並んだ13、14号（2基）で、1、9～11号石塔は宝篋印塔、2～8、13、14号石塔は五輪塔である。なお、台石のある石塔のうち、長方形の石材を横に並べ、台石として複数の石塔で共有できるように利用しているものもある。1・2号で1枚の台石（幅150cm、奥行110cm、厚さ25cmで最も大きい）、2・3号で1枚の台石、3～5号で1枚の台石、5・6号で1枚の台石、7・8号で1枚の台石、9～11は各1枚の台石を用いている。

宝永4年（1707）の「奥院絵図」には、「堀尾山城守」として正面に鳥居を配し、玉垣に囲まれた墓域内に石塔24基が描かれている。寛政5年（1793）の「高野山奥院総絵図」には、「堀尾山城守先祖」として同じく正面に鳥居を配し、玉垣に囲まれた墓域内に石塔24基が描かれている。2つの絵図とも、



第38図 高野山奥之院堀尾家墓所の石塔配置図

石塔の大きさや五輪塔などの形態が描き分けられており、手前から奥に向かって大型化している（日野西1988a）。この絵図の描写が正しいとすれば、絵図の描かれた時点では、参道脇の玉垣に囲まれた墓域内に現在の約2倍の石塔が並んでいたことになる。おそらく近代以降に、堀尾家の墓所は墓域の縮小と石塔の整理が行われ、現在の形となったのであろう。堀尾家に関わる石塔群が建つ幅約10m、奥行約9mの平坦面は、元の墓域の大きさを反映している可能性がある。

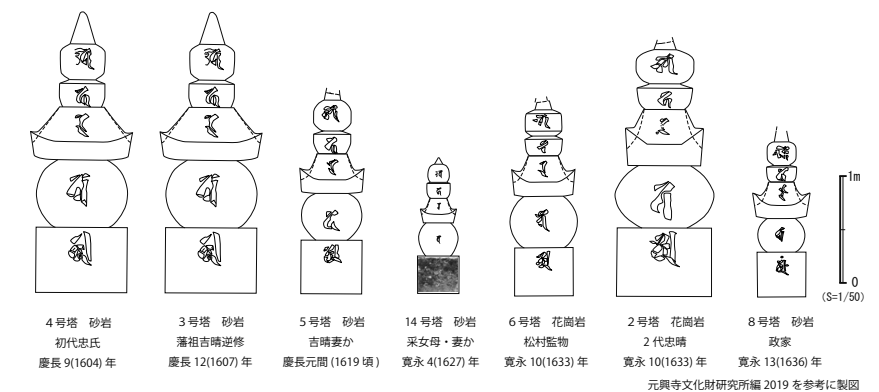
堀尾家と高野山との関係を示す文献史料は少ないが、堀尾家家臣の堀尾但馬が記した「堀尾古記」^(注1)には、忠晴の死去の前後に、堀尾采女、但馬、修理など堀尾家の重臣が高野山に参ったこと、石塔を建てたことなどが記録されている。堀尾家に関わる石塔には、戒名、命日、施主などが刻まれており、「堀尾古記」など文献史料の記事を裏付け、堀尾家と高野山との関係を示す貴重な史料でもある。なお、高野山真言宗の根本道場であるだけに、梵字などの刻字はいずれも整美で、五輪塔、宝篋印塔、刻字の形態は高野山真言宗の典型と考えられる。

石塔群の中では、1号石塔（宝篋印塔）は堀尾吉晴、忠氏、忠晴石塔と並び大型で、この石塔には「光堀尾山城守殿忠晴公御息女 為法光院殿全心玄貞大姉 施主石川宗十郎」と刻まれている。堀尾忠晴娘（石川廉勝妻：憲之母）のために石川宗十郎が施主となって建てたもので、宗十郎とは夫の廉勝と考えられる^(注2)。忠晴には男子がなかったが、石川家に嫁いだ娘は、石川家が断絶後の堀尾家の菩提を弔い続けるうえで重要な存在であったのである^(注3)。

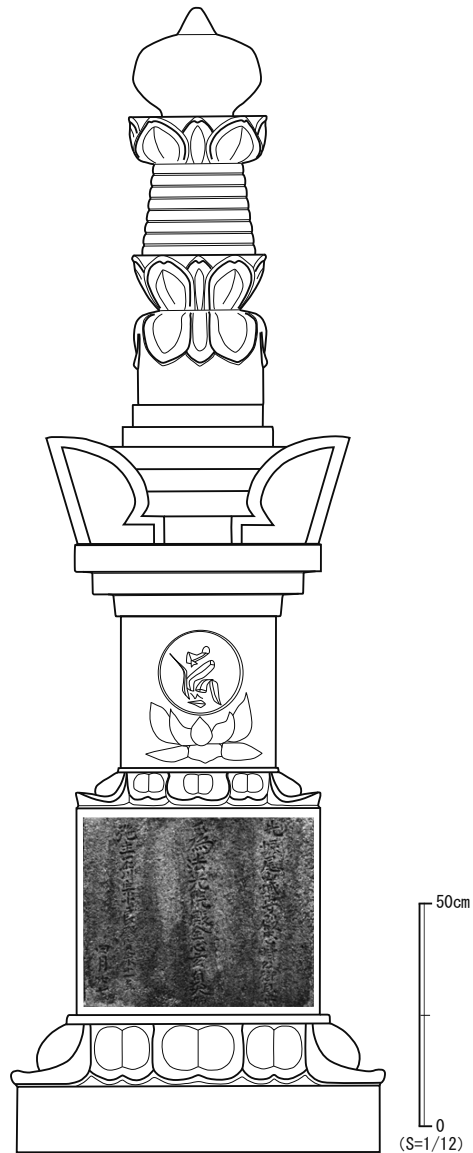
なお、高野山奥之院の大名墓調査が行われているのは、堀尾家以外では東北の津軽家のみである。近年、地元の高野町教育委員会により大名墓の網羅的調査が行われ、その概要が報告書（元興寺文化財研究所編2019）として刊行されている。その報告書には、堀尾家の石塔調査成果も盛り込まれており、石材の砂岩から花崗岩への移行時期のことや、五輪塔の形態、とりわけ火輪の軒口の形態変遷にも触れられている。奥之院における大名墓の資料化は今後の課題であり、堀尾家の調査事例が少なからず参考にしてもらえればと期待している。

1号石塔（宝篋印塔：堀尾忠晴娘〔石川廉勝妻：憲之母〕石塔）

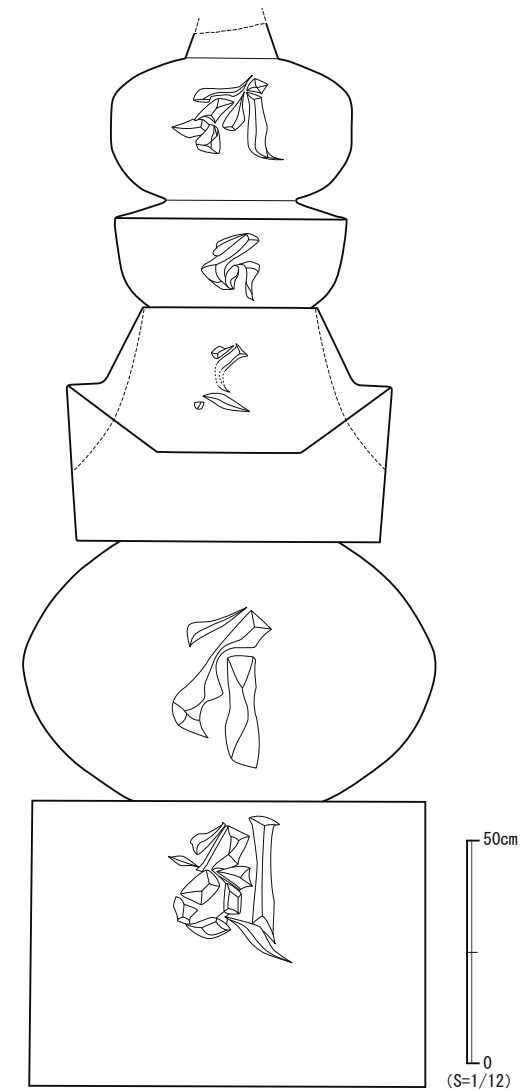
1号石塔は、墓所の奥側に11基並ぶ石塔群のうち、正面向かって右から1番目に配されている。花崗岩製の宝篋印塔で、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。保存状態は良く、相輪先端から基壇までの総高は、257cmである。



第39図 高野山奥之院堀尾家墓所五輪塔の年代順配列図



第40図 1号石塔（堀尾忠晴娘〔石川廉勝妻：憲之母〕石塔）実測図



第41図 2号石塔（堀尾忠晴石塔）実測図

相輪は、上から宝珠、受花（上）、九輪、受花（下）、反花が刻まれ、総高 89 cm である。宝珠は高さ 24.5 cm、最大径 28.5 cm、受花（上）は高さ 10.5 cm、最大径 31 cm、九輪は高さ 20.5 cm、最大径 25 cm、受花（下）は高さ 12.5 cm、最大径 31 cm、反花は高さ 21 cm、最大径 30 cm である。

笠は、上部 6 段、下部 2 段の階段を作り出し、高さ 47.5 cm、軒幅 55 cm、上端幅 29 cm、下端幅 36.5 cm である。隅飾端先端幅は 68 cm で、外反している。隅飾の側面は一段の帯で縁取っている。

塔身は、高さ 34 cm、上端幅 34.5 cm、下端幅 34.5 cm で、4 面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。

基礎は、上部に深みのある反花を刻み、高さ 55.5 cm、上端幅 35.5 cm、下端幅 54.5 cm である。正面には、「光堀尾山城守殿忠晴公御息女」「為法光院殿全心玄貞大姉」「施主石川宗十郎殿寛永十一年」「四月廿七日」の銘文が刻まれている。堀尾忠晴娘のために夫の石川廉勝（宗十郎）が施主となって建てたと考えられる。

基壇は、上部に深みのある反花を刻み、高さ 31 cm、上端幅 59 cm、最大幅 84 cm、下端幅 81 cm である。

2号石塔（五輪塔：堀尾忠晴石塔）

花崗岩製の五輪塔で、空風輪の先端が欠くが、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 238.5 cm（空風輪先端を復元すると、約 254.5 cm）である。地輪に刻まれた銘文より、堀尾忠晴の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、先端が欠くが、総高 64 cm（復元高約 80 cm）である。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は先端が欠くが、高さ 8 cm（現存高）、底幅 21 cm、球形の最大幅 54 cm、高さ 32 cm、風輪と接する括れ部の幅 29 cm である。風輪は最大幅 52 cm、下端幅 36 cm、高さ 24 cm である。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 39 cm、最大幅 73 cm、下端幅 68 cm、高さ 52.5 cm である。軒の厚さは中央で直線的に高さ 20 cm、左端 35 cm、右端 35 cm で、左右の端部は直線的に広がる。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 49 cm、最大径 92.5 cm、下端径 42 cm、高さ 58 cm で、やや上方で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

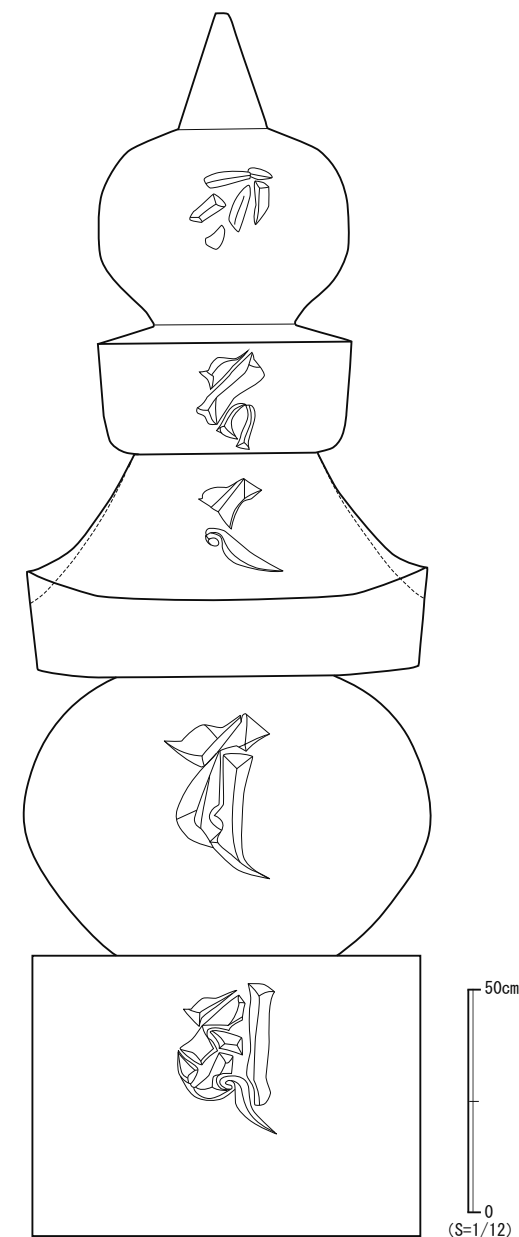
地輪は、上端幅 88 cm、下端幅 89 cm、高さ 64 cm である。四方に梵字を刻む。正面には、「寛永十天」「出雲隠岐両国太守光堀尾」「為圓城院殿」「高賢宗肖」「大居士追善」「山城守高階朝臣忠晴御栄」「九月二十日」を刻む。「堀尾古記」（松江市史編纂委員会編 2018）の寛永 11 年（1634）の項に「十月七日ニ高野へ但馬・縫殿・下井十太郎参 御石塔ヲ立ル」とあるのはこの 2 号石塔のことと考えられる。

3号石塔（五輪塔：堀尾吉晴石塔）

砂岩製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 274.5 cm である。地輪に刻まれた銘文より、堀尾吉晴の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

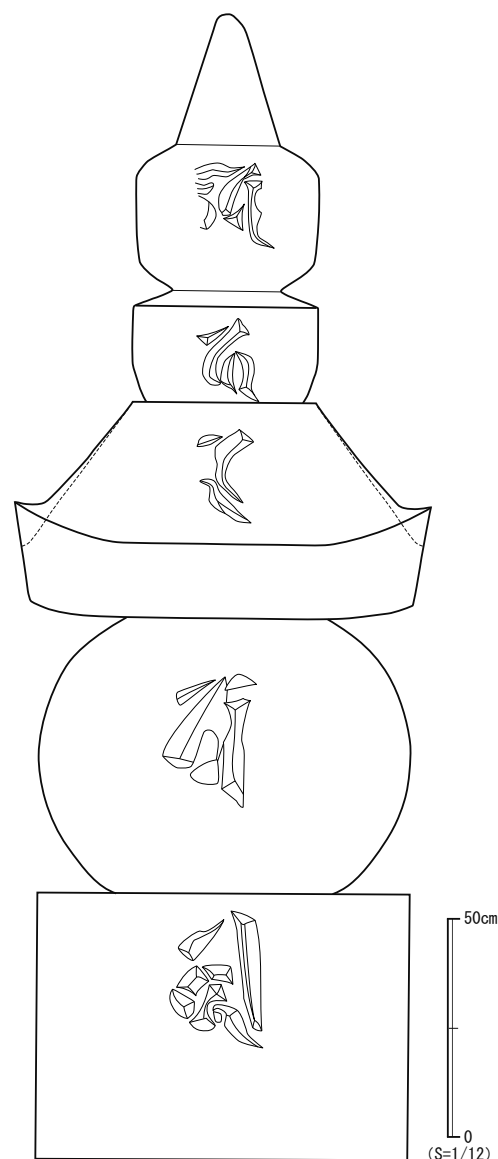
空風輪は一石からなり、総高 99 cm である。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高さ 26 cm、底幅 20 cm、球形の最大幅 56 cm、高さ 44 cm、風輪と接する括れ部の幅 31.6 cm である。風輪は最大幅 57 cm、下端幅 39 cm、高さ 29 cm である。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 41 cm、最大幅 90 cm、下端幅 85 cm、高さ 50 cm である。軒の厚さは中央で 17 cm、左端 22 cm、右端 22 cm で、左右の端部はややカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部でややカーブする。四方に梵字を刻む。



第 42 図 3 号石塔（堀尾吉晴石塔）実測図

水輪は、上端径 50 cm、最大径 91 cm、下端径 49.5 cm、高さ 62.5 cm で、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。



第 43 図 4 号石塔（堀尾忠氏石塔）実測図

地輪は、上端幅 87 cm、下端幅 87 cm、高さ 63 cm である。四方に梵字を刻む。正面には、「為松庭世柏居士逆修」「慶長十二年」「四月日立之」「豊富朝臣堀尾帯刀吉晴」を刻む。この銘文から、吉晴が慶長 12 年（1607）4 月に逆修塔（^{あらかじ}逆め生前に自分の墓を建て、自分ために仏事を修して死後の冥福を祈る）を建てたことが知られる。吉晴が慶長 12 年 4 月に逆修塔を建てた理由は分らないが、嫡子で藩主、堀尾忠氏の死去から 3 年後であり、^{りゆうしやういん}龍翔院（吉晴母）の死去（4 月 6 日没）がこの頃である。

4 号石塔（五輪塔：堀尾忠氏石塔）

砂岩製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 263 cm である。地輪に刻まれた銘文より、堀尾忠氏の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、総高 89 cm である。空輪は上部が円錐形、下部は側面が垂直な宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高さ 30 cm、底幅 24 cm、球形の最大幅 42 cm、高さ 33.5 cm、風輪と接する括れ部の幅 25 cm である。風輪は最大幅 42.5 cm、下端幅 35.5 cm、高さ 25.5 cm である。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 42 cm、最大幅 95 cm、下端幅 87 cm、高さ 49.5 cm である。軒の厚さは中央で 17 cm、左端 22.5 cm、右端 22.5 cm で、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 45 cm、最大径 85 cm、下端径 48.5 cm、高さ 63.5 cm で、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 85 cm、下端幅 85 cm、高さ 61 cm である。四方に梵字を刻む。正面には、「為前雲州太守正四位堀尾」「忠氏朝臣天岫世球大居士」「施主慈父堀尾帯刀殿」「慶長九年八月四日敬白」を刻む。銘文から、慶長 9 年（1604）8 月 4 日に死去した忠氏のために、父堀尾吉晴が施主となり建てた石塔と分かる。

5 号石塔（五輪塔：堀尾吉晴妻か）

砂岩製の五輪塔で、空風輪の先端を欠くが、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 185.4 cm（空風輪先端を復元すると、約 204 cm）である。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、先端を欠くが、総高 56.4 cm（復元高約 75 cm）である。空輪は上部が円錐形、下部は側面が垂直な宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は先端を欠くが、高さ 7 cm（現存高）、底幅 15 cm、球形の最大幅 34.5 cm、高さ 28.5 cm、風輪と接する括れ部の幅 17 cm である。風輪は最大幅 34 cm、下端幅 24.5 cm、高さ 21 cm である。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 27.5 cm、最大幅 59 cm、下端幅 55.5 cm、高さ 36.5 cm である。軒の厚さは中央で 12.5 cm、左端 21.5 cm、右端 21.5 cm で、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 30 cm、最大径 55.5 cm、下端径 28.5 cm、高さ 43 cm で、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 56 cm、下端幅 56 cm、高さ 49.5 cm である。四方に梵字を刻む。正面には、「(不明)」「(不明)」「于時・元和□年（三または五）四月□・・」「□意味□」を刻む。高野山の堀尾家墓所に石塔が立てられる可能性のある人物として、元和 3 年（1617）4 月に没した人物は見当たらないが、元和 5 年（1619）4 月 4 日には堀尾吉晴妻（大方様：昌徳院殿俊芳宗英大姉）が亡くなっている（注 4）。

6 号石塔（五輪塔：松村監物石塔）

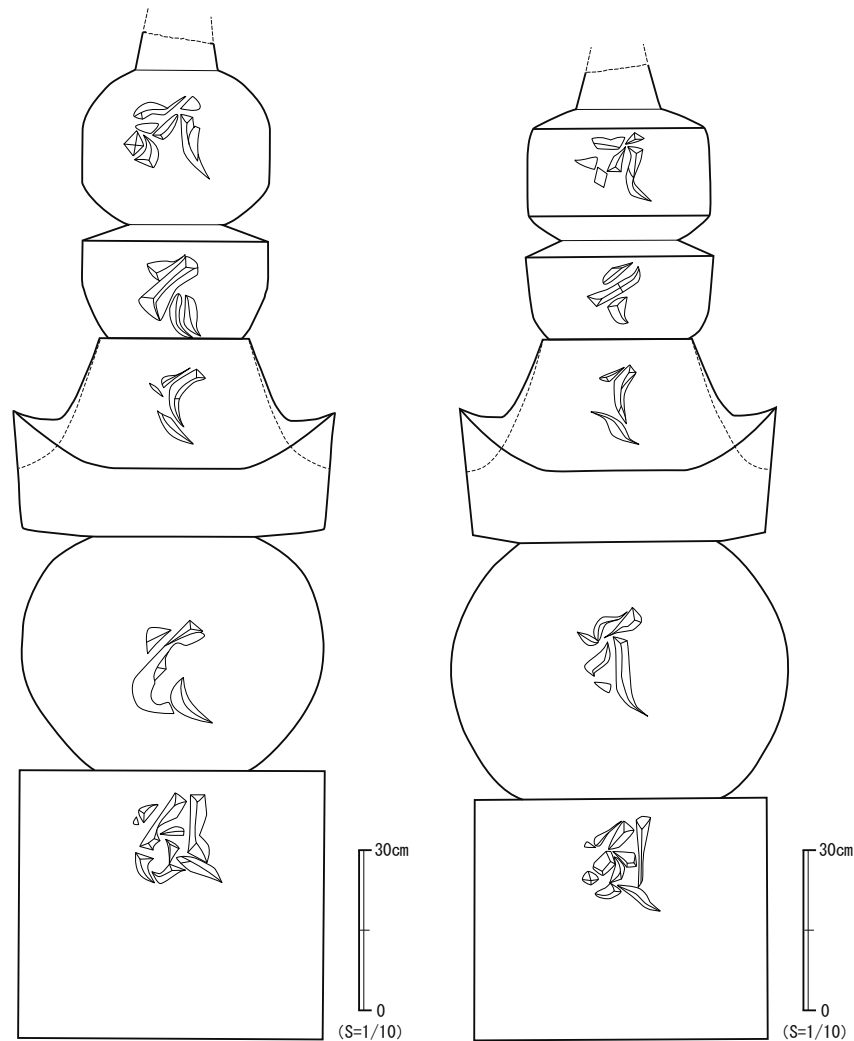
花崗岩製の五輪塔で、空風輪の先端を欠くが、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は182.4 cm（空風輪先端を復元すると、約195 cm）である。地輪に刻まれた銘文より、松村監物の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、先端を欠くが、総高51.4 cm（復元高約64 cm）である。空輪は上部が円錐形、下部は側面が垂直な宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は先端を欠くが、高さ8.4 cm（現存高）、

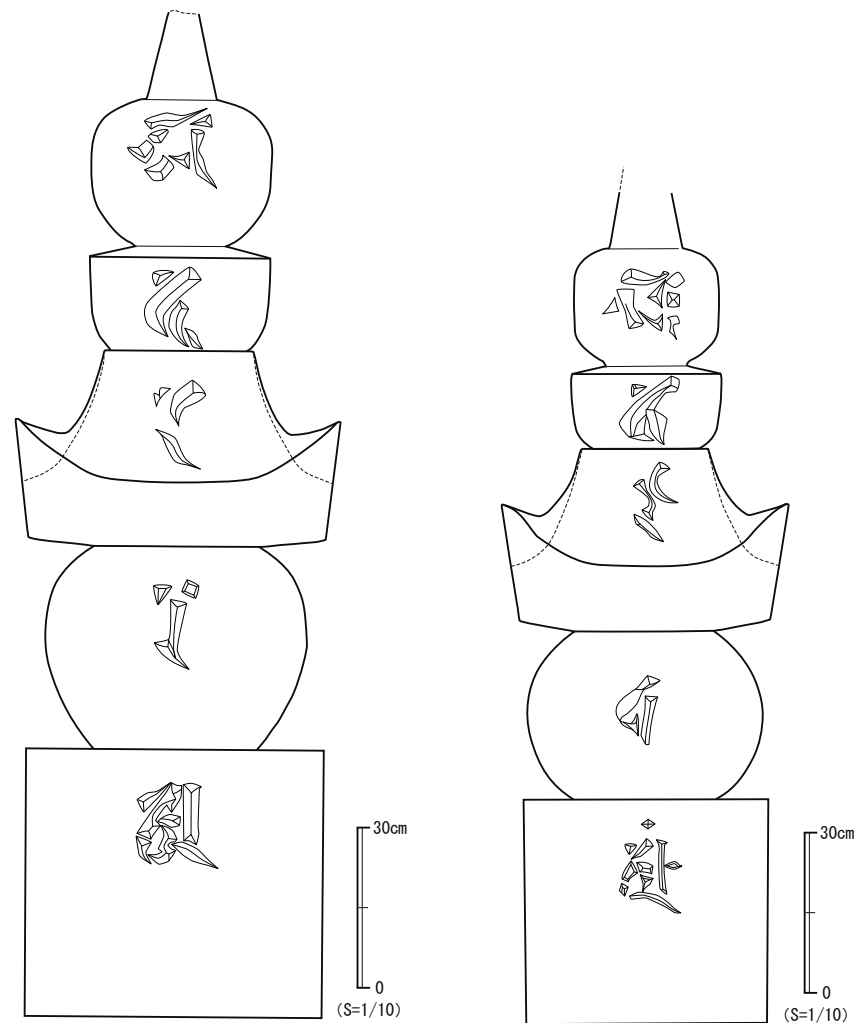
底幅16 cm、球形の最大幅34 cm、高さ24.5 cm、風輪と接する括れ部の幅22 cmである。風輪は最大幅35 cm、下端幅25 cm、高さ18.5 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅28 cm、最大幅59 cm、下端幅54.5 cm、高さ38 cmである。軒の厚さは中央で13.5 cm、左端23.5 cm、右端23.5 cmで、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径37 cm、最大径63 cm、下端径37.5 cm、高さ48 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。



第44図 5号石塔〔左〕（堀尾吉晴妻か）・6号石塔〔右〕（松村監物石塔） 実測図



第45図 7号石塔〔左〕（堀尾吉晴娘・勘解由母の勝山か）・8号石塔〔右〕（堀尾頼母助政家石塔） 実測図

地輪は、上端幅 54.5 cm、下端幅 55 cm、高さ 45 cm である。四方に梵字を刻む。正面には、「于時寛永十亥」「居士」「為大怨玄忠」「九月廿六日 命日 松村監物」を刻む。松村監物は堀尾忠晴の死に殉じた家臣で^(注5)、妙心寺春光院（京都市）（岡崎ほか2007）、白華山養源寺（東京都千駄木）（西尾ほか2011）でも同様に堀尾家の墓所に石塔が建つ。なお、この石塔も2号石塔（堀尾忠晴石塔）と同じ時期に、堀尾家臣らが高野山に向いて建てた可能性がある。

7号石塔（五輪塔：堀尾吉晴娘・勘解由母の勝山か）

砂岩製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 188 cm である。銘文はなく、誰の石塔であるか不明である。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、総高 63.5 cm である。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高さ 16.5 cm、底幅 13 cm、球形の最大幅 33.5 cm、高さ 27.5 cm、風輪と接する括れ部の幅 17 cm である。風輪は最大幅 33.5 cm、下端幅 25 cm、高さ 19.5 cm である。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 28 cm、最大幅 60.5 cm、下端幅 55.5 cm、高さ 36.5 cm である。軒の厚さは中央で 12 cm、左端 22 cm、右端 22 cm で、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 30 cm、最大径 49 cm、下端径 30.5 cm、高さ 38 cm で、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 55.5 cm、下端幅 55.5 cm、高さ 50 cm である。四方に梵字を刻む。正面中央にある梵字の下には「高月□・□」を刻み、左右にもはっきりと判読できないが、刻字がある。左側にある刻字のうち、一字は「元」と読めそうである。「春光院三時回向」によると「高月」の字を戒名にもつ人物は堀尾吉晴娘で堀尾勘解由母の勝山（戒名：靈照院殿高月宗松大禪定尼）のみで、没年が元和 4 年（1618）である。

8号石塔（五輪塔：堀尾頼母助政家石塔）

砂岩製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 156 cm（空風輪先端を復元すると、約 167.5 cm）である。地輪に刻まれた銘文より、寛永 13 年に没した堀尾頼母助の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、先端を欠くが、総高 48.5 cm（復元高約 60 cm）である。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は先端を欠くが、高さ 11 cm（現存高）、底幅 13.5 cm、球形の最大幅 27 cm、高さ 22 cm、風輪と接する括れ部の幅 15 cm である。風輪は最大幅 28 cm、下端幅 19.5 cm、高さ 15.5 cm である。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 23.5 cm、最大幅 53.5 cm、下端幅 46.5 cm、高さ 34 cm である。軒の厚さは中央で 12 cm、左端 21.5 cm、右端 21.5 cm で、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 26 cm、最大径 44 cm、下端径 26.5 cm、高さ 31.5 cm で、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

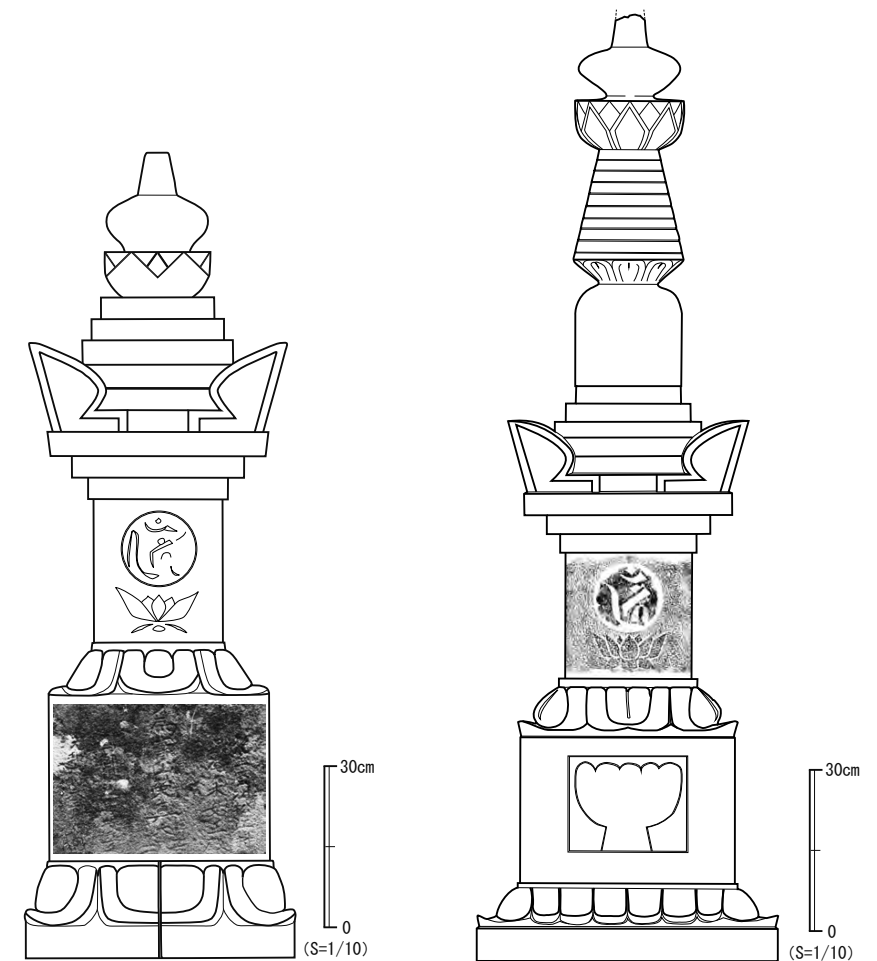
地輪は、上端幅 45.5 cm、下端幅 45 cm、高さ 42 cm である。四方に梵字を刻む。正面（現在裏面となっている）には、「寛永十三年堀尾□□」「生國尾州中嶋郡□□」^(注6)「為□□院」「切岩□□□」「堀尾頼母助政家入」「八月二十七日為」を刻む。石塔にある「堀尾頼母助政家」の戒名や没年月日を示す史料

は確認できていないが、慶長 5～6 年（1600～01）に御仕置を務め^(注7)、「秋上家文書」（慶長 6 年（1601）4 月 26 日）など^(注8)に奉行の一人として連署する堀尾頼母助正秀（元は高間善兵衛）という人物がおり、長子（堀尾佐兵衛）も頼母を名乗っていることから^(注9)、寛永 13 年（1636）に没したのは頼母助正秀の息子の頼母助で、政家を名乗っていた可能性がある。堀尾家断絶後に石塔が建てられており、石川家と共に堀尾家再興などに尽力したのであろうか。

9号石塔（宝篋印塔：堀尾民部石塔）

砂岩製の宝篋印塔で、相輪の一部を欠くが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。保存状態は良く、相輪（宝珠）先端から基壇までの総高は、149.5 cm（相輪を復元すると、約 202.5 cm）である。

相輪は、宝珠、受花（上）が残るが、九輪、受花（下）、反花は失われている。宝珠は高さ 18.5 cm、



第 46 図 9号石塔〔左：堀尾民部石塔〕・10号石塔〔右：堀尾勘解由石塔〕 実測図

最大径 19 cm である。受花（上）は高さ 8.5 cm、最大径 19.5 cm である。残存高は 27 cm（九輪、受花（下）、反花を加えた推定復元総は約 80 cm）である。

笠は、上部 6 段、下部 2 段の階段を作り出し、高さ 37.5 cm、軒幅 41 cm、上端幅 21 cm、下端幅 26 cm である。隅飾先端幅は 48 cm で、外反している。隅飾の側面は一段の帯で縁取っている。

塔身は、高さ 26.5 cm、上端幅 24 cm、下端幅 24 cm で、4 面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。

基礎は、上部に反花を刻み、高さ 40.5 cm、上端幅 24.5 cm、下端幅 41 cm である。基礎の正面には、「施主雲州松江村」「堀尾采女正殿」「為實山榮真大居士」「・・・立之」「元和六〇三月六日」を刻む。「堀尾古記」（松江市史編集委員会編 2018）の元和 6 年の項に「三月六日ニ民部果ル」とあることから、9 号石塔は堀尾采女が施主となって父親である民部^(註10)のために建てたことが分かる。

基壇は、上部に深みのある反花を刻み、高さ 18 cm、上端幅 42 cm、下端幅 50 cm である。

10 号石塔（宝篋印塔：堀尾勘解由石塔）

砂岩製の宝篋印塔で、相輪（宝珠）の一部を欠くが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。保存状態は良く、総高（残存）は、基壇（上部）から宝珠の残存最高所までで 176.0 cm である。

相輪は、上から宝珠、受花（上）、九輪、受花（下）、反花、伏鉢が残る。宝珠は残存高 16.0 cm で上部を欠く。頂部の突起が大きくて長く、基部径 7.0 cm である。下部の球体は最大径 19.0 cm で押しつぶした形式である。受花（上）は高さ 9.0 cm、上面径 20.3 cm を測る。連弁は直線的な輪郭線で彫りが浅い。九輪は高さ 20.5 cm、上端径 11.0 cm、下端径 20.4 cm を測り、下方に向けて径が直線的に大きくなる。擦管は線彫りで 9 本ほぼ等間隔で彫られている。受花（下）は高さ 4.4 cm、下端径 11.0 cm で、下方に向けて直線的に細くなる。連弁は簡略した複弁の形を浅く彫る。伏鉢は高さ 19.0 cm、径 19.6 cm で垂直に立ち上がり、上部で丸味を持たせる。底面に径 9.0 cm の柄が付くが、長さは折損し不明である。

笠は、上部 6 段、下部 3 段の階段を作り出し、総高 31.0 cm である。隅飾は高さ 13.3 cm、最大幅 10.8 cm を測る。隅飾は 2 弧式だが、弧線の下部は最下段の内側に水平に寄り途中から垂下する。輪郭内側の断面は平底である。外郭線は直線で外傾する。笠の上端面には相輪の柄を受ける柄穴が彫られている。柄穴は上端径 9.6 cm、深さ 8.4 cm である。

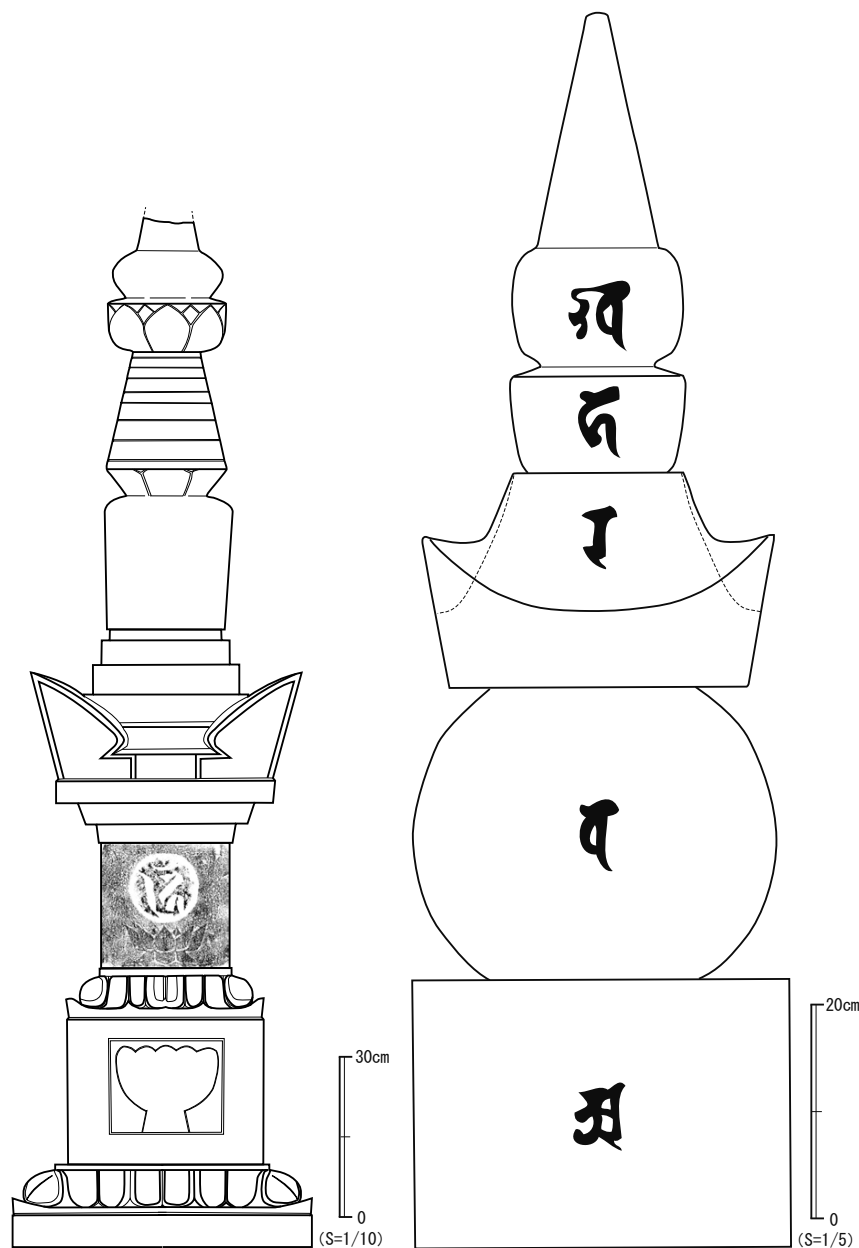
塔身は、高さ 23.4 cm、横幅 23.7 cm を測る。各 4 面に中央に径 13.0 cm、深さ 0.5 cm 前後の月輪を深く彫り込み、「ウン」の梵字を薬研彫で刻む。下部には平面的な蓮華座を彫る。

基礎は、高さ 38.2 cm、横幅 40.0 cm を測る。内、高さ 11.0 cm の上部には立体的な複弁の反花座を彫り出す。直方体部分には中央に縦 17.8 cm、横 22.0 cm の浅い長方形の彫り込みを設け、その中に格狭間の文様を彫る。格狭間は上部を 5 つの弧線で表し中央に垂直線は無い。また、下部は八の字にひろがるがその高さは 4.4 cm と異常に高い。長方形彫り込みの両外側には銘文が刻まれている。今は全文読み取れないが、従前の観察では右側に「桂岩院殿祥雲世〇大〇〇」、左側に「慶長十三年十二月〇日」と読まれている（西尾ほか 2013）。堀尾勘解由の戒名が「桂岩院殿祥雲世端大居士」で没年月日が慶長 13 年 12 月 5 日であることから（岡崎ほか 2007）、10 号石塔は堀尾勘解由の為に造られたことが分かる。

基壇の上部は、宝篋印塔を固定する砂岩の石材である。総高 14.4 cm で、上部は複弁の反花座で、下部は高さ 6 cm、一辺 56 cm を測る。基壇の下部は、上部を固定する花崗岩の石材である。深さ 20 cm 以上、左右の 9 号、11 号の宝篋印塔ともに共通する基壇である。おそらく、墓所が再整理された時に、全体的に花崗岩の石材が水平を保つ基壇として最下部に埋められたのであろう。

11 号石塔（宝篋印塔）

きめの細かい黄褐色の砂岩製の宝篋印塔で、相輪（宝珠）の上部を欠くが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。相輪（宝珠）残存先端から基壇（上部）までの総高は、176.0 cm である。



第 47 図 11 号石塔〔左〕・13 号石塔〔右〕 実測図

相輪は、上から宝珠、受花（上）、九輪、受花（下）、伏鉢が残る。宝珠は上部を欠き、残存高は15.0 cm、頂部の突起が大きくて長く、基部径16.0 cmである。下部の球体は最大径21.0 cmで、押しつぶした形式である。

笠は、上部6段、下部2段の階段を作り出し、高さ40.0 cm、隅飾は高さ20.0 cm、最大幅51.0 cmである。隅飾は2弧式だが、弧線の下部は最下段の内側に水平に寄り途中から垂下する。輪郭内側の断面は平底である。外郭線は直線で外傾する。

塔身は、高さ23.4 cm、幅24.0 cmで、4面にはそれぞれ径13.0 cmの月輪を深く彫り込み、「ウン」の梵字を薬研彫で刻む。下部には平面的な蓮華座を彫り込む。

基礎は、高さ36.6 cm、幅36.8 cmである。うち、高さ11.0 cmの上部には立体的な複弁の反花座を彫り出す。直方体部分には中央に縦17.0 cm、横20.8 cmの浅い彫り込みを設け、その中に格狭間の文様を彫る。格狭間は上部を5つの弧線で表し、中央に垂直線はない。また、下部は八の字にひろがるが、その高さは4.0 cmと高い。

基壇（上部）は、砂岩で、総高15.4 cm、上部は複弁の反花座で、下部は高さ6 cm、一辺56 cmを測る。

基壇（下部）は、花崗岩で、深さ20 cm以上、左右にある9号、11号石塔と共通する基壇である。おそらく、墓所が再整理された時に、全体的に花崗岩の石材が水平を保つ基壇として最下部に埋められたのであろう。

13号石塔（五輪塔）

砂岩製の五輪塔で、全体に保存状態は良く、総高は115.5 cmである。空風輪、火輪、水輪、地輪を別々の石で作る。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、総高43 cmである。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高く突き出て高さ22 cm、底幅11.5 cm、球形の最大幅16 cm、高さ11 cm、風輪と接する括れ部の幅10.5 cmである。風輪は最大幅16.5 cm、下端幅13 cm、高さ10 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅16 cm、最大幅33 cm、下端幅28 cm、高さ20 cmである。軒の厚さは中央で7 cm、左端14 cm、右端14 cmで、左右の端部から中央に向けてゆるやかにカーブする。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径18.5 cm、最大径33 cm、下端径19 cm、高さ27.5 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅35 cm、下端幅35 cm、高さ25 cmである。四方に梵字を刻むが、他には刻字はない。

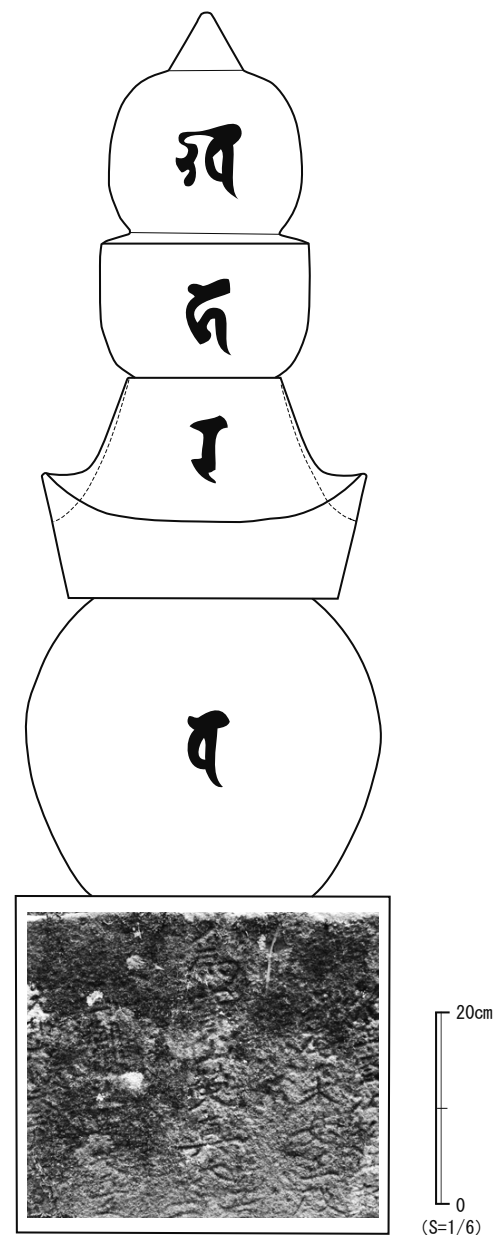
14号石塔（五輪塔：堀尾采女母・妻か）

砂岩製の五輪塔で、全体に保存状態は良く、総高は127 cmである。空風輪、火輪、水輪、地輪を別々の石で作る。正面の空・風・火・水・地輪には大円鏡智発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、総高38 cmである。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高さ6 cm、底幅8 cm、球形の最大幅20 cm、高さ17 cm、風輪と接する括れ部の幅15.5 cmである。風輪は最大幅22 cm、下端幅14.5 cm、高さ15 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅16 cm、最大幅34 cm、下端幅28 cm、高さ23 cmである。軒の厚さは中央で8 cm、左端13 cm、右端13 cmで、左右の端部はゆるくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径23 cm、最大径37 cm、下端径23 cm、高さ31 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球



第48図 14号石塔（堀尾采女母・妻か）実測図

第3表 石塔の形成要素（配列・被供養者・形態・年代・全高・石材）

石塔配列	被供養者	形 態	年代（和歴）	年代（西歴）	全高（cm）	石 材
1号石塔	堀尾忠晴娘 (石川廉勝妻：憲之母)	宝篋印塔	寛永11年	1634年	257	花崗岩
2号石塔	堀尾忠晴	五輪塔	寛永10年	1633年	254.5	花崗岩
3号石塔	堀尾吉晴	五輪塔	慶長12年	1607年	274.5	砂岩
4号石塔	堀尾忠氏	五輪塔	慶長9年	1604年	263	砂岩
5号石塔	堀尾吉晴妻か	五輪塔	元和□年	1619年頃	204	砂岩
6号石塔	松村監物	五輪塔	寛永10年	1633年	195	花崗岩
7号石塔	堀尾吉晴娘（勝山）か (堀尾勘解由母)	五輪塔	元和4年	1618年	188	砂岩
8号石塔	堀尾頼母助政家	五輪塔	寛永13年	1636年	167.5	砂岩
9号石塔	堀尾民部	宝篋印塔	元和6年	1620年	202.5	砂岩
10号石塔	堀尾勘解由	宝篋印塔	慶長13年	1608年		砂岩
11号石塔	—	宝篋印塔	—	—		砂岩
13号石塔	—	五輪塔	—	—	115.5	砂岩
14号石塔	堀尾采女母・妻か	五輪塔	寛永4年	1627年	127	砂岩

第4表 刻字一覧

石塔配列	俗 名	戒 名	命 日	建立年月日	施 主
1号石塔（堀尾忠晴娘〔石川廉勝妻：憲之母〕）	光堀尾山城守殿忠晴公御息女	法光院殿全心玄貞大師	寛永十一年四月廿七日		石川宗十郎
2号石塔（堀尾忠晴）	出雲隠岐両国太守光堀尾山城守高階朝臣忠晴	圓城院殿高賢宗肖大居士（追善）	寛永十一年九月二十日		
3号石塔（堀尾吉晴）	豊富朝臣堀尾帯刀吉晴	松庭世柏居士（逆修）		慶長十二年四月日	
4号石塔（堀尾忠氏）	前雲州太守正四位堀尾忠氏朝臣	天軸世球大居士	慶長九年八月四日		慈父堀尾帯刀
5号石塔（堀尾吉晴妻か）			元和□年四月□		
6号石塔（松村監物）	松村監物	大恕玄忠居士	寛永十一年九月廿六日		
7号石塔（堀尾吉晴娘〔勝山〕か） （堀尾勘解由母）		高月□・・			
8号石塔（堀尾頼母助政家）	堀尾頼母助政家（生國尾州中嶋郡□□）	□□院切岩□□□	寛永十三年八月二十七日		堀尾□□
9号石塔（堀尾民部）		實山榮真大居士	元和六□三月六日		雲州松江村堀尾采女正
10号石塔（堀尾勘解由）		桂岩院殿祥雲世□大□□	慶長十三年十二月□日		
11号石塔					
13号石塔					
14号石塔（堀尾采女母・妻か）		芳□妙□大姉	寛永四年十一月十四日		雲州松江堀尾采女正

形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 39 cm、下端幅 39 cm、高さ 35 cmである。四方に梵字を刻む。正面には、「雲州松江堀尾采女正」「為□□□立之」「為芳□妙□大姉」「寛永四年」「十一月十四日」を刻む。寛永 4 年（1627）11 月 14 日に亡くなった人物については確認できないが、「堀尾采女」や「芳□妙□大姉」などの銘文から、堀尾采女の母か、妻の可能性が考えられる。

12号石塔（円頂方柱型）

円頂方柱型の竿石と台石からなる。竿石には「文化十一□五月九日」「定誉正山良碩法師」「靈位」「覚誉□□良硯居士」「文政十一□七月二七日」「施主和州平群郡長安寺邑」「渡邊良□立之」を刻む。

文化 11 年（1814）5 月 9 日に亡くなった大和国平群郡長安寺村（奈良県郡山市長安寺町）の渡邊某氏石塔は、同族（息子か）が文政 11 年（1828）7 月 27 日に建てたものである。現在、堀尾家墓所に置かれている理由は不明である。なお、『紀伊續風土記』^{（注11）}によれば、龍生院の末寺として大和国宇智郡に2か寺と記載されている。

15号石塔（円頂方柱型）

円頂方柱型の竿石と台石からなる。竿石には、「勢州一志郡那珂道村北川重右衛門俊正」「元文五庚申天十一月十八日」「普観院眞月□現居士」「俗名北川宅□右衛門俊英」「宿坊龍生院」を刻む。

元文 5 年（1740）11 月 18 日の銘を持つ石塔で、伊勢国一志郡那珂道村（三重県松坂市三雲町）北川重右衛門俊正が北川宅□右衛門俊英のために建てたものである。両人は名前より親子と考えられる。また、「宿坊龍生院」とあることより、明治以降、龍生院に関わる墓所が整理された時に堀尾家墓所に置かれた可能性がある。なお、那珂道（中道）村は、江戸時代には和歌山藩領で、村内には真言宗養命寺がある。寛政 12 年（1800）「大指出帳」によると、地土に北川安右衛門がいたことが知られる^{（注12）}。なお、地土は和歌山藩の制度で置かれた地元の有力者で、地侍である。

16号石塔（円頂方柱型）

円頂方柱型の竿石と台石からなる。竿石には、「俗名津田織衛門□中建之」「任山靈雲信士靈位」「安永五丙申六月十八日」を刻む。安永 5 年（1776）6 月 18 日の没年月日を刻むが、生国などはなく、来歴は不明である。また、現在、堀尾家墓所に置かれている理由も不明である。

17号石塔（石地藏）

光背をもった地藏尊で、風化のため一部剥落が認められる。刻字などはなく、来歴は不明である。

18号石塔（小型五輪塔）

小型の一石五輪塔で、空輪、風輪、火輪、水輪が残る。刻字などはなく、来歴は不明である。

注

- (1) 「堀尾古記」の寛永 11 年の項に「六月廿八日ニ大坂より高野へ参、采女・猪兵衛・但馬・修理・隼人、大隅参」「十月七日ニ高野へ但馬・縫殿・下井十太郎参 御石塔ヲ立ル」とある。堀尾忠晴の死の前後、複数の堀尾家の重臣たちが高野山に参る事実は、石塔を建てるなどの儀礼のためだけではなく、御家断絶の危機が迫る中、堀尾家安泰の祈祷を願うために出向いた可能性も考えられる。忠晴の死後、堀尾采女など堀尾家遺臣たちは忠晴娘の嫁いだ石川家の庇護を受けながら堀尾家の再興に奔走した（注（3）参照）。
- (2) 宗十郎の名は石川忠総（廉勝の父：妻は堀尾吉晴娘）、廉勝（忠総の子：堀尾忠晴娘の夫）ともに用いているが、ここでの施主石川宗十郎は夫の廉勝と考えられる。
- (3) 西尾ほか 2011。養源寺には堀尾忠晴、忠晴娘、松村監物、堀尾采女、堀尾勝明の石塔があるが、忠晴娘の石塔は最も大きい。

- (4) 「堀尾古記」(松江市史編集委員会編 2018)、岡崎ほか 2007
- (5) 「堀尾古記」(松江市史編集委員会編 2018)
- (6) 中嶋郡は愛知県北西部に位置していた郡で、現在、愛知県稲沢市。中嶋郡には堀尾荘があり、堀尾氏の出所の可能性もある。堀尾吉晴の一族は現在の愛知県丹羽郡大口町を拠点としていたとされる。
- (7) 「堀尾古記」(島根県編 1965b)
- (8) 「秋上家文書 221 堀尾家四奉行蓮署奉書」(『意字六社文書』島根県教育委員会 1974)、福井 2010
- (9) 春光院所蔵の「堀尾近代系図並外孫縁者之略図」には、「堀尾左兵衛、左兵衛は堀尾頼母」「頼母長子頼母」とあり、堀尾頼母助正秀の息子も頼母と名乗っていたことが分かる。
- (10) 松江市玉湯町報恩寺には来待石製大型石廟があり(西尾・稲田 2005)、表面全体に戒名である「實山榮真大居士」の文字が刻まれた卒塔婆が陽刻されている。9号石塔の調査で堀尾民部の戒名が「實山榮真大居士」と特定できたことから、報恩寺の石廟も民部のためのものと特定できる。
- (11) 「紀伊續風土記高野山之部」(『紀伊続風土記(五)』歴史図書社 1970)
- (12) 「三重県」『角川地名大辞典』角川書店 1983

3 おわりに

高野山奥之院に所在する近世大名堀尾家墓所について、現存する石塔の配置・形態・刻字・年代・石材などについて、詳細に確認することができた。また、これまであまり紹介されることのなかった高野山と堀尾家との関係を、高野山金剛峯寺、大円院、普賢院、高野山大学などのご協力で確認できた。以下、概要をまとめておく。

堀尾家墓所は、高野山奥之院の参道に面した平坦面奥にあり、堀尾家に関わる石塔として13基を確認した。これらの石塔群は、堀尾吉晴、忠氏の出雲国入府後、高野山龍生院を宿坊とし奥之院に堀尾家墓所が設けられたことにより、堀尾家当主及び一族のために建てられたものである。紀州藩が編纂した『紀伊續風土記』^(注1)にある「堀尾吉晴主(中略)正五九の月には武運榮久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す」「堀尾家雲隠兩国の太守たりし時建立の碑数基あり伊勢龜山石川侯先操を追ひて壇契篤し」の記事が示すように、堀尾吉晴は武運榮久の「誓祈」を高野山真言宗に乞うた。一方、堀尾家の菩提は、堀尾家断絶後、忠晴娘が嫁いだ石川家によって弔われ、墓所は今日に伝わった。高野山奥之院に堀尾家墓所が成立し、石塔が建てられた年代は、堀尾忠氏石塔(4号石塔)が建てられた慶長9年(1604)頃から、堀尾忠晴娘石塔(1号石塔:石川廉勝妻:憲之母)が建てられた寛永11年(1634)頃までの間にほぼ限られる。

石塔の形態は、五輪塔と宝篋印塔である。2〜8・13・14号石塔は五輪塔(堀尾吉晴、堀尾忠氏、堀尾忠晴、松村監物、堀尾頼母助など)、1・9〜11号石塔は宝篋印塔(堀尾忠晴娘、堀尾民部、堀尾勘解由など)である。堀尾家当主墓には五輪塔が採用されていることが分かる。いずれの石塔も約30年間の間に建てられており、形式的には大きな変化はなく、梵字など刻字も整美で、高野山真言宗の総本山奥之院に建つ17世紀初頭の典型的な五輪塔、宝篋印塔といえる。五輪塔をみると、空輪が長く尖り、また、火輪は高さがあり、降棟の先端が強く尖っている。宝篋印塔は、相輪の頂部が尖り、九輪は短く、各輪を沈線状に表現し、しっかりした返花を彫る。

石塔の規模(総高:[復元高])は、3号石塔(堀尾吉晴)274.5cm、4号石塔(堀尾忠氏)263cm、1号石塔(堀尾忠晴娘)257cm、2号石塔(堀尾忠晴)[254.5]cm、5号石塔(吉晴妻か)[204]cm、9号石塔(堀尾民部)[202.5]cm、6号石塔(松村監物)[195]cm、7号石塔188cm、8号石塔(堀尾頼母助政家)[167.5]cm、14号石塔(采女母・妻か)127cm、13号石塔115.5cmの順である。

堀尾家当主と忠晴娘の石塔が250cm以上の大型、(吉晴妻か)・堀尾民部・松村監物ら上級家臣層の石塔が200cm前後、堀尾頼母助、(采女母・妻か)の石塔などが170cm以下となっており、生前の地位などが石塔の規模に反映しているであろう。18世紀代の堀尾家墓所が描かれた宝永4年(1707)の「奥院絵図」、寛政5年(1793)の「高野山奥院総絵図」では、正面に鳥居を配し、玉垣に囲まれた墓域内の石塔の大きさが描き分けられ、手前から奥に向かって4列に大型化している(日野西編著 1988a)。おそらく、元々堀尾家墓所では、当主らの総高8、9尺前後の石塔を最奥に、その手前に当主に近い家族や上級家臣らの総高6、7尺前後の石塔を、前の2列にその他の一族・家臣らのやや小型の石塔を建て並べていたと考えられる。江戸時代に奥之院へ通じる参道から堀尾家墓所を見ると、奥行きが感じられ、総ての石塔が見渡せたと思像される。堀尾家墓所は、絵図にある他の大名墓に比べ、石塔数が多く、かつ規模も大小あり、大名墓の威容さが見てとれたことであろう。

なお、「奥院絵図」、「高野山奥院総絵図」には、墓域内に石塔24基が4列に描かれているが、今回の調査で確認された堀尾家に関わる石塔は13基である。この絵図の石塔数が正しいとすれば、絵図の描かれた時点では、参道脇の玉垣に囲まれた墓域内に現在の約2倍の石塔が並んでいたことになる。墓所の成立の契機は、堀尾氏の出雲国入府間もない慶長9年(1604)、藩主堀尾忠氏の死去であったと考えられ、堀尾家が宿坊として関係をもつ龍生院を介して奥之院に墓所が営まれた。その後、慶長12年(1607)に吉晴の逆修塔(3号石塔)ができ、寛永期に当主忠晴石塔(2号石塔)が家臣により建てられ、最後に、忠晴娘石塔(1号石塔:石川廉勝妻)が石川宗十郎(廉勝)により建てられ、大規模石塔の製作は終了する。堀尾家墓所は、基本的にはこの4基を中心とする墓所と考えられる。その前列には、松村監物、堀尾頼母助、堀尾民部、堀尾勘解由などの中規模な石塔(6号、8号、9号、10号)が並んでいたであろう。他に采女母・妻かの石塔(14号)があるが、小規模な石塔は現存しない。これは、近代に堀尾墓所が整理され、現在の数に減ったと推定される。では、現在残る石塔以外に、どのような人物の石塔が建っていたのであろうか。堀尾家の出雲国領有後の墓所は、高野山奥之院の他にも、巖倉寺(安来市広瀬町)、忠光寺(同)、圓成寺(松江市栄町)、妙心寺春光院(京都市)、養源寺(東京千駄木)に現存し、そこでは堀尾家当主の石塔近くに、一族や堀尾家と関係の深い家臣たちの石塔も見られる^(注2)。高野山の堀尾家宿坊であった龍生院が現存せず、過去帳や位牌などが確認できない中で、かつての堀尾家墓所の全容を知ることはいできない。しかし、他の墓所と同様に、堀尾家一族や堀尾家と関係の深い家臣たちの石塔が建てられていたことは想像に難くない。

石塔の石材は、砂岩(和泉砂岩か)と花崗岩の二種類の石が使用されている。砂岩がほとんどを占め、堀尾家に関わる石塔の建立は慶長期から寛永期で終わるが、それ以降に墓所に持ち込まれた堀尾家に関係の無い石塔も同じ砂岩製である。花崗岩を使用した石塔は、1号石塔(堀尾忠晴娘)、2号石塔(堀尾忠晴)、6号石塔(松村監物)で、その他の石塔は砂岩を使用している。堀尾家石塔のうち、寛永期の1、2号石塔(忠晴娘、忠晴)は花崗岩が採用されたことになる。寛永期の堀尾采女の母か妻の石塔や堀尾頼母助の石塔は砂岩である。1、2号石塔のほか、松村監物石塔も花崗岩製であるが、監物の石塔は京都の妙心寺春光院、江戸の養源寺にも建つなど、忠晴に殉じた忠臣として、特別丁重に扱われたのかもしれない。慶長期には、大名墓にも砂岩を使用しているが、寛永期には花崗岩と砂岩石材の利用の違いが階層や経済力の違いを表している可能性もある。ただ、いずれの石材にしろ、江戸時代、巨大な墓石を海岸部から遠く離れた紀伊山地の奥部まで運ぶ労力と、それにかかる費用も相当なものであったと推定される。

堀尾家墓所の中でも、特に注目されるのが3、4号石塔(堀尾吉晴、忠晴)で、奥之院における砂岩製五輪塔で慶長年間のもものでは最大規模の大きさである。地輪と水輪が古式の形状をしていることも、

他の同時代の石塔では見られない。堀尾家墓所の近くに山内一豊の花崗岩製の石塔があるが、一回りは小さい。高野山奥之院において造立当時は異彩をはなつた五輪塔だったと想像される^(注3)。

なお、堀尾家と高野山との関係を示す文献史料は少ないが、堀尾家重臣堀尾但馬が記した「堀尾古記」（松江市史編集委員会編 2018）には、忠晴の死去の前後に、堀尾采女、但馬、修理など堀尾家の重臣が高野山に参ったこと、石塔を建てたことなどが記録されている。忠晴の死の前後に複数の堀尾家重臣たちが高野山に参る事実は、石塔を建てるという儀礼などのためだけではなく、御家断絶の危機が迫る中、堀尾家安泰などの祈祷を願うために出向いた可能性も考えられる。

以上のとおり、高野山奥之院に所在する近世大名堀尾家墓所の調査を通して、高野山奥之院における大名墓のあり方の一端と堀尾家の宗教的背景の一端を確認することができた。『紀伊續風土記』にある「堀尾吉晴主（中略）正五九の月には武運栄久の誓祈乞ひ香華佛餉の資糧を附す」の記事が示すように、堀尾吉晴は「誓祈」を高野山真言宗に願っている。

吉晴は、堀尾家の武運栄久などを願い、高野山龍生院を宿坊とし、奥之院に墓所を設けるとともに、領国支配や松江城下町形成、松江城築城などにあたっても、「長栄」「武運長久」などの誓祈、祈祷を高野山真言宗に願ったと考えるのが妥当であろう^(注4)。

注

- (1) 「紀伊續風土記高野山之部」『紀伊続風土記(五)』歴史図書社 1970。「高野山之部」龍生院の項には、「（前略）堀尾吉晴主此天の靈異を仰信ありて宮殿を修し正五餉九の月には武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す 且堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢龜山石川侯先操を追ひて壇契篤し」とある。
- (2) 堀尾家当主の墓石近くに一族や家臣の石塔が残るものとして、圓成寺（松江市栄町）では堀尾但馬、妙心寺春光院（京都市）では、堀尾泰晴妻、堀尾吉晴妻、堀尾忠氏妻、奥平家昌、野々村河内妻（吉晴娘）、松村監物、養源寺（東京都千駄木）では、堀尾勝明（式部）、松村監物、堀尾采女の石塔を確認している。なお、報恩寺（松江市玉湯町）には堀尾忠氏墓と伝わる石塔があり、近くに堀尾民部の石廟がある。
- (3) 木下浩良氏（高野山大学図書館課長）のご教示による。
- (4) 松江城の鬼門（北東）には真言宗千手院（松江市石橋町）、裏鬼門（南西）には真言宗報恩寺（松江市玉湯町）を配置するなど、松江城と高野山真言宗との関係は極めて深い。松江城天守創建に関わる誓祈、祈祷が高野山で行われた可能性も高い。

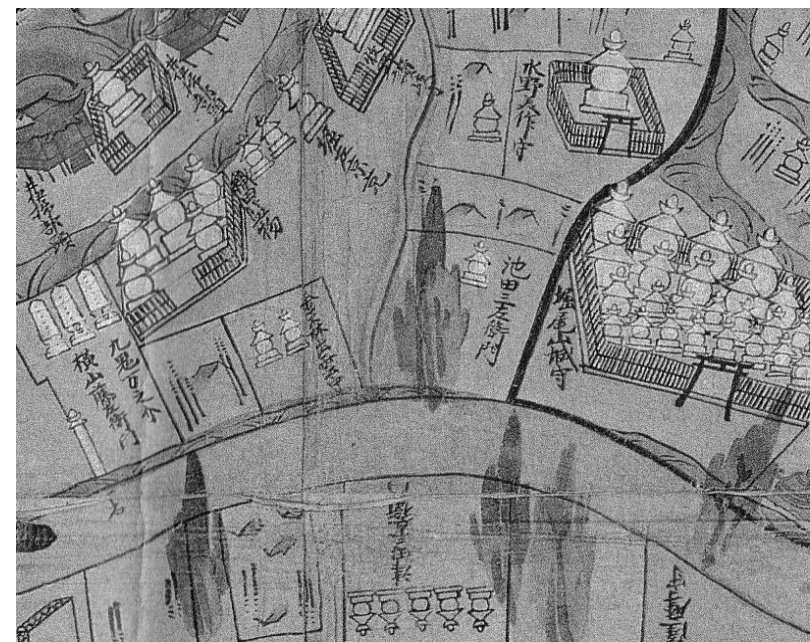


写真 75 「奥院絵図」（宝永4年）に描かれた堀尾家墓所

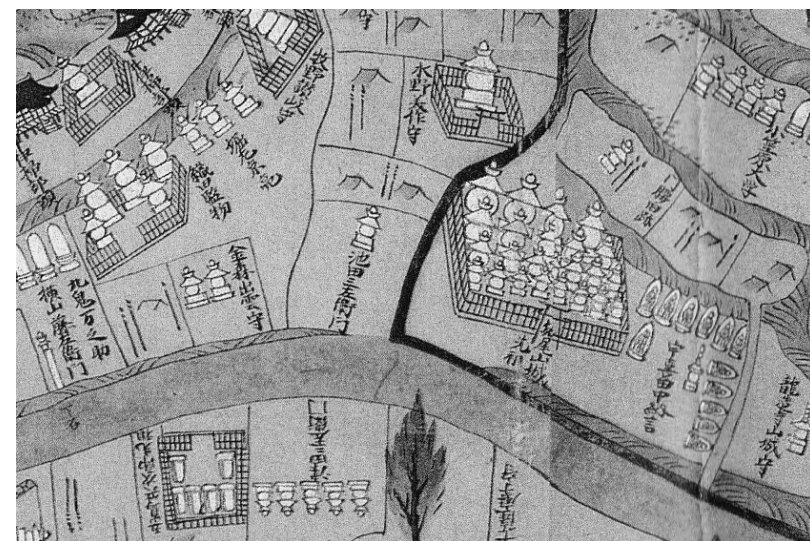


写真 76 「高野山奥院総絵図」（寛政5年）に描かれた堀尾家墓所



写真 77 堀尾家墓所（奥側と左側面に堀尾家の石塔が並ぶ）



写真 80 1号石塔（宝篋印塔：堀尾忠晴娘）
（石川簾勝妻：憲之母）



写真 81 1号石塔基礎の銘文



写真 82 2号石塔（五輪塔：堀尾忠晴石塔）



写真 83 2号石塔地輪の銘文



写真 78 堀尾家墓所
（右側から10号～18号石塔）



写真 79 堀尾家墓所（右側から1号石塔）

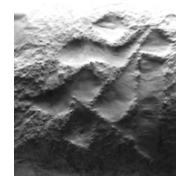


写真 84 2号石塔空輪の梵字
（拓本）

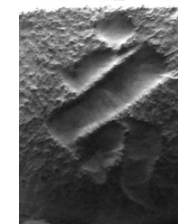


写真 85 2号石塔風輪の梵字
（拓本）

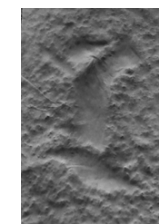


写真 86 2号石塔火輪の梵字
（拓本）

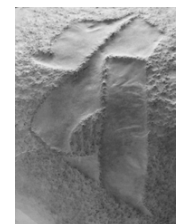


写真 87 2号石塔水輪の梵字
（拓本）

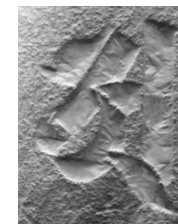


写真 88 2号石塔地輪の梵字
（拓本）



写真 89 2号石塔空・風・火輪
の梵字



写真 90 3号石塔（五輪塔：堀尾吉晴石塔）



写真 91 3号石塔地輪の銘文



写真 96 6号石塔（五輪塔：松村監物石塔）



写真 97 6号石塔地輪の銘文



写真 92 4号石塔（五輪塔：堀尾忠氏石塔）



写真 93 4号石塔地輪の銘文



写真 98 7号石塔（五輪塔：堀尾吉晴娘・勘解由母の勝山か）



写真 99 7号石塔地輪



写真 94 5号石塔（五輪塔：堀尾吉晴妻か）



写真 95 5号石塔地輪の銘文



写真 100 8号石塔（五輪塔：堀尾頼母助政家石塔）



写真 101 9号石塔（宝篋印塔：堀尾民部石塔）



写真102 9号石塔（堀尾民部石塔）基礎の銘文



写真103 9号石塔基礎の銘文（拓本）



写真108 12号石塔（円頂方柱型）



写真109 13号石塔（五輪塔）



写真104 10号石塔（宝篋印塔；堀尾勘解由石塔）



写真105 10号石塔基礎の銘文



写真110 14号石塔（五輪塔；堀尾采女母・妻か）



写真111 14号石塔地輪の銘文



写真106 11号石塔（宝篋印塔）



写真107 11号石塔基礎



写真112 15～18号石塔



写真113 石塔の調査風景（11号石塔側から）

3. 江戸・養源寺堀尾家墓所

1) 養源寺について

白華山養源寺は、江戸初期に創建されたと伝えられる臨済宗妙心寺派の寺院であり、現在東京都文京区千駄木に所在している。開山は、秀嶽和尚と伝えられている。秀嶽は、慶長12年（1607）に湯島天神前坂下に倚松庵という庵を結び、のち寺地を拝領した。そして、明暦3年（1657）の大火の後に現在の寺地に移転している。山号の由来としては、その寺地に見事な白桜が植えられていたことから白華山を称したと伝えられている。寺号については、その由来として、開基である稲葉正勝が、徳川幕府三代将軍の乳母春日局の息子であり、春日局が源姓の徳川家光の養育にあたったことの報恩の意を込めて、寺号を養源寺としたとされている。また、秀嶽和尚が茶の湯の道に秀でており、家光から「養源寺」の号の入った茶碗を拝領している。その寺号の由来が示す通りに、徳川家光やその乳母春日局との関わりが窺える新興の寺院であったことがわかる。寺域には、寛永11年（1634）1月に死去した開基の稲葉正勝の供養塔も残されている。

堀尾氏に関わる供養塔が養源寺に残されている所縁は、養源寺が関係資料を戦災で消失してしまっているため、現状確認することは困難である。しかし、大正6年（1917）に刊行された川上孤山氏による『妙心寺史』には「堀尾忠晴の墓あるは當時雲州堀尾家は此寺を假香花寺としてゐたのである」と記されており、堀尾氏にとって養源寺が仮の菩提寺的性格を持っていたことを知ることができる。

堀尾氏によって創立された妙心寺俊庵院が、姻戚関係にあった石川氏の保護によって春光院として現在も存続している。そのことに示されるように、寛永年間に大名家として断絶してしまった堀尾氏については、以後も姻戚関係にあった石川氏によってその菩提が手厚く弔われていた。養源寺に関しても、同様な石川氏の保護を窺うことができる。堀尾忠晴らの供養塔に対して向かってすぐ左脇に位置する供養塔は、石川憲之の子勝明（堀尾式部）のものである。勝明は、憲之の母が忠晴の娘であった関係上忠晴よりみれば曾孫にあたる人物であり、堀尾を称して将軍に拝謁していたことが確認できる人物である。その勝明の供養塔は、その形状や石材から考えて忠晴らとは作成時期が違うものと思われるが、堀尾氏関連の供養塔と共に配置されていることは、勝明を堀尾氏の一員として捉えて供養していること示している。

石川氏と養源寺の関係については、未だ明らかでないが、元禄8年（1695）に勝明の実母にあたりと考えられる「石川越前守北堂」が、徳川家康の長子信康とその母築山殿の菩提を弔っている。勝明が死去したのが、その7年前の貞享5（元禄元：1688）年であり、元禄年間における石川氏と養源寺の関係が深いつながりを窺うことができる。そのような関係を考えると、石川氏に生まれた勝明を、堀尾氏と共に継続的に供養していた存在は、石川氏以外には考え難いと思われ、春光院と同様に石川氏によって堀尾氏の菩提は弔われていたものと思われる。

なお、京都の春光院にも勝明の石塔



写真 114 養源寺（東京都文京区千駄木）

が存在する。この石塔は母（石川憲之妻）の石塔の南隣に位置する。通路を挟んで、西側には堀尾家の吉晴、泰晴、忠氏の各夫妻の石塔が並んでいる。

参考文献

川上孤山・萩須純道『増補妙心寺史』 思文閣 1975

『御府内寺社備考』四 名著出版 1686

『寛政重修諸家譜』三 続群書類従完成会 1964

2) 堀尾氏に関わる石塔群

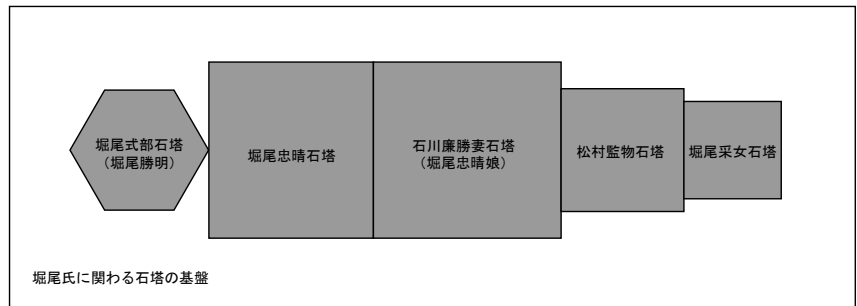
現在、養源寺本堂裏の墓所には堀尾氏に関わる石塔群が残されており、正面左から堀尾勝明（式部：發心院殿正山覺居士）石塔、堀尾忠晴石塔、石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）石塔、松村監物石塔、堀尾采女石塔の5基が並んで建っている。5基の石塔は、幅1.3m、長さ3.65mの共通の基盤に載る。平成22年（2010）に養源寺墓地の整備が行われ、堀尾氏関係の5基の石塔と基盤も本堂裏墓地内の東端に移転されているが、石塔の配列は変わらない。

堀尾家と石川家は、近江膳所石川家初代当主となる石川忠総に堀尾吉晴の娘が嫁ぎ、その子廉勝に忠晴の娘が嫁ぐと言う二重の姻戚関係を持っていた。すなわち、石川廉勝は吉晴の孫であり、忠晴の甥でもあるという関係を持っていたのである。ところが、廉勝は忠総より早世したため、廉勝長男で忠総孫の石川憲之が後を継ぐ。堀尾勝明（式部）は憲之の三男で、堀尾家再興を期待されたが、貞享5年（1688）に亡くなった。堀尾采女、松村監物はいずれも堀尾氏重臣で堀尾氏の松江藩政を支えた人物で、堀尾采女は忠晴の死後も堀尾家再興のために尽力し、松村監物は忠晴の死去に伴い殉死した。

『島根縣史』（島根縣史編纂掛編 1930）には養源寺の石塔群についての記述があり、「以上（堀尾忠晴石塔、石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）石塔、松村監物石塔）の外堀尾采女堀尾式部の二墓ありて墓側に堀尾家の霊屋ありしに享保年中終に焼失せりといふ」とある。石塔については戦災前と同様であること、また、かつて存在した御霊屋が享保年間に焼失したらしいことが分かる。

堀尾勝明（式部）石塔

堀尾勝明（式部）石塔は、現在5基並ぶ堀尾氏に関わる石塔群のうち、正面向かって左端に配されている。塔身、受花、基礎からなる無縫塔で、塔身先端を欠くが、総高は120cmである。塔身は高さ64cm、受花・基礎は高さ56cmで、塔身の正面には「發心院殿正山覺居士」の戒名、正面右には「貞享五戊辰年」、



第49図 堀尾氏に関わる石塔群配置図

正面左には「六月二日」、裏には「堀尾式部丞」を彫る。石材は安山岩（小松石）である。

堀尾忠晴石塔

堀尾忠晴石塔は、現在5基並ぶ堀尾氏に関わる石塔群のうち、正面向かって左から2番目に配されている。相輪（宝珠）の一部を欠くが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。基壇から相輪（宝珠）先端までの総高は、262.5 cmである。石材は安山岩（小松石）である。

相輪は、高さ99 cm（復元高）で、上から宝珠、受花（上）、九輪、受花（下）、反花が刻まれている。宝珠は高さ25.5 cm（復元高）、最大径30 cmで、「空」の文字を刻む。受花（上）は高さ12 cm、最大径35 cm、九輪は高さ18 cm、最大径28 cm、受花（下）は高さ13.5 cm、最大径34 cm、反花は高さ30 cm、最大径31.5 cmである。

笠は、上部6段、下部2段の階段を作り出し、高さ43 cm、軒幅49 cm、上端幅27 cm、下端幅46 cmである。隅飾端部幅は64 cmで、外反している。隅飾の側面は2段の帯で縁取っており、上部階段の一方所に「火」の文字を刻むが、他には特別な装飾はない。

塔身は、高さ46.5 cm、上端幅38.5 cm、下端幅38.5 cmで、正面には「水」、他の3面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。一部破損しており、コンクリートで補修されている。

基礎は、上部に深みのある反花を刻み、高さ44 cm、上端幅39 cm、下端幅50.5 cmである。正面中央に「地」の文字、その右側に「為圓成院殿前雍州太守」「高賢宗肖大居士」「琢磨功用如何」「一跳直入妙来地」「咄」、左側に「寛永十龍集癸酉」「九月廿日」「敬白」の銘文が刻まれている。

基壇は、上部に深みのある反花を刻み、高さ30 cm、幅71 cmである。また、格座間を表す高さ15 cm、幅28 cmの長方形を対に彫る。

石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）石塔

石川廉勝妻塔は、現在5基並ぶ堀尾氏に関わる石塔群のうち、正面向かって左から3番目に配されている。相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。基壇から相輪（宝珠）先端までの総高は、266 cmである。石材は安山岩（小松石）である。

相輪は、高さ130 cmの四角錐形で、宝珠と受花（上）、九輪、受花（下）が刻まれている。宝珠は高さ19 cm、最大径27 cmである。受花（上）は長方体で高さ15 cm、幅32 cm、「空」の文字を刻む。九輪は凹凸が明瞭な細長い長方体を重ねており、高さ56 cm、幅32 cm、受花（下）も長方体で高さ11 cm、幅32 cmで「風」の文字を刻む。

笠は、上部5段、下部2段の階段を作り出し、高さ45 cm、上端幅33.5 cm、下端幅49 cmである。軒は幅44 cmで、唐草文状の装飾を施す。隅飾端部幅は79 cmで、外反している。隅飾の側面は2段の帯で縁取っており、蕨手状の渦巻を彫る。上部階段に「火」の文字を刻む。

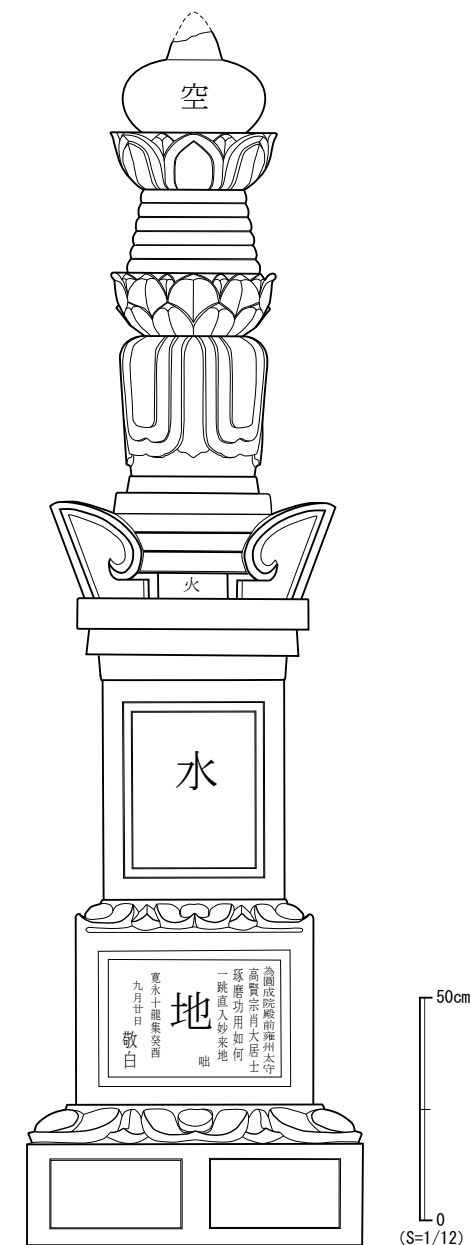
塔身は、高さ35 cm、上端幅44 cm、下端幅44 cmで、正面には「水」、他の3面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。

基礎は、上部に深みのある反花を刻み、高さ42 cm、上端幅43.5 cm、下端幅59 cmである。正面中央に「地」の文字、その右側に「法光院殿 為」「全玄貞大姉」「彫琢焉」、左側に「寛永甲戌」「四月念七日」の銘文が刻まれている。

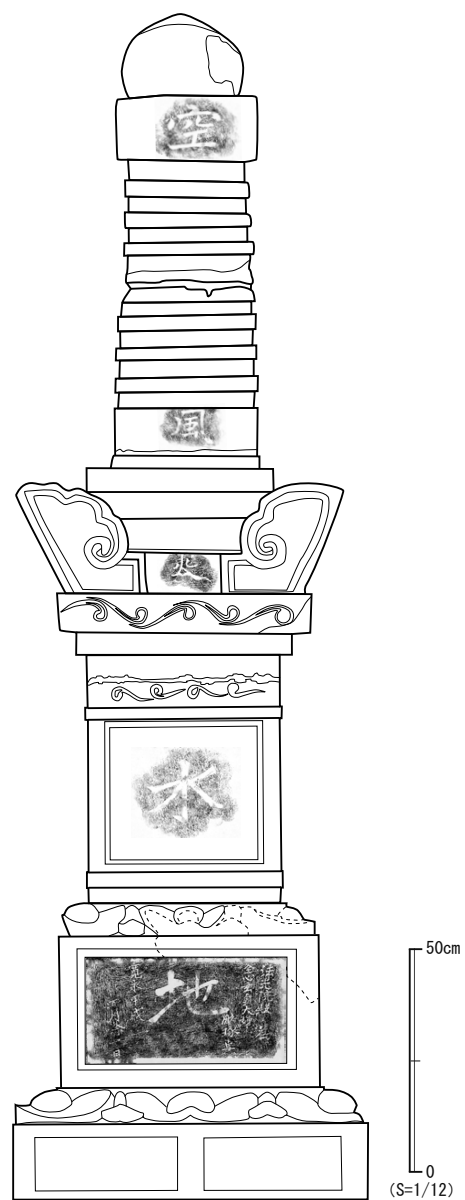
基壇は、上部に深みのある反花を刻み、高さ25.5 cm、幅80 cmである。また、格座間を表す高さ12 cm、幅31 cmの長方形を対に彫る。

松村監物石塔

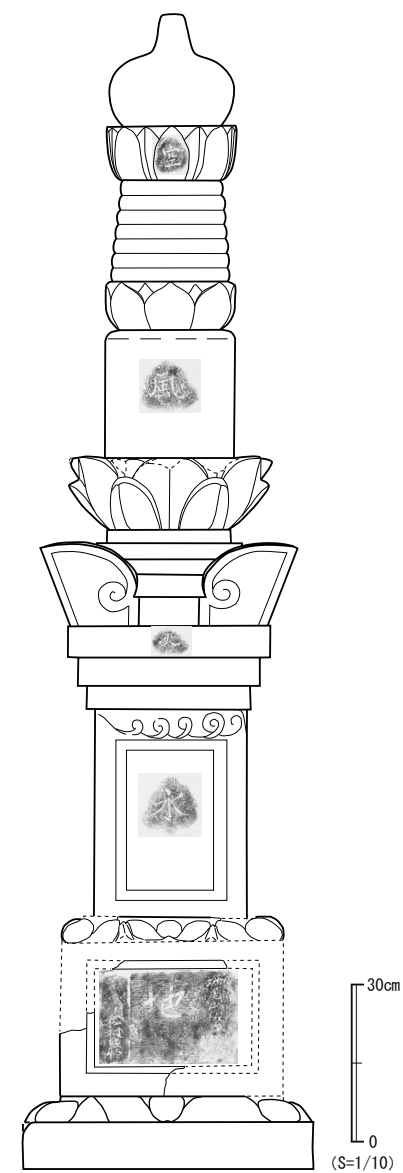
松村監物石塔は、現在5基並ぶ堀尾氏に関わる石塔群のうち、正面向かって左から4番目に配されている。相輪（宝珠）の一部を欠くが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。基壇から相輪



第50図 堀尾忠晴宝篋印塔 実測図



第51図 石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）宝篋印塔 実測図



第52図 松村監物宝篋印塔 実測図

(宝珠) 先端までの総高は、218 cmである。石材は安山岩（小松石）である。

相輪は、高さ 83 cm（復元高）で、上から宝珠、受花（上）、九輪、受花（下）、伏鉢が刻まれている。宝珠は高さ 21 cm（復元高）、最大径 23 cm、受花（上）は高さ 10 cm、最大径 24 cm で「空」の文字を刻む。九輪は高さ 19 cm、最大径 22 cm、受花（下）は高さ 9 cm、最大径 24 cm、伏鉢は高さ 24 cm、径 24 cm で「風」の文字を刻む。伏鉢の下に高さ 13.5 cm、最大径 38 cmの受花を置く。

笠は、上部 5 段、下部 2 段の階段を作り出し、高さ 33.5 cm、軒幅 37.5 cm、上端幅 23 cm、下端幅 30.5 cmである。隅飾端部幅は 48 cmで、外反している。隅飾の側面は 1 段の帯で縁取っており、軒に「火」の文字を刻むが、他には特別な装飾は無い。

塔身は、高さ 39.5 cm、上端幅 29 cm、下端幅 29 cmで、正面には中央に「水」文字、上端に渦状の模様を刻む。塔身の左右の面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。

基礎は、上端部から下端部にかけて部分的に欠き、セメントで補修しているが、上部に反花を刻み、高さ 34.5 cm、上端幅約 32 cm、下端幅約 42.5 cmである。正面中央に「地」の文字、その右側に「堀尾山城守□」、左側に「松村監物」□之の銘文が、正面右側には「這箇三基為」「大恕玄虔居士」「琢磨焉意趣」「作麼生」「出離三界登」「二覺成」「咄」、正面左には「寛□□龍集」「癸酉」「九月廿六日」「敬白」、の銘文が刻まれている。

基壇は、上部にやや簡略化した反花を刻み、高さ 14 cm、幅 55 cmである。

堀尾采女石塔

堀尾采女石塔は、現在 5 基並ぶ堀尾氏に関わる石塔群のうち、正面向かって左から 5 番目（右端）に配されている。相輪は九輪がなく、宝珠（一部を欠く）と受花のみだが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部は揃っている。基壇から相輪（宝珠）先端までの総高は、157 cmである。石材は安山岩（小松石）である。基礎は、やや赤味がかったている。

宝珠は高さ 29 cm（復元高）、最大径 23 cmで「空」の文字を刻む。受花（上）は高さ 10.5 cm、最大径 22 cmで「風」の文字を刻む。

笠は、上部 4 段、下部 2 段の階段を作り出し、高さ 27 cm、軒幅 30 cm、上端幅 20 cm、下端幅 25 cmである。隅飾端部幅は 38.5 cmで、外反している。隅飾の側面は 1 段の帯で縁取っており、軒に「火」の文字を刻むが、他には特別な装飾は無い。

塔身は、高さ 32.5 cm、上端幅 24 cm、下端幅 24 cmで、正面には「水」の文字を刻む。

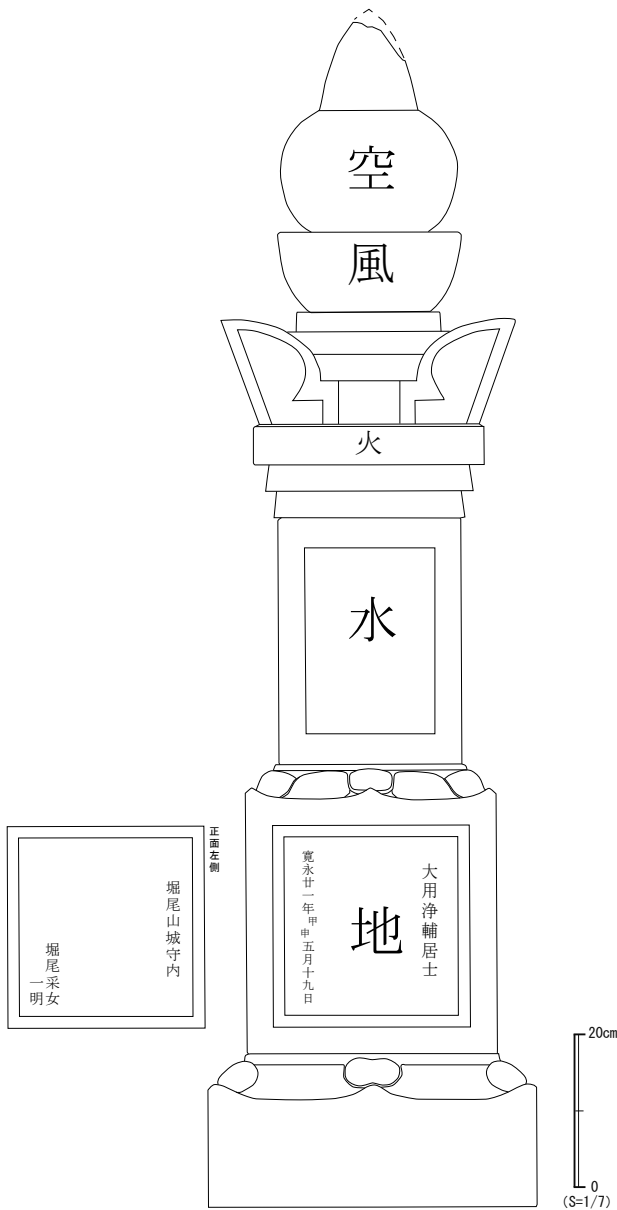
基礎は、上部に簡略化した反花を刻み、高さ 38 cm、上端幅 25 cm、下端幅 33 cmである。正面中央に「地」の文字、その右側に「大用浄輔居士」、左側に「寛永廿一甲申五月十九日」の銘文が、正面左側には「堀尾山城守内」「堀尾采女」「一明」の銘文が刻まれている。

基壇は、上部に簡略化した反花を刻み、高さ 20 cm、幅 43 cmである。

3) おわりに

堀尾氏が改易されて 380 年近くが過ぎ、その後、時代が変わり、さらに地震、戦災も経たにもかかわらず忠晴石塔をはじめ 5 基の墓石が現在も千駄木の養源寺に存在する。管見の限りでは、この石塔群は東京における堀尾氏を知る唯一の記念物といえよう。

養源寺も、明暦 3 年（1657）の大火の後に、湯島天神前坂下から現在の寺地に移転している。その後、堀尾氏の御霊屋も享保期には無くなり、石塔のみとなったという。京都の菩提寺春光院のように、御霊屋とその背後に当主と親族、累計の墓石が並んでいたかどうかは、史料が残っておらず、詳細は不明である。いずれにせよ、石塔は春光院と同様に、姻戚関係のある石川氏の援助を受けて、その後も存続し



第 53 図 堀尾采女宝篋印塔 実測図



写真 117 堀尾氏に関わる石塔群裏面（移転前）



写真 118 堀尾式部石塔正面（移転前）



写真 121 堀尾忠晴石塔 基礎正面



写真 119 堀尾忠晴石塔（左）、石川廉勝妻石塔（右）（移転前）



写真 120 松村監物石塔（左）、堀尾采女石塔（右）（移転前）



写真 122 石川廉勝妻石塔 基礎正面



写真 123 松村監物石塔 基礎正面



写真 124 堀尾采女石塔 基礎正面

第 4 章

来待石製石塔に関する一考察
 —堀尾氏と来待石製石塔の出現・変遷—

1. 近世来待石製石塔出現の一起源

1) はじめに

松江市宍道町来待地区を中心として産出される凝灰質砂岩は、通称「来待石^{きまちいし}」と呼ばれる。来待石は古墳時代の石棺や石室、古代の寺院などに利用されたことが確認されているが（出雲考古学研究会1987、島根県教育委員会1974、西尾ほか1993）、その後の利用は、伝大野次郎左衛門墓五輪塔など来待石製の五輪塔は見られるものの、類例は少なく、系譜を追うには至っていない（狭川2015）。時代を隔てて岩屋寺（松江市宍道町上来待）に所在する「文禄五年二月」（1596）銘をもつ宝篋印塔（岩屋寺石造物調査団2008）や「慶長拾貳年二月日」（1607）銘をもつ板碑^{（注1）}などを最古期にあたり、近世になると来待石の利用は爆発的に広がる。「出雲石」とも称されるように、出雲地域を代表する石材として利用されてきた。

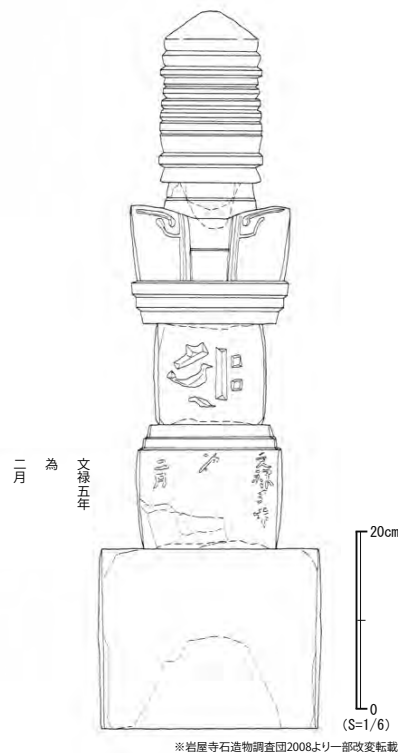
本稿では特徴的な形態をした来待石製石塔の起源について、その出現の契機と歴史的背景を推論し、予察するものである。

注

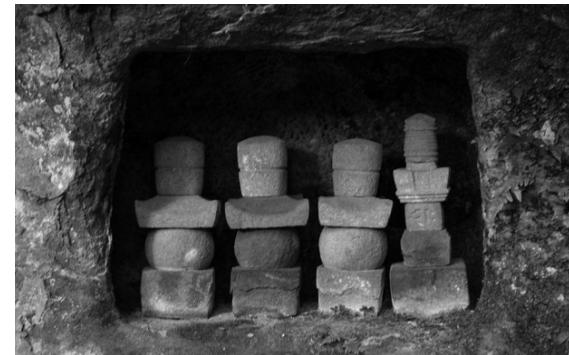
- (1) 岩屋寺石造物調査団2008。岩屋寺薬師堂裏は来待石の岩盤を掘りぬき、仏像を安置したような掘り込みが残り、堂宇をその前面に建てた造りとなっている。「慶長拾貳年」銘板碑は来待石石窟を掘り込んでほめ込まれており、銘文は「江州浅井郡山田口主 久口 南無阿弥陀仏 慶長拾貳年二月日」と確認できる。どのような経緯でこの板碑が製作されたかは分からないが、近江国浅井郡に出自をもつ人物が出雲国に移住し、岩屋寺薬師堂と来待石製石造物群製作に関わったことを彷彿させる。近江国浅井郡は天正13年（1585）から同18年（1590）まで、堀尾氏（佐和山城主）の所領に含まれていた。時代的な背景を考えれば、堀尾氏の出雲国入部との繋がりを想定できる。

2) 特徴的な形態をした来待石製石塔の出現状況

岩屋寺の「文禄五年二月」銘宝篋印塔に見られるように、特徴的な形態をした宝篋印塔は出現当初から独特な形態を備えていた。形態の違いは特に宝篋印塔の笠に見られ、上部階段の表現、隅飾の文様などは日引石製宝篋印塔、白粉石製宝篋印塔には見られない。この特徴に至る石塔の変遷を出雲地域でたどることができない。恐らく、他地域で来待石に類似した石材を利用して石塔製作を続ける過程の中で典型的な宝篋印塔などとは異なる形に形態変化し、その後、石工の移動によって来待石が石塔材として



第55図 岩屋寺「文禄五年」紀年銘宝篋印塔 実測図

写真125 岩屋寺「文禄五年」紀年銘宝篋印塔
(右端の宝篋印塔)写真126 岩屋寺「慶長拾貳年」
紀年銘板碑

見出されたのではなかろうか。出現当初から独特な形態を備えていたのは、他地域で身に付けた石塔製作技術をもった石工の移動以外に考えにくい。

筆者らはこれまで来待石に関する調査を行う中で、来待石製大型石塔や来待石製石廟^{せきびよう}に注目し、慶長5年（1600）に出雲国を知行した堀尾氏が一族の墓石塔、供養塔を造立するうえで来待石を利用していることを明らかにし、造立された宝篋印塔は岩屋寺の「文禄五年二月」銘宝篋印塔と系譜を同じくするものと確認してきた（岩屋寺石造物調査団2008、岡崎ほか2006、岡崎ほか2007、岡崎ほか2008、西尾・稲田2005、西尾・稲田・樋口2005a、西尾・稲田・樋口2005b、樋口2005）。

さて、中世後半期において出雲国内では福井県大飯郡高浜町日引で採石される日引石（安山岩質凝灰岩）製石塔と、松江市宍道町、玉湯町周辺から産出される白粉石（石英安山岩質凝灰岩または白色凝灰岩）製石塔、大山の周辺で産出される大山系石材（角閃石安山岩）などが知られている^{（注1）}。また、伝大野次郎左衛門墓五輪塔など来待石製石塔の例も若干数ある。日引石製石塔には宝篋印塔と五輪塔があり、14世紀後半から15世紀前半にかけて、九州の東シナ海側から鹿児島県^{ほうのつ}、北は日本海沿いの青森県^{とさみなと}までの広範囲に運ばれている（今岡2001、佐藤2015）。白粉石製石塔にも五輪塔と宝篋印塔があり、概ね14～15世紀頃におそらく石材産地の松江市宍道町、玉湯町周辺で採石・加工されたであろうと想定できる。白粉石製石塔はどのような技術的系譜をもつ職人集団により製作されたのだろうか、その実態は不明である。

また、鰐淵寺^{がくえんじ}（出雲市）の石造物調査では、16世紀前半段階では来待石・白粉石・日引石・大山系石材など多種類の石材により石塔が構成され、16世紀後半にかけて来待石など1～2種類の石材に収束されている状況が指摘されている（佐藤2015）。このように、出雲国内における16世紀代の墓地では、多様な石材による石塔が造立されていた景観を想定できる。

ここで、来待石製宝篋印塔・五輪塔について見ると、中世後半期段階では伝大野次郎左衛門墓五輪塔など数例の石塔が散見される状況であり、多様な石材の中での一種類であったが、17世紀を前後する段階で独特な特徴を持つ来待石製の宝篋印塔や五輪塔が突如として多量に製作される状況となる。このことは、日引石製石塔や白粉石製石塔・大山系角閃石安山岩など多種多様な石材で墓地の石塔が構成されていた状況から、近世に入る前後段階には確立した特徴的な形態をした来待石製宝篋印塔や五輪塔によって墓地の石塔が構成される状況を想定させる。また、こうした来待石製石塔、特に宝篋印塔の確立した特徴については、それ以前の祖型を求める資料がなく、突然として現れた印象を抱かされる。つま

り、17世紀前後に多量に製作され始めた来待石製宝篋印塔・五輪塔は、出雲国内に求めることができない特徴的な形態を備えて製作され始めたのである。

注

- (1) 日引石製、白粉石製、来待石製の石塔が同一の場所で確認される例はいくつか知られている。そのうち総合的に調査されたものとして岩屋寺石造物群（岩屋寺石造物調査団 2008）、米坂遺跡（島根県教育委員会 2011）、佛谷寺石造物群（岡崎ほか 2014）、鰐淵寺（出雲市教育委員会 2015）などがある。

3）堀尾一族に関わる来待石製石塔

来待石製宝篋印塔・五輪塔の製作年代が比定できる資料として堀尾氏に関連した石塔群があげられる。堀尾氏は出雲国を知行して以降、堀尾吉晴、忠氏、忠晴と一族の墓、供養塔には来待石を用いた。出雲国内では堀尾氏の出雲国支配に関わりが深い、安来市広瀬町、松江市、雲南市三刀屋町でこれまで確認されており、国外では堀尾氏の菩提所である春光院（京都市）で確認されている。

（1）広瀬（安来市広瀬町）に残る堀尾一族の石塔

広瀬は、尼子氏、吉川氏の居城（富田城）が置かれた場所で、堀尾氏も慶長5年（1600）から松江に移るまで出雲国支配の拠点とした。岩倉寺に堀尾吉晴の墓（五輪塔）、忠光寺跡に忠氏の墓、富田城内に堀尾勘解由の石廟（来待石製大型石廟）である親子観音がある。

- ①堀尾吉晴五輪塔
- ②親子観音

（2）松江周辺（松江市）に残る堀尾一族の石塔

松江は、堀尾氏が出雲支配の拠点として新たに城と城下町を建設した場所である。堀尾氏の菩提寺である圓成寺（松江市栄町）には、江戸で亡くなった堀尾忠晴の墓（五輪塔）がある。また、松江城の裏鬼門とされる報恩寺（松江市玉湯町）には寺で堀尾忠氏の墓と伝える宝篋印塔、堀尾民部の石廟（来待石製大型石廟）などがある。

- ①伝堀尾忠氏宝篋印塔
- ②堀尾忠晴五輪塔
- ③堀尾民部石廟

（3）三刀屋（雲南市三刀屋町）に残る堀尾一族の石塔

堀尾氏は松江城を本城として富田、三刀屋、赤名、亀嵩に支城を置くが、三刀屋には一族の堀尾掃部、修理を配する。三刀屋城近くに掃部、修理の菩提寺である同安寺（道安寺）が置かれ、現在、同安寺跡には殿様墓と呼ばれる来待石製大型石廟が2基残る。

- ①殿様墓

（4）春光院（京都市）に残る堀尾一族の石塔

春光院は、天正18年（1590）の創建と伝えられる臨済宗妙心寺の塔頭寺院である。堀尾吉晴には、堀尾金助という男子があり、吉晴は息子の菩提を弔うために妙心寺に俊巖院を創建し、この俊巖院が後に改称して春光院となっている。

春光院本堂裏の墓域には、堀尾家の位牌及び堀尾家嫡流の木像を納めた御霊屋と、供養塔或いは墓碑などの石塔群が残されている。この石塔群の中に、来待石製（凝灰質砂岩）の石塔が存在し、堀尾泰晴夫妻石廟（笏谷石製）内宝篋印塔2基を含めた宝篋印塔10基のほか、五輪塔1基、無縫塔1基、舟形石塔1基が確認できる。堀尾泰晴夫妻のものとした石廟内の宝篋印塔1基（正面右）には「天徳寺□□□」「世崇□□□」の文字が刻まれており、泰晴の戒名が「天徳寺殿高菴世崇大居士」であることから、この石廟が堀尾泰晴夫妻のものであると特定できた。他の来待石製石塔については、人物を特定できる銘文等は確認できなかったが、春光院には石塔の被葬者・供養者を記した石塔配置図と墓石表が残されていた。

来待石製石塔の配置は、御霊屋の真裏に堀尾泰晴夫妻石廟があり、正面向かって右側に2基の宝篋印塔（伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔）、左側に大小2基の宝篋印塔（伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔）、伝堀尾忠氏石塔の左通路を挟んで東向きに2基の宝篋印塔（伝奥平家昌夫妻宝篋印塔）が配されている。五輪塔1基（伝野々村河内妻〔勝山：堀尾勘解由母〕五輪塔）は伝忠氏夫妻宝篋印塔の北に並んだ石塔列の中に、無縫塔1基（伝堀尾忠晴無縫塔）、舟形石塔1基（伝松村監物舟形石塔）は泰晴夫妻石廟のやや離れた右奥に配されている。

「春光院古今院事記」には、石川家（亀山藩主）の命を受けた石川家家臣が出雲より堀尾家の木像とともに「石碑」を移したことが伝えられており、石塔の一部は、堀尾家断絶後に出雲より移送された可能性もある。

- ①堀尾泰晴石廟
- ②堀尾吉晴夫妻宝篋印塔
- ③堀尾忠氏夫妻宝篋印塔
- ④堀尾忠晴無縫塔
- ⑤奥平家昌夫妻宝篋印塔
- ⑥松村監物舟形石塔

寛永年間に堀尾氏が大名家として断絶した後、出雲国を知行した京極忠高は、父高次のために越前国の笏谷石を用いて供養塔を造り^(註16)、続く松平氏は墓石塔として瀬戸内から運んだ花崗岩を用いている。

このように、江戸養源寺と高野山奥之院にある堀尾家墓所を除けば、堀尾一族はその出自から見れば他国の石材である来待石を一族の墓石塔や供養塔に積極的に採用し、「来待石型宝篋印塔」とでも呼べるような独特な形態を採用している。

そこで、次のような仮説を立ててみた。「近世に入る頃に出現し、その後爆発的に製作され始めた特徴的な形態をした来待石製石塔は、堀尾氏の出雲国知行と共に付き従ってきた職人（採石・加工）集団によって製作されたものであり、来待石石塔出現の一起源は堀尾吉晴、忠氏の旧知行地内の何処かに求められる」というものである。

この仮説の通り、出雲で突如として出現する来待石製石塔の系譜を見出すことができないか、堀尾氏の前知行地である遠江国浜松と周辺において、その出現の起源について考えてみたい。

4）堀尾吉晴、忠氏の旧知行地内（遠江国浜松と周辺）の砂岩製石塔について

（1）堀尾吉晴、忠氏の旧知行地

堀尾吉晴、忠氏の知行地をたどると下記のとおりである。堀尾吉晴は早くに豊臣秀吉に仕え活躍した人物であり、秀吉の天下統一事業が急速に進められたことで吉晴に与えられた知行地も目まぐるしく変

わった。この中で、比較的長く知行した場所として、天正13年（1585年）から天正18年（1590年）まで領有した近江国佐和山（佐和山城）、天正18年（1590年）から慶長5年（1600年）まで領有した遠江国浜松（浜松城）がある。

[堀尾吉晴の知行地の変遷]

- ①天正元年（1573年）、近江国長浜の内において100石。
- ②播磨国姫路において1,500石。
- ③丹波国黒江において3,500石。
- ④天正10年（1582年）、丹波国氷上郡内（黒井城）において6,284石。
- ⑤天正11年（1583年）、若狭国高浜において1万7,000石となり大名に列する（高浜城主）。
- ⑥天正13年（1585年）、若狭国佐柿において2万石（佐柿城主）。
- ⑦天正13年（1585年）、近江国佐和山において4万石（佐和山城主）。
- ⑧天正18年（1590年）、徳川家康の旧領遠江国浜松において12万石（浜松城主）、豊臣姓を許される。
- ⑨慶長4年（1599年）10月、徳川家康・毛利輝元・宇喜多秀家から越前府中城の留守居役として5万石。
- ⑩忠氏が関ヶ原合戦で東軍に与し、家康による諸大名の再配置により慶長5年（1600年）11月、忠氏とともに出雲・隠岐国に入部。

[堀尾忠氏知行地の変遷]

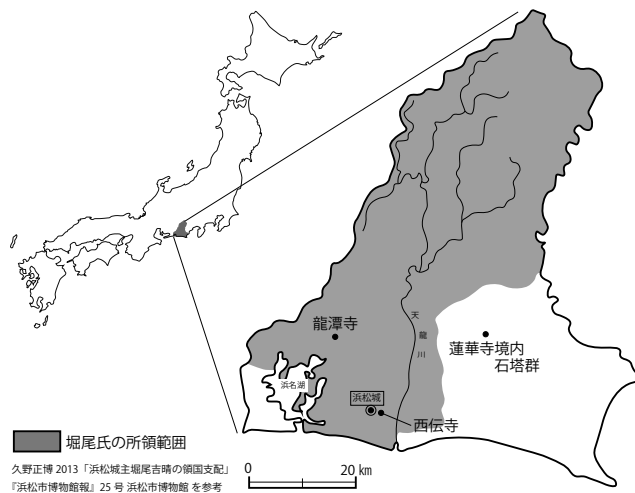
- ①慶長4年（1599年）、父の越前府中城の留守居役に伴い、遠江国浜松12万石を知行（浜松城主）。
- ②慶長5年（1600年）、関ヶ原合戦で東軍に与し、出雲・隠岐国において24万石（富田城主）。

（2）遠江国浜松における砂岩製石塔の実例について

先の仮設の通り、出雲で突如として出現する来待石製石塔の系譜を見出すことができないか、堀尾氏の前知行地と周辺において、その出現の起源について考えてみたい。

（a）蓮華寺境内所在の石塔残欠

当石塔群の所在地は静岡県周智郡森町森で、蓮華寺境内と蓮華寺墓地にあった石塔の多くが歴史民俗資料館脇に集められたものである。その数は町内で最も多い。15世紀代の一石五輪塔が多く、中には宝篋印塔や五輪塔もある（森町考古学研究会2008）。特に、砂岩製の残状況の良いものについて図化・計測を行った。



第56図 遠江国浜松周辺の石塔位置図

第57図の1～4は五輪塔残欠である。

空風輪は、火輪との接続する下端径10.6cm、最大径15cmで柄を含めない高さ16.5cmとなる。側面は丁寧¹に仕上げられ、先端はやや尖るような形状を呈しているが、空風輪をそれぞれ表現するというより、砲弾状の形態に線を彫り込み簡略な作出となっている。

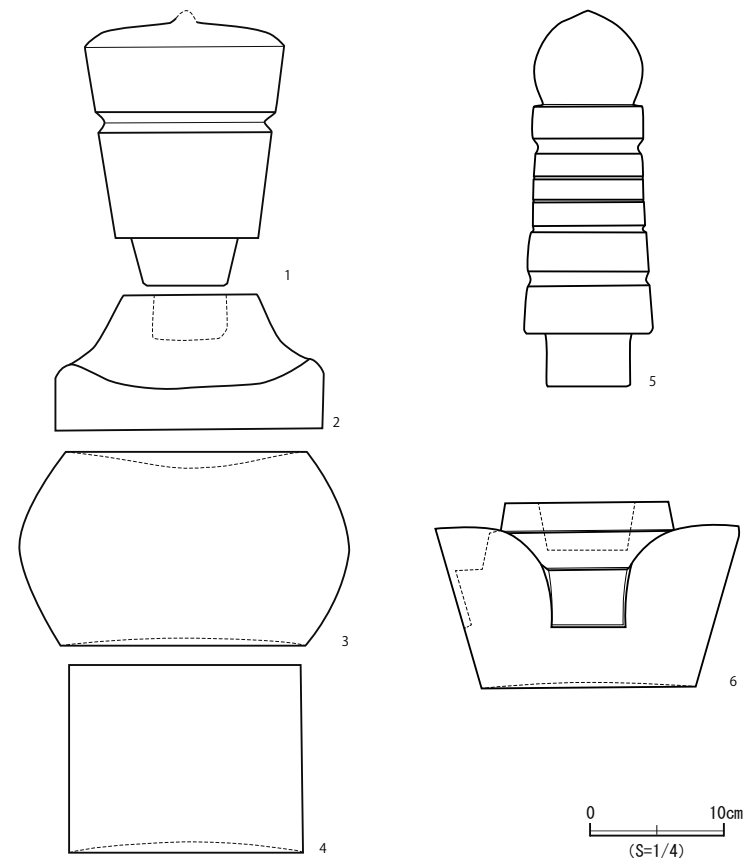
火輪は下端幅20cm、上端幅10cm、高さ10cmで、上部に空風輪を受ける柄^{ほぞあな}が作られている。軒の幅は中央で3cmとなり、隅に行くにつれて軒を厚くする形態となっている。

水輪は下端・上端径18cm、高さ14.5cmのつぶれた球体で、最大径は24cmとなる。上端下端ともやや内側に掘りくぼめられ、ノミの調整痕が残っている。

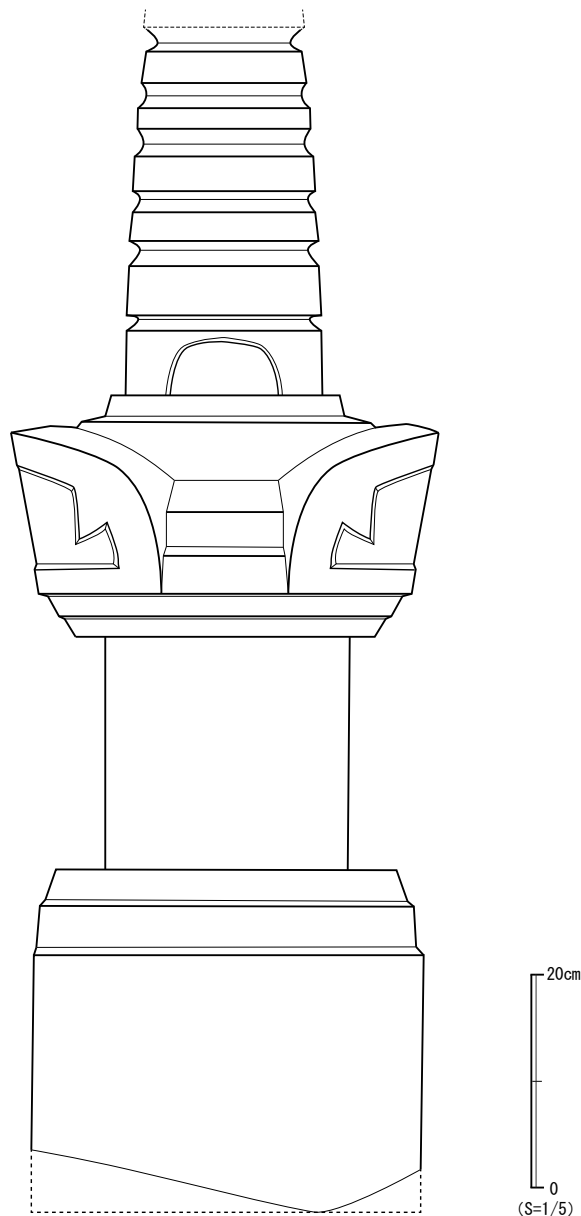
地輪は上端・下端幅とも17.5cm、高さ14cmで、底部にノミ痕の調整痕が残っている。

また、第57図の5と6は、砂岩製の宝篋印塔の残欠（相輪と笠）である。

相輪は、下から伏鉢・下部受花・九輪・上部受花・宝珠が表現され、柄が笠との接続部分に作られている。九輪を線により3区画で表現していることや伏鉢・両受花の表現が単調な作りになっていることにみら



第57図 蓮華寺境内所在の石塔残欠 実測図

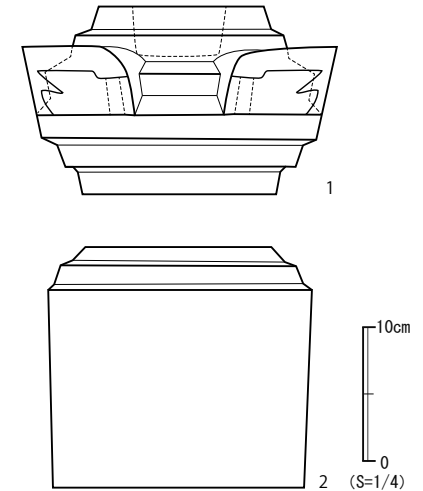


第58図 龍潭寺墓地所在の宝篋印塔（伝新野左馬助公之墓）実測図

れるように、非常に簡略化された表現となっている。
柄を含めた総高は28 cmとなる。

笠の高さ13.8 cm、下端幅16 cm、上端幅12.2 cmで、上端には柄穴を作っている。隅飾の高さ12 cmで、本来表現されるべき下部階段がない代わりに、隅飾と軒が一体となった表現となっている。また、隅飾に文様はない。上部階段は3段作られており、隅飾に挟まれた部分の階段表現は簡略化されている。

来待石製石塔との比較においては、来待石製五輪塔の比較では、地輪・水輪は特徴がないので似ている要素をつかみきれないが、火輪の軒の形状や空風輪はそれぞれを丁寧に表現せず、砲弾形の形状を線で区画してそれぞれを表現する方法などでは、非常によく似ていると考えられる。また、宝篋印塔との比較では、下部階段を有さない点に大きな違いがあるが、上部階段の表現・形状はよく似ている。しかし、相輪の形状はほとんど似ていない。



第59図 西伝寺墓地所在の宝篋印塔実測図

(b) 龍潭寺墓地所在の石塔

万松山^{りょうたんじ} 龍潭寺は浜名湖北部の井伊谷^{いいのや}（浜松市北区引佐町）に所在する禅宗寺院で、天平5年（733）に行基により開山されたと伝わる。室町時代に臨済宗妙心寺派寺院として今日まで至る古刹である。井伊家の菩提寺として伝わり、境内には井伊家墓所のほか、関係する家臣の墓などが多数所在する。

本石塔は井伊家墓所に隣接した墓地に新野左馬助公之墓として伝えられる宝篋印塔である。新野左馬助は戦国期に信濃国の武將で今川家につかえる者であった。桶狭間の戦いで今川氏の勢力がそがれる中、縁戚であった井伊家を保護するとともに、今川家を見限ることなく最後まで同家を守ろうとし、永禄7年(1564)9月15日に没したとされる。石塔の形態からみて同時代を前後する時期の石塔と考えられる。

宝篋印塔は砂岩製で、第58図のとおり相輪、笠、塔身、基礎からなり、相輪の九輪中部あたりから上部を欠く。残存高は106 cmである。また、基礎の下半部分で剥落をしているが、全体としては良好な状態で残存している。

相輪は下から伏鉢、下部受花、九輪が表現されているが、九輪の中部から上部を欠き、残存高16 cmである。伏鉢は下端幅9 cmで花弁の表現が残っている。下部受花の下端径8 cmで、最大径は9 cmとなり、花弁の表現は確認できなかった。九輪は溝を彫りこむことで表現されており、下端径8 cm、最大径8.5 cmで、上部に向かってやや細くなっていく。

笠は高さ11.3 cm、下端幅14 cm、上端幅10.7 cmで、下部階段が2段、上部階段が4段に作り出されているが、隅飾に挟まれた部分の上部階段表現は、簡略的である。隅飾は高さ7.8 cm、下端幅5.7 cmで、側面は隅飾内側の部分を太く縁取るような帯が表現されている。

塔身は、高さ11 cm、上端幅・下端幅とも11.3 cmで、ほぼ正方形を呈している。側面に梵字などの表現はなく、平坦に整えられている。

基礎は、高さ39 cm、上端幅16 cmで、上部に2段の階段を有し、表面はノミ痕がはっきりと認められ、5 mm幅の工具痕がはっきりと側面4面に残っている。

来待石製石塔との関係で注目されるのは、基礎の上部に2段の階段表現があり、笠の形態で上部階段の特徴ある表現と形状が非常によく似ている点を挙げることができる。また、隅飾のやや直線的な表現も飛躍的ではあるが、来待石製宝篋印塔の直線的な表現とのつながりを想起させる。

(c) 浜松市西伝寺墓地所在の石塔

源寶山(せいでん じ)西伝寺は浜松市南区に所在し、市南東部の天竜川の下流右岸に立地する浄土宗寺院である。治承年間に法然と弟子の西伝が当地を訪れ、西伝が当地にとどまり、布教活動を行ったことが寺の開基と伝わる。

当寺の墓地には、多数の石材が使用され、中世の段階においても様々な産地から石塔が搬入されたことが、明らかにされている^(注1)。中でも、東三河産といわれる砂岩を使用した宝篋印塔・五輪塔残欠について観察を行った。

第59図の1は宝篋印塔の笠で、高さ14 cm、下端幅14.5 cm、上端幅12.3 cmで、下部階段が2段、上部階段が4段作り出されているが、隅飾に挟まれた部分の上部階段表現は、簡略的である。隅飾は高さ5.1 cm、下端幅7.2 cmで、側面は隅飾内側の部分を太く縁取るような帯が表現されている。また、隅飾の中央よりの部分には浅く縦に伸びるようなくぼみもみられた。

第59図の2は基礎で、高さ18 cm、上端幅12.7 cm、下端幅18.7 cm、最大幅19.6 cmで、上部に2段の階段を有し、表面はノミ痕のはっきりと残っている。

さて、ここでも来待石製石塔との関係で注目されるのは、基礎の上部に2段の階段表現があり、笠の形態で上部階段の特徴ある表現と形状、および隅飾りが古式の丸みを帯びた形状よりやや四角い形状になっていることなど、非常によく似ている点を挙げることができる。また、やはり隅飾のやや直線的な表現もニュアンス的な部分ではあるが、来待石製宝篋印塔の表現とのつながりを想起させる。

注

(1) 松井ほか2006。ここで紹介した宝篋印塔は、東三河型式宝篋印塔とされ、東三河で産出される砂岩で製作された宝篋印塔で16世紀代に製作されたものだと考察している。

5) おわりに

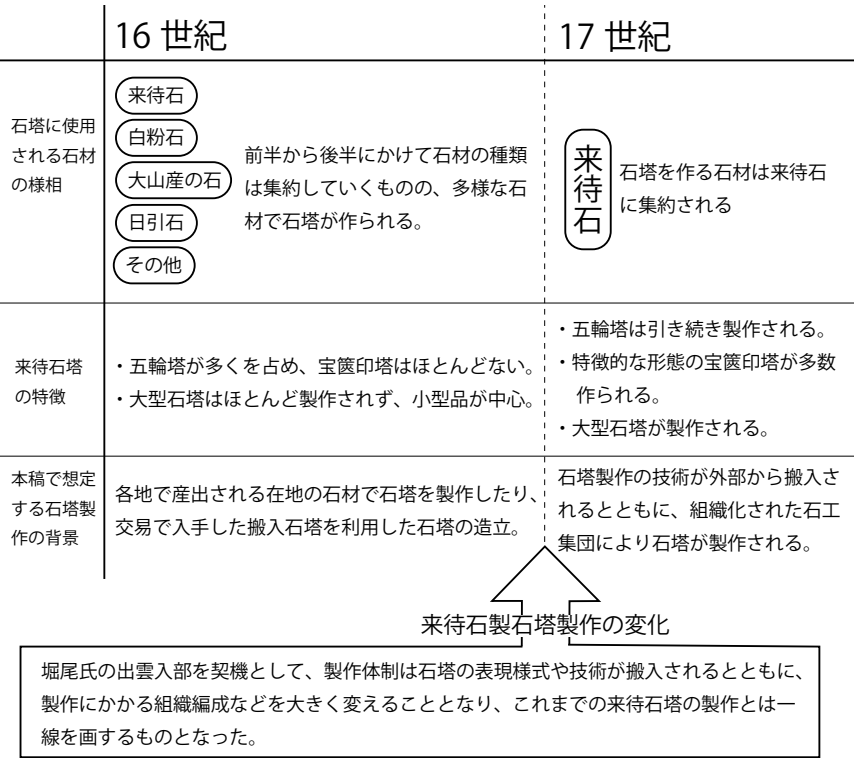
石材としての来待石利用は、古墳時代の石棺・石室、古代寺院などに見られたが、長い断絶を経て17世紀初頭頃に石塔などに再び利用され、その後石材として爆発的に利用され始めた。また、慶長5年(1600)に出雲国を知行した堀尾氏は一族の墓石塔、供養塔に来待石を利用しており、管見の限りでは江戸、高野山奥之院での堀尾家の石塔を除けば全て来待石製である。このことから、「特徴的な形態をした来待石製石塔は、堀尾氏の出雲国知行と共に付き従ってきた職人(採石・加工)集団によって製作されたものであり、来待石製石塔出現の一起源は堀尾吉晴、忠氏の旧知行地内の何処かに求められる」との仮説が想定された。

堀尾吉晴・忠氏が天正18年(1590)から慶長5年(1600)まで知行した遠江国浜松における砂岩製石塔の実例を見る限り、来待石製宝篋印塔の基礎の階段表現や笠の形態など類似している点もある。来待石製石塔とのつながりを考えることができるが、一方で宝篋印塔の隅飾の表現や相輪の形態、基礎の荒い仕上げ調整などでは、飛躍した特徴も存在している。また、五輪塔についても、空風輪の形態などで形態的なつながりを推察することができた。特徴的な形態をした来待石製宝篋印塔の出現を考えるにあたり、遠江国浜松の宝篋印塔を祖形として来待石の宝篋印塔が成立すると想定する可能性はあるだろ

う。ただし、浜松における砂岩製石塔の変遷や確実な紀年銘資料を確認できなかった点から、こうした研究の進展と併せて浜松の石塔と来待石製石塔とのつながりを改めて評価していくことも課題として残る^(注1)。

ここで、堀尾氏によって来待石製石塔の製作が本格的に開始されるという仮説のもとでは、岩屋寺宝篋印塔の紀年銘に矛盾が生じることになる。岩屋寺の「文禄五年二月」(1596)銘宝篋印塔は、これまで年代を比定する基準資料と考えられてきたが、堀尾氏の出雲入部によって来待石製石塔の生産が開始されるとなれば、文禄年間の堀尾氏の入部前に特徴的な形態をもつ来待石製石塔が生産されているという矛盾が生じる。慶長5年以降に生産が本格的にはじまるのであれば、「文禄五年二月」の紀年銘を慶長5年以降に作成した石塔に没年など古い年号を刻んだ可能性もあるが、何れにしても文禄の紀年銘の評価は今後の課題となる。

特徴的な形態をした来待石製宝篋印塔の出現を考えたとき、もう一つ課題となるのは遠江国浜松における宝篋印塔と来待石製宝篋印塔との型式学的な隔たりである。宝篋印塔の基礎の仕上げ方やサイズなどに差異があるが、特に隅飾内の特徴的な文様表現については、浜松の宝篋印塔を祖形とすると、表現につながりを想定できるものの、文様自体は全く異なるものである。こうした差異についても考察していく必要があるだろう。さらに、出雲地域では一石五輪塔はほとんど作られず、五輪塔は組合せ式であ



第60図 来待石製石塔製作の変化概略モデル

る。また、浜松の石塔は各部位とも出雲地域のものと比べてひと回り小さく、総高もひと回り低い。

来待石（凝灰質砂岩）はその岩石としての特性から、細かい細工や加工が可能で、多様な形態と大きさに対応でき、また、埋蔵量も豊富であることから量産化の需要にも対応できる優れた石材である。風化が激しいとされる来待石ではあるが、山野に露出している玉石や良質な部分を利用すれば風化の速度も遅く、長期にわたって原型を保っている。近世大名墓としての石塔の大型化にも宝篋印塔のような細かい細工にも耐えうる石材であり、堀尾氏は、来待石を一族の墓石や供養塔に用いる格式のある石材として扱っていたのだろう。

来待石製の石塔がある時期から急に量産され、その宝篋印塔も出現当初から特徴的な形態を有することを考えたとき、先に提示したような堀尾氏の出雲国入部との関係を考慮するとスムーズに説明ができるところである。今回の調査により、その仮説の証明自体はできなかったが、可能性について指摘できるとともに、課題も出てきたところである。来待石製石塔の16世紀段階での生産と17世紀を前後する段階ではその形態・様式は異なり、突如として完成された（特殊な形態をした）来待石製宝篋印塔・五輪塔が出現する。その契機として近世大名堀尾氏の入部を想定したところであるが、こうした歴史的事象と物質文化の変容について、どのようにリンクしてくるのか、さらなる調査をしながら、他の分野からの多方面のアプローチによって、17世紀前後に確立された来待石製宝篋印塔成立の系譜について更に検討する必要があるだろう。

注

(1) 松江市寺町の石工渡部家の伝承では、先祖は浜松から堀尾氏とともに来たと伝える。（永井 2014）



写真 127 蓮華寺境内所在の石塔 全景



写真 128 蓮華寺境内所在の石塔残欠 1



写真 129 蓮華寺境内所在の石塔残欠 2



写真 130 蓮華寺境内所在石塔残欠の笠（第 57 図 6） 1



写真 131 蓮華寺境内所在石塔残欠の笠（第 57 図 6） 2



写真 132 龍潭寺 本堂



写真 133 龍潭寺墓地所在の宝篋印塔
(伝新野左馬助公之墓) 1



写真 137 西伝寺 山門



写真 134 龍潭寺墓地所在の宝篋印塔 (伝新野左馬助公之墓) 2

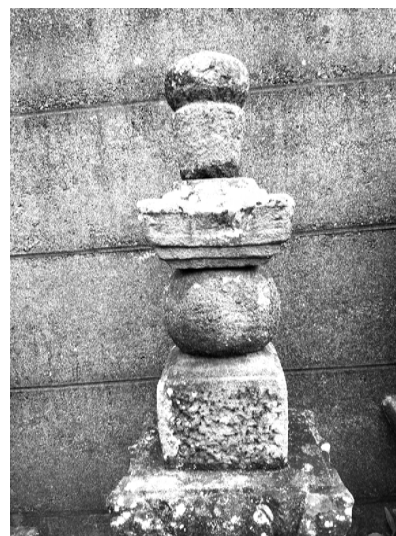


写真 138 西伝寺墓地所在の宝篋印塔
笠・基礎 (第59図1、2) 1



写真 139 西伝寺墓地所在の宝篋印塔
笠・基礎 (第59図1、2) 2



写真 135 龍潭寺墓地所在の宝篋印塔
(伝新野左馬助公之墓 相輪下部・笠)



写真 136 龍潭寺墓地所在の宝篋印塔
(伝新野左馬助公之墓 基礎)



写真 140 西伝寺墓地所在の宝篋印塔笠 (第59図一)

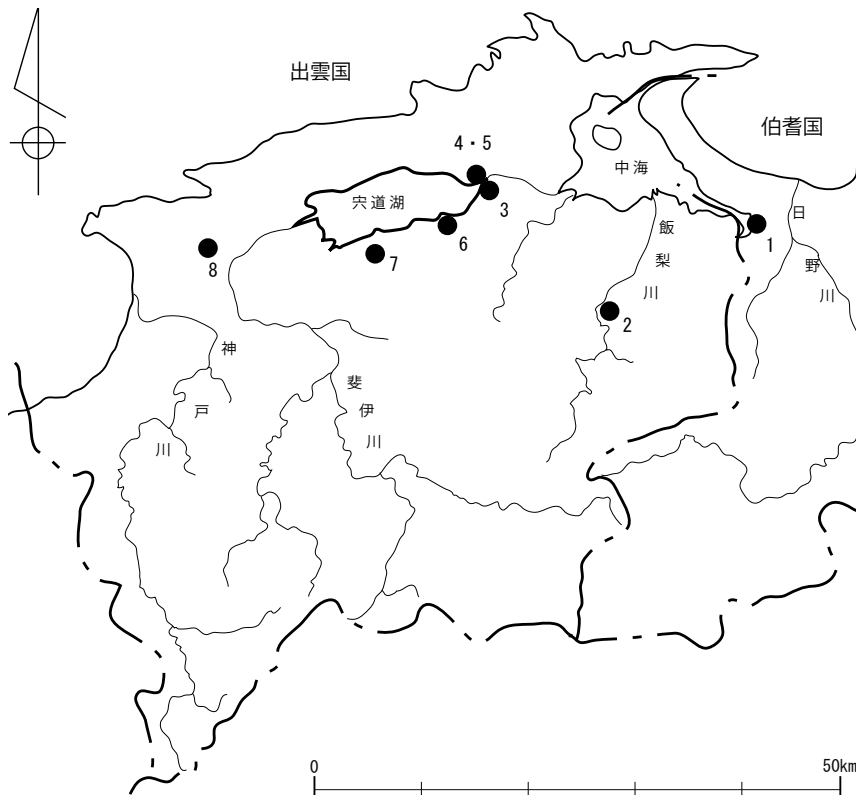
2. 来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景

1) はじめに

出雲部において来待石製（凝灰質砂岩）の五輪塔・宝篋印塔について調査を進めていく中で、高さが2 m 50 cmを超えるような大型の石塔が意識されるようになった。

大型石塔という用語はきわめて曖昧だが、概ね総高250 cm前後のもので、宝篋印塔では基礎、塔身、笠の一辺が60 cm（2尺）以上、五輪塔では地輪、水輪、火輪の一辺や径が60 cm以上の石材を使用するものとした。その基準で松江市を中心として来待石製品を見まわすと、伝大野次郎左衛門墓五輪塔（松江市宍道町）、堀尾吉晴墓五輪塔（安来市広瀬町）、堀尾忠氏宝篋印塔（松江市玉湯町）、堀尾忠晴五輪塔（松江市栄町）、三代長兵衛夫妻宝篋印塔（出雲市美談町）などが挙げられた。

来待石の採石・加工・運搬という、技術や労力を考えたとき、製品の大型化は技術の向上や運搬のた



- | | | | |
|----------------|-------------|-----------------|-------------|
| 1. 清洞寺跡五輪塔群 | 2. 堀尾吉晴墓五輪塔 | 3. 堀尾忠晴五輪塔 | 4. 天倫寺裏山五輪塔 |
| 5. 月照寺裏山五輪塔 | 6. 堀尾忠氏宝篋印塔 | 7. 伝大野次郎左衛門墓五輪塔 | |
| 8. 三代長兵衛夫妻宝篋印塔 | | | |

第61図 来待石製大型石塔の分布

めの動力力と深く結びつくと考えられる。製品の大型化に何らかの歴史的背景を見出すことが出来れば、来待石の採石・加工技術史を読み解く上でも重要な示唆を与えてくれるはずである。

本稿では、管見にかかる大型石塔と、天倫寺裏山五輪塔・月照寺裏山五輪塔など年号の分かる石塔例を紹介することで、戦国期末から江戸時代にかけての五輪塔、宝篋印塔の変遷を明らかにするとともに、大型石塔出現の歴史的背景、造立者の性格、来待石の採石・加工技術の変化等について検討する。

2) 来待石製大型石塔と紀年銘をもつ関連石塔

(a) 伝大野次郎左衛門墓五輪塔

伝大野次郎左衛門墓五輪塔は、松江市宍道町上来待にある島根県立わかたけ学園の敷地に接する丘陵上に位置する。付近は大野原と称する場所で、地元では古戦場跡（時期等は不明）として伝えている。五輪塔については、『八東郡誌』（奥原編1926、第12章来待村の項）では「大野次郎左衛門の墓」と伝えられると紹介するが、『島根縣史』（島根縣史編纂掛編1927、第3章第6節来海庄の項）では『雲陽誌』を引用しつつ、「土御門帝の御陵」と伝えられると紹介する。伝えられる大野次郎左衛門がどのような人物かは定かではないが、大野氏は本宮山城（松江市大野町）を居城とし、戦国末期に宍道氏によって滅亡した一族であり、次郎左衛門を名乗る者もいる。土御門帝については、来迎寺（宍道町東来待）裏に土御門親王の墓と称する宝篋印塔があるように（間野2002）、中世・来待地区が皇室御料であったことと伝承の上で繋がったとも思われる（宍道町教育委員会編1989）。いずれにしろ、この石塔が来待石製としては堀尾吉晴墓五輪塔に並ぶ大型五輪塔であるにもかかわらず、その造立の経緯は明らかではない。

五輪塔（松江市指定文化財）

五輪塔は、現存する来待石製品としては堀尾吉晴墓五輪塔に次ぐもので、空輪から地輪までの総高は290.5 cmを測る。全体的に風化は進んでいるが、製作当初の形態を保っていると思われる。石塔の下には基壇、台石はなく、五輪塔は直接地面に置かれている。五輪塔は空風輪、火輪、水輪、地輪を別々の石で作る。

空風輪は高さ65.5 cmの一石で、空輪は高さ38 cm、最大径56 cmの宝珠形、風輪は高さ28 cm、最大径55 cmの円筒形である。空輪・風輪の接合部は空輪の宝珠形を造り出している。風輪の底には火輪に重なる直径約22 cmの杓をもつ。

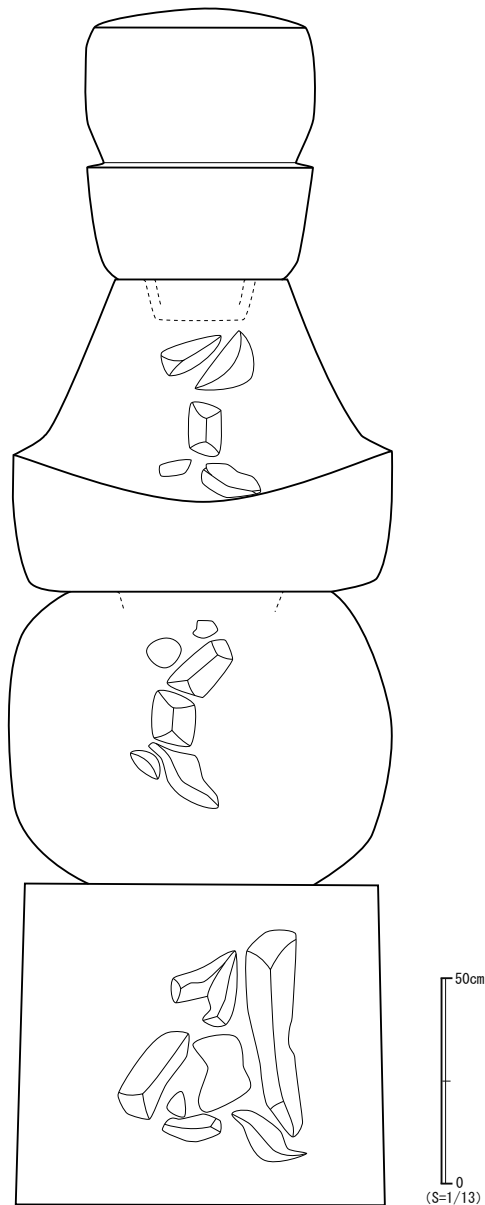
火輪は下端幅90 cm、最大幅約92 cm、上端幅42 cm、高さ76 cmである。軒の厚さは中央で約22 cm、左端約33 cm、右端約33 cmで、中央に向けて緩やかにカーブしている。軒から火輪の上端につながる稜線は緩やかにカーブしている。上面には直径27 cm、深さ約10 cmの杓穴をもつ。

水輪は下端径55.5 cm、最大径93.5 cm、上端径64 cmで、高さ71 cmで、円柱形に近い球形である。上部には径40 cm、深さ不明の掘り込み穴をもつ。

地輪は上端幅86 cm、下端幅90 cm、高さ78 cmで、上端に向かってやや狭くなっている。

五輪塔には、空風輪を除いて、火・水・地輪の四面に1字ずつ梵字が刻まれている。

参考文献 伊藤菊之輔1965、今岡1991、今岡1998



第62図 伝大野次郎左衛門墓五輪塔 実測図



写真141 伝大野次郎左衛門墓五輪塔1



写真142 伝大野次郎左衛門墓五輪塔2

(b) 堀尾吉晴墓五輪塔（第2章1参照）

(c) 堀尾忠氏宝篋印塔（第2章2参照）

(d) 堀尾忠晴五輪塔（第2章3参照）

(e) 京都・妙心寺春光院石塔（第3章1参照）

(f) 天倫寺裏山五輪塔

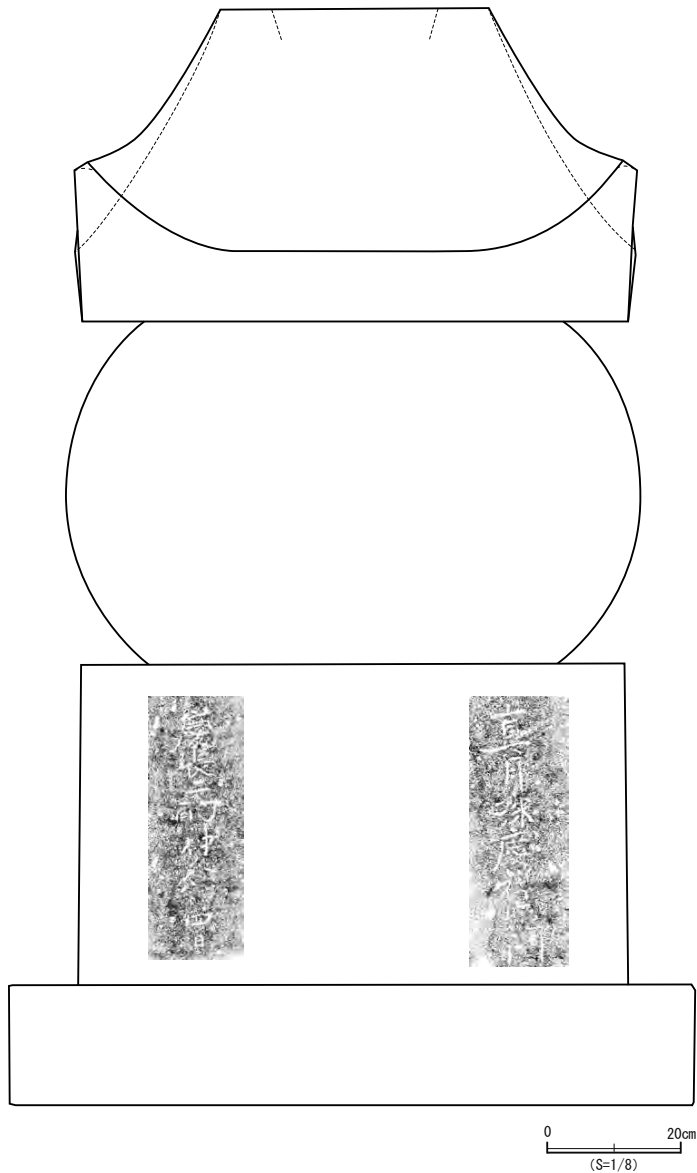
天倫寺は松江市の市街地の西にあって、南北方向に延びる低丘陵の突端部・洗合（現堂形町）に所在する。この洗合の地に堀尾吉晴が遠州浜松の天徳寺の春龍玄済和尚を開山として招き、龍翔山瑞応寺と称する菩提寺を創建したと伝える。

寛永11年（1634）、松江藩主京極忠高は瑞應寺を意宇郡乃木村に移して、忠晴の法名にちなんで鏡湖山圓成寺と改め、洗合には玄要山泰雲寺を興した。同15年（1638）に京極氏に代わって入封した松平直政は、同16年（1639）に信州松本から東愚等持を招き、寺号を神護山天倫寺と改めた。

五輪塔は境内の裏山にある墓地の最も西側奥の斜面に立地しており、正面は東南に向いている。この五輪塔については、伊藤菊之輔の『出雲の石造美術』（伊藤1965）に記載してあるが、詳細については知られていなかった。また、北側（正面右）に隣接して同規模の五輪塔が1基ある。

五輪塔

五輪塔は来待石製で、空風輪が欠くが、その他は残存し、横幅102cm、高さ18cmの台石の上に建つ。火輪から地輪までの高さは146cmで、台石を含めると164cmである。（現在の五輪塔には空風輪が存在



第 63 図 天倫寺裏山五輪塔 実測図



写真 143 天倫寺裏山五輪塔 (正面)



写真 144 天倫寺裏山五輪塔

するが、伊藤菊之助『出雲の石造美術』に紹介された写真には、空風輪がないことから、現在の空風輪は近年の補修と判断した。）

火輪は、高さ 46.8 cm、下辺幅 80.8 cm、上辺幅 40 cm、底部は中央部で高さ 10.8 cm、左右の突端部で高さ 22.8 cm、わずかに上外方へ傾斜し、幅 84 cm を測る。上部に径 24.6 cm の柄穴を掘り込む。

水輪は、高さ 51.2 cm、上径 61.6 cm、下径 60.8 cm、下端部から 25.2 cm 上で最大径 85.8 cm を測る。

地輪は、横幅 88 cm、高さ 48 cm を測る。正面の左右に銘文が陰刻されている。銘文については、風化が著しく不明な部分もあるが、現時点では以下のように読める。

左側：慶長二丁酉仲四日

右側：真月珠慶禪門

慶長 2 年（1597）は豊臣秀吉による慶長の役にあたる年で、当時、出雲国の東部は富田城主の吉川広家（元春次男）が支配していた。それに先立つ、永禄 5 年（1562）、毛利元就は瀬川の富田城、白鹿城攻略のための向城として荒隈城を築き、吉川元春や小早川隆景とともに、永禄 9 年（1566）に富田城明渡しを実現する等、尼子氏との対決の拠点としていたところである。石塔造立の時期には、天倫寺領は城地の一部として使用されていた可能性があり、また、瑞応寺以前に墓域として認識されていた可能性もあるとともに、慶長 2 年銘が追刻の可能性もある。毛利氏関係の文献史料にも関連する事項や該当者はなく^{（注1）}、被葬者についてはなお検討を要する。伊藤氏は背面にも銘文があると記載しているが、背面は背後の斜面の土に覆われており確認できなかった。

注

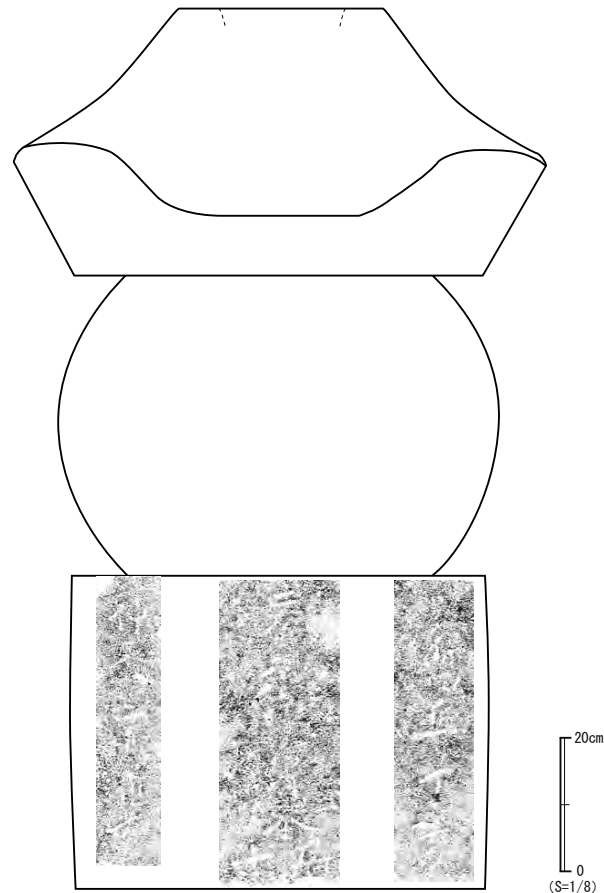
（1）『大日本古文書 吉川家文書』東京大学出版会 1970

(g) 月照寺裏山五輪塔

月照寺は臨済宗の寺院である。もと洞雲寺と称したと伝え、松江松平家初代藩主松平直政が生母月照院のため霊碑を安置し、蒙光山月照寺と改称した。2代綱隆は父直政の遺命により廟所を営み、山号を歓喜山と改め、以来、松江藩主松平家の菩提所となっている。境内には、山腹を削り、初代～9代までの藩主の廟所が配置されている。

平成8年(1996)3月29日、近世大名家の墓地として貴重であることから、境内地、墓地、背後の山林を併せて国史跡に指定された。また、平成18年(2006)1月26日には、8代斉恒公廟所の北東部に隣接する山林が追加指定された。今回紹介する大型五輪塔は、追加指定地の中にあるものである。

五輪塔は山道の脇に正面を東に向け、3段の基礎(基壇)の上に建てられている。基礎(基壇)は3段にわたり複数の直方体の来待石で囲われているが、五輪塔本体に比べ風化の度合いが浅いので、後世増補されたものであろう。五輪塔の両側には、宝篋印塔の相輪や笠が散乱していたが、北隣に所在する



第64図 月照寺裏山五輪塔 実測図

佐藤家の墓地の螢域を造成された際に整理され、ばらばらの状態で積まれたのではないかと推測する。

五輪塔

五輪塔は来待石製である。空風輪は、当初のものは失われたようで、宝珠形の来待石製品が代わりに載せてある。火輪から地輪までの高さは132cmである。

火輪は、高さ40cm、上辺30.6cm、下辺61cmを測り、底の上の線は、中央から縁部(突端部)に向けてS字状にカーブする。突端部辺80cm、上部に径18.6cm、深さ不明の柄穴がある。

水輪は、高さ45cm、上径46cm、下径46cmを測り、最大径は下端から22cm上で66.5cmである。

地輪は、高さ47cm、上辺62cm、下辺60.8cmを測り、中位で1～1.5cmほど胴張りとなる。正面の左右と中央部に年号や戒名などの文字が陰刻されているが、大変風化が著しく、全部の文字の解読は困難である。拓本などで検討した結果、現段階では、

右側：□保四□丁亥

中央：□□□□本 居士

左側：仲春行□日□(逝)去

と読める。右側の文章は、「□保四」と「丁亥」という干支から推測するならば、「正保四年丁亥」と推定できる。正保4年(1647)は松平家初代松江藩主直政の代である。上級家臣の墓石であろうか。今後検討を要する。

宝篋印塔

五輪塔の周囲には宝篋印塔の残欠が数点あり、実測したのは笠部のみである。総高30.4cm、復元高32cm。下端幅34cm。上方の階段は2段、下方の階段は3段ある。隅飾は、下端幅11.6cm、高さ左14cm、右15.8cmを測り、上外側に開く。隅飾りは薬研彫りで、縁取り文様を刻む。

他に、高さ51cm程度の相輪が2本あり、少なくとも2基の宝篋印塔が存在していたと考えられる。

(h) 三代長兵衛夫妻宝篋印塔

出雲市美談町に所在する興源寺には、旧家の三代家第4代夫妻の墓と伝える大型の宝篋印塔2基が並んで残されている。興源寺は、戦国大名小早川隆景が2代前の祖先である小早川正平のために建立した古刹で、付近には小早川正平の墓と伝える宝篋印塔が知られている(西尾・樋口2004)。紹介する三代家宝篋印塔は小早川正平の墓より北約100m程に位置し、興源寺本堂横の丘陵地を加工して墓域とした三代家墓所の一角に建てられている。

三代家(屋号元之沖)は、今回話を伺わせていただいた三代正邦氏で14代を数え、家伝によると、戦国期末頃、三代家3代の時に大原郡三代村(現雲南市加茂町三代)から美談周辺の新田開発のために移住したと伝える。以後、美談村の庄屋などを勤め、4代長兵衛は新田開発や村政に多くの功績を残したという。4代長兵衛の子である5代目長兵衛は、故あって島根郡長海村(現松江市長海町)に移り、そこで成功をおさめ、4代長兵衛(寛文8年[1668]没)とその妻(天和2年[1682]没)の死に際し

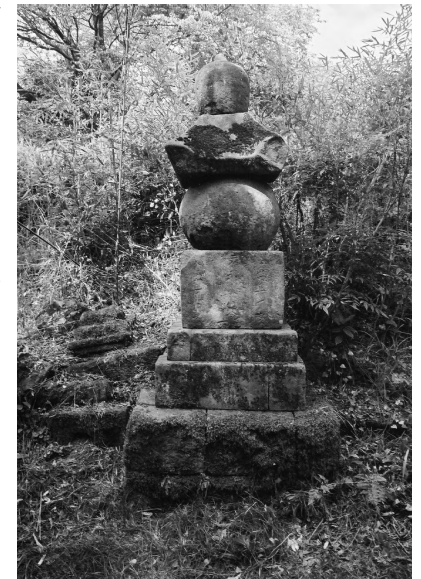


写真145 月照寺裏山五輪塔



写真 146 三代長兵衛夫妻宝篋印塔（遠景）



写真 147 三代長兵衛夫妻宝篋印塔

では、墓石として今回紹介する大型の宝篋印塔を建てたという。三代家には、家伝や系図を纏めた「三代家代々歴史並小譜」と位牌が残されており、宝篋印塔の年代観とも相まって、大型宝篋印塔造立の背景を概ね正確に伝えていると考えられる。

三代長兵衛宝篋印塔

正面向かって右側（南側）の宝篋印塔（三代長兵衛宝篋印塔）は、台石の上に建ち、隅飾突起の先端部を欠く以外は、各部が揃っている。基礎から相輪先端までの総高は 268.5 cm で、台石を含めた総高は 280.5 cm である。

相輪は、総高 111 cm で、伏鉢、受花、九輪、受花、宝珠の順に下から作られていると考えられるが、上下受花に花卉の表現はなく、上部受花のあたりと思われる突帯は、その部分が本来のどの部分を示すものなのかは、比定しにくい。伏鉢の下端径は 34 cm で、柄を有する。九輪の高さは 60 cm、上端径 25 cm、下端径 27 cm、最大径 32 cm で、九輪は浅い沈線によって表現されている。宝珠は高さ約 16 cm、最大径 26.5 cm である。

笠は、上部 4 段、下部 2 段の階段を作り出し、高さ 56 cm、軒幅 73.5 cm、上端幅 33 cm、下端幅 61.5 cm である。上部階段は上から 1 段と 2 段、3 段と 4 段が装飾的に表現されており、本来階段状にされるべきであるような階段表現にはなっていない。また、上端には相輪との接続部分である柄穴が作られ、上端径約 23 cm で、深さは観察できなかった。隅飾は、先端が欠けているものの、復元される隅飾幅は 77 cm で、やや外反している。隅飾の側面には、来待石に特徴的な文様が施されているが、直線的な文様の下に描かれる線刻を省略していることなどから、簡略的な表現である。

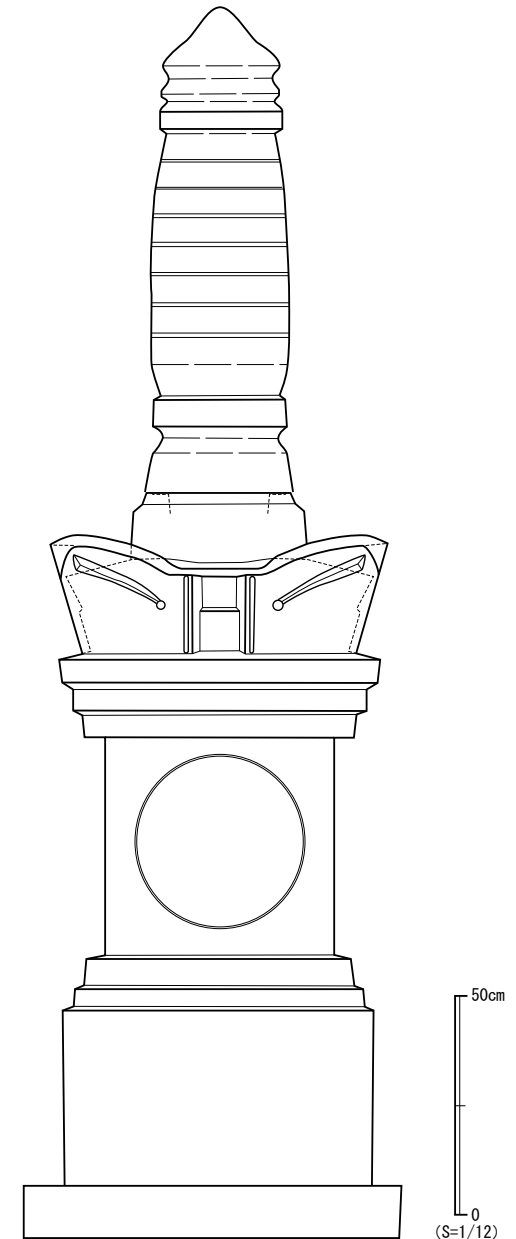
塔身は、高さ 95.5 cm、下端幅 52 cm、上端幅 52.5 cm で、四面にはそれぞれ線刻した月輪内に梵字を配している。正面でのみ梵字を読むことができるが、他の三面は風化のため剥落している。月輪は径 38.5 cm である。

基礎は、上部が 2 段の階段状で、高さ 50.5 cm、上端幅 62.5 cm、下端幅 70 cm、階段下幅は 71.5 cm である。塔身との接続面は、基礎上端よりも 1 cm 程度膨らんでいる。正面には、銘文が刻まれているが、風化・摩滅のために読み取ることができない。

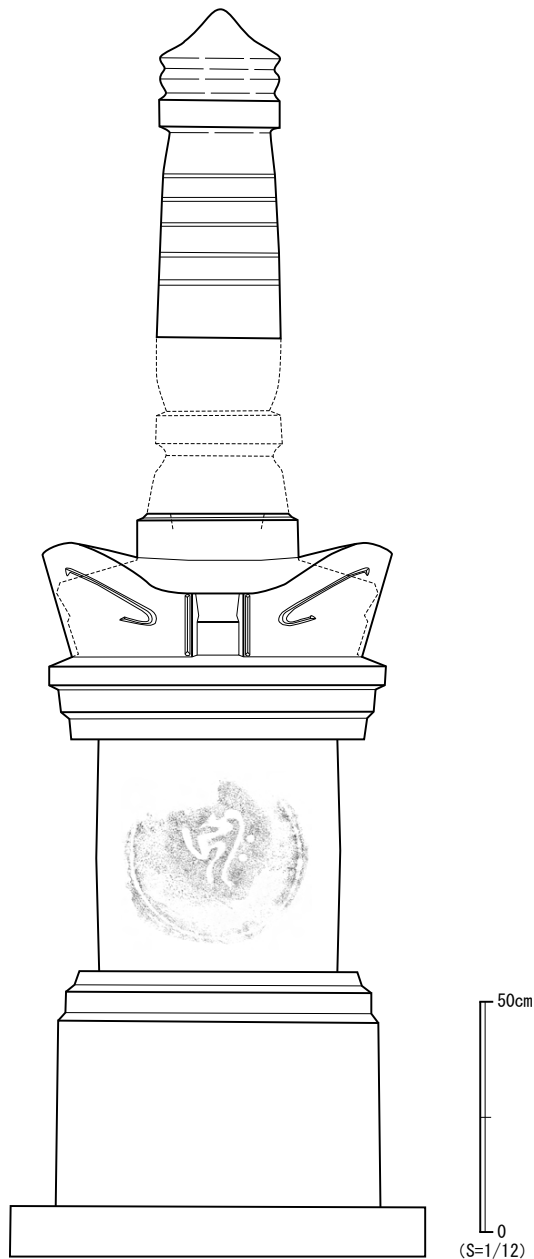
台石は来待石製で、数個の石材を組み合わせている。側面には、荒いノミ調整が確認できる。高さは、12 cm、幅 86 cm である。

三代長兵衛妻宝篋印塔

正面向かって左側（北側）の宝篋印塔は三代長兵衛妻の宝篋印塔で、台石の上に建ち、相輪の根本が折れているが、各部は揃っている。基礎から相輪先端までの総高は約 240 cm で、台石を含めた総高は約 251 cm である。石材は来待石製である。



第 65 図 三代長兵衛宝篋印塔 実測図



第 66 図 三代長兵衛妻宝篋印塔 実測図

相輪は、伏鉢、受花、九輪、受花、宝珠と作られていたと思われるが、九輪の下部から伏鉢、受花が折れており、底部を整えて笠上端と接合している。相輪の復元高は約 90 cm である。現存する九輪は高さ 44 cm、上端径 22 cm、下端径 27 cm、九輪は浅い沈線で表現されている。上部受花は高さ 13.5 cm、最大径 26.5 cm で、花卉の表現はない。宝珠は高さ 10.5 cm、最大径 26 cm である。

笠は上部 4 段、下部 2 段の階段を作り出し、高さ 49 cm、軒幅 73 cm、隅飾幅 76 cm、上端幅 30.5 cm、下端幅 64 cm である。上端には、相輪との接合部である径 20 cm の柄穴が掘られている。隅飾はほぼ直線的に開き、側面には線刻で文様をつけている。

塔身は、高さ 50 cm、下端幅 52 cm、上端幅 52 cm、最大幅 53 cm で、やや胴が膨らむ。四面それぞれに線刻した月輪内に梵字を配している。

基礎は、上部が 2 段の階段状で、高さ 51 cm、上端幅 60.5 cm、下端幅 70 cm で、階段下幅は 66 cm である。側面には文字が刻まれており、大半は判読できないが、正面左側面には「三代〇〇」という文字が判読できる。ご当主の三代正邦氏によれば、しばらく前までは「三代長兵衛」と読めたという。

台石は、高さ 11 cm、幅 90 cm で、2 枚の石材を組み合わせている。

3) 16 世紀末から 17 世紀における来待石製石塔の変遷

来待石製石塔の変遷については、これまでも 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて、紀年銘資料などの基準資料の報告と変化の方向性が指摘されてきた（間野 2001）。しかし、17 世紀前葉以降の年代を知る資料は乏しく、特に五輪塔の年代的な変化は、型式学的方法と発掘調査による成果のみで推定されていたに過ぎず、不明瞭な部分も多かった。



写真 148 三代長兵衛妻宝篋印塔

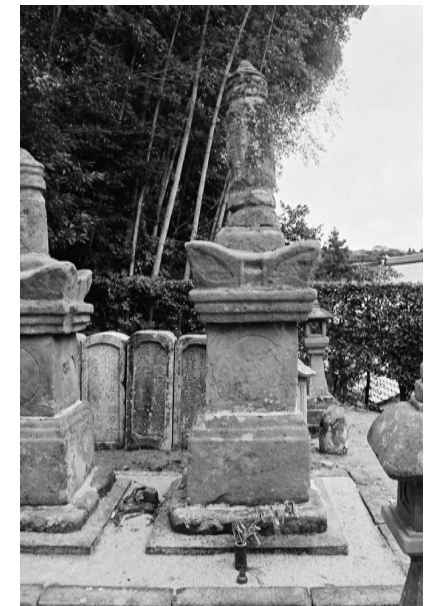


写真 149 三代長兵衛妻宝篋印塔

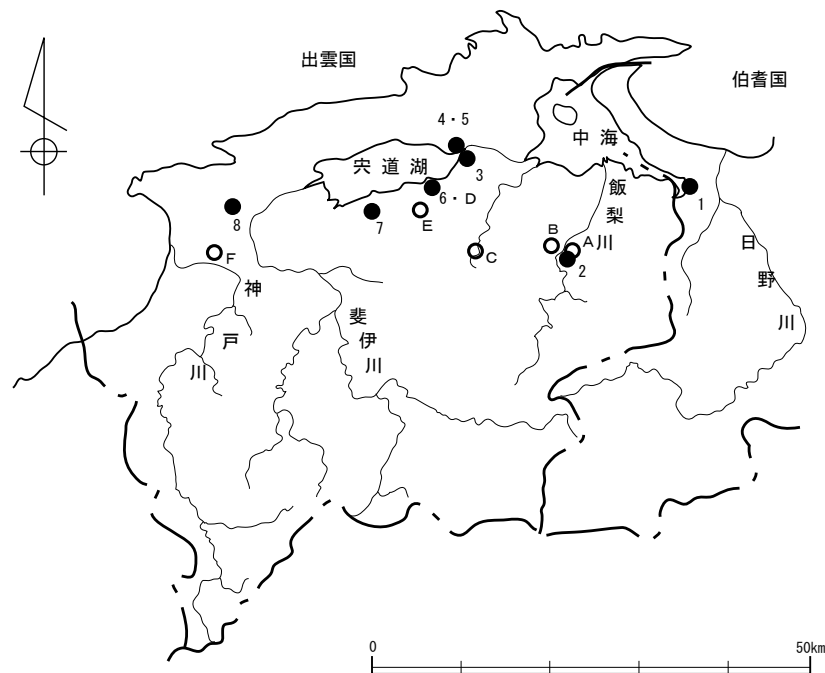
今回の報告を含めて、年代の分かる宝篋印塔・五輪塔は以前より増えており、来待石製石塔の変遷に年代的な考察を詳しくおこなえる状況となった。ここでは来待石製石塔の変遷について、16世紀末から17世紀の宝篋印塔・五輪塔の形態変化を概観し、各部分ごとに変化の特徴を整理したうえで、その変遷から読み取れる諸問題を指摘したい。

(a) 基準資料の諸特徴

今回報告した石塔のうち、記録や紀年銘などで造立年代を確定できるものに、堀尾吉晴墓五輪塔、堀尾忠晴五輪塔、天倫寺裏山五輪塔、月照寺裏山五輪塔、三代長兵衛夫妻宝篋印塔などがある。それらを含めて、基準となる紀年銘をもつ石塔を概観する。

宝篋印塔

① 岩屋寺境内宝篋印塔【松江市宍道町東来待】（第4章1参照）



● 大型石塔の分布

1. 清洞寺跡五輪塔群 2. 堀尾吉晴墓五輪塔 3. 堀尾忠晴五輪塔 4. 天倫寺裏山五輪塔
5. 月照寺裏山五輪塔 6. 堀尾忠氏宝篋印塔 7. 伝大野次郎左衛門墓五輪塔
8. 三代長兵衛夫妻宝篋印塔

○ 年代を考察するうえで参考となる石塔

- A. 親子観音 B. 祖父谷丁古墓 C. 谷ノ奥遺跡 D. 堀尾民部宝篋印塔
- E. 岩屋寺境内宝篋印塔 F. 尼子義久夫人宝篋印塔

第67図 年代基準となる宝篋印塔・五輪塔と大型石塔の分布

基礎部分に「文禄五年（1596）」の紀年銘があり、来待石製宝篋印塔では、現在最も古い年号を有する石塔である。

石塔の特徴は、基礎、塔身に中位でふくらみがある造りとなっている。塔身には、梵字が大きく刻まれている。笠では、相輪に続く上部段級の上から2段ははっきりとした様子でつづいていない。隅飾突起は、ほとんど外反せず、直線的に上に立ち上がり、四角い形状となっている。側面に施された文様は、上に偏り、直線的な蕨手状のものとなっている。相輪は、あまり高さがなく、九輪の突帯間の幅は狭い。

② 親子観音（堀尾勘解由）石廟内宝篋印塔【安来市広瀬町富田】（第2章4参照）

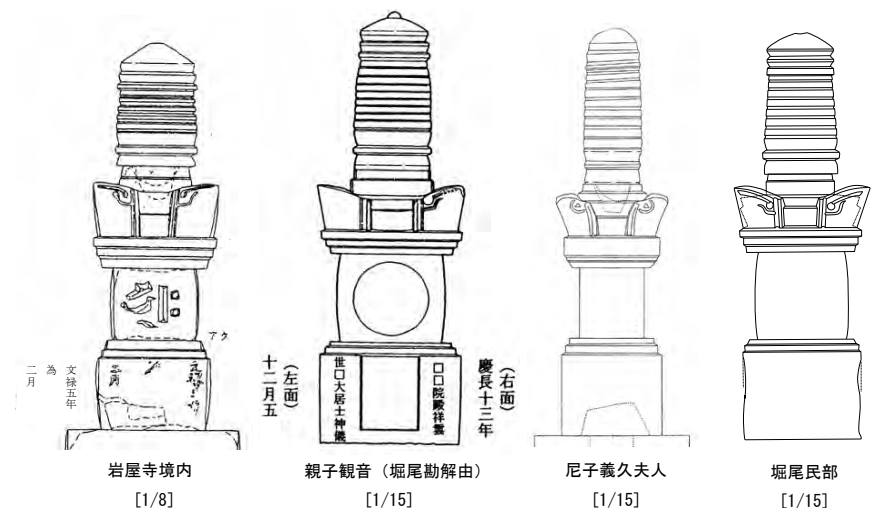
富田城内に所在し、石塔は寄棟平入屋根を有する親子観音と呼ばれる大型石廟内に納められたものである。石廟の正面入り口を除いた四周の外壁面には、四十九院が刻まれている。正面入り口には、観音開きの扉を有していたと考えられるが、現在では失われている。基礎の正面・左右側面に銘が刻まれており、正面には戒名、向かって右側面に没年「慶長十三年（1608）」、左側面に没月日「十二月五」が刻まれている。

基礎・塔身ともに、側面中位に若干ふくらみを有する。塔身の正面には蓮座が刻出されている。塔身には、月輪内に梵字が刻まれる。笠の上部階段の上から2段は若干階段状に作られており、隅飾突起はやや外反し、突起の上縁は、中央に向かってやや下がる台形状になっている。側面に施される文様は、やはり蕨手上の直線的なものである。相輪は、やや高さが増し、九輪の突帯部分の幅が広くなり、溝部分の幅は狭い。

また、本石塔は、戒名に「□（桂カ）□院殿祥雲世□大居士靈儀」と読める可能性がある。宝篋印塔に刻まれた年月日と没年月日が一致する人物としては、「堀尾古記」（松江市史編集委員会編 2018）の慶長13年に「堀尾勘解由果ル、極月五日京ニテ」と記され、若くして亡くなった堀尾勘解由の名前が挙げられる。

③ 尼子義久夫人宝篋印塔【出雲市渡橋町】

出雲・観音寺に所在する尼子義久夫人宝篋印塔（間野 2002）は、石塔自体に紀年銘はない。富田城



第68図 大型石塔以外の年代基準となる宝篋印塔

主である尼子義久の妻は、永禄9年（1566）の尼子氏滅亡によって、出家し円光院と称した。『雲陽誌』によると、観音寺において慶長15年（1610）に没したとされ、その墓として境内に本石塔が造立された。このような伝承から、1610年以降の間もない時期の宝篋印塔と考えられる基準資料である。

基礎・塔身ともにふくらみをもたず、直線的な立方体の形態となる。塔身はやや縦長になる。笠の下部階段は、笠下端から軒にかけて、階段状に造るものの直線的につながる。上部階段の上から2段はやや傾くが、階段状に造られている。隅飾突起はゆるやかに外反し、近い上縁は、隅から中央に向けてカーブをもつ形態となっている。側面の文様は、曲線的となっている。相輪は、九輪の突帯部分の幅が広く、溝部分の幅も広がっている。宝珠の先端は尖らず、丸くおさめている。

④報恩寺・堀尾民部石廟内宝篋印塔【松江市玉湯町林村】（第2章4参照）

報恩寺の本堂裏の石廟内に納められている宝篋印塔である。石廟の外壁には、親子観音と同じように、四十九院が刻まれ、そのうちに「實山榮眞大居士」と戒名が刻まれている。過去帳によれば、この戒名を持つ人物は「元和七年酉辛三月 堀尾山城守家臣也 采女□（ちか）□（ちか）」と記されており、「采女ちち」とすると、堀尾采女の父親である堀尾民部の石塔と考えられる。「堀尾古記」では、堀尾民部は「元和六年三月六日 民部果ル」とあることで、没年が1年異なっている。いずれにしろ、元和6・7年頃の1620年前後に造立された宝篋印塔と考えられ、年代の分かる基準資料である。

基礎は風化が著しく、胴張りかどうかは不明だが、塔身はわずかに胴張りの形態である。笠の上部階段の上から2段の形状は、はっきりとした階段状とはならない。隅飾突起はゆるやかに外反し、側面に施されている文様は、側面の半分より上に刻まれている。相輪の九輪は、突帯部分の幅が広く、突帯と突帯の間は浅い溝で区画されている。

⑤三代長兵衛夫妻宝篋印塔【出雲市美談町】（前節参照）

興源寺の裏山の墓地内に所在する。

基礎・塔身ともに直線的な作りである。笠の上部階段の上から2段目の縦幅が広くなり、階段の形状は、ゆるやかである。隅飾突起はゆるやかに外反し、側面に施される文様は眉毛のような文様のみとなっている。相輪は、九輪で突帯部分が広く、突帯部分を区画するように、浅く細い溝によって区画される。

五輪塔

五輪塔はこれまで紀年銘を有するものはなく、型式学的な型の変化から変遷を考察していた。特に、これまで参考としてきたものは谷ノ奥遺跡出土の五輪塔と、祖父谷丁石塔の石塔残欠のみであり、詳細な変化の過程については課題であった。今回の報告では、年代を把握することのできる基準資料を得



写真 150 尼子義久夫人宝篋印塔

たことから、これらもあわせて特徴を拾い上げていく。

①伝大野次郎左衛門墓五輪塔【松江市宍道町上来待】（前節参照）

大野次郎左衛門墓と伝えられているが、その由来は明らかでない。石塔自体に紀年銘などはないが、諸特徴から、型式学的に来待石製五輪塔で古い様相を有する石塔である。

地輪は横幅に対して、縦幅のほうが長い縦長長方形となる。水輪は、整備な球形ではなく、丸みを帯びた円柱に近い形状である。火輪は、縦方向に長く、軒の上辺は中位から隅に向けて反りあがっている。風輪は、下方が碗形にすばまり、空輪はいびつであるが、丸みを帯びた宝珠状に造られている。

②谷ノ奥遺跡五輪塔【松江市八雲村岩坂】

国道432号の改良工事の際に調査された谷ノ奥遺跡（八雲村教育委員会2002）は、谷の中位に張り出した丘陵の尾根斜面に立地した遺跡である。中世末から近世に初頭にいたる墓群が発掘され、これらの墳墓に伴うものと考えられる、来待石製五輪塔残欠が出土している。また、五輪塔は来待石製以外に凝灰岩製のものも出土している。五輪塔はすべて残欠であるため、各部材の正確なセット関係は不明であるが、いずれの部位の残欠も同様な形態をしていることから、どの部材も同時期のものと思われる。

水輪はやや横に扁平な形態で、最大幅は中位ないしは中位より若干上にある。火輪はかなり扁平なもので、軒は中央から隅にかけてゆるやかに反りあがっている。空風輪は砲弾形で、先端はやや丸みを有する。

③堀尾吉晴墓五輪塔【安来市広瀬町富田】（第2章1参照）

富田城内の蔵倉寺境内奥に所在する大型五輪塔である。堀尾吉晴は慶長16年（1611）に没しており、石塔の規模・所在している場所などから、堀尾吉晴を葬ったという信憑性は高い。ただし、五輪塔の建つ基壇は石垣を積み直していると思われることから、五輪塔自体も積み直された可能性もある。

水輪はやや横に扁平で、胴部が隅丸方形に近い形で張る。火輪の軒は上下とも、平行で、隅部分で反りあがる。軒隅から火輪上端に向けては、比較的直線的につながる。空風輪は、砲弾型をなし、空輪と風輪の間は空輪の上端が水平的に削られ、空輪を緩やかに整形して、空輪と風輪を分ける溝としている。

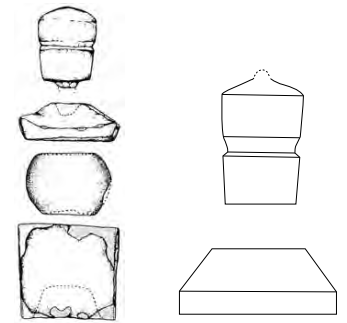
④天倫寺裏山五輪塔【松江市堂形町】（前節参照）

松江市市街地の西側で、北から宍道湖に向けてのびる丘陵先端に位置する天倫寺の裏山に所在する五輪塔である。地輪部分に、「慶長二 丁酉仲口四日」の紀年銘がある。空風輪を欠くほかは、揃っている。

水輪は扁平で丸味を帯びており、最大幅は中位にある。火輪の軒は、下縁は水平で、上縁は上方に反りあがる。軒隅から火輪上端に向けては、やや湾曲しながらつながっていく。形態的な諸特徴や文字の状態から刻まれた紀年銘は追刻の可能性もあり、年号をそのまま造立年とはしがたいため、あらためて後述の「変遷上に見られる問題点」において詳述したい。

⑤堀尾忠晴五輪塔【松江市栄町】（第2章3参照）

圓成寺の裏山にある堀尾忠晴墓所に所在する。堀尾忠晴は、寛永10年（1633）に江戸で没し、江戸駒込養源寺に埋葬されたが、寛永12年（1635）、京極忠高は圓成寺に忠晴の分骨を葬り、五輪塔を造立した。



谷ノ奥遺跡
五輪塔
[1/15]

祖父谷丁石塔
[1/20]

第69図 年代考察上、参考となる五輪塔

水輪は中央に最大径をもつ、球形である。火輪の軒は下辺が水平で、上辺が中央では水平で隅の部分では反りあがっている。空風輪は、風輪部分が筒状であるが、空輪では整った宝珠形を呈している。

⑥月照寺裏山五輪塔【松江市外中原町】（前節参照）

松江市市街地の西側に所在する月照寺の裏山の丘陵上に位置する。地輪に「□保四〇丁亥」の紀年銘が読めることから、正保4年（1647）の可能性が高い。

水輪は、扁平で丸みをもち、最大径は中位にある。火輪の軒は、下端が直線的で、上縁は、隅部分で宝篋印塔の隅飾突起のように中心から隅にかけてS字状にカーブしている。隅から火輪上端にかけては、若干湾曲しながらつながっている。

⑦祖父谷丁石塔【安来市広瀬町広瀬】（前節参照）

祖父谷の入り口部分の祠に集積された石塔群である。石塔の石材は、砂岩・安山岩・凝灰岩など様々であるが、この中にひととき大きな来待石製五輪塔が存在している。火輪と空風輪しか現存していない。石塔群は多数の石塔が寄せ集められているが、大きさから考えて、この2つの部材が組み合う可能性は高い。

火輪は軒の下端と上端が平行し、四注は直線的に火輪の上端につながっている。空風輪は、砲弾形で、空輪と風輪の間は空輪の上端は直線的に削られ、空輪を緩やかに整形して、空輪と風輪を分けている。

また、紀年銘を有するが、正確な造立年代に検討を要する資料として、鳥取県米子市西町に所在する清洞寺跡五輪塔群の紀年銘を有する3基の大型五輪塔がある。

⑧加藤光泰五輪塔【米子市西町】

加藤光泰五輪塔（佐伯・加藤 2006）は、地輪に戒名とともに、「文禄三年（1594）八月二十八日」と紀年銘が刻まれていたとされる五輪塔である。記された没年には、加藤氏は米子に入府しておらず、石塔が造立されたのは、加藤氏が米子に配された慶長15年（1610）から元和3年（1617）の間の時期と考えられる。

五輪塔は、全体的に風化が進んでいる。地輪は、横幅に対し、縦幅のほうが長い。水輪は、どれだけ丸みを帯びていたかは不明であるが、横に扁平である。火輪の軒は、下辺と上辺が平行し、隅部分で緩やか上方に反る。隅から上端への四注は緩やかに湾曲しながらつながる。空風輪は、風輪の若干下方がすばまる形状をし、空輪は上端が丸くなっている。

⑨池田由之五輪塔【米子市西町】

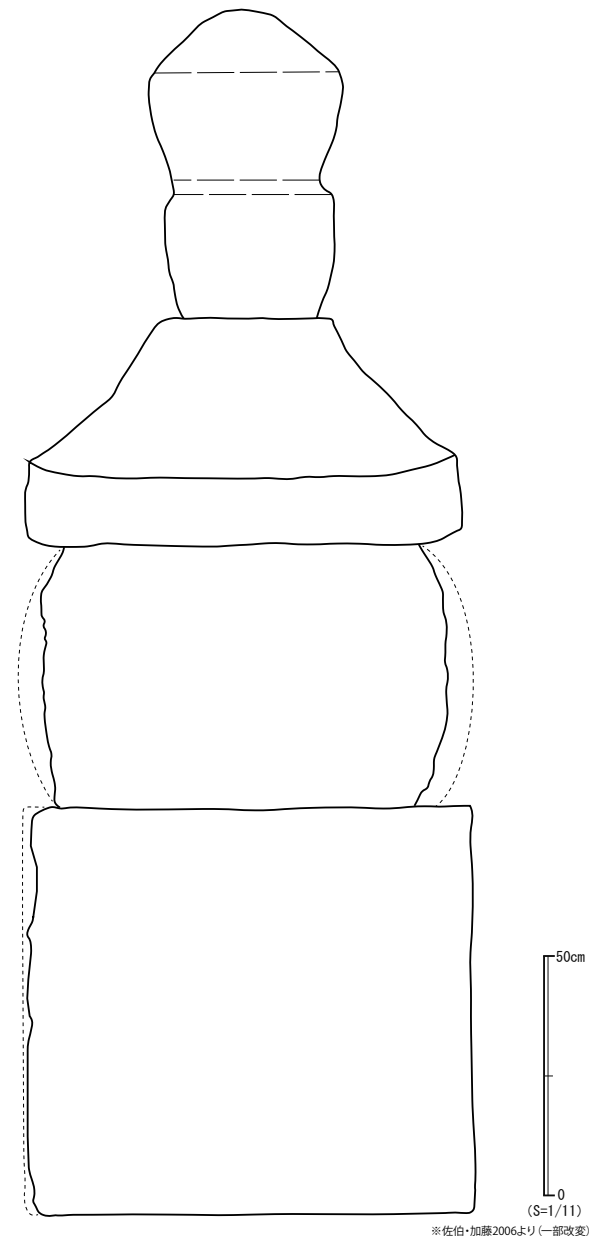
池田由之五輪塔（佐伯・加藤 2006）は、地輪に戒名とともに、没年が記された五輪塔である。没年は、「元和四年午歳」とあり、1618年以降の造立である。

五輪塔は、空風輪を欠いている。水輪は、扁平ではなく、やや縦に長くなっている。最大径の位置は、風化のため、不明である。火輪は軒の下辺は、水平で、上辺は隅の近くで反りあがっている。隅から上端へかけての四注は緩やかに湾曲する。

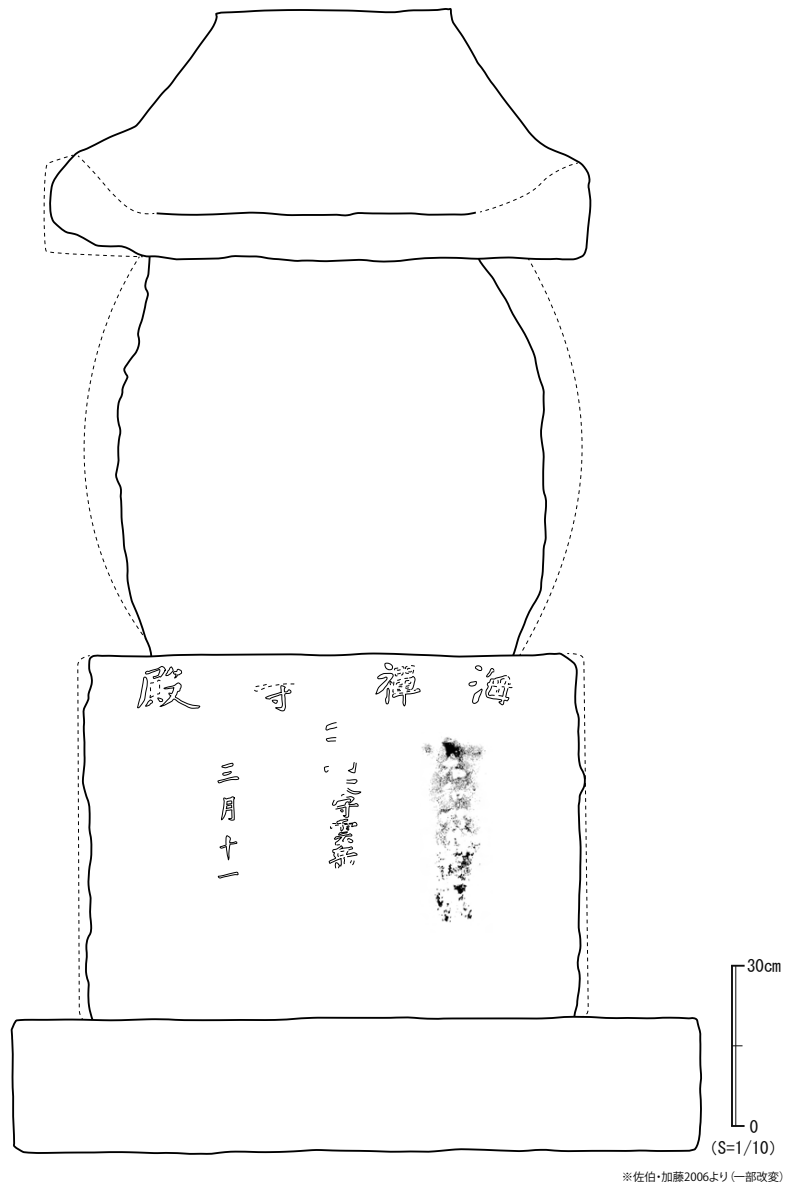
⑩池田由之妻五輪塔【米子市西町】

池田由之妻五輪塔（佐伯・加藤 2006）は、地輪に戒名とともに、「慶長十七年（1612）二月五日」の紀年銘を有する。しかし、池田氏が、米子に入府するのは元和3年（1617）となるため、没年が直ちに石塔の造立年代を示すものではない。元和3年（1617）以降で、かつ、元和4年（1618）の池田由之の没年に近い年代に造立されたものであろう。

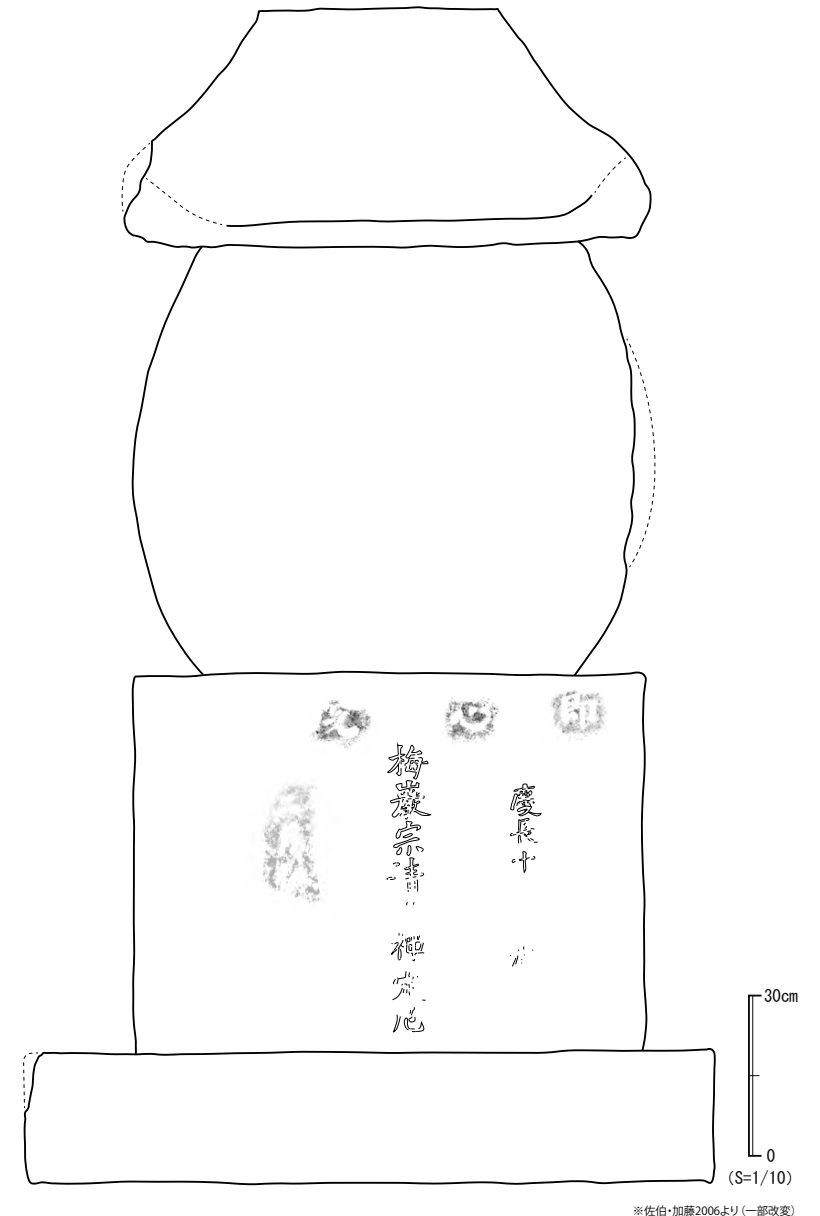
五輪塔は、空風輪を欠く。水輪は、縦に長く、最大径が中位よりも若干下にある。火輪は扁平で、風化が著しいが、軒の下辺は水平なのに対し、上辺は隅の近くで反り上がっている。火輪の隅から上端への四注は、緩やかなカーブをもちながらつながる。



第70図 加藤光泰五輪塔 実測図



第 71 図 池田由之五輪塔 実測図



第 72 図 池田由之妻五輪塔 実測図

(b) 16世紀末から17世紀の石塔の変遷

宝篋印塔の変遷

最も古い紀年銘もつ宝篋印塔は岩屋寺境内宝篋印塔（以下、「岩屋寺境内例」）で、文禄期（1592～1595年）に造立されたものである。ここでは、最古の例から三代長兵衛夫妻宝篋印塔（以下、「三代長兵衛例」）に至るまでの形態変化を整理していく。

①基礎

基礎上部に2段の階段を有するのは、該期を通じて共通し、この基本的な形態は、特に変化することはない。

親子観音（堀尾勘解由石廟）内宝篋印塔（以下、「親子観音例」）では、正面の格狭間に蓮座を有するという文様上の特徴があるが、それ以降の石塔には、レリーフは刻出されていない。形態では、岩屋寺境内例で、側面に膨らみが確認でき、親子観音例でも同様の形態は確認できる。しかし、親子観音例のよりも後の尼子義久夫人宝篋印塔（以下、「尼子義久夫人例」）や、報恩寺・堀尾民部石廟内宝篋印塔（以下、「堀尾民部例」）では、側面が膨らむ形態は確認できない。

②塔身

文様上の特徴を見ると、岩屋寺境内例では梵字のみが刻まれるが、親子観音例以降には、月輪を彫り、梵字はその中に彫り込まれている。

形態では、最も古い岩屋寺境内例で胴部が張り、親子観音例でも、若干胴部が張っている。そして、尼子義久夫人例では、胴部は張っておらず、堀尾民部例では、胴部が張る形態となっており、三代長兵衛例では、胴張り形態ではなくなる。1620年代までは、胴張り形態が存続し、尼子義久夫人例のように直線的な塔身が出現するのは1610年頃からなのかは後述したい。

③笠

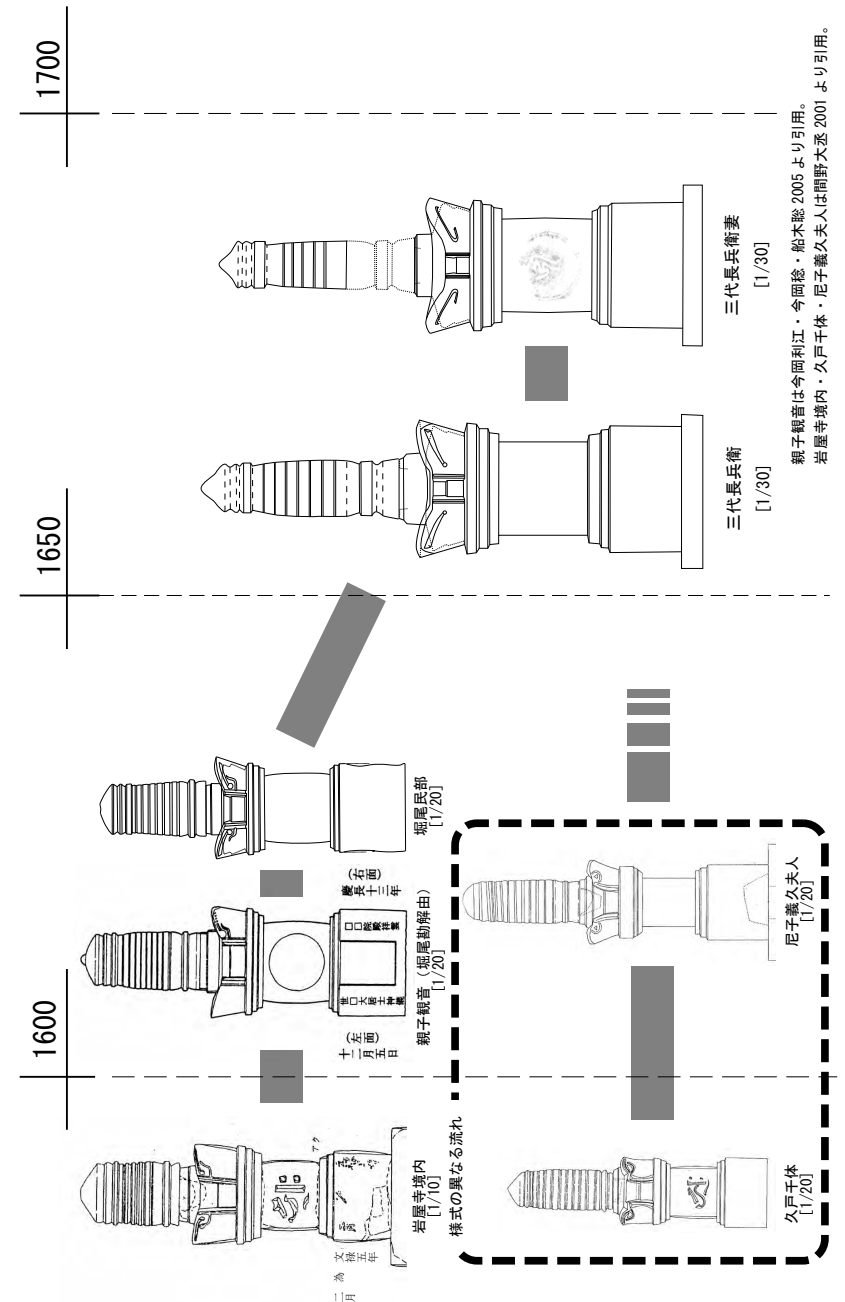
軒を挟んで、上部階段4段、下部階段2段というのは、基本的には変化しない。来待石製宝篋印塔出現当時から、上部階段の上から3・4段は、形骸化した階段となっている。

形態的な特徴で、特に顕著なのは隅飾の形態・文様であろう。岩屋寺境内例では、隅飾突起は角ばった側面形態で、隅はほぼ垂直に立ち上がる。親子観音例では、隅飾の側面上縁の中央よりの部分に丸みが生じ、隅も若干外反する。尼子義久夫人の石塔の例では、隅飾側面上縁の中央よりが、極端に丸味をもち、隅も明瞭に外反する。しかし、堀尾民部例では、尼子義久夫人例のように、隅飾上縁中央よりの部分が丸味を帯びず、隅から中央に向けて直線的に下がり、隅飾が台形状となっている。外反の度合いも親子観音例よりも若干開く程度である。三代長兵衛例では、隅飾の外反の度合いが、若干きつくなるが、側面の形態は、大きく変化するものではない。

隅飾側面の文様は、施される部位が親子観音までは上寄りに彫られているが、堀尾民部例では、中位から上に彫られるように、文様構成部分が、下に下がってきている。また、尼子義久夫人例では、最も上に施される、眉毛状の文様が省略され、それまでの文様に比べ、丸みを帯びた文様となっている。一方で、三代長兵衛例では、文様の下に施される受手状の文様が省略される。

この他、上部階段の表現のうち上部2段に注目すると、岩屋寺境内例や親子観音例では、1段目と2段目の階段表現は、はっきりとした階段状ではなく、緩やかにつながるように作られている。この特徴は、堀尾民部例や三代長兵衛例においても同じであり、三代長兵衛例では2段目の幅が広がる特徴がある。一方、尼子義久夫人例では、明瞭に階段状に造られているという特徴があり、直線的な表現となっている。ここでも、尼子義久夫人例の特異性が指摘できる。

④塔輪



第73図 17世紀における来待石製宝篋印塔の変遷

相輪は、岩屋寺石塔例では高さがあまりないが、親子観音例、堀尾民部例、三代長兵衛例と、時期を経るにつれて高くなっている。また、尼子義久夫人例では、突如として、相輪の高さが高くなっている。九輪部分では、岩屋寺境内例では九輪の突帯の部分の幅が狭く、溝と同じくらいの幅であるが、親子観音例では、突帯部分の幅が増し、堀尾民部例、三代長兵衛例で幅が広がっていく傾向にある。ただし、尼子義久夫人例では、突帯の広さが、親子観音例に比べて極端に広がっている。

このように各部分の変遷過程を整理したところ、従来考えていたよりも（樋口 2004）、他の属性においても変化を窺うことができた。変遷過程でみたように、来待石製宝篋印塔は、出現当初から笠部の階段表現や相輪の各部に形骸化の状況を窺うことができた。そして、形骸化したその特徴をもったまま、変遷していくことも窺うことができた。この変遷の中であって、尼子義久夫人例は、変遷過程の中で特異な資料であるが、このことについては後で考察してみたい。

五輪塔の変遷

①地輪

加藤光泰五輪塔（以下、「加藤光泰例」）では、地輪の横幅に対して縦幅のほうが長い縦長長方体であるが、堀尾吉晴墓五輪塔（以下、「堀尾吉晴例」）以降は、横幅のほうが長い横長長方体となる。

②水輪

伝大野次郎左衛門墓五輪塔（以下、「大野次郎左衛門例」）では、直方体の角を落として丸みを帯びさせたような形状であったが、1610年代前半の堀尾吉晴例や加藤光泰例では、扁平で横に張る形態となっている。最大径は、中位に位置する。そして、1610年代後半以降の池田由之夫妻五輪塔（以下、「池田由之夫妻例」）では、水輪が縦長になり、池田由之夫妻例で観察できるように、最大径は中位よりも下に位置する。洋ナシのような形状となっている。時間幅があるが、次に形状を確認できる寛永12年(1635)の堀尾忠晴五輪塔（以下、「堀尾忠晴例」）では、中位に最大径があり、球形に近い形状となっている。この形態は、正保4年（1647）の紀年銘のある月照寺裏山五輪塔（以下、「月照寺例」）でも同様の形体となっている。

③火輪

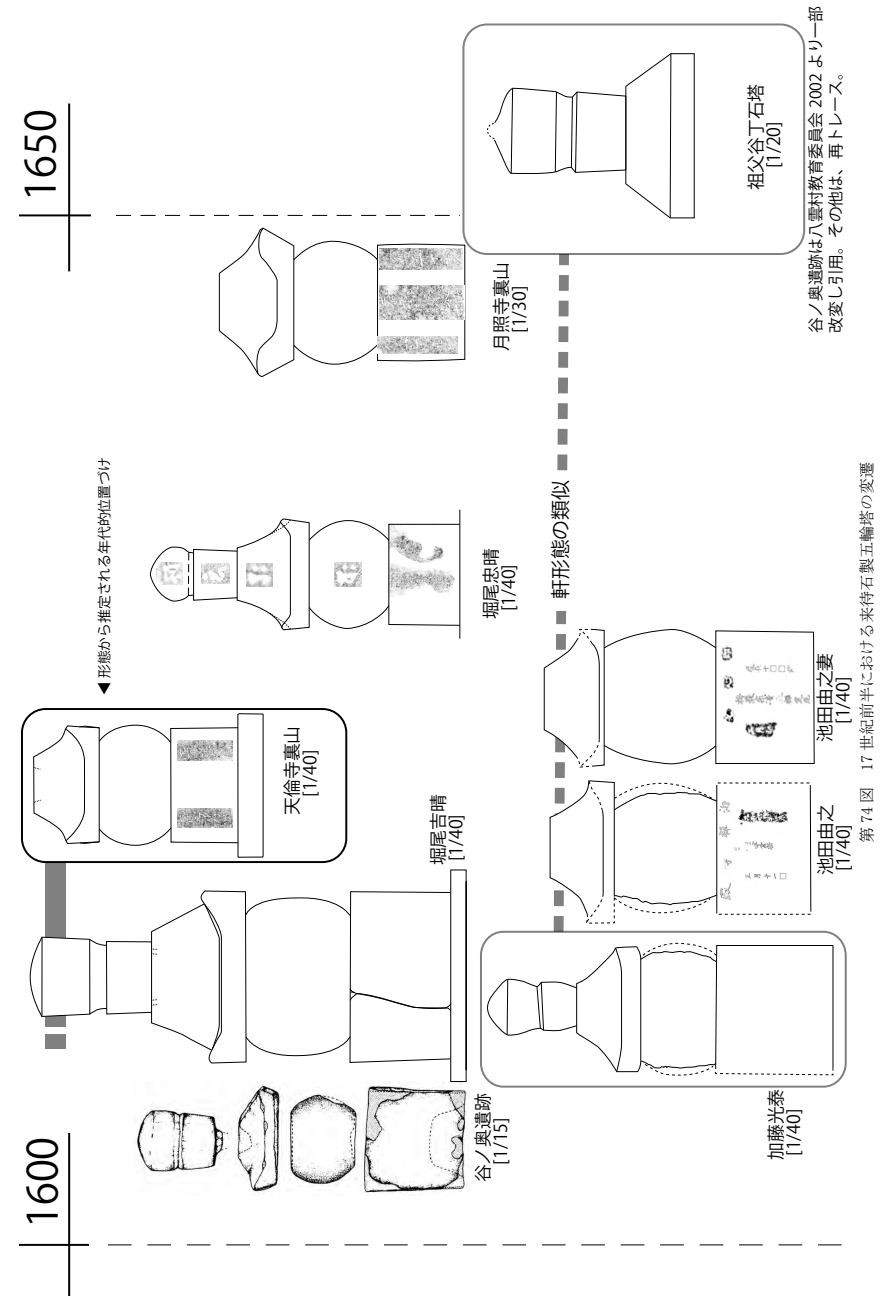
大野次郎左衛門例では、縦長の火輪となっているのに対し、それ以外の五輪塔では、横に扁平なものとなっている。

軒の形状では、大野次郎左衛門例では、軒の上辺が中央から隅に向けて反りがあがっている。堀尾吉晴例では、軒の上辺は、中央部で水平となり、隅に近づき反りがあがる形状となる。この形状は、池田由之夫妻例、堀尾忠晴例でも看取できる。正保4年（1647）の月照寺例では、軒の隅の反り上がりが、宝篋印塔の隅飾のような上がり方をなし、それ以前の軒の形状と、大きく形を変化させている。

また、加藤光泰例の軒の形状は、上辺と下辺が中央では平行に水平となっているが、隅の部分でどちらの辺も反り上がる形状となっている。このような形状は、同時期のものと考えられる堀尾吉晴例や池田由之夫妻例とは、形態が異なる。このような、軒幅が一定となりながら隅で反り上がる形状が、同時期に存在していたものと考えられる。

同じように、軒幅が一定で直線的な形状のものが、祖父谷丁石塔の火輪に認められる。年代は不明であるが、加藤光泰例の火輪の系譜で変遷したもので、軒の下辺が水平で上辺が反り上がる形態で変化するグループとは、別の変遷をたどるものかもしれない。しかし、現状では、それを裏付ける中間的な資料と資料数の不足から、推測の域を出ない。

④空風輪



第74図 17世紀前半における来待石製五輪塔の変遷



















空風輪は大野次郎左衛門例では、空輪がやや碗形をなし、風輪が丸みを帯び、形の張った宝珠の形状であるのに対し、堀尾吉晴例や谷ノ奥遺跡五輪塔では、空輪と風輪の間に溝で区画し、空輪の先端に丸みをもたせた砲弾状の形態となる。ところが、堀尾忠晴例では、空風輪の形態は、風輪が筒形の形態となり、空輪は宝珠の形態となっている。空輪の形状に注目するならば、先祖帰りのような整美な形態へと変化している。1620年以降の資料では、空風輪を欠くものが多い中で、変遷を論じるにはいささか危険であり、空風輪を有する石塔の資料数の増加を待つて再検討の必要があるだろう。

(c) 変遷上に見られる問題点

宝篋印塔

宝篋印塔の変遷では、基礎で、胴張りの有無・蓮座の有無、塔身で胴張りの有無、月輪の有無、笠部

第5表 基準資料となる宝篋印塔・五輪塔の諸属性

宝篋印塔		岩屋寺境内	親子観音	尼子義久夫人	堀尾民部	三代長兵衛	三代長兵衛妻	
特徴	相輪	総高に占める相輪高の割合	31.9%	39.7%	37.0%	32.4%	41.2%	不明
	笠	隅飾の形状						
		隅飾文様						
		上部段級の形状						
	塔身	側面の膨らみ	○	○	×	○	×	×
		月輪	×	○	×	○	○	○
		梵字	○	○	×	○	○	○
	基礎	側面の膨らみ	○	○	×	○	×	×
		格狭間	×	○	×	×	×	×
	年代の根拠		紀年銘	紀年銘	雲陽誌・伝承	過去帳・外壁の戒名	家伝	家伝
暦年代		1596年	1608年	1610年以降	1620年前後	1668年	1682年	
大型石塔の画期		毛利期	堀尾期	堀尾期	堀尾期	松平期	松平期	

五輪塔		堀尾吉晴	谷ノ奥遺跡	天倫寺裏山	堀尾忠晴	加藤光泰	池田由之	池田由之妻	月照寺裏山	祖父谷丁石塔
特徴	空風輪	空輪部	砲弾形	砲弾形	-	宝珠形	宝珠形	-	-	砲弾形
		風輪部	砲弾形	砲弾形	-	筒形	碗形	-	-	砲弾形
	火輪	形状	横長	横長	横長	横長	横長	横長	横長	横長
		軒の形状								
	水輪	形状	扁平で横張り	扁平で横張り	扁平	球形	扁平で横張り	縦長	縦長	扁平
		最大径	中位	中位	中位	中位	-	下位	-	中位
	地輪	形状	横長	正方形	横長	横長	縦長	横長	横長	横長
		年代の根拠	伝承・被葬者の没年	発掘調査	紀年銘	寺伝・紀年銘	戒名	戒名	戒名	紀年銘
		暦年代	1611年	17世紀初頭	-	1635年以降	1610～1617年	1618年以降	1618年以降	1647年
		大型石塔の画期	堀尾期	堀尾期	堀尾期	堀尾期	堀尾期	堀尾期	松平期	?

で、隅飾突起の形態・文様、上部階段の形態、相輪で相輪の高さ、九輪の突帯幅などの属性に変化が見られることを指摘した。岩屋寺境内例の永禄年間から、三代長兵衛例までの変化をたどる中で、尼子義久夫人例のみが特殊な存在として浮き上がってきた。尼子義久夫人例は、岩屋寺境内例・親子観音例で見られる変化の特徴とは異なり、また、年代的に続く堀尾民部例・三代長兵衛例とも変化の特徴が異なり、一線を画すものである。

尼子義久夫人例は、笠の下部階段が若干段をつけるものの斜めに軒につながる、隅飾突起の側面は、丸みを帯び、大きく外反する。隅飾の文様は丸みを帯びており、縦方向の蕨手状の文様が施される。上部階段の上から2段は明瞭な階段状に作られており、相輪の高さは比較的高い。このような特徴に類似する石塔に、久戸千体宝篋印塔（以下、「久戸千体例」）がある。相輪の高さが高く、隅飾にも丸みを有し、隅飾の文様にも丸みをもつなどの特徴を有する。塔身の胴が張り、月輪を有さないことから、岩屋寺境内例とさほど時期差がないものと考えられる。

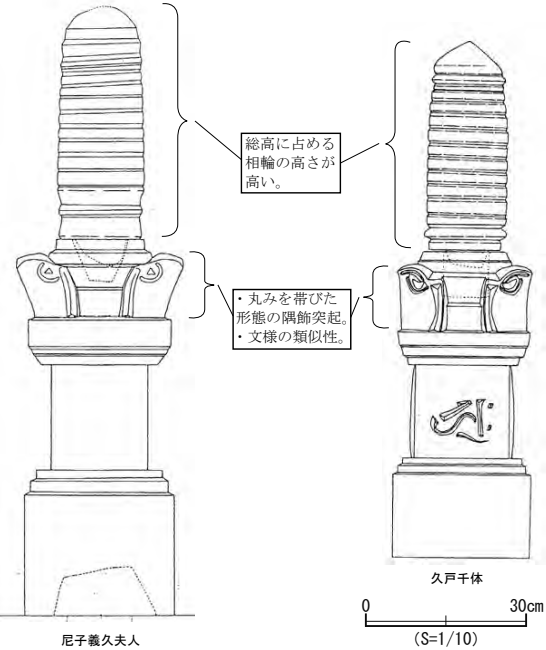
このように、久戸千体例と尼子義久夫人例につながりが見出せることから、来待石製石塔の変遷は、単一的に捉えられるものではなく、多面的な変遷が想定される。この差が、何に起因するのかは、製作地・生産職人などの可能性が想定されるが、多くみられる岩屋寺系列の石塔の数に比べれば、報告例は格段に少なく稀有な製品である（注1）。

五輪塔

五輪塔の変遷では、地輪の縦横比、水輪の最大径の位置や形状、火輪の軒の形状や高さ、空風輪の形態などに、変化がみられることを指摘した。変遷をたどる中で、加藤光泰例のように、同時期にあって、異なる火輪の軒形状を有するものが検出でき、祖父谷丁石塔の火輪へつながる変遷の一群がある可能性が指摘できる。問題は、五輪塔自体の紀年銘資料が1610年代に集中しており、1620年代以降の資料については堀尾忠晴例と月照寺例の2例で構築しているに過ぎない。このため、資料数の増加をもって、1620年代以降の変遷は再検討を要する。

ところで、天倫寺裏山五輪塔（以下、「天倫寺例」）は紀年銘を有するものの、形態的特徴より紀年銘の追刻の可能性があることから、変遷上に参照資料としなかったの、ここでその評価を述べる。

改めて、その形態的特徴を整理すると、地輪は横長長方体で、水



第75図 尼子義久夫人宝篋印塔と久戸千体宝篋印塔との類似点

輪は中位に最大径があり、胴張りの形態である。火輪は、横に扁平で、軒の下辺は水平、上辺は中央では水平であり、隅で反り上がる。

このような形態は、堀尾吉晴例に類似し、紀年銘の「慶長二 丁酉仲口四日」の年代とは10年ほどの差が生じている。大野次郎左衛門例の年代をどこまで下げて考えるかという問題と関連してくるが、堀尾吉晴例から、池田由之夫妻例への間に、水輪の変化が10年以内に起きていることを考えると、紀年銘にある慶長2年(1597)から堀尾吉晴例が建てられた慶長16年(1611)まで、同じ形態を10年間以上保持し続けているとは考えがたい。これらのことから、天倫寺例の紀年銘は追刻であり、石塔は1610年代前半のものである可能性がある。

(d) 小結

今回、基準資料の増加によって来待石製宝篋印塔・五輪塔の編年を再構築することができた。検討の中では、久戸千体宝篋印塔や尼子義久夫人宝篋印塔のように、変遷が一系統で論じ切れるものではなく、多系統の変化の可能性も指摘できた。このような、変化の系統性は、「石工」・「製作地」、または「消費層」・「信仰」などの差というように、どのような種別・区分で説明されるべきか、文献史料を含めた多角的な研究の必要性を含めて、今後の検討課題である。

しかし、一方で、基準となる資料の年代的な分布の濃淡があり、必ずしも正確に変遷を追えていないところもある。来待石製宝篋印塔・五輪塔の変遷において、基準資料の少ない時期を補強していくような資料の充実を期待したい。

注

- (1) 来待石製石塔の中での文様・形態などの様式差は、出雲市美談町の興源寺に所在する石塔にも看取することができる。この場合は、^{ふくみつし}福光石での宝篋印塔の表現様式を、そのまま来待石にもってきた資料であり、工人差と評価できる。(西尾・樋口 2004)

4) 来待石製大型石塔出現の背景とその意義

今回報告したもののうち、来待石製大型石塔とは、「概ね総高250cm前後のもので、宝篋印塔では基礎、塔身、笠の一边が60cm(2尺)以上、五輪塔では地輪、水輪、火輪の一边や径が60cm以上の石材を使用するもの」と、暫定的に定めており、管見にかかる中では、その多くが江戸時代初期に集中している。ここでは出雲国の領主の変遷を時代区分の目安とし、来待石製大型石塔の出現の背景とその意義を考えてみたい。

(a) 来待石製大形石塔の画期

16世紀末から17世紀における来待石製石塔の変遷を基にすると、来待石製大型石塔(五輪塔、宝篋印塔)では、堀尾氏の出雲入部、松平氏の出雲入部に画期を求めることができ、来待石製大型石塔の造立時期を次のように区分できると考えられる。画期に出雲国領主名を用いるのは、領主と大型石塔の変遷が深い関係を有するとともに、時期を理解しやすいからでもある。

I 期

I 期は堀尾氏の出雲入部以前の段階である。I 期の石塔として^{かなやま}金山五輪塔群1号塔(西尾・稲田 2004)があり、来待石の産地である松江市宍道町に所在する。金山五輪塔群1号塔は、宍道氏の菩提寺である^{きょうけいじ}経慶寺跡の小さい墳丘の上に存在し、毛利氏に属した宍道氏が造立した石塔と考えられる。

I 期の来待石製石塔は、確認できる範囲で数が少なく、また、来待石の産地に造立されている。

II 期

II 期は堀尾氏支配下の17世紀初めの慶長期から寛永期である。大型の宝篋印塔では堀尾忠氏宝篋印塔(松江市玉湯町)が、五輪塔では堀尾吉晴墓五輪塔(安来市広瀬町)、堀尾忠晴五輪塔(松江市栄町)、加藤光泰五輪塔(米子市西町)、池田由之夫妻五輪塔(同)が知られている。

この期の大型石塔は、松江藩主堀尾氏三代の墓・供養塔など、国主層のために製作されていることが特徴的である。堀尾氏は遠江国浜松城から出雲の富田城に入り、城府を松江に決めると、城下町建設を始めた。堀尾忠氏は慶長9年(1604)に亡くなり、報恩寺境内に大型宝篋印塔が建てられる。年代観や伝承が正しければ、この石塔が堀尾氏の最初的大型宝篋印塔である。次に、堀尾吉晴が慶長16年(1611)に亡くなり、巖倉寺に大型五輪塔が建てられる。3代目の忠晴が寛永10年(1633)に亡くなり、堀尾家断絶後、寛永12年に圓成寺に五輪塔が建てられる。

堀尾家の断絶後、京極忠高が松江藩主を継いだ。京極氏は1代限りで、造立石塔としては京極高次^{たかつぐ}供養塔(松江市竹矢町)が知られるが、石材は越前の^{しやうぐんこ}笏谷石である。一方、堀尾家家臣で二千石の重臣^{きんぎ}牧志摩^{よしなり}の来待石製宝篋印塔が慈雲寺(松江市寺町)に残る。

隣の伯耆国では、米子城近くの清洞寺跡(米子市西町)に3基の来待石製大型五輪塔が知られる(佐伯・加藤 2006)。1基は慶長15年(1610)に米子城主となった加藤貞泰が亡父加藤光泰のために建てた供養塔である。加藤家は元和3年(1617)に伊予大州へ転封となっており、在城9年間に建てられたと考えられる。また、他の2基の大型五輪塔は、加藤氏の後に米子城主となった池田由成が亡き父由之と母とのために造った供養塔である。石塔が建てられた時期は池田由成が城主であった寛永9年(1632)までのものである。

以上のように、II 期には国主層に関連して大型石塔が作られ、伯耆国西部まで分布が広がる。また、大型石塔ではないが、II 期には側面に塔婆を彫り出す初期の来待石製石廟の親子観音(安来市広瀬町)、報恩寺の堀尾民部石廟(松江市玉湯町)、殿様墓(雲南市三刀屋町)などが出現し、出雲国では堀尾氏にかかわる人物の墓や供養塔に使用されたと考えられている(樋口 2005)。なお、今回報告したように、堀尾氏の菩提寺である京都・妙心寺春光院でも堀尾氏に関わりがあると考えられる来待石製の大型無縫塔と大型舟形石塔が各1基存在することを確認しており^(注1)、これもII 期の特徴を示す事例と考えている。

III 期

III 期は、松平氏が松江藩主となった寛永期以降で、寛文期を中心とする17世紀中頃から後半にあたる。松江藩松平家初代の松平直政は寛文6年(1666)に亡くなり、松江市外中原町の月照寺の廟所に墓塔が営まれる。この墓石は大型の変形五輪塔であるが、石材はこれまでの来待石ではなく、花崗岩が用いられた。松江松平家では、2代以降の藩主も同じ花崗岩を墓石に使用している(松江市教育委員会 2000)。しかし、家老など松江藩の上級武士層や藩士の墓石は従来どおりの来待石が多い。

今回紹介したものとしては、五輪塔では月照寺裏山五輪塔(松江市外中原町)、宝篋印塔では三代長兵衛夫妻宝篋印塔(出雲市美談町興源寺内)がある。月照寺裏山五輪塔はやや小型で、造立者は今のところ不明だが、年代は正保4年(1647)と推定される。この時期には、付近に禅宗寺院の洞雲寺があり、その関係者かも知れない。興源寺三代家の宝篋印塔は、大塔(正面右)が寛文8年(1668)に死亡した4代当主三代長兵衛の墓石で、小塔(正面左)は天和2年(1682)死亡の長兵衛妻の墓石である。三代家は楯縫郡美談村で庄屋を務めるなどの有力農民で、この時期になると来待石製大型石塔は国主層のために製作されることはなく、松江藩の上級武士層^(注2)や、経費的負担を担保すれば有力農民層でも製作可能であったことが分かる。来待石製石龕が広く使用されるのもこの時期にあたる。

なお、興源寺・三代長兵衛夫妻石塔の後の来待石製大型五輪塔・宝篋印塔については、年代を確定できる報告例はなく、詳細は不明である。大型石塔の下限の時期については今後の課題としたい。

(b) 来待石製大型石塔の分布範囲

I期の石塔が石材の産地近くに造立されたのに対し、II期の来待石製大型石塔の特徴の一つは、分布範囲が大きく広がったことである。堀尾吉晴墓五輪塔（安来市広瀬町）、伯耆国の加藤光泰石塔（米子市西町）、池田由之夫妻石塔（米子市西町）などがそれである。加藤氏と池田氏は共に米子城主で、造立時期も元和から寛永期で、堀尾氏が出雲国を領有していた時期と重なる。

また、京都・妙心寺春光院にも来待石製大型石塔と呼べる無縫塔と舟形石塔が各1基確認されている。2基とも銘文が残存せず、年代は不明であるが、春光院は堀尾氏の菩提寺であることから、堀尾氏が断絶した後の石川家が巨大な石塔を出雲国から京都まで運んだものとされる。

なお、堀尾氏の後に松江藩主となった京極忠高は、寛永期に亡父のために宝篋印塔（京極高次石塔）を松江市竹矢町安国寺に建てているが、この石塔は笏谷石（緑色凝灰岩）製で、元の領国の小浜に近い越前（福井県）から運ばせている（岡崎・樋口2002）。石塔の移動には当時の葬送・供養観念の他に、故地・領地との関係も働いていたようで、石塔の分布を考える上での検討材料である。

(c) 大型石塔の画期とその背景

堀尾氏の入部と大型石塔

高さが250cm前後を超え、一辺が60cm（2尺）以上の石材を利用する来待石製の大型石塔が確実に出現し、定着するのは、17世紀初め（江戸時代初め）の慶長期から寛永期の大型石塔II期である。その背景には、織豊期から江戸時代初めにかけての全国的な大名の墓石の大型化が底流にはある。また、来待石石塔の場合、堀尾氏の出雲入部が大きな画期であったと考えられる。出雲地方最大の織豊系城郭である松江城築城と、その城下町形成にみられるように、織豊系の武将たちが戦国期を勝ち抜く中で獲得した高度な先端技術を、堀尾吉晴・忠氏親子を中心とする堀尾家臣団が出雲の地にもたらしたという出来事的一端として、来待石製大型石塔の出現と定着があったと理解したい。

採石・加工技術の変化

堀尾氏が入部し、松江を城府に定めて以降、城普請や武家屋敷、町屋建設など、江戸時代後期になると、建物の土台石や排水溝、生活用品などに来待石が大量に使用されている。石山から効率的に石を切り離す作業に「キリヌキ」技法があるが（福田1990、島根県教育委員会1998）、この技術がいつの時点で導入され、稼動し始めたかは依然不明ではあるものの、来待石を大量に生産する必要に迫られた堀尾氏入部以降（大型石塔II期）に導入・定着する可能性も考えられよう。

一方、堀尾氏一族の墓（あるいは供養塔）に使用された大型の石廟の側面は、厚さ10cm程度の薄い板石を組み合わせたものだが^{（注3）}、これほど薄い板石を製作する技術は極めて高度なものである。松江城に残る来待石製の排水溝は厚さ10cm程度の板石を組み合わせており^{（注4）}、来待石を加工しての薄い板材を大量に製作する高度な技術も、堀尾氏の入部による城、城下町建設で定着していったと推定されるのである^{（注5）}。

文献史料上では明らかではないが、製品の大型化や高度な加工技術、大量生産という新しい需要に応じるために、堀尾氏（またはその家臣団）により産地での石切（採石）集団と松江城下での石工（石材加工）集団という編成が行われた可能性もある。やがて近世をとおして、石切は来待地区周辺（石材産地）で、加工は松江城下でという分業形態が制度化され、固定化されていくという経過をたどったので

はなかろうか。

注

- (1) 松江石造物研究会では、2006年3月に京都・妙心寺春光院（堀尾家菩提寺）を訪れ、堀尾家霊屋の裏に高さ230cm程の無縫塔と高さ200cm程の舟形石塔を確認した。いずれも2尺以上の来待石部材を重ねたもので、五輪塔・宝篋印塔とは形態が異なるために、高さなどの単純な比較はではないが、大型石塔と呼べるものである。同院では多くの来待石製石塔と来待石製の大型石廟の原型とも推定できる笏谷石製の石廟などを確認した。
- (2) 松江藩の上級武士層の墓石等については今後の調査課題だが、慈雲寺（松江市和田見町）にある堀尾家重臣・牧志摩宝篋印塔などは、後の補修等もあるが。管見の範囲では大型石塔と呼べそうである。上級武士層の造立した石塔については、今後さらに調査を進める必要がある。
- (3) 今岡2006、西尾ほか2005bで、堀尾民部石廟（松江市玉湯町）、親子観音（安来市広瀬町）、殿様墓（雲南市三刀屋町）を紹介する。堀尾民部石廟の場合、石廟に7枚の板石を立て並べるが、そのうち側面一枚は縦104cm、横42cm、厚さ10cmの板石を用いている。
- (4) 松江市教育委員会2001。来待ストーンミュージアムでは石垣改修の折に取り出された松江城三之丸県庁敷地部分の来待石製排水溝部材が展示してある。
- (5) 松江城築城にあたって、近江国から穴太の石工を400石と300石で召抱え、その他の石切職人も大坂その他より呼び寄せたという（『松江亀田山千鳥城取立古説』、『島根縣史』8、島田成矩『堀尾吉晴』1995など）。堀尾吉晴はいくつかの城普請に関わり、「普請上手」、「堀尾普請」と称されたという（『島根縣史』8など）。堀尾忠晴は徳川大坂城普請に参加しており、堀尾家の家紋入りの石材が確認されている（古川久雄ほか『岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』芦屋市教育委員会2003）。

4) おわりに

来待石製大型石塔について、「概ね総高250cm前後のもので、宝篋印塔では基礎、塔身、笠の一辺が60cm（2尺）以上、五輪塔では地輪、水輪、火輪の一辺や径が60cm以上の石材を使用するもの」と暫定的に定義し、調査を進めてきた。出雲国においては、17世紀前半（江戸時代寛永期まで）に主として国主層の墓石や供養塔に来待石製大型石塔が利用されており、紀年銘や来歴があまり残りにくい石塔にあって、製作年代や被葬者（被供養者）、造立者が分かりやすいということも事象の解明に好都合であった。

本稿では、まず個別の大型石塔と紀年銘をもつ石塔を紹介し、来待石製宝篋印塔・五輪塔の変遷を明らかにすることで、大型石塔の画期と区分を示し、来待石製大型石塔出現の歴史的背景と意義を考察した。

既に述べたように、堀尾吉晴・忠氏父子が出雲国に入部する慶長年間以降、堀尾氏が断絶する寛永年間まで（大型石塔II期）、来待石製大型石塔の造立数は拡大し、分布範囲も遠くは京都・妙心寺まで運搬されている。出雲国においては、堀尾吉晴・忠氏父子とその家臣団のもたらした石造技術（採石・加工・運搬・造作などのトータルな技術）がその現象を可能にしたのは間違いない。

来待石製大型石塔の広がりは、全国的な大名墓の大型化傾向の一端ではあろうが、織豊系大名として戦国末期から江戸時代にかけての乱世を勝ち抜いてきた堀尾氏が、当時の先端技術や情報、組織力を出雲の地にもたらしたという出来事の一現象として捉えることが可能であろう。

一方、以下の課題も明らかになった。

①堀尾氏によってもたらされた石造技術は、松江城築城や城下町形成などにも当然利用されており、堀

尾氏入部以前に比べると、高度で、大量生産が可能なものと言えるが、その技術や職人体制を具体的に明らかにしていく必要がある。同時に、堀尾氏が、出雲の地にもたらした当時の先端土木技術や情報、技術集団に対する組織力を、石造技術以外でもトータルに明らかにしていく必要がある。

②石塔の形態から、来待石製大型石塔の最古の例は伝大野次郎左衛門墓五輪塔と考えられるが、その造立背景については不明点も多く、今後解明していく必要がある（狭川 2015、松尾 2018）。

③Ⅱ期の大型石塔の造立時期は堀尾三代の出雲国支配の期間と重なるが、この時期に忽然と出現する四十九院が刻まれた大型石廟（親子観音 [安来市広瀬町]、報恩寺・堀尾民部石廟 [松江市玉湯町]、殿様墓 [雲南市三刀屋町] など）についても、堀尾氏の上級家臣の墓・供養塔と考えられる。大型石塔と石廟との使い分けに身分の上下が関係すると考えられることから、大型石廟導入の系譜、被葬者（被供養者）、造立者、その後の石廟の展開など、出雲地方で定着した来待石製石廟について、さらに調査事例を増やしていく必要がある。

④Ⅲ期の大型石塔の被葬者（被供養者）・造立者層が、松江藩の上級武士層や富裕有力農民層に移っていくことを指摘したが、この区分の事例は造立下限の問題も含めて、さらに調査事例を増やしていく必要がある。

⑤今回暫定的に定義した大型石塔の基準については、今後さらに資料を蓄積することによって、より厳密に決定していく必要がある。この作業に伴い、石塔の規格と分布、階層問題等についてもより深く言及できる可能性がある。

今回の調査によって、明らかになった点と課題を列挙したが、石造物調査は地域の歴史を解明するための有効な手段であることを改めて認識しておきたい。

3. 来待石製石龕^(注1)の成立と展開 ～江戸時代前半を中心に～

1) はじめに

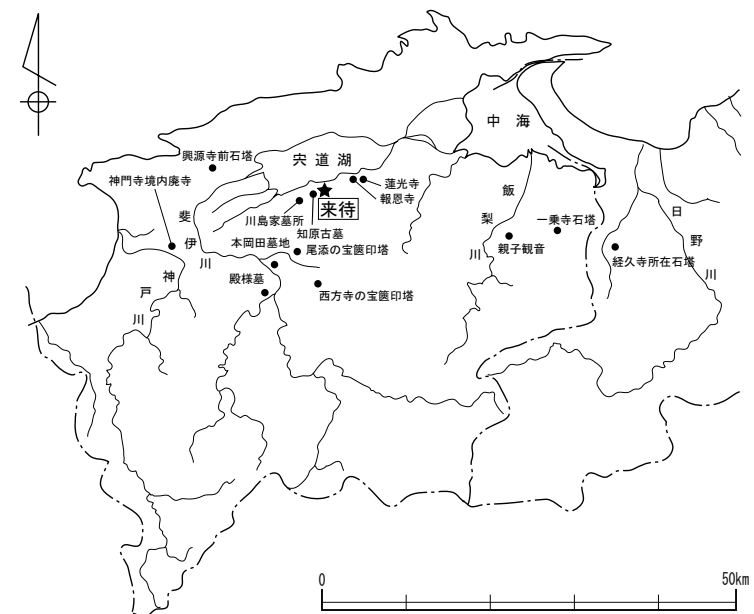
これまで石龕^{せきがん}について多くの事例が報告されるとともに、年代的な定点として基準資料の報告がなされている。宝篋印塔・五輪塔など石塔の展開だけにとどまらない、石塔を納める石龕の展開についても、その成立と展開について、ある程度言及することのできる状況になっていることは間違いない。

石龕とは、石塔を覆う石屋形のような施設を指す。来待石における石龕の研究史は、石塔よりも進んではない状況にある。そのなかで、今岡稔は、松江市宍道町知原遺跡^{ちばら}における石龕の報告をおこなうとともに、当時確認されていた石龕資料と、氏の実見された資料をもとに石塔の年代と石龕の年代について検討を加えている^(注2)。来待石製石塔の研究が、宝篋印塔・五輪塔を中心に進むなかで、石龕に注目した検討は、石龕の研究では先駆的な検討であった。

来待石製石塔の研究は、近年資料報告とともに近世初頭までのおおよそ宝篋印塔・五輪塔の編年観が形成されてきた^(注3)。しかし、近世における石塔の展開については、不明な点も多く、なかでも石塔を覆う施設としての石龕の様相については、なお不明瞭である。

そこで、本論では来待石製の石龕の成立と展開、そこに内包される諸問題について検討を加え、石龕の性格について明らかにしたい。

2) 石龕の分布



第76図 来待石製石龕の分布

現在確認されている石塔（宝篋印塔）を有する石龕の事例は、十数例であり多くはない。分布範囲は、鳥取県の西伯耆の南部町にある経久寺石塔の例から、西は出雲平野、南は雲南市まで広がっていることが確認できる。そのなかでも、宍道湖南岸地域に多く確認されている。しかし、この分布の偏りに、石塔調査の多寡の影響があることも考えておく必要がある。

また、この分布は来待石製宝篋印塔・五輪塔の分布域とほぼ同じような範囲を示している。石龕という特殊な施設でも分布圏外から運び出されることはなく、来待石の分布圏内のみで移動することがわかる。

3) 年代が分かる石塔の変遷

年代を比定できる事例は、石龕事例が少ないなかでも、ごくわずかな数である。事例として、安来市広瀬町の親子観音、松江市玉湯町の報恩寺堀尾民部墓・蓮光寺上福庭家墓所、松江市宍道町の川島家墓所などが挙げられる。

親子観音、堀尾民部墓の石龕は、共通して側面に塔婆が刻出され、観音開きの扉を有している。屋根の形態は寄棟造である。石龕の規模は幅・高さともに1mをこえる大きなものであり、ともに1基の宝篋印塔が納められている。

親子観音は、内部に納められた宝篋印塔基礎の側面に「慶長十三年」の紀年銘を有していることから、石龕の年代が1608年と確定できる。また、堀尾民部墓は外面に刻出された塔婆に「實山栄真大居士」と刻まれ、報恩寺過去帳によると同様の戒名が記されており、没年が元和7年（1621）と記されていることから、年代を推定することができる^(註4)。このようなしっかりとした作りの石龕は、上述したように暦年代を定められる状況から、17世紀前半に位置づけられる。

同様の特徴を有する石龕として、雲南市三刀屋町給下の殿様墓の事例がある。殿様墓は、石龕内に2基の宝篋印塔を有する違いはあるが、石龕は外面に塔婆を刻出し、石龕前面には扉を有している。屋根の形態も寄棟造であり、比較的大型のものであるという同様の特徴を有する。このような石龕が、基壇上に2基並んでいる。殿様墓の石龕は、17世紀前半に位置づけられる親子観音・報恩寺堀尾民部石龕と同様な特徴を有し、石龕内部に納められている宝篋印塔からも、殿様墓は17世紀前半に位置づけることができる。

宝篋印塔の編年観から、同時期もしくは、やや後出のと認識できる例は、鳥取県西伯郡南部町法勝寺の経久寺（旧西伯町）に所在する石龕がある。ただし、この事例は石龕の外面に塔婆などの表現はなく、表面は鑿による調整が残る。正面には観音開きの扉を有し、屋根の形態は寄棟造である。17世紀前半代の事例として、屋根形態は同じであるが、このように表面の装飾を省略した簡略なつくりのものも存在していることは注目される。

17世紀前半以降で年代がわかるものは、川島家墓所で確認されている。川島家墓所では4基の石龕が過去帳によって年代を推定できる事例である。最も古い事例は17世紀中葉であり、屋根は寄棟造である。それに次ぐ2号石塔は、笠型の屋根に宝珠が乗る宝造の形態をとり、3号石塔では宝形造の屋根に宝珠が乗り、その後は石龕を伴わないが、全体的なプロポーシオンが石龕の特徴を踏襲している竿状の形態をとる4号石塔へと続く。このように川島家墓所では石龕の屋根の形態から、石龕の変遷を追うことのできる事例である。

この川島家墓所に並行する時期にあてはまる事例として、1号石塔では、雲南市加茂町の本岡田墓所の石塔、尾添の宝篋印塔、平田市興源寺前石塔があり、2号石塔に類似するものは松江市宍道町の知原古墓や安来市市伯太町の一乗寺石塔がある。ただし、2号石塔の類似例は、扉石を有することが注目さ

れ、扉石の存在が、古出な特徴であることを示すものかもしれない^(註5)。知原遺跡4号墓は、マウンド上に石龕を有する事例で、唯一石龕下部の発掘調査が行われた事例である^(註6)。発掘調査では、石龕の位置するマウンドの裾部分から土壇墓1基が検出されている。土壇墓からは鉄釘・宋銭・京都系土師器皿・鐺形銅製品が出土している。石龕周辺が発掘された事例は、知原遺跡のみであり今後の資料の増加を待って評価すべきであるが、唯一の発掘例として注目される。

また、暦年代を有する資料に蓮光寺上福庭家墓所の事例がある。福庭家墓所は、近世前半と考えられる五輪塔が墓所内では最も古いもので、それを基点として石龕を有する石塔が展開する墓所である。そのなかで、紀年銘を有する古い事例は、享保17年（1732）と延享3年（1746）の没年の記された宝篋印塔2基を納める石龕である。この事例は、18世紀前半でありながら寄棟造の屋根を有している。また、上福庭家墓所ではこの事例に後続する事例はすべて石龕に宝篋印塔と位牌の形態が折衷した石塔を納める墓標が展開し、墓地内で新しい石龕は入母屋造の屋根形態をしている。この点は、川島家墓所が石龕の形態を形骸化させ、石龕そのものが竿状の石塔へ変化していくパターンとは異なっている。これは、川島家墓所のように石龕がそのまま墓標へと変化している過程と、上福庭家墓所のようにあくまで墓標を納めるものとして石龕を利用する過程の2者の存在を想定する必要があるだろう。

ところで、平田市興源寺前石塔例は、2基の宝篋印塔を納める石龕の事例である。石龕は寄棟造の屋根である。内部に納められた宝篋印塔は、来待石製でありながら来待石の宝篋印塔の特徴を持ち合わせず、石見地方の邇摩郡温泉津町で産出される福光石製の宝篋印塔の特徴を有する石塔である^(註7)。宝篋印塔の表現方法は異なるが、基礎と塔身が1石、笠と相輪がそれぞれ1石でつくられるものであり、このような部材の構成は、福庭家墓所の紀年銘を有する宝篋印塔と同じつくりである。部材の構成のみで年代を推定するには多少危険があるが、18世紀代を推定できる石龕であろう。

このように、石塔を納める石龕は、最も古いもので17世紀初頭の年代が与えられるものがあることから、江戸時代初期に成立することがわかる。ただし、その事例は多くはなく、大型で、入念な作出がなされたものと、表面に装飾のない簡略なつくりのもの2者があった。その後の石龕の変遷は、川島家墓所・蓮光寺上福庭家墓所で確認でき、特に川島家墓所では17世紀後半から18世紀後半までの変化の過程を追うことができる。ここで注目されるのは、川島家墓所では寄棟のつくりから、宝珠を乗せる形態に石龕の屋根が変化し、さらにその形態が竿状の石塔に変化していく過程を経るパターンと、蓮光寺福庭家墓所のように宝篋印塔が位牌に変化し、小型化した石龕はその後同様な形態のものが作り続けられるようなパターンの2つの過程が18世紀中頃に境に生じている。このように、石龕の変遷は屋根形態と壁面の構成から追うことができるだろう。屋根形態では寄棟造タイプが成立する。その後、川島家墓所のように宝造タイプのものに変化し、宝珠が屋根と一体化した形態となり、竿状の石塔へと変化する。側面の形態では、前面に扉石を有するものが古出であり、なかでも、外壁に塔婆を刻出するも

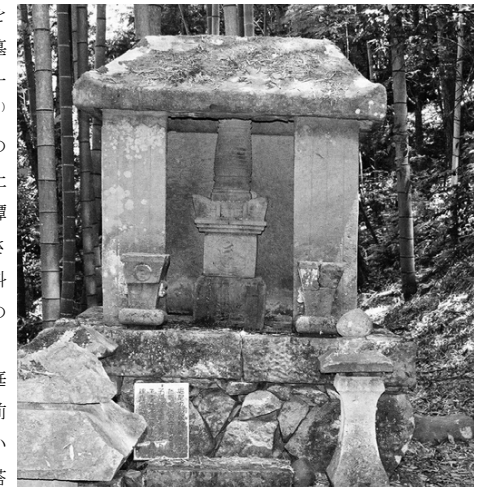
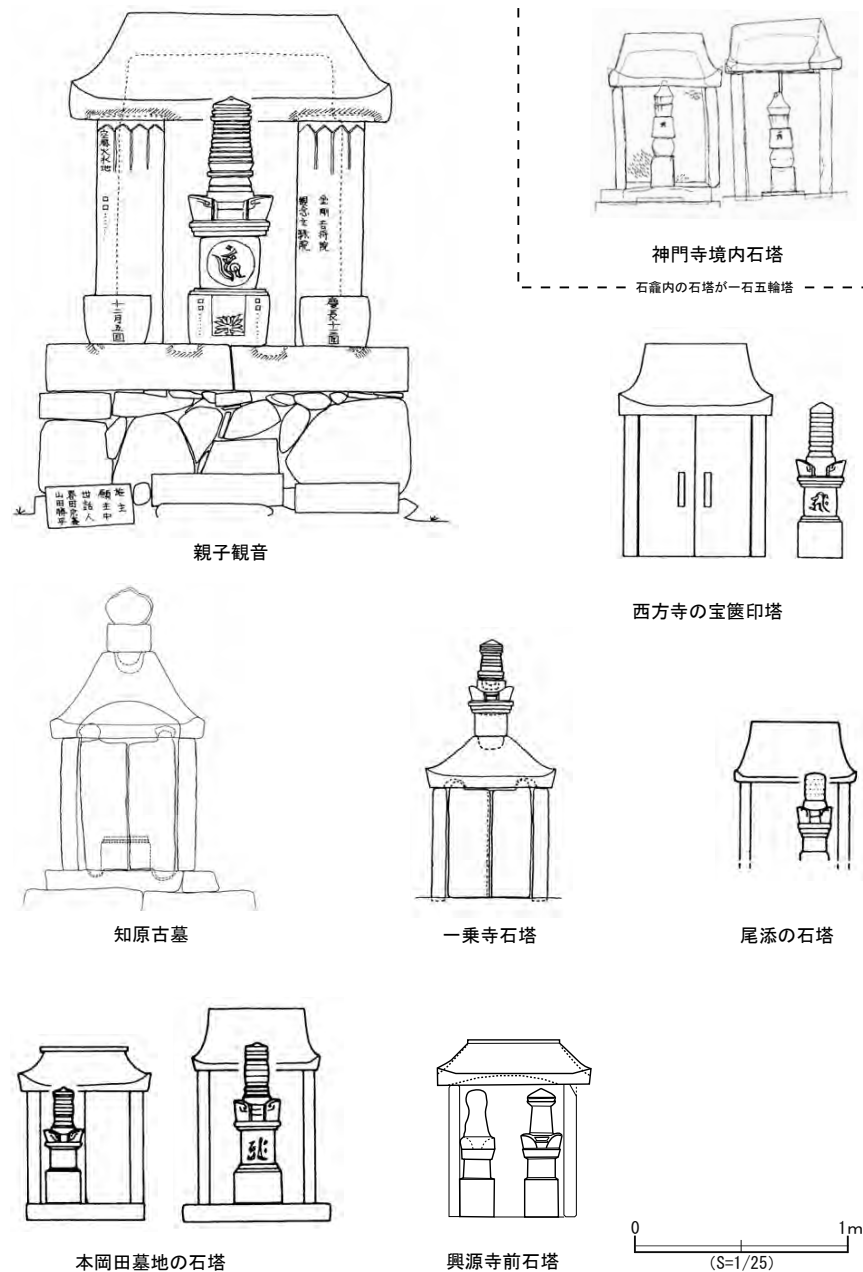


写真151 親子観音



第77図 来待石製の石龕

のは成立期に位置づけられる。そして、18世紀前半には扉石を失い、川島家墓所では、石龕側面自体が石塔となってしまう。

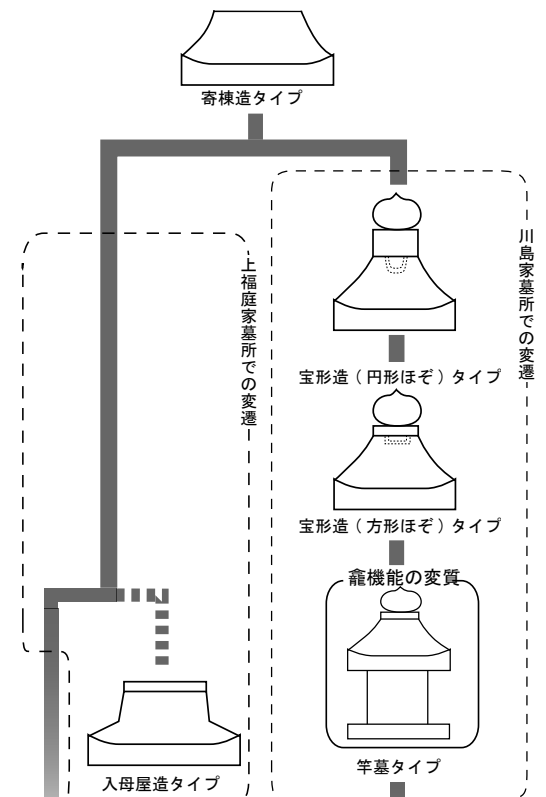
4) 石龕の展開

(a) 石龕の形態的変遷の意義

以上、石龕の出現と展開について年代が推定できる事例を中心にまとめてきた。17世紀初頭の成立から18世紀中頃までの変遷について検討を加えてきた。そこで、17世紀前半の出現と、18世紀中頃の変質という展開を窺うことができる。

まず、様相は17世紀初頭の出現期の事例は比較的大型のもので、入念な作出のものがある一方で、外面に装飾を施さない事例が存在している。このことは、地域差・工人差とするよりも、石龕の成立時期から、階層的な差異を表徴する展開があったことが考えられる。特に、入念に外面に塔婆を刻出する事例は、松江藩の藩主であった堀尾氏に関連する人物の石塔であることが注目される。親子観音は、安来市広瀬町の富田城に入城した堀尾氏に対し、お家騒動を起こし処罰とされた重臣堀尾河内守とその子勘解由の墓と伝えられ^(注8)、また、堀尾民部も堀尾忠晴のいとこにあたる。また、殿様墓は三刀屋城主である堀尾修理との関係性が想定されている^(注9)。このように、17世紀初頭に成立した装飾的な外面を有する石龕はかなり高いステータスを有していた大名・家老クラスの人物の石塔を納めるものとして成立した。

しかし、その後、このように入念な作出を行う石龕の製作は、引き続き作られることはなく、川島家墓所の1号石塔のように外面に塔婆を刻出しない寄棟造タイプの屋根を有する石龕が作られるようである。そして、屋根の形態に注目すると屋根の頂部に宝珠がのる宝形造タイプの石龕へと変化し、18世紀後半には竿状の墓標へと石龕が形態変化している。またその一方で、蓮光寺上福庭家墓所では、石龕の採用以来から石龕の屋根は寄棟造タイプで形態をあまりかえることはない^(注10)。しかし、その内部の石塔は宝篋印塔から、宝篋印塔の形をした位牌形の石塔が納められる。その転換期は、石塔の年代から18世紀中頃と考えられる。つまり、18世紀中頃から後半にかけて、川



第78図 石龕屋根形態の変遷概念図

島家墓所では、石龕そのものが墓標となるケースが確認でき、蓮光寺上福庭家墓所では石龕はそのまま継続して採用されるが、内部に納められる石塔は位牌形へと変化しているケースと確認できる。2つのケースで確認できる変化は、石龕の変遷としては異なるものであるが、石塔の変遷で考えるならば、軌を一にしている。18世紀前半～中葉における、石塔の変化は宝篋印塔の周辺時期に位置づけられるとともに、宝篋印塔を採用しない契機が発生したと考えられる。このような墓制の変遷の時期として、該期を位置づけることが可能である。

(b) 石龕の成立に関する問題

ところで、このような石龕の採用の理由を探ってみる。現在確認されている来待石製の石龕の最古例は親子観音の慶長13年(1608)の17世紀初頭である。それ以前の戦国時代では、石龕を利用した墓標の存在は確認されていない。16世紀にはみられないものが、17世紀から出現するのである。つまり、17世紀初頭に石龕採用の契機があったことが窺える。

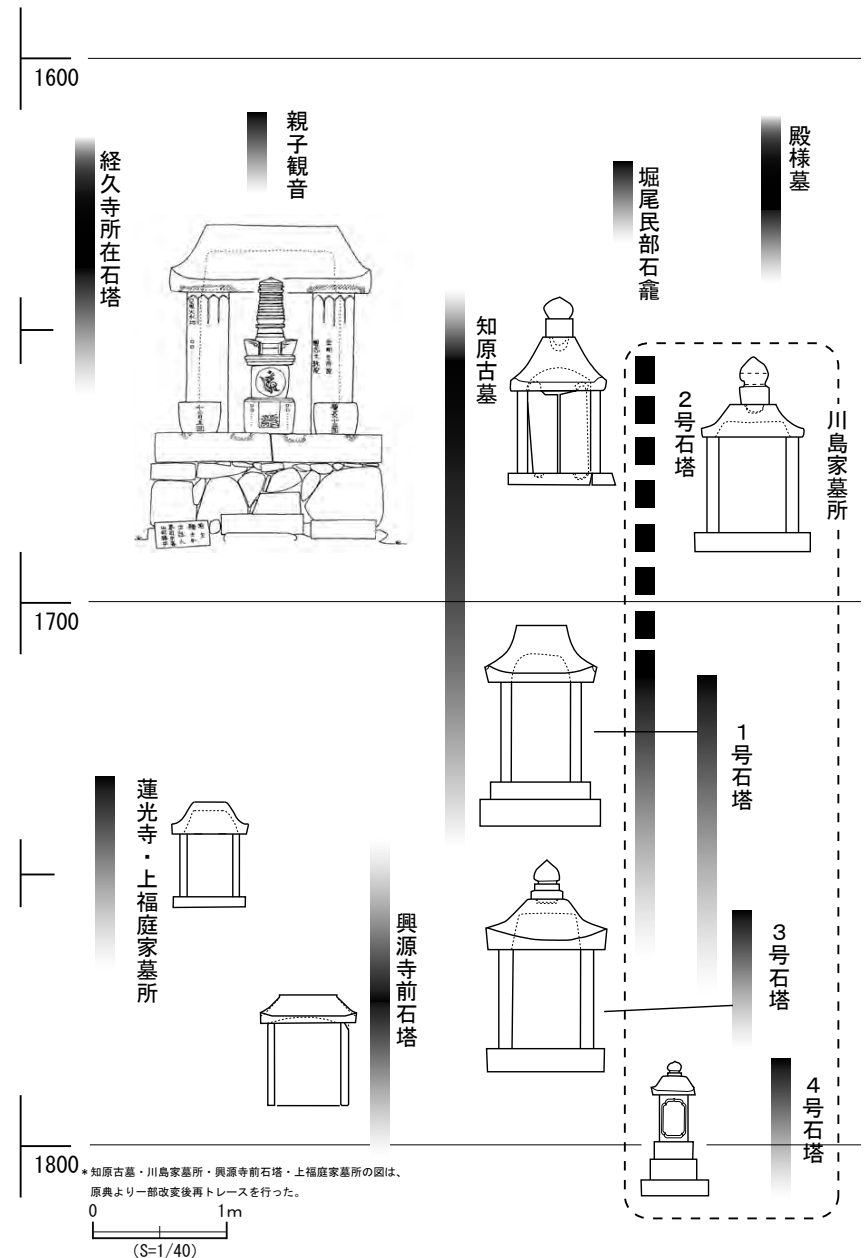
石龕採用の成立を考えるとき、まず注目されるのは成立期の石龕が堀尾氏に關係する石塔と関わるものであることである。先述したように、成立期の石龕である親子観音が堀尾河内・勘解由に關係し、報恩寺観音堂裏の石龕が堀尾民部、殿様墓が堀尾修理との關係が想定・推定される。これらの石龕は、堀尾氏に關係する人物であり、成立の契機を堀尾氏に關係付けることができる。

ここで、堀尾氏について若干説明を加えておこう。堀尾氏は、出雲に入る以前は、堀尾吉晴が遠江国の領主として浜松城12万石を有していた。関ヶ原合戦では東軍に加担し、その後、出雲・隠岐24万石の大名となった。初代松江藩主には、吉晴が隠居したために、吉晴の子忠氏がその任に当たり、富田城に入るが、城下など手狭な部分が多く、現在の松江に拠地を移し、松江で城下町の建設をはじめた。しかし、初代藩主忠氏が若くして死去し、寛永10年(1633)に2代藩主の忠晴が死去したことでお家断絶となり、堀尾松江藩はわずか2代で終わりを告げた。

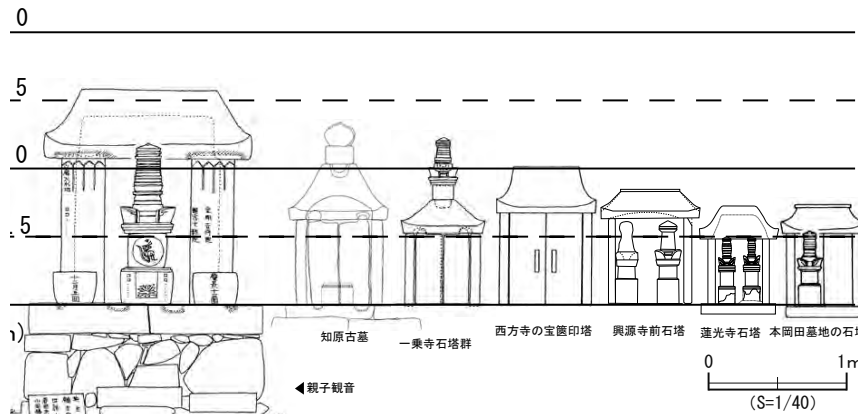
さて、石龕の採用と堀尾氏の関係を先に指摘したところであるが、堀尾氏の入部と石龕の成立を関連付けるならば、出雲移封前の浜松における状況を確認しておく必要があるだろう。浜松周辺における石塔の状況はあまりはっきりと様相が明らかにはなっておらず、不明な点が多いなかで、石龕をもつ石塔も散見されている。その多くは、内部に一石五輪塔を納めるもので、戦国時代のものが確認されている状況にある^(注11)。浜松周辺における堀尾氏に關係する石塔は現在不明である。このような現状では、浜松における墓制が、堀尾氏の移転を契機に出雲へきた可能性は存在するものの、親子観音のように大型で、側面に塔婆を刻出するような同様な事例が確認できないことから、あくまで伝播した可能性がある程度のものであるだろう。つまり、戦国時代に来待石製の石龕が作られておらず、堀尾氏の入部した17世紀初頭から作られ始めていることと、堀尾氏の前領地である浜松周辺において不明な点が多いが、石龕を利用した墓が戦国時代に作られていたことを考えあわせると、状況的な側面ばかりであるが、堀尾氏の入部をきっかけとして石龕が成立した可能性を指摘しておきたい。

(c) 石龕の展開と階層性

第1節では、石龕の展開について考え、若干階層的な側面について触れたが、ここで改めて石龕の階層的な性格について検討してみたい。石龕のサイズをみると、成立時の外面に塔婆を刻出し、観音扉を有するものは、それ以降の石龕に比べかなり大型のものであることがわかる。しかし、その後の石龕は、やや小型化していく傾向はあるものの、ほとんど同じような規模である。石龕の規模からも、成立期の石龕の突出性を窺うことができる。石龕は、成立当時の採用階層が堀尾氏であり、大名・家老クラスの



第79図 来待石製石龕の展開



第80図 来待石製石龕規模の比較

その造墓主体となっている。つまり、成立期の採用階層とその後の石龕の展開について注目しておく必要があるだろう。

17世紀初頭の石塔は親子観音では、堀尾勘解由が推定されており、報恩寺では堀尾民部墓、殿様墓では堀尾修理という被葬者が想定されている^(注12)。これは、先述したように松江藩堀尾氏の家臣であり、相当な階層の上位に位置づけられる人物の墓・供養塔である。同時期、もしくは若干時期が新しい石塔には、経久寺の石塔例が挙げられるが、これは堀尾氏に關係する石龕が大型で側面に塔婆を刻出している点と異なり、側面は無文で、やや小型のものである。被葬者の性格は、不明な点が多い。17世紀前半では、家老クラスで入念な石龕の採用があるとともに、どの程度ランクが下がるのかは不明であるが、採用階層に若干の広がりがあることが窺える。

17世紀中葉には、川島家墓所で確認できるように、庄屋クラスにまで石龕の採用が拡大していることがわかる。そして、上福庭家で確認できるように18世紀前半にも継続して庄屋クラスで石龕が採用され続けている。

石龕の採用が大名・家老クラスの人物に始まり、ほぼ同時にその石龕の採用がワンランク下がった階層にまで広がりをみせている。そして、17世紀中頃から18世紀中頃まで継続して庄屋クラスの階層で石龕の利用がおこなわれていたことがわかる。このような、石龕の階層的な展開は、石龕事例が決して多くない現状では不明な点が多いが、その採用が階層的に上位に位置づけられる人物に關係していることには注目していく必要があるだろう。

5) おわりに

このように、石塔を内部に納める覆い屋としての石龕は、階層差や墓標としての石塔の変遷、墓標の変化の背景にある宗教上の変化などの諸要素が展開のなかに反映されている。しかし、この点のみで石龕は語りつくされるものでなく、さらなる資料の増加で明らかになる問題点も多いだろう。特に、17世紀後半から18世紀前半における石龕の様相については、川島家墓所でしか変化を追っていくことができず、事例数の増加を受けて詳細な型式学的な検討を経て、17世紀前半の出現から18世紀後半の変質までの展開を論じる必要がある。このような手続きおこなったうえで、改めて石龕の展開の素描を検討していくことが肝要であろう。

また、今回は石龕の展開を今日までの資料の集積状況から19世紀以降の様相について検討を加えられなかった。川島家墓所や蓮光寺上福庭家墓所のように、変化の過程を抑えることができ、かつ年代を把握しやすい墓所資料の蓄積を待ち、検討していく必要があるだろう。

【参考文献】

今岡稔 1996「山陰の石塔二三について - 5 -」『島根考古学会誌』第13集，島根考古学会

今岡稔 1999「宍道町知原遺跡Ⅰ区の石塔および石屋形について」『宍道町歴史叢書』4，宍道町教育委員会

【石塔実測図出典】

一乗寺石塔群：今岡稔 1991「山陰の石塔二三について - 2 -」『島根考古学会誌』第8集，島根考古学会

親子観音：今岡稔 1996「山陰の石塔二三について - 5 -」『島根考古学会誌』第13集，島根考古学会
興源寺前石塔：西尾克己・樋口英行 2004「平田・小早川正平墓と興源寺周辺の石塔について」『来待ストーン研究』5，来待ストーンミュージアム

尾添の宝篋印塔：杉原清一 1991『加茂町の遺跡 - 赤川以北 -』，加茂町教育委員会

西園寺の宝篋印塔：杉原清一 1989『大東町の遺跡Ⅰ - 春殖・幡屋 -』，大東町教育委員会

神門寺境内廃寺：川上稔・西尾克己 1982『神門寺境内廃寺』，出雲市教育委員会

知原古墳：今岡稔 1999「宍道町知原遺跡Ⅰ区の石塔および石屋形について」『宍道町歴史叢書』4，宍道町教育委員会

本岡田墓地の石塔：杉原清一 1999『加茂町の遺跡 - 赤川以南 -』，加茂町教育委員会

注

- (1) 本書では、親子観音（堀尾勘解由石廟）、堀尾民部石廟、殿様墓は、「石廟」という呼称を用いたが、本節では原典のとおり石龕とした。
- (2) 今岡稔 1999「宍道町知原遺跡Ⅰ区の石塔および石屋形について」『宍道町歴史叢書』4
- (3) 間野大丞 2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について - 中世末から近世初頭を中心に -」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第2回研究会資料 石造物研究会・来待ストーンミュージアム客員研究会 によってその成果がまとめられた。
- (4) 過去帳では「堀尾民部」と明確に記されており、民部の子である采女の名前が読み取れる。また、「采女」と記された後に解説不明の文字が記されているが、その文字が読みにくい、「ちち」と読める部分を有し、このように解説するならば采女の親である堀尾民部と推定することが可能である。文字の解説が困難な状況からは、その被葬者を断定することはできない状況にある。
- (5) 2号石塔と3号石塔は、石龕内部に納められた宝篋印塔の隅飾突起の形態や、各部材の石の構成、相輪部の形態などの型式学的諸特徴から、3号石塔のほうが古く、2号石塔のほうが新しい特徴を有する。しかし、石龕の特徴に注目するならば2号石塔石龕から3号石塔石龕への推移を窺うことができるため、内部に納められている石塔は入れ替わっている可能性がある。
- (6) 山本清・西尾克己・稲田信・木下誠 1999「宍道・知原遺跡群とその性格」『宍道町歴史叢書』4 宍道町教育委員会
- (7) 間野大丞 2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について - 中世末から近世初頭を中心に -」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第2回研究会資料 石造物研究会・来待ストーンミュージアム

ム客員研究会 で指摘がなされ、西尾克己・樋口英行 2004「平田・小早川正平墓と興源寺周辺の石塔について」『来待ストーン研究』5 来待ストーンミュージアムで、その事例の広がりや報告がなされた。

- (8) 親子観音の伝承では、堀尾河内と勘解由の関係が指摘されてきた。しかし、親子観音内宝篋印塔の「慶長十三年」と戒名から、堀尾家重臣の堀尾但馬が記したとされる「堀尾古記」（松江市史編集委員会編 2018）に、慶長 13 年「堀尾勘解由果ル、極月五日京ニテ」と記されていること、京都・春光院所蔵の「春光院三時回向」に「桂岩院殿祥雲世端大居士 慶長十三 十二月五日」と記されていることから、親子観音は堀尾勘解由に由来して造られたものと理解できた（今岡 2006、岡崎ほか 2006、岡崎ほか 2007）。
- (9) 『雲陽誌』と「飯石郡中萬差出帳」（寛政 4 年）に堀尾修理が三刀屋城に在城したと伝えている。
- (10) 上福庭家墓所では、墓所の成立時には石龕を有さない五輪塔が造立されるが、その後、寄棟造タイプの石龕が墓地内で作られつづき、墓地内の新しい石龕になると入母屋造タイプの石龕がみられる。
- (11) 足立順司 2002『もう一つの中世史』
- (12) 被葬者と造塔の主体者は異なり、石塔を実際に建てる主体となるのは、被葬者ではなく、造墓の主体者としての被葬者以外の人物である。つまり、石塔の造立は被葬者の意思でもってなされるのではなく、死者を葬る生者の側に造立の意思が働くだろう。とすると、被葬者の性格が石塔に反映される側面と造塔主体者の側面が反映された結果として石塔が建立されると考えられる。

堀尾氏に關係する人物が被葬者として、供養の対象として想定されても、造塔の主体は想定される人物以外である。しかし、報恩寺推定堀尾民部墓では、被葬者が堀尾民部と推定するならば、その造塔者としては、報恩寺に対し寄進を行っていた民部の子采女の可能性が高いと想定できる。とするならば、堀尾氏の石塔造立行為は堀尾氏に關係する、被葬者に直接關係する人物が行っていることの一つのケースとなる。そのため、石塔・石龕の造立に、堀尾氏が關係しているものと考えられる。

4. 石龕から竿状石塔へ ～宍道・川島家墓所にみる石塔の変遷～

1) はじめに

本家川島家（現当主：川島啓史氏）は、近世から松江市宍道町白石（字才）に屋敷地を構えた旧家である。現在は畑地になっているが、屋敷跡である広い平坦地が残されている。宍道に残る俗謡にも、「才の川島、小佐々布の三島、宍道木幡にや かにやわせぬ」と謡われるほど、宍道木幡家と対比されながらも、周囲から一目おかれる存在であったことがうかがわれる。

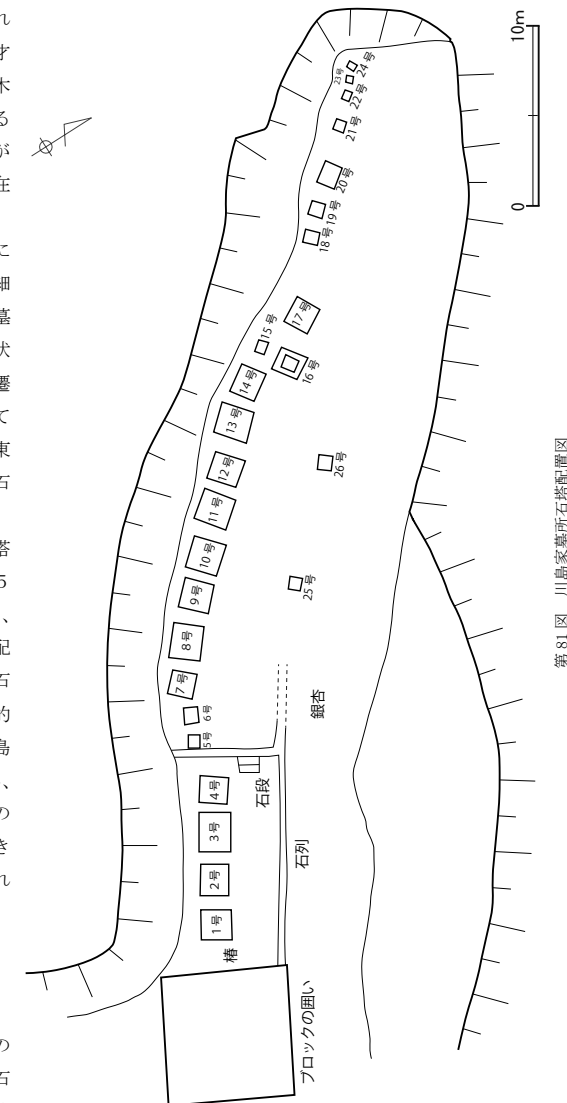
川島家墓所は屋敷地跡の北側に隣接し、丘陵中腹に形成された細長い平坦地に配置されている。墓所には五輪塔（残欠）、石龕、竿状の石塔、自然石など、石塔の変遷を示すように、整然と配列されている。便宜的に石龕が 3 基並ぶ東側より 1 号石塔とし、順次 24 号石塔までの番号を与えた。

本稿では川島家墓所に残る石塔のうち、五輪塔（残欠）、石龕 5 基、竿状の墓石 1 基を紹介するが、遺存状態が大変良く、横一列に配置されているために、五輪塔→石龕→竿状石塔という変遷が形式的に追うことができる。また、川島家には過去帳が家伝と共に存在し、年号が刻み込まれていない石龕の実年代もほぼ類推することができるという、極めて好条件に恵まれている。

2) 川島家墓所の石塔

(a) 1 号石塔と石龕

石龕は、来待石製で、寄棟造の屋根をもつ。保存状態はよく、石龕の中には来待石製の 2 つの宝篋



第 81 図 川島家墓所石塔配置図

印塔を納める。

石龕（第82図）

石龕の本体は横幅60.4cm、奥行き47cm、屋根頂部までの高さ（床石を含む）130cm、床石上面から屋根天井までの内高は96cmとなる。床石は幅74.6cm、奥行き64cm、厚さ13cmの1枚からなる。基壇は幅90cm、奥行き93cm、厚さ20cmの2枚からなる。本体側壁は厚さ8cmで、1石で構成され、表面には荒いノミ跡が残る。屋根の最大幅84cm、高さ40cmで、軒にかけて大きく反っている。頂部の平坦部は37cm×8.5cmである。

宝篋印塔（第83図. 左側の石塔）

石龕内の正面左側の石塔。総高77cmで、相輪、笠は別々の石で作られているが、基礎、塔身は一石で作られている。基礎、塔身は風化が進んでいる。復元すると、基礎は幅20cm、高さ19cm、塔身は幅15.5cm、高さ15cmである。笠は、高さ18cmで、下端幅15.3cm、隅飾の最大幅は21.5cmで、軒幅は約18cmである。軒より下部の階段は2段となっているが、上部階段は1段のみで作られている。隅飾の高さは8.8cmで、やや外側に傾く。相輪は高さ25cmで、宝珠、九輪、受花、伏鉢が表現されているが、受花などに花弁は彫られてはいない。柄は根本で幅6cm、長さ2cmと短い。伏鉢は高さ2.8cm、下端部径10.6cmで、下部受花の高さ3cm、最大径10.2cmである。九輪は高さ10.6cm、最大径9.1cmで、細く浅い溝5条を付けることで表現している。上部受花は高さ2cm、最大径10cm、宝珠は推定で高さ6.5cm、最大径10cmである。

宝篋印塔（第83図. 右側の石塔）

石龕内の右側の石塔。総高77.6cmで、相輪、笠は別々の石で作られているが、基礎、塔身は一石で作られている。基礎は幅20cm、高さ19cm、塔身は幅15.5cm、高さ15cmである。笠は、高さ18.5cm、下端幅14.5cm、隅飾の最大幅は18.6cmで、軒幅は約18.5cmである。軒より下部の階段は2段となっているが、上部階段は1段のみで作られている。隅飾の高さは8.3cmで、やや外側に傾く。相輪は高さ25.1cmで、宝珠、九輪、受花、伏鉢が表現されているが、受花などに花弁は彫られてはいない。柄は根本で7cm、長さ3.5cmである。伏鉢は高さ2.8cm、下端部径10.7cmで、下部受花の高さ3cm、最大径11cmである。九輪は高さ10.6cm、最大径10cmで、細く浅い溝5条を付けることで表現している。上部受花は高さ2.1cm、最大径10.4cm。宝珠は高さ6.5cm、最大径10.4cmである。

(b) 2号石塔と石龕

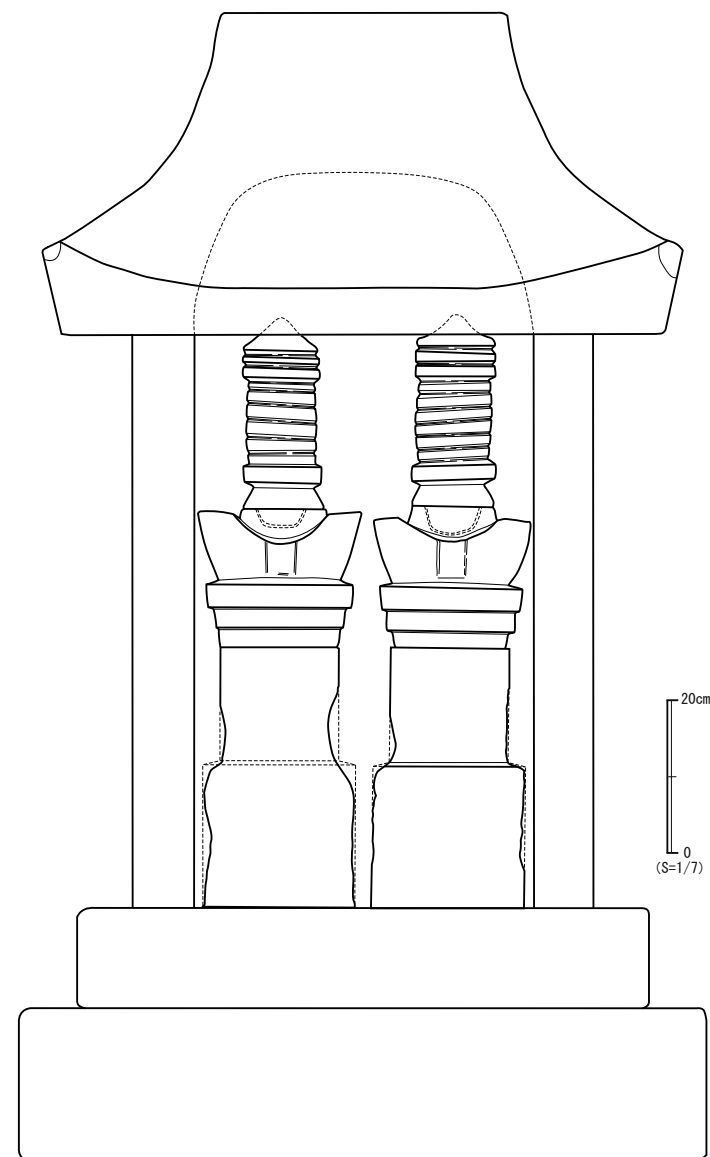
石龕は来待石で、笠型の屋根には宝珠が載る。風化が著しく、屋根は壊れ、石塔の背後に置かれている。また、宝珠も、今は1号石塔付近に移動している。石龕の中には来待石製の2つの宝篋印塔を納めている。

石龕（第84図）

石龕の本体は壊れており、横幅不明、奥行き65.5cm、床石から宝珠までの高さ（床石を含む）は復元すると153.2cmとなる。床石は幅90cm、奥行き不明、厚さ22cmの1枚からなる。本体は厚さ8cmで、1枚で構成され、表面には荒いノミ跡が残る。屋根は幅約76cm、高さ24cmで、軒に向けて大きく反っている。頂部の平坦部は約34cm×22cmあり、中央部に径16cm、深さ6cmの柄穴がある。宝珠は上部、下部とも最大径21cmで、高さは35cmで、整った形になっている。柄は根本で最大径13cm、長さ6cmである。柄と柄穴は、3号石塔の石龕のそれとは異なり、雑に仕上げられている。

宝篋印塔（第85図. 左側の石塔）

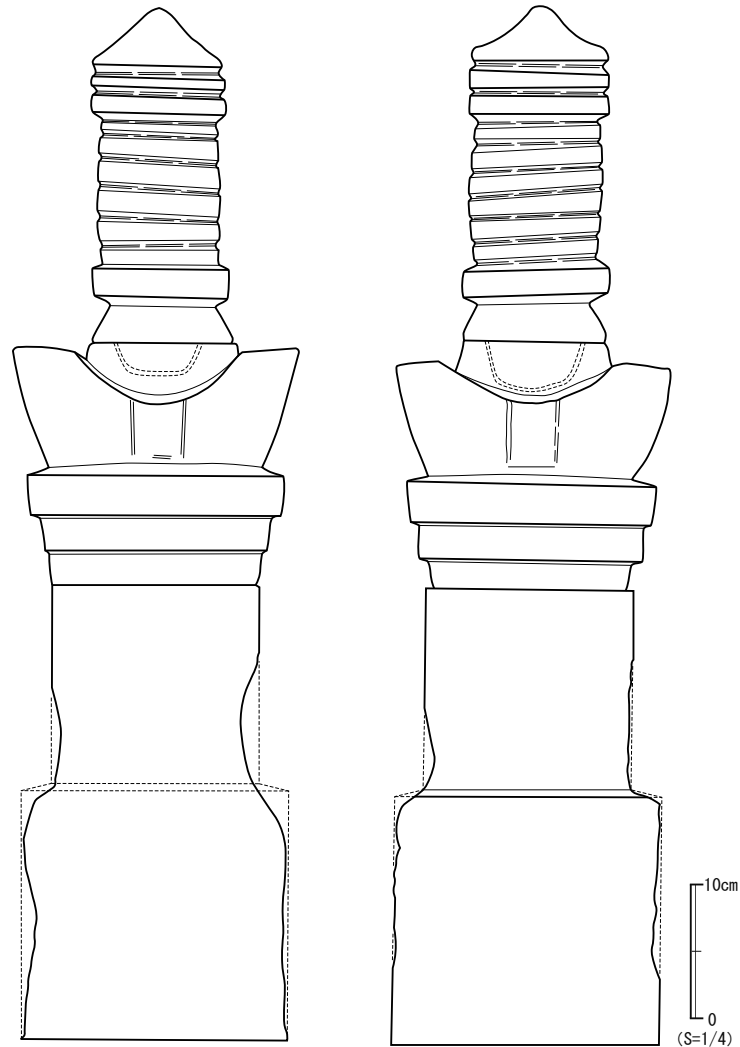
石龕内の北側の石塔。総高は不明で、相輪、笠、基礎、塔身は別々の石で作られている。基礎は下端



第82図 川島家墓所1号石塔 実測図

幅 20.7 cm、上端幅 16 cm、高さ 18 cm で、立面図は台形となる。塔身は高さ 12.5 cm、下端幅と上端幅とも 15 cm である。笠は、高さ 18 cm で、下端幅 18 cm、上端幅（推定）で 13 cm と考えられる。

下部階段は2段となっているが、軒より上の上部階段は1段のみで作られている。隅飾の高さは7 cm で、やや外側に傾く。側面に文様が彫られているが、左右で異なる。相輪は高さ 23.5 cm で、宝珠、九輪、受花、伏鉢が表現されているが、受花などに花卉は彫られてはいない。柄は根本で 7.6 cm、長さ 2 cm と短い。伏鉢は高さ 1.7 cm、下端部径 11.5 cm で、下部受花の高さ 2.2 cm、最大径 11.5 cm である。九輪は高さ 12 cm、最大径 11 cm で、細く浅い溝 4 条を付けることで表現している。上部受花は高さ 2.3 cm、最

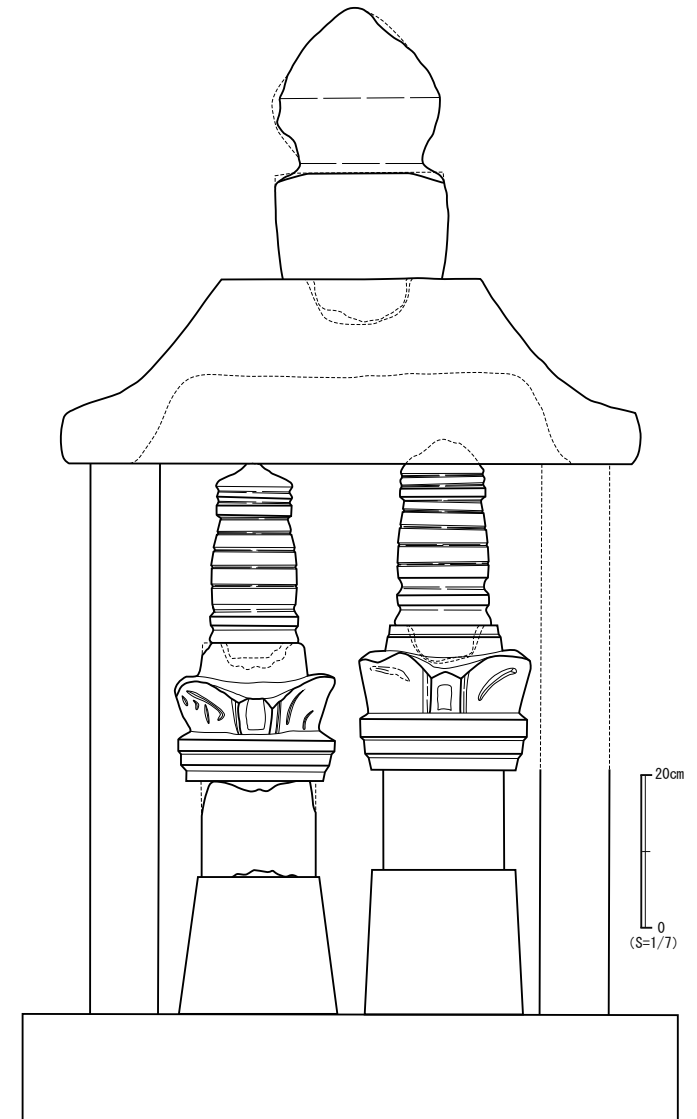


第 83 図 川島家墓所 1 号石塔の石龕内宝篋印塔 実測図

大径 9.8 cm。宝珠は推定で高さ 5.4 cm、最大径 10 cm である。

宝篋印塔（第 85 図、右側の石塔）

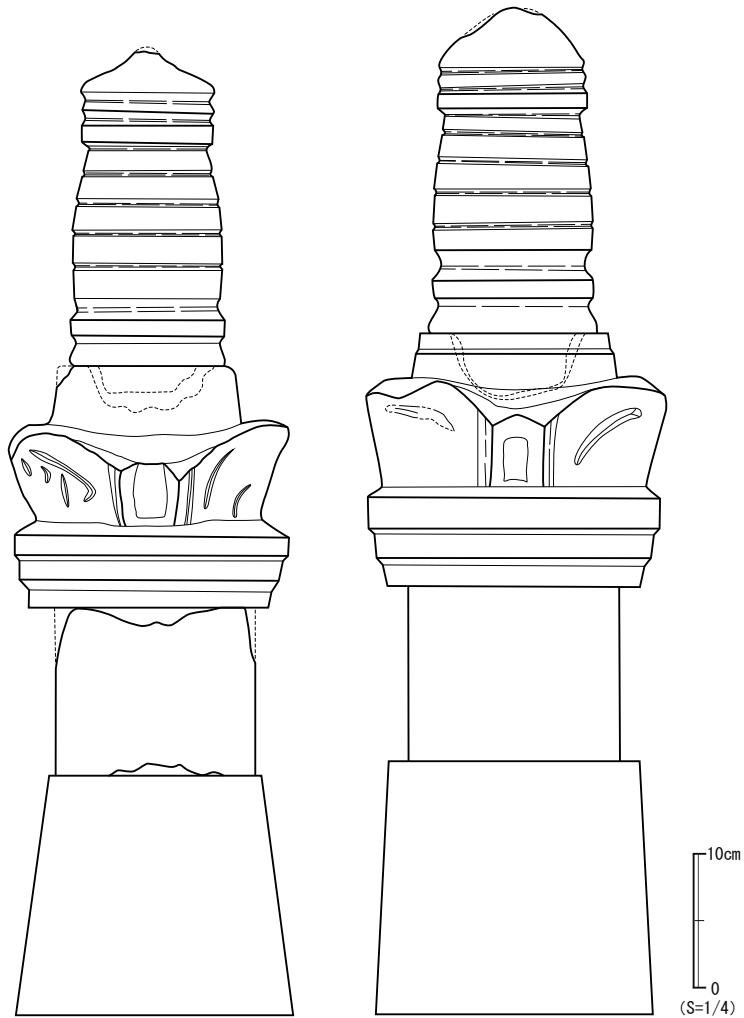
石龕内の北側の石塔。総高 79 cm で、相輪、笠、基礎、塔身は別々の石で作られている。基礎は下端幅 21 cm、上端幅 19 cm、高さ 19 cm である。塔身は高さ 13 cm、下端幅と上端幅とも 16 cm である。笠は、



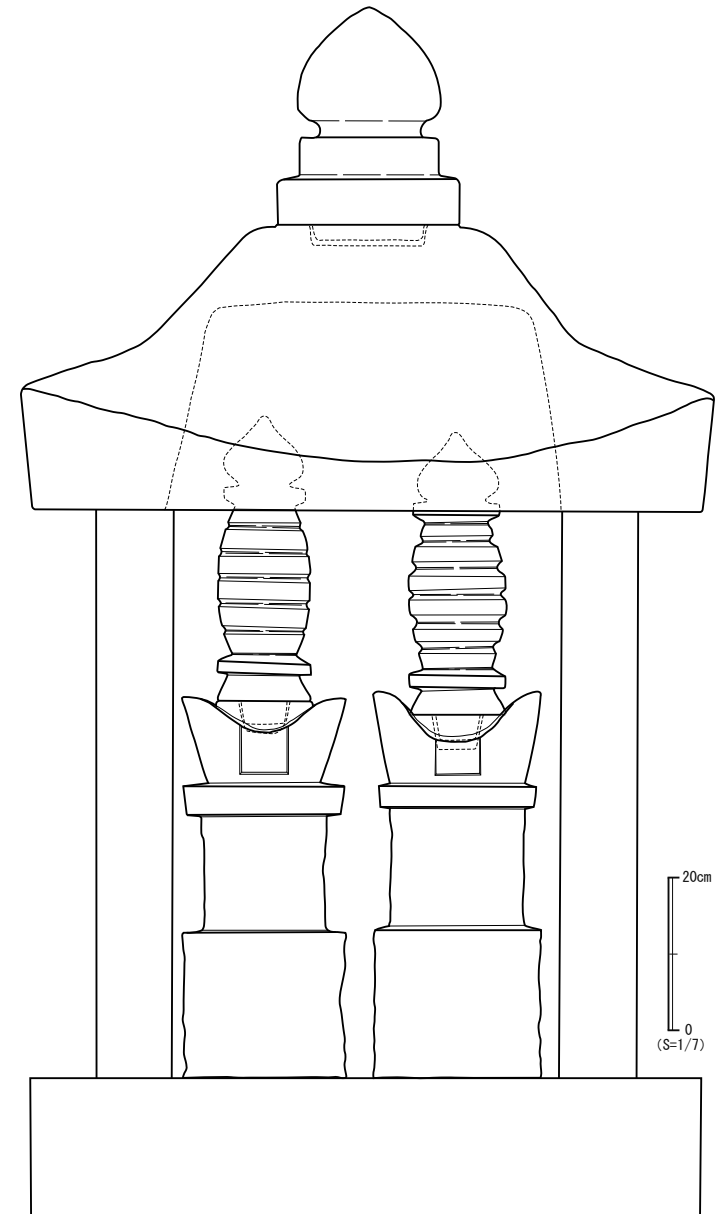
第 84 図 川島家墓所 2 号石塔 実測図

高さ 18.8 cm で、下端幅 19 cm、上端幅で 14 cm である。

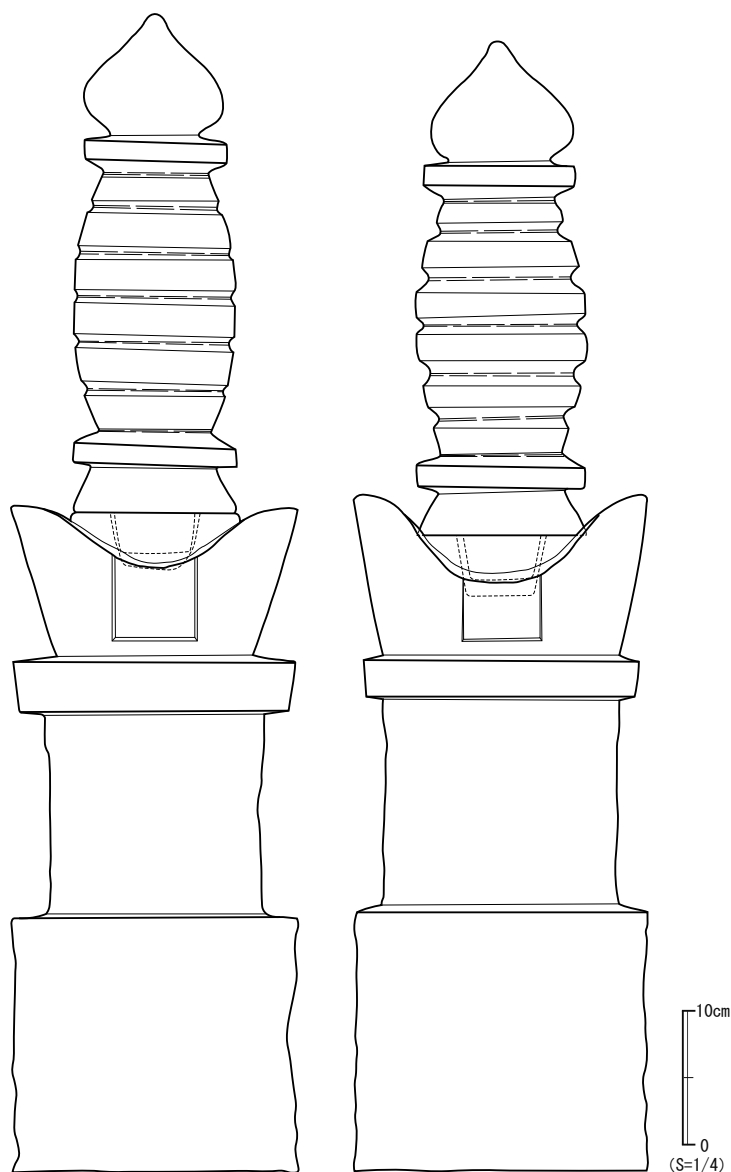
下部階段は 2 段で、軒より上の上部階段も 2 段に作られている。隅飾の高さは 7 cm で、やや外側に傾く。側面にノの字状の文様が彫られている。相輪は高さ 24.3 cm で、宝珠、九輪、受花、伏輪が表現されているが、受花などに花卉は彫られてはいない。柄は根本で 8.5 cm、長さ 4.5 cm と短い。伏鉢は高さ 2.2 cm、下端部径 12.5 cm で、下部受花の高さ 2.6 cm、最大径 12 cm である。九輪は高さ 11.8 cm、最大径 11.8 cm で、細く浅い溝 4 条を付けることで表現している。上部受花は高さ 2 cm、最大径 11.2 cm、宝珠は高さ 6 cm、最大径 11 cm である。



第 85 図 川島家墓所 2 号石塔の石龕内宝篋印塔 実測図



第 86 図 川島家墓所 3 号石塔 実測図



第87図 川島家墓所3号石塔の石龕内宝篋印塔 実測図

(c) 3号石塔と石龕

石龕は、来待石製で宝形造の屋根に宝珠が載るタイプのものである。保存状態はよく、石龕の中には来待石製の2つの宝篋印塔を納める。

石龕（第86図）

石龕の本体は横幅70.6cm、奥行き56cm、床石から宝珠までの高さ（床石を含む）158cmで、床石上面から屋根天井までの内高は101cmとなる。床石は幅88cm×奥行き72cm、厚さ18cmの2枚からなる。基壇は幅177cm、奥行き91cm、厚さ19cmの2枚からなる。本体側壁は厚さ10cmで、表面には荒いノミ跡が残る。屋根の最大幅90.8cm、高さ37cmで、軒にかけて大きく反っている。頂部の平坦部は28cm×28cmで、その上に露盤宝珠がのる。宝珠は最大径18.9cm、露盤は一辺24cm、高さは28.6cmで、整った形になっている。露盤宝珠の柄と、屋根の柄穴は方形で、ていねいに仕上げられており、柄穴は一辺15.4cm、深さ2.6cmである。

宝篋印塔（第87図・左側の石塔）

石龕内の正面左側の石塔。総高86.5cmで、相輪は別の石で作られているが、笠、基礎、塔身は一石である。基礎、塔身はやや風化している。基礎は幅21.5cm、高さ19.3cm、塔身は幅16.4cm、高さ15cm、笠は高さ18cmで、下端幅20.2cm、隅飾の最大幅は21.4cmで、軒幅は約21cmである。軒より下部の階段は省略され、上部階段は1段のみで、径12.6cmの平面円形に作られている。隅飾の高さは11.4cmで、やや外側に傾く。相輪は高さ37.5cmで、簡略されながらも宝珠、九輪、受花、伏鉢が表現されている。柄は根本で幅6cm、長さ3cmである。伏鉢は高さ3.3cm、下端部径12.2cmで、下部受花の高さ2.6cm、最大径12.2cmである。九輪は高さ19.5cm、最大径12cmの胴張りで、幅広の溝5条を付けることで表現している。上部受花は高さ2.8cm、最大径10.8cm。宝珠は高さ9.2cm、最大径10.5cmである。

宝篋印塔（第87図・右側の石塔）

石龕内の正面右側の石塔。総高84.5cmで、相輪は別の石で作られているが、笠、基礎、塔身は一石である。基礎、塔身はやや風化している。基礎は幅22cm、高さ19.5cm、塔身は幅17.7cm、高さ15.8cm、笠は高さ15.2cmで、下端幅20.2cm、隅飾の最大幅は22cmで、軒幅は約20.5cmである。軒より下部の階段は省略され、上部階段は1段のみである。隅飾の高さは12.1cmで、やや外側に傾く。相輪は高さ37cmで、簡略されながらも宝珠、九輪、受花、伏鉢が表現されている。柄は根本で幅6cm、長さ3.3cmである。伏鉢は高さ3.3cm、下端部径12.6cmで、下部受花の高さ2.8cm、最大径12.7cmである。九輪は高さ19.2cm、最大径12.8cmの胴張りで、幅広の溝5条を付けることで表現している。上部受花は高さ2.7cm、最大径11.5cm、宝珠は高さ9cm、最大径10.8cmである。

(d) 4号石塔

来待石製で、屋根に宝珠をもつ竿状の墓石である（第88図）。3号石塔の隣にあり、同じ列に存在する。川島家墓所では、石龕を伴わない最も古い墓石であり、石龕の最終時期や形態の推移を知るために紹介する。基礎が3段あり、その上に墓石を置き、頂部に宝珠が付いた笠を載せる。下の基礎は2枚からなり、幅76cm、奥行き73cm、高さ20cm、2段目は1枚で、幅55.6cm、奥行き52cm、高さ25cm、3段目は幅46.4cm、奥行き43cm、高さ21.5cmである。墓石は幅34cm、奥行き30.5cm、高さ56cmの長方体の石材である。表面は、凹状に深さ2.3cmに浅く削り、縁を花弁状に加工し、2段に彫っている。中央部の枠取内に「帰元」、戒名と没年の「寛政5年」、「天明5年」が左右に刻まれている。笠と宝珠は一石で作る。笠部下端は幅56cm×奥行き54cm、上端幅29cm、高さ39.5cmである。軒は中央から端にかけては直線であるが、端部では大きく反っている。頂部の平坦部には低い段を設け、2段とし

ている。上段は22.5 cm × 28 cmで、中央部に宝珠が付く。宝珠の下端幅は17 cm、奥行き15 cmで、高さは16.5 cmである。宝珠は整った球形になり、高さ10.5 cm、最大径は16 cmである。

(e) 17号石塔と石龕

石龕は、来待石製で寄棟造の屋根をもつタイプのものである。保存状態はよく、石龕の中には来待石製の2つの宝篋印塔を納める。

石龕（第89図）

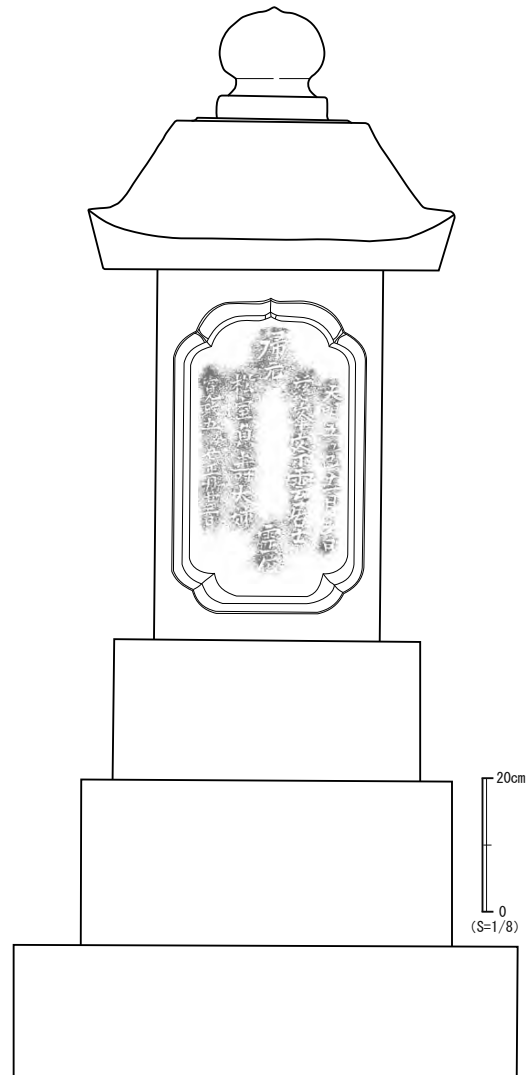
石龕の本体は、横幅63 cm、奥行き46 cm、高さ（床石を含む）113 cmあり、床石上面から屋根天井までの内高は78 cmとなる。床石は幅81.5 cm、奥行き65 cm、厚さ17 cmの1枚からなる。本体側壁は厚さ10 cmである。屋根の最大幅68.5 cm、高さ33 cmで、軒にかけてやや反っている。頂部の平坦部は48 cm × 7 cmである。

宝篋印塔（第90図・左側の石塔）

石龕内の左側の石塔。総高68.1 cmで、相輪、笠、基礎、塔身は別々の石で作られている。基礎は幅18.5 cm、高さ18.2 cmで、上端には反花座の退化した2段の階段をもつ。塔身は高さ11.4 cm、幅11.4 cmである。笠は高さ18.3 cmで、下端幅16 cm、隅飾の最大幅20.5 cmである。軒より下部の階段は2段、上部の階段も2段で作られている。隅飾の高さは7.8 cm、やや外側に傾き、側面に文様が彫られている。相輪は高さ22.1 cmで、宝珠、九輪、受花、伏鉢が表現されているが、明瞭ではない。柄は根本で幅5 cm、長さ3 cmである。伏鉢部分は高さ1.5 cm、径10.8 cmで、下部受花の高さ2.2 cm、径10.7 cmである。九輪は高さ11.2 cm、最大径10.7 cmで、細く浅い溝4条を付けることで表現している。上部受花は高さ2.8 cm、最大径10.3 cm。宝珠は高さ4.5 cm、最大径10.3 cmである。

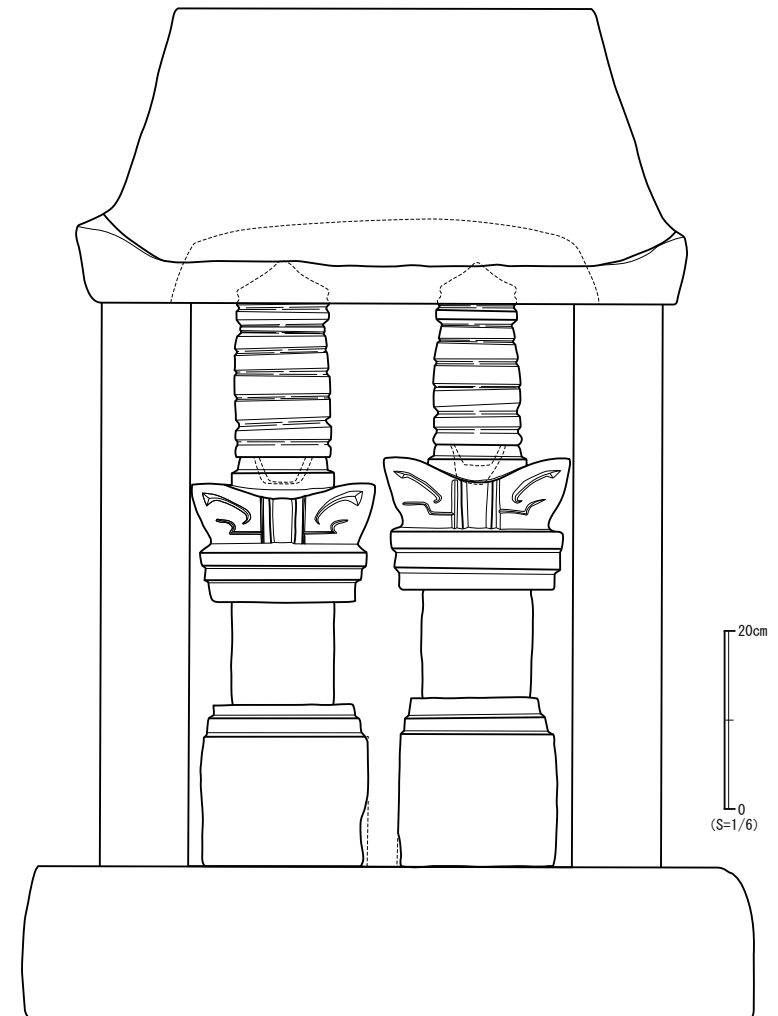
宝篋印塔（第90図・右側の石塔）

石龕内の右側の石塔。総高67.9 cm



第88図 川島家墓所4号石塔 実測図

で、相輪、笠、基礎、塔身は別々の石で作られている。基礎は幅17.7 cm、高さ19 cmのやや胴張りで、上端には2段の階段をもつ。塔身は高さ12.1 cm、幅12.4 cmのやや胴張りである。笠は高さ16.2 cmで、下端幅17.2 cm、隅飾の最大幅は20.8 cmである。軒より下部の階段は2段、上部の階段も2段で作られている。隅飾の高さは8.1 cm、やや外側に傾き、側面に文様が彫られている。相輪は高さ20.5 cmで、宝珠、九輪、受花、伏鉢が表現されているが、明瞭ではない。柄は根本で幅5 cm、長さ2.4 cmである。伏鉢部分は高さ1.5 cm、径9.9 cmで、下部受花の高さ2 cm、径9.8 cmである。九輪は高さ10 cm、最大径9.7 cmで、細く浅い溝3条を付けることで表現している。上部受花は高さ3 cm、最大径9 cm、宝珠は高さ4 cm、最



第89図 川島家墓所17号石塔 実測図

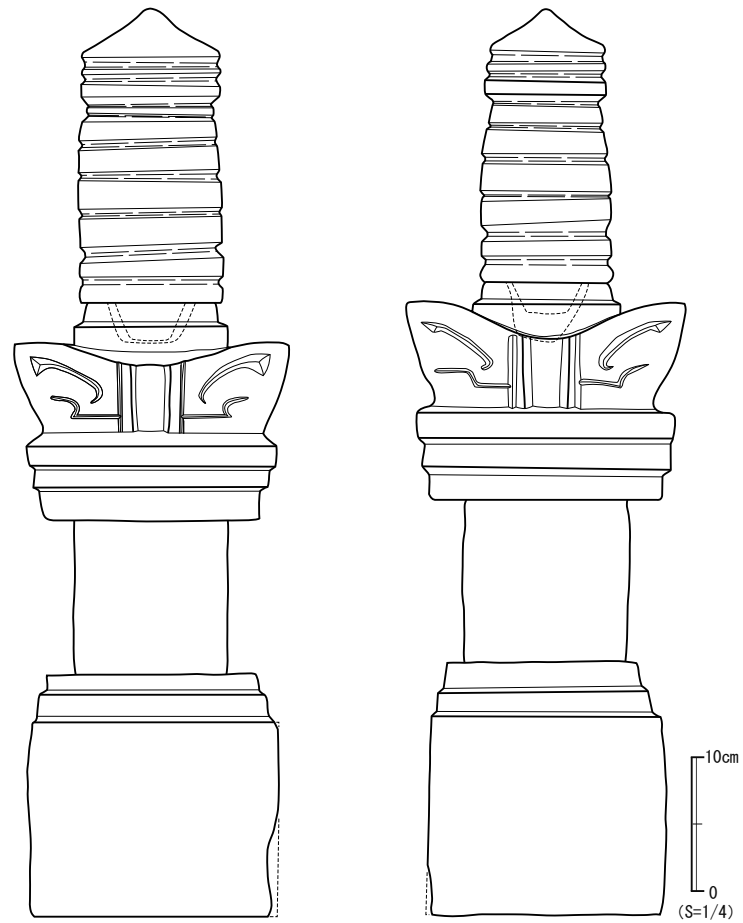
大径 8.7 cmである。

(f) 20 号石塔と石龕

墓地の奥に所在し、2 基の石地藏の隣にある。石龕は、来待石製で寄棟造の屋根をもつ。風化が著しく、屋根は壊れ、残欠は石塔の背後に置かれている。また、内部の宝篋石塔の相輪は壊れ、塔身や基礎も風化が進んでいる。

石龕（第 91 図）

石龕の本体は横幅 60 cm、奥行き 45.5 cm、高さ 64 cmあり、床石から宝珠までの高さは 103 cmとなる。床石は幅 72 cm、奥行き 59.5 cm、厚さ 18 cmの一枚石からなる。本体は厚さ 6 cmで、1 枚で構成され、表面には荒いノミ跡が残る。屋根は幅 78 cm、奥行き不明、高さ 39 cmと高く、軒のかけては大きく反つ

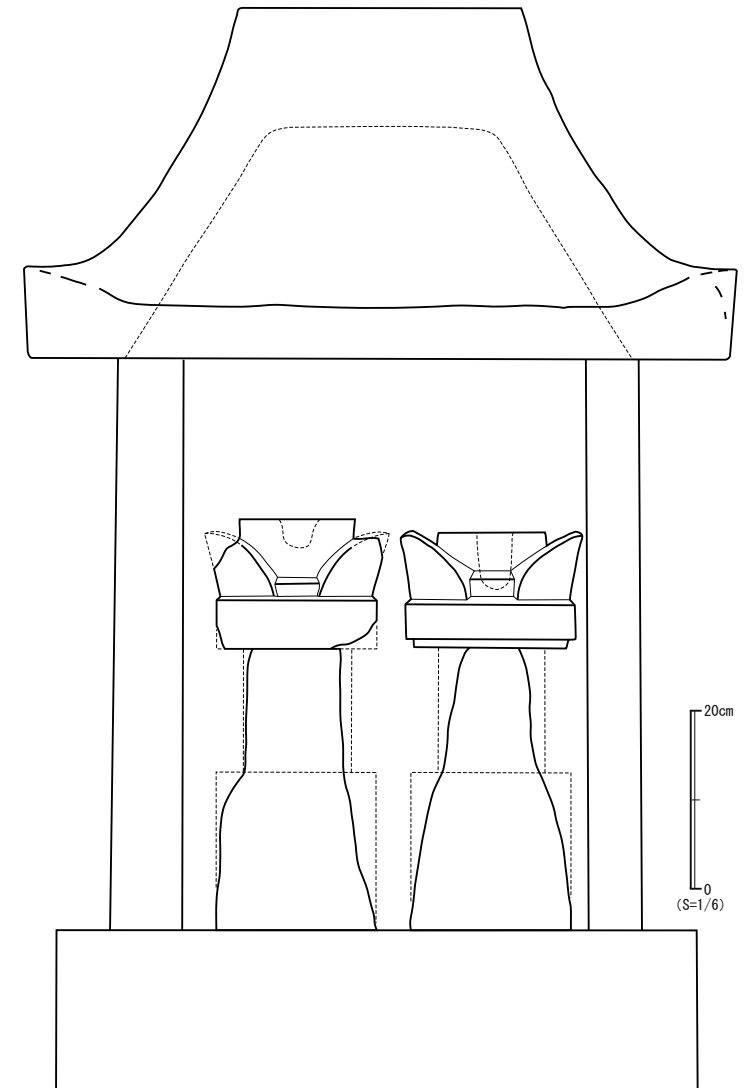


第 90 図 川島家墓所 17 号石塔の石龕内宝篋印塔 実測図

ている。棟にあたる頂部の平坦部は長さ（推定）32 cm、幅 8.5 cmであり、横に細長い。

宝篋印塔（左側の石塔）

石龕内の左側の石塔。相輪を欠く。相輪、笠、基礎は別々の石で作られているが、基礎と塔身は同じ石である。基礎は下端幅 18 cm、上端は風化しているものの、身の壁が垂直立ち上がるので、同じ幅と推定される。高さ 17.8 cm。塔身は高さ 13.8 cm、下端幅と上端幅とも 12 cmである。笠は高さ 14.4 cmで、



第 91 図 川島家墓所 20 号石塔 実測図

下端幅 18 cm、上端幅で 13 cm である。下部階段はなく、軒より上の上部階段 1 段に作られている。隅飾の頂部は欠けてはいるが、推定で高さは 7 cm で、全体にやや外側に傾く。側面の文様は彫られていない。頂部の柄は径 4.5 cm、深さは 3.2 cm と浅い。

宝篋印塔（右側の石塔）

石龕内の右側の石塔。前記の石塔と同じく相輪を欠く。この石塔も、相輪、笠、基礎は別々の石で作られているが、基礎と塔身は同じ石である。基礎は下端幅 18 cm、上端は風化しているものの、身の壁が垂直立ち上がるので、同じ幅と推定される。高さ 17.4 cm。塔身は高さ 14 cm、下端幅と上端幅とも 12 cm である。笠は、高さ 13 cm で、下端幅 17 cm、最大幅 19 cm、上端幅で 12 cm である。下部階段は 1 段で、軒より上の上部階段も低い段が 1 段作られている。隅飾の高さは 7.5 cm で、全体にやや外側に傾く。側面の文様は彫られていない。頂部の柄は径 4 cm、深さは 7.5 cm で、狭く深い。なお、相輪の九輪の一部がある。左右どちらの塔のものかは定かではないが、径 7.4 cm の大きさである。

3) 川島家過去帳に見る石塔の実年代

川島家に残された過去帳により、初代より 4 代目をみると、
[中興]

①（戒名）
寛文 5 年（1665）11 月 11 日没
（戒名）
寛文 4 年（1664）5 月 17 日没

②（戒名）
享保 5 年（1720）正月 7 日没
（戒名）
宝永 4 年（1707）正月 27 日没

③（戒名）
宝暦 7 年（1757）5 月 12 日没
（戒名）
宝暦 12 年（1762）正月 20 日没

④普照院 慈峯寮雲居士、俗名 忠右エ門、忠左衛門の父
天明 5 年（1785）11 月 5 日没
松室貞寿大姉、忠左エ門の母
寛政 5 年（1793）正月 23 日没

（以下略）

とあり、4 代目にあたる「普照院 慈峯寮雲居士」「松室貞寿大姉」の戒名と没年が、今回紹介した 4 号石塔銘文と一致する。

一方、4 号石塔より東側の 1～3 号石塔はいずれも石龕で、年代的には 4 号石塔に先行するが、2 号、3 号石塔は屋根に宝珠をもつなど、4 号石塔への移行段階を示している。2 号、3 号石塔内の宝篋印塔を比較した場合、3 号石塔内の宝篋印塔は便化が進んでおり、より新しい様相を示している。更に、5 号石塔より西側にかけても、紀年銘によると年代順に配列されていることが確認できる。川島家の家伝も、1 号石塔より西に向かって、初代、2 代、3 代、4 代・・・と数えている。これらのことから、1 号石塔→2 号石塔→3 号石塔→4 号石塔の配列が川島家過去帳に記された初代より 4 代目の墓石に該

当する蓋然性が高いと考えられ、製作年代も没年より概ね推測することが可能であろう。

なお、17 号石塔、20 号石塔も石龕である。しかし、配列や過去帳より類推するに、川島家一族ではあるが、嫡流当主の墓石ではなく、何らかの理由で傍系の墓石が置かれたものとするのが妥当であろう。

4) まとめにかえて

川島家墓所の石塔は、石龕から竿状の石塔への変遷がたどれるとともに、残された過去帳より製作実年代を推測できる大変貴重な事例である。1 号石塔→2 号石塔→3 号石塔→4 号石塔という変遷を想定したが、とりわけ、石龕から竿状の石塔への変化が明確に確認でき、その年代は宝暦期（1760 年代）より後、天明・寛政期（1780 年代）までの間と特定できる点は重要である。また、石龕の屋根の変遷は、寄棟造から頂部に宝珠を乗せる宝形造に変化する傾向にあることが指摘できる。

一方、石龕内の宝篋印塔も、入れ替え等がなければ、変遷と実年代を想定できる。もっとも、今回の調査例では疑問点もないわけではなく、すなわち、1 号、2 号石塔内の宝篋印塔を比較した場合、1 号塔内の塔は基礎、塔身が一石で作られているのに対し、2 号塔内の塔は基礎、塔身が別々の石で作られるなど、形式的には 2 号塔内の宝篋印塔が古式の様相を示している。

以上の点をふまえ、調査事例を増やすことによって、石龕スタイルの石塔の出現と消滅、石龕と内部石塔とのセット関係などを更に追求していくことが今後の課題であろう。

なお、川島家墓所は、古い墓石が総廟等により改修・消滅していく中で、近世の庄屋クラスの墓石を良好な状況で残している極めて貴重な事例であることを改めて付け加えておく。



写真 152 川島家墓所全景（東から）



写真 155 川島家墓所東側（左から1～4号石塔）



写真 153 川島家墓所1号石塔



写真 154 川島家墓所2号石塔



写真 156 川島家墓所3号石塔



写真 157 川島家墓所4号石塔



写真 158 川島家墓所全景（西から）

5. 来待石製石塔の階層的広がり ～玉湯・上福庭家墓所の石塔～

1) はじめに

福庭家は中世から続き、近世以降、意宇郡^{おもじろ}白村（現在の松江市玉湯町湯町）に居住している。江戸時代には上福庭家、下福庭家に分かれ、両家とも意宇郡^{したごおり}の下郡役を勤めたことのある旧家である。

本稿で報告する上福庭家墓地の石龕と宝篋印塔とは、玉湯町布志名にある曹洞宗蓮光寺の墓地に所在する。墓地は寺の北側にあり、斜面をカットし、東西9m×南北12mの長方形区画としている。石塔の配列をみると、上福庭家初代の石塔は大形の五輪塔で、西側中央に位置する。2代にあたる石塔は初代の南に隣接し、そして、本紙で報告する3代の石龕は初代の五輪塔の北側に存在する。また、それ以降の歴代の石塔も墓地の西、北、東にコの字形に整然と並んでいる。（写真161）

なお、詳細は後述するが、石龕内の2基の宝篋印塔は墓石銘より上福庭家三代の夫妻墓であることが知られる。

注

（1）『八東郡誌』（1926）に、福庭氏系図と紹介がある。『宍道町史（通史下巻）』（宍道町 2004）「意宇郡下郡役一覧表」による。

2) 石龕

上福庭家墓地は、コの字状に石龕が展開し、代々それぞれの墓石がその中に納められている。そのうち、本稿では、宝篋印塔の退化した形態で、かつ紀年銘を有する事例を紹介する。本石塔は、上福庭家の墓地内において西側に並ぶ石塔・石龕のうちで、ほぼ中央に位置し、凝灰質砂岩（来待石）製の石龕内に2基の宝篋印塔が納められたものである。石龕の天井部分は削り抜くように調整され、荒い鑿の調整痕が残る。

石龕内の宝篋印塔は、基礎部分の風化が著しい他は、良好な残存状況である。左側の石塔は総高96.8cmで、基礎・塔身が一石で作られ、笠・相輪もそれぞれ一石である。基礎は高さ25.4cm、下端は風化のため幅は不明で、上端は23.9cmである。塔身は高さ20.9cm、下端幅・上端幅19.2cmである。塔身には、右に「延享三年」、中心に戒名、左に没日が刻まれている。笠は、高さ19.1cmで、下端幅24.9cm、上端幅11.7cmである。下部階段は2段表現されているが、明確に階段状に段を作っているわけではない。軒より上の上部階段は1段のみ作られている。また、隅飾は、やや外側に傾き、上辺は丸みを持たず直線的な作りとなっている。高さ11.7cm、下端幅7.5cmで、側面には直線的な文様が施されている。相輪は高さ31.3cmで、九輪・受花・宝珠・伏鉢が表現されているが、受花などに花卉の表現はみられない。伏鉢は高さ2.1cmで、下端径12.4cm。下部受花の高さは、2.1cmで、下端径11.3cm、最大径12.6cm。九輪の高さは、20.9cmで、下端直径10.5cm、上端直径10.0cm、最大径13.3cmである。九輪は、細く浅い溝を5本付けることで表現されている。上部受花は、高さ1.8cm、下端径10.0cm。宝珠は高さ4.4cm、下端径10.4cm、最大径12.4cmである。

石龕内右側の宝篋印塔は、下部が土に埋もれているため、総高を測ることはできなかったが、現状で確認できた石塔の高さは92.0cmであり、左側の石塔とほぼ同じ総高になるだろう。基礎部は確認できた高さが20.9cm、上端幅24.6cmで、上部に2段の階段を作り出している。基礎は高さ21.0cm、下端幅18.3cm、上端幅18.6cmである。塔身には右に「享保十七年」（1732）、中央に戒名、左に没した日付



写真 159 川島家墓所 17 号石塔

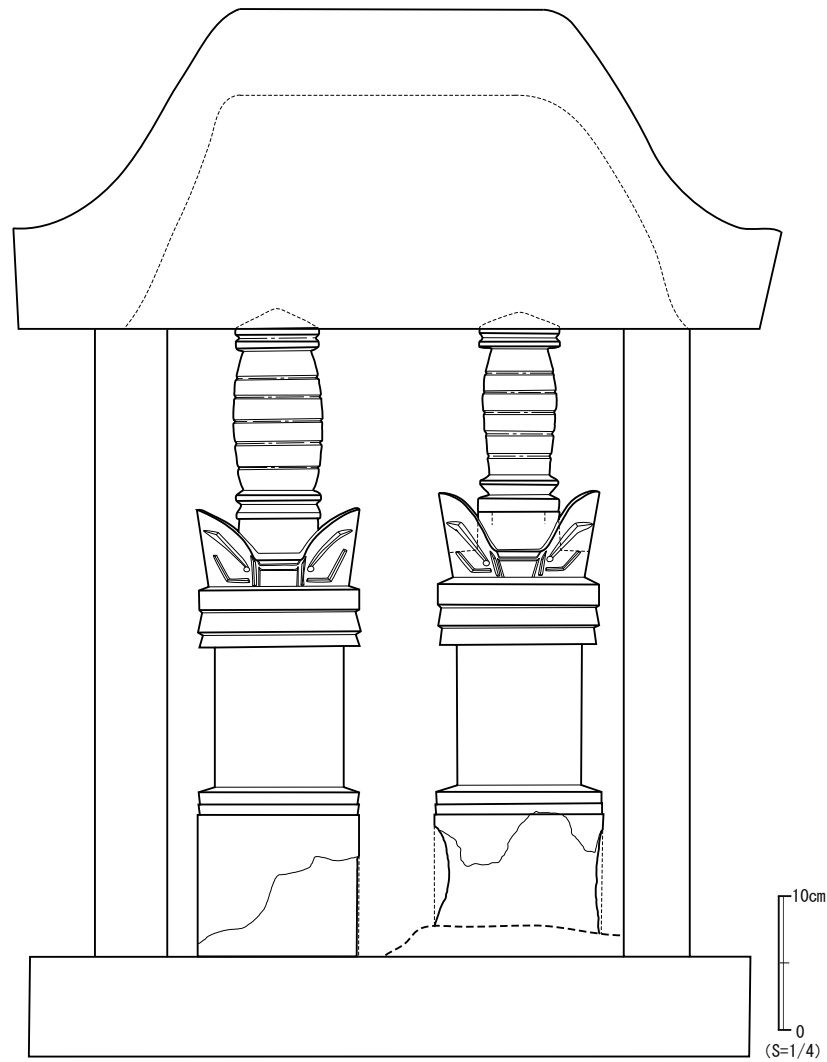


写真 160 川島家墓所 20 号石塔

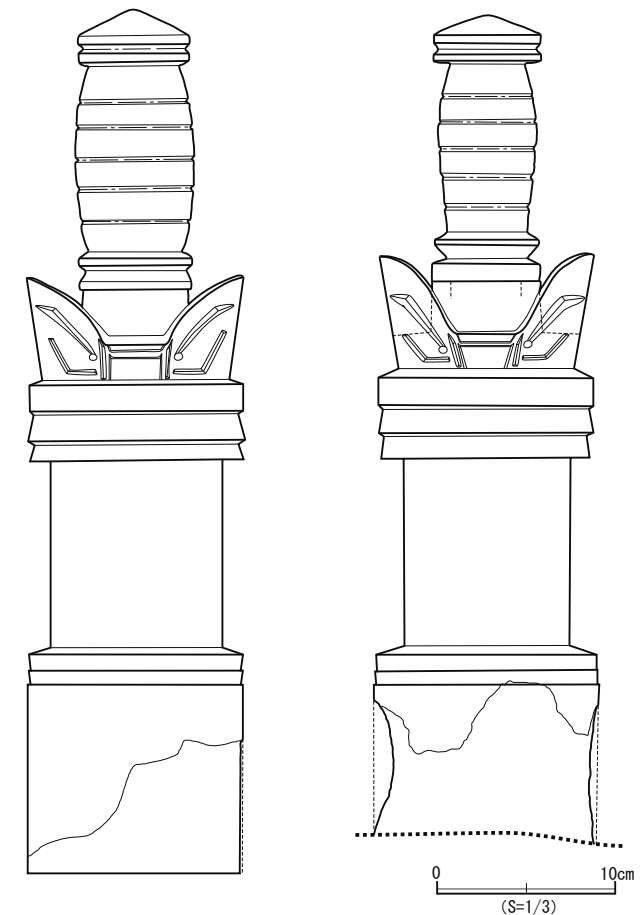
が刻まれている。笠は高さ 19.8 cm、下端幅 23.2 cm、上端幅 12.0 cm。下部階段は 2 段、上部階段は 1 段作り出されている。隅飾は高さ 12.9 cm、下端幅 7.6 cm で、側面にはやはり直線的な文様が施されている。相輪は左側の石塔と同じように、下から伏鉢、受花、九輪、受花、宝珠が表現されている。伏鉢は高さ 2.6 cm、下端径 11.9 cm。下部受花は高さ 2.9 cm、下端径 9.0 cm、最大径 11.7 cm。九輪は高さ 18.9 cm、下端幅 8.7 cm、最大径 11.1 cm で、表面に 5 本の細く浅い溝を巡らせることで九輪を表現している。上部受花は高さ 1.5 cm、下端径 8.8 cm、最大径 11.9 cm。宝珠は、高さ 3.8 cm、下端径 11.0 cm、最大径 11.9 cm である。

3) まとめ

上福庭家墓地に所在する多数の石塔のうち、本稿では石龕内に納められた紀年銘を有する宝篋印塔 2



第 92 図 蓮光寺 上福庭家墓所石龕・宝篋印塔（上福庭家三代石塔） 実測図



第 93 図 蓮光寺 上福庭家墓所三代石龕内宝篋印塔 実測図

例を紹介してきた。本石塔の形態的な特徴としては、基礎と塔身が1石で作り出されている点、隅飾は丸みを持った作りではなく直線的な形で、文様も直線的である点、階段がしっかりした階段状ではなく、簡略化された表現となっている点、笠部の上部階段は1段のみとなっている点、相輪の九輪中位が膨れる形状をし、細く浅い沈線表現される点などが挙げられる。

先述したとおり、本石塔2例には紀年銘を有し、左側の石塔には「延享三年」（1746）、右側の石塔には、「享保十七年」（1732）が塔身に刻まれている。この年代からすれば、本石塔の形態的な特徴は、18世紀前半代の宝篋印塔の特徴を示すものであり、来待石製宝篋印塔の形態的変遷に一点の定点を設定できる石塔である。そもそも、宝篋印塔の塔身には梵字が刻まれるのが一般的であるが、このように戒名を刻むことで、宝篋印塔のもともとの作りから逸脱したものとなっている。このことは、宝篋印塔製作の以後の特徴とも言えるだろう。

また、上福庭家墓地に所在する今回紹介した事例よりも年代的に以降の石龕内の石塔は、塔身部分が縦長になり、そこの部分に戒名を彫りこんだものが目立ち、宝篋印塔が位牌形に変形している。このことを考慮に入ると、本稿で紹介した石塔は、宝篋印塔本来の意味が失われ、位牌としての機能が付加されていく過程としても捉えることができるだろう。その変化の背景として、宗教と造墓のかかわり、造立する石塔の作り手である石工の変化など様々な契機を考えることができ、今後のこのような時期の石塔の報告例が増えることで検討をおこなうべき課題である。

さらに、「上福庭家」という、近世においては下郡格（大庄屋を務めることの出来た家格）の墓所で、石塔の実態を知る上で大変貴重な事例である。近世の社会階層的な構造とそこで用いられる諸用具の格を考慮したとき、本事例は下郡格に位置づけられる家の造墓活動の一事例としての特徴をみてとることができるだろう。江戸時代における石塔の様相が不透明ななかで、本石塔、および墓地内に展開する石塔群は、年代的にも階層的にもひとつの指標となる。



写真 161 蓮光寺 上福庭家墓所全景（左側中央に初代の五輪塔が建つ）



写真 162 蓮光寺 上福庭家三代石塔 1



写真 163 蓮光寺 上福庭家三代石塔 2



写真 164 蓮光寺 上福庭家初代五輪塔



写真 165 蓮光寺 上福庭家五代石塔（寛政 6、7 年の紀年銘をもつ）

おわりに

松江石造物研究会の石造物調査

松江石造物研究会は、これまで^{きまちいし}来待石（凝灰質砂岩）製石塔の調査及びその報告を重ねてきた。これは、来待石の風化しやすい特徴によって貴重な資料が失われる前に、石塔事例の集められる限りの情報を収集し、来待石製石塔の記録を残そうとするところから始まった。更に、調査開始の段階では、来待石製石塔の実証的研究が少なく、その分布や利用の実態、変遷など多くのことがまだまだ明確ではなかった。

この調査は、来待石製の紀年銘を有する石塔や特徴的な形態を有する石塔、伝承や記録をもつ石塔など、年代・被葬者・造塔経緯など、石塔の形だけではなく、石塔に付随する情報量の多い資料を中心に進めていった。このことは、石塔を記録していくと同時に、来待石製石塔の利用の実態について調査を進めていく作業でもあった。その結果、来待石製石塔の分布については出雲国が中心となることを明らかにするとともに、大型石塔と石廟という、特殊な事例があるということ把握するに至った。

大型石塔の利用は、第 4 章 2 で触れたように、伝大野次郎左衛門墓五輪塔を特殊例として考えるならば、^{いむくらじ}厳倉寺・^{ほり おまじはる}堀尾吉晴墓五輪塔、^{せきがん}報恩寺・^{ほうおん じ}堀尾忠氏宝篋印塔、^{ただうじ}圓成寺・^{えんじょう じ}堀尾忠晴五輪塔で確認できるように、藩主の墓塔として近世初頭に突如として出現している。これは全国的な近世大名墓の大型化の傾向として、堀尾氏もその流れの中にあることを確認することになった。それと同時に、大型石塔の出現は、大型石材を加工、利用する技術的な到達点を見いだすことができる。この大型石材の利用とその後の展開の背景には、堀尾氏が戦国期から織豊期を勝ち抜く中で培った最新の土木技術が、堀尾氏の入部によって出雲にもたらされ、更に堀尾氏による松江城と城下町の建設によって、この技術が定着したと想定した。つまり、大型石塔の資料調査を集める過程において、藩主墓で来待石製大型石塔が利用されるという特徴と、その出現年代から、大型石材利用の技術史的な要因に堀尾氏の入部が関係しているということまで考察を進めることができた。

また、調査を進める中で「石龕」と呼ばれる来待石製の側壁と屋根で構成される覆い屋があり、その内に宝篋印塔を納める墓の形態があることもわかってきた。特に、^{せきがん}報恩寺・^{みんぶ せきひょう}堀尾氏部石廟、^{ふた}富田城内・^{しんじ}親子観音、^{みとや}三刀屋・^{とだ}殿様墓は、大型で、平入り屋根に側面外壁に四十九院が彫り込まれる手の込んだ作りのものであり、他の石龕とは規模や質的に凌駕するものであった。それらの石塔を詳しく調べていくと、個々の石塔に記された紀年銘や戒名、または石塔の所在する立地などから、石塔の被葬者を明らかにすることができた。その結果、この特殊な石龕は、堀尾氏一族で利用されたことが明らかとなり、石龕の中でも特殊な事例として当研究会では、「石廟」として評価をするに至った。そして、石廟の堀尾家家臣の利用、石廟を見本としながら、それが小型化した石龕を使用した事例の確認を通じて、石廟と石龕の階層的な展開まで考察することができた。

このように、来待石製石塔の調査を進めることは、堀尾氏とその一族の石塔の実態を明らかにすることにつながるとともに、次第に堀尾氏一族の墓の実態と墓石の状況について調べていくという方向性が明確化してくることとなった。これは、第 3 章で記した堀尾家墓所の悉皆調査の段階へつながることとなった。

まず、平成 18 年の京都・^{しゅんこういん}春光院における堀尾家墓所の調査では、堀尾家断絶後に出雲から運ばれて形作られた墓所の実態が明らかとなった。出雲から遠く離れた京都において、来待石製石塔が林立する墓地景観は、当時からかなりの衝撃を受けた。この調査において、墓所内御霊屋に安置された木像、来待石製石塔の状況、^{しやくだにいし}笏谷石製石廟の確認、古文書による堀尾氏一族の名前と戒名の照合など、多くの新たな

発見を得ることができた。特に、堀尾吉晴の親である堀尾泰晴夫妻の宝篋印塔2基を安置した石廟は、越前（福井県）で産出される笏谷石（火山礫凝灰岩）製であり、その形態は平入り屋根に外周壁面に四十九院を彫り込み、正面の開口部に扉を有していた。この形状は、それまで出雲で調査してきた堀尾民部石廟や親子観音、殿様墓の石廟に非常に似通った特徴を有していたことから、来待石製石廟出現を考えるうえで大きな手がかりとなった。

また、江戸・養源寺ようげんじと高野山奥之院においても堀尾家墓所の調査を行い、それぞれの墓所の状況を把握できた。来待石製石塔の立ち並んでいた京都・春光院の墓所と異なり、それぞれの墓所に立てられた石塔の石材は、近隣から調達された石材であったが、遠く国元から離れた場所であっても、墓所が形成されていたことが掴めた。更に、墓所の一連の調査によって、こうした堀尾家墓所の整備には、堀尾家断絶後、堀尾忠晴の娘の嫁ぎ先である石川家や残された堀尾氏一族が深く関わっていることも明らかとなった。

このように、来待石製石塔の調査を通じて、近世大名堀尾氏とその一族における墓塔造立のあり方、及びその堀尾氏を頂点とする墓塔の階層性、大型来待石製石塔の利用にみられる石材加工の技術的展開、他石材からの来待石製石塔製作への影響など多くの点において、新たな知見を見いだすことができた。しかし、こうした新たな発見により派生する課題も一方で生じていることも事実であり、以下では「おわり」に代えて、堀尾氏とその一族の石塔調査を通じて見えてきた今後の課題となる点について記しておきたい。

1. 近世来待石製石塔出現の諸問題

（1）来待石製石塔出現の系譜

近世初頭の来待石製宝篋印塔は、そのプロポーシオンが実に特徴的である。幅の大きな塔身、側面が四角形に近い隅飾の形とそこに彫り込まれる独特な文様、請花表現の省略された相輪、簡略化された九輪、扁平な宝珠など、本来の宝篋印塔の形態を大きく逸脱したオリジナリティーを備えた様相を呈している。かねてより宍道町・岩屋寺周辺の石塔研究を通じて、この来待石製宝篋印塔が中世末から近世初頭にかけて突然出現し、爆発的に広がっていくことが指摘されてきた。しかし、独特の形態をしているにもかかわらず、その系譜をつかむことができない状況にある。更に、宝篋印塔だけに限らず、中世段階で来待石を利用した五輪塔などの石塔事例も明確なものが少ない状況にある。

当研究会は、第4章1で述べたように、突然として現れる来待石製宝篋印塔の様式について、来待石の石材利用の技術系譜を堀尾氏に求めるのであれば、堀尾氏とともに技術が動いたという仮説を立て、堀尾氏の出雲入府前の領地であった遠江（静岡県）において、その仮説を検証するべく調査を行った。しかし、砂岩であったり文様の系譜として似ている要素は確認できたものの、結果として明らかな証拠をつかむまでには至らなかった。

また、来待石製石塔出現の系譜については、京都・春光院の堀尾家墓所における笏谷石製石廟の存在を評価しながら、併せて文様から近江地域（滋賀県）の影響があることが指摘されている（間野2019）。これは文様系譜からその出現を考察する実証的手法であり、出雲地域で突如として出現した来待石製石塔の独特の宝篋印塔様式の系譜を考察するうえで非常に興味深い指摘である。

更に、京都・春光院の堀尾家墓所には、堀尾泰晴夫妻宝篋印塔を安置する石廟があり、この石廟は福井県で産出される笏谷石を使用したもので、越前荘厳式と呼ばれる一定の型式を有している。他地域の石廟が利用され、その内部に安置された宝篋印塔は来待石製宝篋印塔であったことから、笏谷石製石塔との関係についても注意していく必要がある。

なお、堀尾吉晴は豊臣秀吉の死後、徳川家康と前田利長としながが対立した際、利長が家康に詫びを入れることで終結した事件の後、慶長4年（1599）に北陸の抑えとして堀尾吉晴は越前国府中城の留守居役を任され、五万石が与えられた。注目すべきは、これにより堀尾吉晴は、越前国に知行地を有していたということである。このことにかかわらず、もともと堀尾吉晴は尾張国出身ではあるが、秀吉と戦功を重ねることにより、天正11年（1583）には若狭国高浜城が与えられ、後豊臣秀次の家臣として近江国佐和山城を与えられた後に遠江国浜松城主となるというように各地を転々としている。堀尾吉晴は、領地移転に伴い、各地で築城技術・城下町の建設技術及び、いわゆる織豊城郭という当時の建設土木技術の最先端を目の当たりにしていたと思われる（堀尾吉晴公共研究会：城郭チーム報告書参照）。

こうした状況の中で、京都・春光院の堀尾家墓所に所在する笏谷石製石廟の存在を考えたとき、堀尾吉晴が越前から産出される笏谷石の製品に触れる機会は、多分にあったと考えられる。笏谷石製石廟から来待石製石廟生産の影響を考慮すると、堀尾吉晴の領国支配の足跡を更に丁寧に調査をするによって、来待製石塔の系譜が明らかにできる可能性もある。

また、これまで当研究会は、主として来待石製の五輪塔や宝篋印塔について、室町時代後期から江戸時代にかけての変遷を検討してきた。しかし、最近の発掘調査による新知見によって、16世紀以前の中世に製作された石塔も数多く確認されるようになってきた。それにより、中世の段階では、採用された石材は種類に富み、来待石の他、地元産の白粉石しらこいし（白色凝灰岩）、荒島石あらしまいし（浮石凝灰岩）、大海崎石おおみさかいし（和久羅山デイスイト）に加え、大山産の安山岩、若狭の日引石（安山岩質凝灰岩）系の製品が出雲に搬入され、墓塔（五輪塔・宝篋印塔）として利用された状況が明らかになってきている。

こうした中世における石塔の形態と石材の特徴、流通を把握し、その変遷を探求する中で、中世末から近世にかけて、来待石製の石材に統一されていく過程を考えていく必要がある。そうした作業により、来待石の本格的利用の起源を探ることにつながっていくこととなるだろう。

（2）岩屋寺宝篋印塔を巡る課題

岩屋寺に所在する「文禄五年」（1596）銘のある宝篋印塔は、紀年銘のあるものとして来待石製宝篋印塔の最も古い基準資料に位置づけられる。その形態は、隅飾側面が四角く、そこにモチーフが不明な文様が入り、相輪は請花表現が省略され、九輪も簡素に作り出され、宝珠も扁平に仕上げられている。これは、本来の宝篋印塔の形態とはかけ離れた様相を呈している。しかし、先述したように、この決定的な祖型となるが、型式学的に前代に位置づけられる来待石製石塔はこれまで見つかっていない。

これまで考察してきたように、当研究会は、堀尾氏の出雲入府をきっかけとして来待石の石材利用が本格化することを想定してきた。しかし、堀尾氏が出雲に入府するのは慶長5年（1600）の関ヶ原合戦の後のことである。

つまり、岩屋寺に所在する「文禄五年」銘宝篋印塔の存在により、その形態が堀尾氏の出雲入府前に既にあったことになり、時間的な矛盾が生じることとなる。

石塔造立は被葬者の供養が目的となるが、石塔を建てるタイミングは追善供養として亡くなって数年後に立てる可能性も含まれる。そのため、「文禄五年」銘宝篋印塔は、堀尾氏が入府する慶長5年以降に文禄5年に亡くなった被葬者の追善供養として建立された可能性もある。いずれにしても、岩屋寺の「文禄五年」銘宝篋印塔をどのように評価していくのか、近世における来待石製石塔の生産起源を考える上で、その存在と評価は課題となる。

2、来待石製石塔と石工

来待石製の大型石塔の出現から、当研究会は来待石製石塔の本格的生産の開始は、戦国期から織豊期

を生き抜き、各地で城や城下町などの大規模工事を手がけてきた大名の堀尾氏が、その具備する技術をもって入封することで成し遂げられたと考えてきた。しかし、これはあくまで状況的な考察に過ぎない部分が多分にあり、その実態はどのようなものであったのかははっきりしない。新たな技術の導入は果たしてどのような形で持ち込まれたのか。

松江市宍道町来待地区で、中世から近世にかけてある段階で「犬山氏」という、近江国犬山郡から移り住んだと考えられる一族が、石を取り扱う集団として、当地で影響力を発したという。どの段階で移り住んだのかは明確ではないが、地元の伝承として残っているようである（きまち史話会 1997）。この伝承によれば、来待石を産出し製品を製作する本拠地となる来待地区に、出雲国外の近江国から移り住んでいる集団がいること、そしてその集団は石材の加工を手がける集団であったことも考えられるだろう。

また、堀尾氏による松江城と城下町の建設は、当時としても大きな土木事業であり、築城と町造りの経験や知識、技術が無ければ、完成することができない大事業であったと考えられる。こうした事業を成功に導いたのが、城の石垣構築や城下町造成の技術を有する職人集団であったと考えられる。この職人の実態については、先述の来待石製石塔生産の起源にも関係してくるが、どこでどのような職人が、どのような体制で来待石の加工に携わり、どのような注文手法で来待石製品の製作を行っていたのか。これは、石塔の起源と関連して考古学的な手法だけでなく、文献史的な方面からもアプローチして進めていくべき課題であろう。

3、堀尾家墓所の諸問題

（1）出雲・江戸・高野山の堀尾家墓所

これまでの石造物調査を通じて、堀尾氏の墓塔やその墓所の様子が明らかとなったが、それぞれの墓所調査を通じて解明し得ないこともあった。

まず、国元である出雲において、堀尾氏は当主である堀尾吉晴、忠氏、忠晴が、それぞれ八瀬・巖倉寺、玉湯・報恩寺、松江・圓成寺に個別に大型石塔を建てた状況があった。また、京都・妙心寺春光院に墓塔や木像が移動されるまでは、出雲国内に一族の墓所を構え、そこには堀尾吉晴の親である堀尾泰晴をはじめとして、嫡流を中心とした人物と重臣の墓塔が立てられていた状況がうかがい知れる。

つまり、堀尾家断絶前には、国元においてそれぞれ当主個別の大型五輪塔、または大型宝篋印塔で墓塔を立てることに平行して、一族の墓所を1箇所構えていたこととなる。また、その墓所に現在の春光院のように御霊屋が構えられていたかどうかは不明であるが、国元に木像があったことも確かである。では、この当時の墓所が春光院へ移されるまで、墓所にどの人物の石塔が建てられて、堀尾忠晴の死去後、どのような改変を受けて春光院へ墓塔は運ばれたか、現状では解明は困難であるが、春光院での堀尾家墓所整備の過程を考える上で、一つの課題となるだろう。

次に、参勤地の江戸では、千駄木・養源寺に堀尾忠晴とその重臣二名、堀尾忠晴娘（石川廉勝妻）の宝篋印塔が残されている。この墓所は享保年間に火災に遭い、「御霊屋」が消失し、明暦年間においても火災により寺地を移転するという曲折を経て現在の状況へ至っている。かつては、堀尾忠晴をはじめとする墓塔群と御霊屋によって養源寺の墓地一角に堀尾家墓所が形作られていたことは確かであろう。その当時の状況として、他に吉晴や忠氏ら堀尾氏の他の石塔が存在していたか、また御霊屋の中にはどのようなものが安置されていたかは、これも今に至って不明であるが、この墓所が堀尾家の断絶前に既に墓所として存在していたのか、それとも断絶後に墓所としてすべてが整備されたのか、堀尾家の墓所への考えを探る上で課題となるだろう。

また、高野山奥之院に所在する墓所に石塔が立てられた年代については、調査の結果から慶長9年（1604）から寛永11年（1634）までに限られ、そこに堀尾吉晴をはじめとする当主とその重臣、堀尾忠晴娘（石川廉勝妻）の石塔が建てられている。この墓所が営まれ始めたのは、堀尾忠氏が死去した後のことである。つまり、堀尾氏が出雲国を領している時期から墓所の整備が始まっていることは、はっきりしている。高野山へ一族の墓所を構えるという行為は、堀尾家の造墓活動を考える上で非常に重要である。しかし、堀尾家断絶後は堀尾忠晴の娘が嫁いだ伊勢亀山藩主石川家が墓所の管理をおこなうなかで、近代になり、墓所の整理が行われている。かつて、堀尾家断絶後に石川家によって形作られたと考えられる墓所の状況については、新たな資料等によって解明を待つほかないだろうが、どのクラスの家臣がどれほどの石塔を立てていたか、堀尾氏一族の高野山信仰を考える上で重要であろう。また、高野山奥之院における各近世大名の造墓活動において、堀尾氏の墓所が相対的にどの程度の位置にあるかということも、堀尾氏の高野山信仰の程度を考えるうえで課題となる。

（2）堀尾家墓所と堀尾采女

これまで述べてきたように、堀尾家の墓所は出雲国内をはじめ、高野山奥之院、京都・春光院、江戸・養源寺にある。この中で、妙心寺塔頭の春光院の石塔は、堀尾家断絶後に石川家が松江から京都に運んだといわれる（堀尾会 1934「堀尾公畫像縁由」など）。

高野山奥之院の堀尾家墓所について、「堀尾古記」によると、堀尾家断絶の翌年（1634）の10月7日、堀尾但馬（「堀尾古記」の作者）外2名で、高野山へ忠晴の石塔を立てている。その年の6月28日には、堀尾采女と但馬を入れて重臣6名で、大坂より高野山へ上っている。これは1周忌の打合せとともに、忠晴の供養と堀尾家再興の祈願を塔頭の龍生院で行った可能性がある。よって、大坂では堀尾忠晴と松村監物の石塔建立の準備を行い、その後高野山に向かったと考えられる。当時、高野山奥之院での大名墓を製作したのは、大坂石工と泉州石工であり、寛永期は両者の併存期（1620～1630年代）にあたる（関根 2018）。成立時期からみて、花崗岩の大規模な石塔製作を大坂石工に依頼した可能性が高い。

出雲以外の墓所は堀尾吉晴、忠氏、忠晴とその親族、さらに殉死した松村監物の墓が主体である。中でも、高野山奥之院には堀尾采女の関係者や堀尾頼母助などの家臣の石塔も存在する。しかし、江戸の養源寺は今に残る石塔は少なく、5基のみである。家臣として堀尾采女の石塔が唯一存在するのが注目される。堀尾采女は2代藩主忠晴の重臣で、堀尾民部（吉晴の甥）の子である。堀尾家では3番目に高い4000石を給し、「堀尾古記」によれば藩政を仕切った「仕置役」に就いていた。なお、松江城下での屋敷は松江城の脇である北惣門前の現松江歴史館（殿町）の位置にあって、隣には弟の堀尾右近（500石）の屋敷も存在していた。

采女は断絶時に再興を幕閣に願い出た重臣の一人である。堀尾家断絶後の10年を経た寛永21年（1644）に江戸で死亡しているが、その間の史料はない。「堀尾古記」に「（寛永十一年）十二月十一日ニ采女京ヲ罷立、江戸へ下り申候」とあり、堀尾家断絶の翌年の寛永11年（采女が史料に出る最後の年）後も、いろいろと再興に動いていたであろうことは、養源寺に残る堀尾家墓所内に家臣としては唯一石塔があることから想像できる。

なお、『寛政重修諸家譜』では、年代は降るが、断絶から40年後、淀藩主石川憲之（堀尾忠晴の孫）の三男勝明が、將軍綱吉の時代に旗本として堀尾家を再興した。しかし、勝明は28歳の若さで亡くなり、極めて短期間の堀尾家の再興となった。また、勝明の石塔は春光院と養源寺に残るが、養源寺の石塔裏側には「堀尾式部丞」の文字が彫られている。

采女は、現在の松江市玉湯町に所在する報恩寺に大般若経を寄進している。この寺は松江城の裏鬼門にあたり、堀尾氏の祈願所であり、寺の縁起によれば、堀尾忠氏の室である長松院が梵鐘を寄進し

たともあり、堀尾氏と深い関わりを有している（『玉湯町史下巻（1）』1982）。境内には、忠氏の石塔と言われる大型宝篋印塔と堀尾民部の宝篋印塔が入った石廟が残る。なお、寺の過去帳には民部の欄に「采女ちち」と載る。

また、それぞれの墓所は最終的に堀尾忠晴娘の嫁ぎ先である伊勢亀山藩主石川家によって管理がなされ、石川廉勝妻の石塔が建てられている。この墓所の整備について、石川家と残された堀尾家家臣がどのように合意や意見を交わしながら墓所の整備を進めてきたか、今となっては解明できない部分はあるが、今後も留意しておく必要があるだろう。

なお、石川家が堀尾家断絶後に関わってきた京都・春光院、江戸・養源寺、高野山奥之院では墓所が今日まで残ってきた経緯がある一方で、堀尾氏が出雲入府に至るまでのゆかりの場所では、関係する社寺名は残っていても堀尾氏にかかわる墓塔は現在確認できない。本来、こうした場所においても墓所が存在していてもおかしくなく、その存在も含めて堀尾家墓所の実態を検討していくことも課題として残っている。

4、堀尾氏以降の来待石製石塔の展開

（1）堀尾氏以降の松江藩主の墓石展開

堀尾家の断絶後、寛永11年（1634）に若狭小浜藩から京極忠高が24万石で、出雲に入部した。京極氏は3年後の寛永14年（1637）に忠高が死去すると、末期養子を立てるも幕府から認められず、改易となるが、同年先祖の勲功を理由に播磨龍野藩に封じられることとなった。出雲では、3年間と短い入部であり、一族の墓所を構えるまでには至っていない。

しかし、京極忠高は、父にあたる京極高次の供養塔を松江市竹矢町の寶亀山安国寺に立てている（松江市指定文化財）。この石塔は、越前北部（福井県）から産出される笏谷石で作られた宝篋印塔で、基礎に4区画の縦連子と格狭間の文様を配しているように、笏谷石で作られる石塔にみられる製作様式である。基礎正面に「慶長十四己酉奉」（1609）（右）「泰雲院殿前三品相公」「徹宗道閑大居士神儀」（中央）「五月初三日」（左）と彫り込まれている。この石塔は、京極氏が若狭小浜の在藩時代に作られた可能性はあるが、はっきりしていることは、わざわざ笏谷石製宝篋印塔を出雲へ運び込み、父高次の供養塔を立てていることである。

京極氏の供養塔建立は、江戸時代初期における大名墓造営における搬入石材の利用と現地で調達できる石材利用について、何らかの手がかりとなる可能性がある。

なお、京極氏は近江国清瀧寺（滋賀県米原市）に京極家墓所（国指定史跡）を構え、江戸時代に歴代の当主の墓石を集め、一族の墓所として整備し、京極高次、忠高もこの墓所に宝篋印塔が建てられている。

京極氏が改易となると、次に寛永15年（1638）に結城秀康の三男であった松平直政が18万6千石で信濃松本藩より出雲に入部した。以後、幕末を迎えるまで、出雲国は松平家の領するところとなった。

現在の松江市外中原町に所在する月照寺が建つ地には、洞雲寺という禅宗寺院があったと伝えられ、「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）には、堀尾忠氏の法名の一部を寺名とした「忠光寺」（忠氏の墓所か）が記されている。寛文4年（1664）に初代藩主の松平直政は、生母の月照院の霊牌を安置するため、浄土宗寺院として蒙光山月照寺を建てた。その2年後、直政が寛文6年（1666）に江戸で死去すると、2代藩主の綱隆は、父である直政の遺命により、月照寺に直政の廟所を整備し、以後、月照寺の松平家墓所は9代までの歴代藩主の墓所となった。

墓所は、9代にわたる藩主を単位とする廟所が集まって構成され、その廟所は廟門・鳥居・墓塔を中心軸上に配置し、廟所を取り囲うように正面を除く三方に藩重臣より寄進された花崗岩製の献灯をめぐ

らす構成となっている。墓塔は五輪塔が主であるが、火輪が平面円形で側面から見ると笠のように変形した五輪塔の形態をするものもある。また、境内には、歴代藩主の位牌を安置する御霊屋も建てられている。

このように、松江藩主松平家墓所では、藩主一代ごとに廟が設けられ、その集合体が墓所として存在している。これは、個々の墓塔が林立する形で形成されていた堀尾家墓所の規模とは大きく隔絶している。

近世大名の存続のあり方も多様性がある。短期間の内に改易される事例、転封を繰り返す事例、長期間にわたって藩政を担う事例、支藩を生み出す場合など、藩の存在する形には多くのパターンが存在する。そうした中、堀尾家墓所のあり方と松江藩主松平家墓所とのあり方には大きな違いがあり、それが当地を領した江戸時代初期の堀尾家と、その後に入封した松平家と、時期的な差であるのかは現段階では明確にはしえない。堀尾家墓所のように当主とその一族の墓塔を立てて供養するという造墓のあり方と、藩主の墓に付属施設が加えられ大型化するとともに家臣による献灯が捧げられるという造墓のあり方の違いがどのような要因で生じるのか、他地域の事例も考慮しながらその差の意味を考える必要があるだろう。

また、石材について、松平家墓所の主要な石塔の石材は花崗岩であり、堀尾氏の墓所で使用されていた来待石は使用されていない。来待石は、地元で産出される石材で現地で多量に産出され、かつ加工しやすい石材であったはずである。しかし、松平家墓所で藩主墓の墓石や構成する主要な施設に採用されたのは、来待石ではなかった。大名墓に使用される石材のあり方についても、どういったことが石材採用の判断基準となるのか、他事例も含めて検討していくことも堀尾氏と来待石の評価につながるであろう。なお、松平家家臣の墓に採用される石材に花崗岩はほとんどなく、来待石がその中心となっていることも、藩主と家臣との階層差を考察する上で注目される。

（2）来待石製石塔の展開

出雲における近世大名墓で、来待石製石塔を大名の墓石として採用したのは堀尾氏であった。来待石製石塔の利用を考えたとき、堀尾氏の出雲入部は、来待石製品を生産するうえで大きな画期となってきたと想定してきた。それは、当主の大型石塔到来待石が使用されるとともに、堀尾家墓所においても五輪塔・宝篋印塔をはじめとする主要な石塔は、来待石を用いて作られた。特に、宝篋印塔の系譜をたどれば、堀尾氏が出雲を領国とする以前は、明確にたどれない状況にあり、堀尾氏が出雲を治める中で、来待石製石塔の生産が本格化し、大小のサイズ様々な形態のものまで生産の幅は増した状況であったことがうかがわれる。そうした中で、堀尾氏の墓では、来待石製石塔が採用され、当主の個別石塔では大型の来待石製石塔が作られ、国元の墓所では来待石製石塔が林立するように、堀尾氏は近世大名として初めて領した出雲で産出される石を自身の墓地に多用した。

しかし、その後に入部した京極氏、松平家は、来待石製の石塔を藩主の石材としては利用していない状況にある。京極氏は出雲における治世期間が非常に短い中で、墓所を構築する余裕がなかったかもしれないが、松平家は安定して9代の墓所を造営し、歴代の墓所を整備している。その中において、松平家墓所では花崗岩によって墓石を中心とする墓所の主要施設を配し、来待石がメインで採用されることはなかった。

松平期における墓所内での来待石利用は薄れていくが、堀尾期からその生産が本格的に始まって以来、墓所以外の場、例えば神社・仏閣及び城下町や町屋における来待石利用は、狛犬・鳥居・灯籠・溝や基礎石のような建築部材など多方面で使用され、その流通と生産は隆盛を極めていくこととなる。堀尾氏が出雲に入部してから当主の墓として採用された大型宝篋印塔・五輪塔の完成は、階層的に下って堀尾

家重臣や有力農民層の三代家のように家臣や有力農民のような階層まで、その造墓意識が広がった。また、石廟も小型化した石龕として有力農民層の川島家墓所や上福庭家墓所の事例のように模倣ができる階層まで広がった。来待石製石塔の利用は、時間が経過するとともに、階層的な広がりを見せることとなっていることがうかがわれるが、その詳細については、やはり基準資料の積み重ねが薄いように感じられる。

更に、来待石製石塔のみに限らず、特に来待石製の狛犬や灯籠は、近世から近代にかけて出雲国から流通し、広く分布している状況にある。近世大名、堀尾氏の入部をきっかけとして、生産が本格した来待石であるが、石の切り出し、加工、販売などの生産体制とその展開について、生産開始当初において堀尾氏とどのような関係性を有し、石加工の職人集団としてどのような展開があったのか、来待石の石材利用を考える上でも非常に注目すべき切り口だと考えられる。

以上述べたように、まだまだ実証的に不備な点は多いものの、これまでの調査から堀尾氏の出雲国入部という歴史的出来事と来待石利用の歴史は非常に密接に関連していると当研究会は考えている。その追求目的を端的に表現するならば、堀尾氏及び一族の葬送観念がどのようなものであったか、そして戦国期から織豊期を生き抜いてきた堀尾氏及び家臣団の有した土木技術とその知識が、出雲国における素材（石材）をどのように利用し、この地域に影響を与えたかということになるだろう。この近世初頭の出来事により、来待石は西日本でも有数の石材と認識されとともに、多くの製品を世に送り出した。

当研究会は、凝灰質砂岩という来待石製石造物のもろくて風化しやすい石質からくる危機感と、開発行為等による急速に変化する社会状況において、貴重な歴史的情報と思われる来待石製石塔の状況を記録として残すことから調査を始めた。当研究会が調査した中には、既に失われた石塔もある中で、実際に現地で測り、図面化し、写真を残すことの重要性を改めて痛感している。

第6表 堀尾吉晴とその一族に関する石塔一覧表（没年編年） ※本書で取り上げた石塔を一覧表にしたもの

没年	人物名	戒名	墓所					京都 春光院	高野山 奥之院	江戸 養源寺	堀尾吉晴との関係 その他
			広瀬 蔵倉寺	富田城内 富田城内	松江 龍成寺	三刀屋 (廣徳墓)	玉湯 報恩寺	赤名			
1599 (慶長4)	堀尾泰晴	天徳院殿高龍世大居士◆									父 石塔の銘文には「天徳寺」「世崇」とある
1604 (慶長9)	堀尾忠氏	忠光院殿天輔世大居士◆						宝篋印塔	五輪塔		
1607 (慶長12)	堀尾泰晴妻	龍瑞院殿芳嶽宗大姉◆						宝篋印塔			本男、初代松江藩主 広瀬・忠光寺跡には礎石・石垣のみ残存
1608 (慶長13)	堀尾勘解由	桂岩院殿祥雲世大居士◆						宝篋印塔			母
1611 (慶長16)	堀尾吉晴	法雲院殿松庭世大居士◆	宝篋印塔						宝篋印塔		孫(堀尾山)と野々村河内の子、野々村河内は堀尾姓を賜る 富田城内の石塔を地元では獅子観音という
1611 (慶長16)	奥平家昌妻	法明院殿慧光正圓大押定尼◆	五輪塔					宝篋印塔	五輪塔		松江開府の祖
1614 (慶長19)	奥平家昌	六通院殿天眼道高居士◆						宝篋印塔			孫「忠晴」妻の母 江戸・清光院にも石塔あり
1618 (元和4)	堀尾吉晴娘 (勝山)	靈照院殿高月宗松大押定尼◆						宝篋印塔			孫「忠晴」の父 家の父も石塔あり
1618 (元和4)	堀尾吉晴娘 (三刀屋)	清涼院殿金堂宗通大押定尼◆							五輪塔▲		孫「勘解由」の母(野々村河内の妻) 春光院石塔配置図(文政3年)に石塔配置の記載あり
1619 (元和5)	堀尾吉晴妻	昌徳院殿俊芳宗英大姉◆						宝篋印塔	五輪塔▲		
1620 (元和6)	堀尾民部	實山堂貴大居士※						宝篋印塔			
1627 (寛永4)	堀尾忠氏妻	長松院殿眞諦紹聖大姉◆						宝篋印塔	五輪塔▲		男(姉「奈良」と掛斐勘左衛門の子)、堀尾姓を賜る ※報恩寺の過去帳・石廟と高野山の石塔に刻まれた戒名
1627 (寛永4)▲	堀尾采女母 または妻	芳二□大姉※						宝篋印塔	五輪塔▲		子「忠氏」の妻(奥平玄良の娘) 砂心寺塔蓮華院にも石塔あり
1632 (寛永9)▲	牧志摩	慈徳院日雄大居士※							五輪塔▲		※石塔に刻まれた戒名
1633 (寛永10)	堀尾忠晴	圓成院殿高賢世大居士◆			五輪塔				五輪塔	宝篋印塔	堀尾家重臣 ※石塔に刻まれた戒名
1633 (寛永10)	松村監物	大知玄忠居士◆						無縁塔	五輪塔	宝篋印塔	孫、2代松江藩主 圓成寺の院牌には「圓成寺殿」とある
1634 (寛永11)	堀尾忠晴娘	法光院殿玄貞全火姉◆						前形石塔	五輪塔	宝篋印塔	孫「忠晴」の小姓(堀尾忠晴の死去に伴い殉死)
1636 (寛永13)	堀尾頼母助政家	為□□院 切岩□□□※							宝篋印塔		曾孫(孫「忠晴」の娘、石川藤勝の妻) 高野山と養源寺の石塔銘文の戒名は「法光院殿全玄貞大姉」 春光院石塔配置図(文政3年)に石塔配置の記載あり
1644 (寛永21)	堀尾但馬	最勝院殿天叟世光居士※							五輪塔		※石塔に刻まれた戒名
1644 (寛永21)	堀尾采女	大田南嶺居士※								宝篋印塔	従弟(叔父「方泰」の子) 堀尾家の過去帳に記された戒名
1650 (寛安3)	堀尾忠晴妻	雲松院殿長天正久入大姉◆									終孫(甥「民部」の子) ※石塔に刻まれた戒名
1667 (寛文7)	堀尾但馬妻	慈覚良寛大姉※			五輪塔						孫「忠晴」の妻(奥平家昌の娘、堀尾秀忠の養女) 江戸・清光院にも石塔あり
1688 (貞享5: 元禄元)	堀尾勝明 (堀尾次郎)	發心院殿正山世大居士◆								無縁塔	従弟「但馬」の妻 堀尾尾家の過去帳に記された戒名

◆印は春光院所蔵「春光院三時同向」に記された戒名

▲印は没年や人物比定が推定

宝篋印塔
佐佐田 右衛門は笏
左近衛 各石

〔凡例〕

来待石製、三重作：石廟

参考文献一覧

出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究』古代の出雲を考える 6

出雲市教育委員会 2015『出雲鰐淵寺埋蔵文化財調査報告書』出雲市の文化財報告 28

伊藤菊之輔 1965『出雲の石造美術』

稲田信 1990「来待石の採石と加工」『宍道町ふるさと文庫』 3 宍道町教育委員会

稲田信・西尾克己 2005「宍道・川島家墓所にみる石塔の変遷 - 石龕から竿状石塔へ - 」『来待ストーン研究』 6 来待ストーンミュージアム

稲田信・内田文恵・居石由樹子 2013「松江城天守創建に関わる祈祷札について」『松江城研究』 2 松江市教育委員会

今岡稔 1991「山陰の石塔二三について― 2 ―」『島根考古学会誌』 8 島根考古学会

今岡稔 1998「山陰の石塔二三について― 7 ―」『島根考古学会誌』 15 島根考古学会

今岡利江 2001「山陰の中世石造物についての一考察 - 日引石製品を中心に - 」『島根考古学会誌』 第 18 集 島根考古学会

今岡利江・今岡稔・舟木聡 2005「石室を持つ宝篋印塔 2 例」『日引』 7 石造物研究会

今岡利江 2006「石室を持つ宝篋印塔 3 例」『島根考古学会誌』 23 島根考古学会

岩屋寺石造物調査団 2008「岩屋寺石造物調査報告書」『来待ストーン研究』 9 来待ストーンミュージアム

上野富太郎・野津静一郎編 1941『松江市誌』松江市（復刻版 名著出版 1978）

岡崎雄二郎 1996「松江市・圓成寺の六角地蔵燈籠について」『宍道町歴史叢書』 1 宍道町教育委員会

岡崎雄二郎・樋口英行 2002「松江市・安國寺所在の石塔について」『来待ストーン研究』 4 来待ストーンミュージアム

岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・佐々木倫朗・樋口英行 2006「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景 - 松江藩主堀尾氏のもたらした石造技術 - 」『来待ストーン研究』 7 来待ストーンミュージアム

岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・樋口英行・佐々木倫朗・松原祥子 2007「春光院に所在する来待石製石塔群について」「春光院所蔵の堀尾氏関連文献史料について」『松江市歴史叢書』 1 松江市教育委員会

岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・佐々木倫朗・樋口英行 2008「来待石製大型石塔調査（補遺） - 松江・洞光寺宝篋印塔、牧志摩宝篋印塔 - 」『来待ストーン研究』 9 来待ストーンミュージアム

岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・佐伯純也・木下 誠 2014「龍海山三明院佛谷寺に所在する石造物群について」『伯耆文化研究』 第 15 号 伯耆文化研究会

奥原福市編 1926『八東郡誌』本篇（復刻版 名著出版 1973）

川勝政太郎 1998『新装版 日本石造美術辞典』東京堂出版

元興寺文化財研究所編 2019『史跡金剛峯寺境内（奥院地区）大名墓総合調査報告書Ⅰ』高野町文化財報告書第 8 集 高野町教育委員会

きまち史話会 1997『きまち書留帳』

朽津信明・西尾克己・稲田信 2012「松江藩で利用された花崗岩類」『松江歴史館研究紀要』第 2 号 松江歴史館

佐伯純也・加藤裕一 2006「鳥取県米子市・清洞寺跡五輪塔群」『来待ストーン研究』 7 来待ストーンミ

ュージアム

狭川真一 2015「松江の中世石塔訪問記」『松江市歴史叢書』 8（松江市史研究 6 号） 松江市

佐藤利江 2015「山陰の石塔における鰐淵寺資料の位置づけ」『出雲鰐淵寺埋蔵文化財調査報告書』出雲市の文化財報告 28 出雲市教育委員会

島根県編 1965a「堀尾家記録」『新修島根県史』史料編 2

島根県編 1965b「堀尾忠晴給帳」『新修島根県史』史料編 2

島根県教育委員会 1974『山代郷北新造院跡』

島根県教育委員会 1983『史跡富田城関連遺跡群発掘調査報告書』

島根県教育委員会 1998『来待石石切場遺跡群』

島根県教育委員会 2011『山辺遺跡・鞍切遺跡・米坂古墳群・貝先遺跡他』

島根県史編纂掛編 1927『島根県史』 5 島根県（復刻版 名著出版 1972）

島根県史編纂掛編 1929『島根県史』 8 島根県（復刻版 名著出版 1972）

島根県史編纂掛編 1930『島根県史』 9 島根県（復刻版 名著出版 1972）

白神尚彦 1988『島根の寺院』有賀書房

宍道町教育委員会編 1989「宍道町の文化財めぐり」『宍道町ふるさと文庫』 2

関根達人 2018『墓石が語る江戸時代』吉川弘文館

大名墓研究会（中井均ほか） 2020「松江藩主松平家墓所 - 松江・月照寺に守り伝えられる近世大名莫迦 - 」『松江市ふるさと文庫』 25

坪井俊三 1997「堀尾氏の北遠支配」『浜松城主 堀尾忠晴』浜松市博物館

永井 泰 2014「雑記帳」『島根の石造物データ』

永塚久守 1982「堀尾時代の三刀屋」『三刀屋町誌』三刀屋町

西尾克己・稲田信・原田敏照・守岡正司 1993『宍道町歴史史料集（古墳時代編Ⅰ）』宍道町教育委員会

西尾克己・稲田信 2004「宍道・金山五輪塔群について」『来待ストーン研究』 5 来待ストーンミュージアム

西尾克己・樋口英行 2005a「玉湯・上福庭家墓所の石塔」『来待ストーン研究』 6 来待ストーンミュージアム

西尾克己・稲田信・樋口英行 2005b「玉湯・報恩寺の石塔群」『来待ストーン研究』 6 来待ストーンミュージアム

西尾克己・稲田信・佐々木倫朗 2011「白華山養源寺〔東京都千駄木〕に所在する堀尾忠晴石塔について」『松江歴史館研究紀要』 第 1 号 松江歴史館

西尾克己・稲田信・木下 誠 2013「高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について - 近世大名墓と堀尾家の宗教的背景 - 」『松江歴史館研究紀要』 第 3 号 松江歴史館

西尾克己・樋口英行 2004「平田・小早川正平墓と興源寺周辺の石塔について」『来待ストーン研究』 5 来待ストーンミュージアム

樋口英行 2004『白粉石・来待石の宝篋印塔・五輪塔』宍道町ふるさと文庫 19 宍道町菟古館

樋口英行 2005「来待石製石龕の成立と展開 - 江戸時代前半を中心に - 」『来待ストーン研究』 6 来待ストーンミュージアム

日野一郎 1982「出雲における石造塔婆」地方史研究所編『出雲・隠岐』増補版 原書房

日野西眞定編著 1988a「奥院絵図」「高野山奥院総絵図」『高野山古絵図集成 / 解説索引』タカラ写真製版株式会社

日野西眞定編著 1988b 「南山奥之院諸大名石塔記」『高野山古絵図集成／解説索引』タカラ写真製版株式会社

福井将介 2010 「堀尾氏関係史料目録」『松江市歴史叢書』2 松江市教育委員会

藤岡大拙 1982 「洞光寺」『島根県大百科事典』山陰中央新報社

藤澤典彦・狭川真一 2017 「石塔調べのコツとツボ」図説 採る 撮る 測るの三種の実技』高志書院

松井一明・木村弘之・溝口彰啓・太田好治 2006 「浜松市西伝寺における中世石塔 - 浜松市域の中世石塔調査報告 1 - 」『浜松市博物館報』第 18 巻 浜松市博物館

松江市教育委員会 2000 『史跡松江藩主松平家墓所保存管理計画書』

松江市教育委員会 2001 『史跡松江城整備事業報告書』

松江市教育委員会 2010 「松江市の指定文化財」『松江市ふるさと文庫』7

松江市史編集委員会編 2018 「堀尾古記」『松江市史』別編 1 松江城 松江市

松尾剛次 2018 「中世叡尊教団の伯耆・因幡・出雲・石見四国における展開」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第 19 号

間野大丞 2000 「宍道町岩屋寺所在の紀年銘のある宝篋印塔について」『来待ストーン研究』3 来待ストーンミュージアム

間野大丞 2001 「来待石製五輪塔・宝篋印塔についてー中世末から近世初頭を中心に」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第 2 回研究会資料 石造物研究会・来待ストーンミュージアム客員研究会

間野大丞 2002 「伝土御門親王墓宝篋印塔について」『来待ストーン研究』4 来待ストーンミュージアム

間野大丞 2019 「きまちいし中世・石塔・カタ・カタチ」島根県埋蔵文化財調査センターいにしえ倶楽部連続講座発表資料

森町考古学研究会 2008 「森町の中世石塔」『森町考古』20

八雲村教育委員会 2002 『谷ノ奥遺跡』八雲村文化財調査報告書 20

安来市教育委員会 2011 『安来市内遺跡調査報告書 1 ―伝・堀尾忠氏墓、日向尾根古墳群―』

協力者一覧（五十音順・敬称略）

機関

出雲玉作資料館

巖倉寺

圓成寺

来待ストーンミュージアム

月照寺

興源寺

高野山大圓院

高野山大学

高野山普賢院

島根県立図書館

春光院

洞光寺

報恩寺

豊龍寺

天倫寺

松江市立来待小学校大野原分校

／宍道中学校大野原分校

養源寺

蓮光寺

個人

足立順二

足立卓生

安部和幸

荒木清純

内川隆志

大國由美子

萩野哲二

勝部 衛

加藤元康

狩野真由

川上史朗

川島啓史

川島哲夫

木下浩良

佐伯純也

狭川真一

佐々木倫朗

佐藤玄了

新庄正典

諏訪文哉

鈴木一有

角 光

高屋茂男

永井 泰

中森 祥

浪花秀明

西原司朗

野村泰久

平野哲也

福井将介

福庭和文

藤田光寛

古川寛子

堀尾秀樹

松原祥子

松本美和子

三代正邦

森 寛勝

森山淳昌

安井昭雄

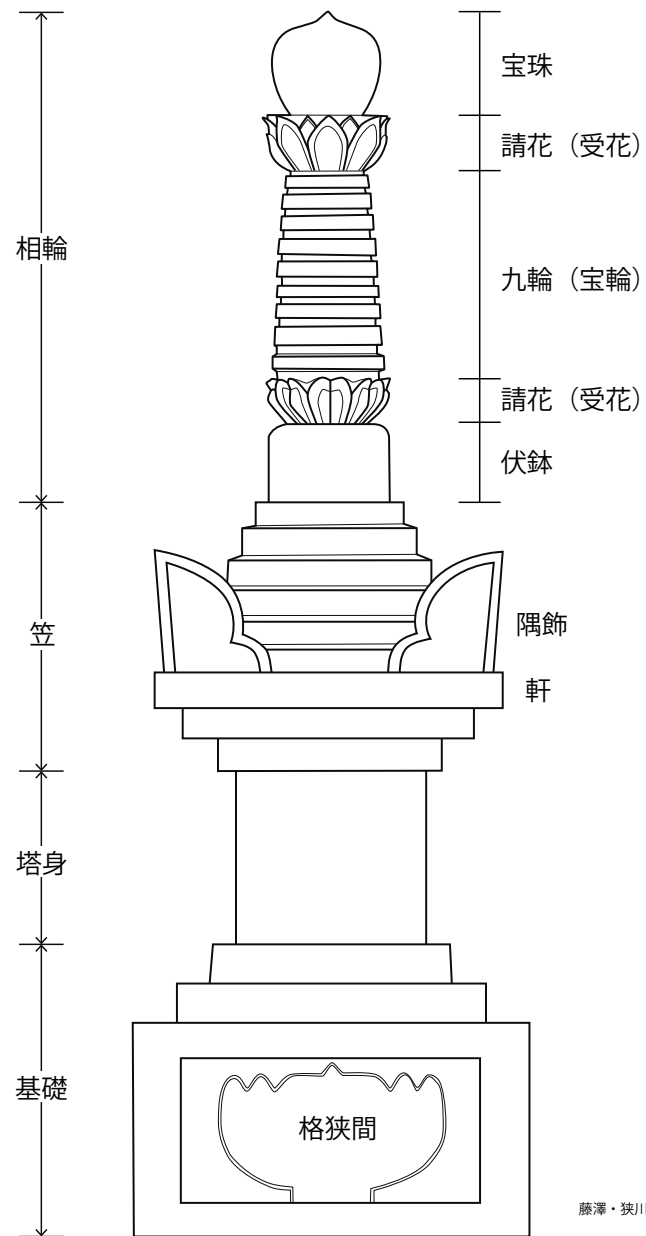
山田文雄

吉川東吾

若槻大浩

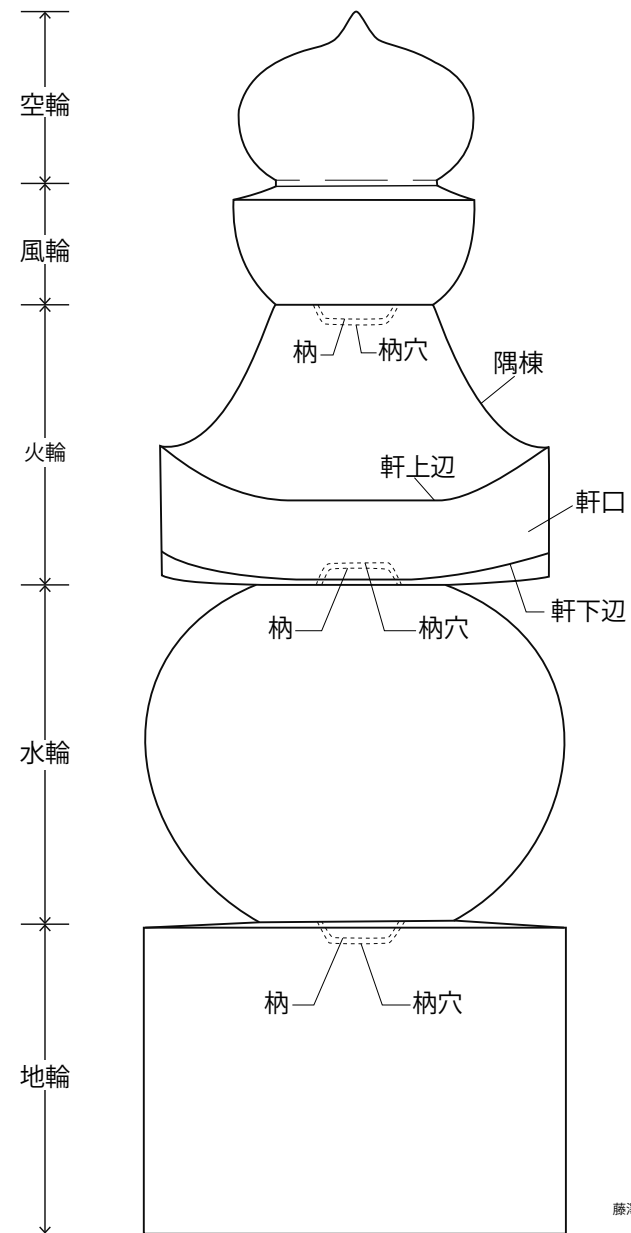
和田美幸

（機関名、個人名は調査当時）



宝篋印塔各部位の名称

藤澤・狭川 2017 より
(一部改変)



五輪塔各部位の名称

藤澤・狭川 2017 より
(一部改変)

堀尾吉晴公共共同研究会 報告書

研究テーマ：石造物

近世大名・堀尾吉晴とその一族の石塔

令和3年（2021）3月

編集 松江石造物研究会

発行 堀尾吉晴公共共同研究会（松江市・安来市・大町町）

印刷 株式会社 江友

表紙写真：堀尾吉晴五輪塔（広瀬：巖倉寺）